

日本応用心理学会
第64回大会発表論文集

1997年8月30日(土)・31日(日)

駒澤大学

平成10年1月吉日

各 位

日本応用心理学会第64回大会準備委員会
委員長 中 村 昭 之

拝啓 皆様にはお変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。

過日は、日本応用心理学会第64回大会を駒沢大学においてお引き受けいたしました。会員の皆様方多数のご出席をたまわり、盛会裡に終了することができました。茲に厚く御礼申し上げます。

発表論文集が完成いたしましたので、本日、御発送申し上げます。何卒ご受納下さい。

敬具

日本応用心理学会
第64回大会 発表論文集
1997 8/30-31

駒澤大学

目 次

大会日程

第1日 8月30日(土)

	8:30 - 9:30	11:30	11:45 - 12:45	12:55 - 13:45	14:00 - 16:00	16:15 - 17:15	17:45 - 19:45
受付開始	A室 (6-3) 一般・原理		運営委員会	会員総会	公開シンポジウムI	公開講演	懇親会
	B室 (6-4) 人格・検査・測定1		大学会館				
	C室 (6-6) 臨床・矯正1		(2F-1)				
	D室 (6-7) 看護・発達・教育1			大学会館 (2F-1)	中央講堂	中央講堂	三越迎賓館「シルバーハウス」
	E室 (6-8) 看護・発達・教育2		坐禅体験教室				
	F室 (6-9) 認知・感情						
	G室 (6-10) 産業・交通1		禅研究館				

第2日 8月31日(日)

	8:30	9:30	11:30	12:30	14:30	14:40	17:00
受付			A室 (6-3) 社会・文化1	A室 (6-3) 社会・文化2		公開シンポジウムⅡ 中央講堂	
開始			B室 (6-4) 人格・検査・測定2	B室 (6-4) 人格・検査・測定3			
			C室 (6-6) 臨床・矯正2	C室 (6-6) 人格・検査・測定4			
			D室 (6-7) 看護・発達・教育3	D室 (6-7) 看護・発達・教育6			
			E室 (6-8) 看護・発達・教育4	E室 (6-8) 看護・発達・教育7			
			F室 (6-9) 看護・発達・教育5	F室 (6-9) 看護・発達・教育8			
			G室 (6-10) 産業・交通2	G室 (6-10) ワークショップ			

公開講演

8月30日(土) 16:15~17:15 (中央講堂)

傷ついた心の解消と解決 — 仏教文化史の立場から —

講演者 駒澤大学長
駒澤大学仏教学部教授(文学博士)

奈良 康明

司会者 大会準備委員長
駒澤大学 中村 昭之

講演者紹介 略歴 1929年 千葉県に生まれる
東京大学文学部印度哲学梵文学科卒業
同大学院人文科学研究科印度哲学専攻修士課程修了
カルカッタ大学大学院比較言語学科博士課程修了
インド仏教文化史専攻

坐禅体験教室

8月30日(土) 11:45~12:45 (禅研究館)

心のやすらぎを求めて

【 坐 禅 】

指 導	駒澤大学講師 (大洞院住職) 木村 誠治	
集 合 場 所	大会受付前	11時40分
内 容	講座 (坐禅について)	15分程度
	坐禅の心得	10分程度
	坐禅	15分程度

8月30日(土) 14:00~16:00 (中央講堂)

家庭内暴力をめぐる諸問題 —— 親から子どもへの ——

企画・司会	白梅学園短期大学 駒澤大学	林 潔 中村 昭之
話題提供者		
精神医学の立場から	柴田クリニック	柴田 出
ジャーナリストの立場から	作家	椎名 篤子
社会福祉の立場から	白梅学園短期大学	浅井 春夫
教育相談の立場から	昭和女子大学	平尾 美生子
指定討論者	立教大学	神田 久男

家庭内暴力をめぐる問題は、従来子供の暴力行為を中心として理解される場合が多かった。一方暴力行為を含む、親や家庭の機能不全のもたらす問題も無視できないものがある。

このシンポジウムでは、子供に対する親からの暴力という視点から問題をとりあげる。厳しすぎる体罰や度を越した叱責、ひいては児童虐待、あるいはもし物理的な暴力という形ではないとしても、過度の強制や拘束、精神的圧迫も一つの暴力としてとらえることができよう。また「暴力的な」しつけを当然なこととして育った子供が親になった場合、当然のこととして同様な態度で自分の子供に臨むという現実もある。さらには、親の過剰適応の限界、親あるいは子供のコンプレックスの表現あるいは処理様式として暴力の問題がでてきているという可能性もある。

親からの家庭内暴力とその対応について、応用心理学の果たす役割について討議していきたい。

公開シンポジウムⅡ

8月31日(日) 14:40~17:00 (中央講堂)

現代の青少年犯罪とおとなの役割

企画・司会

大正大学

長谷川 孫一郎

話題提供者

少年の凶悪犯罪を中心に
非行少女を中心に
覚醒剤や薬物乱用を中心に
放火犯罪を中心に

仙台矯正管区
静岡少年鑑別所
関東医療少年院
山形県警本部
岩手大学

川辺 譲
川崎 道子
奥村 雄介
桐生 正幸
細江 達郎

指定討論者

かって現代型非行といわれてきた方引きや薬物乱用、車に関係した非行などに加えて、最近はいじめやリンチ、浮浪者襲撃やおやし狩り、アベック殺しなどの凶悪犯罪、覚醒剤や麻薬などの広がり、少女売春などがマス・コミでとりあげられ、それも多くはグループで、一人一人は普通の青少年なのにとか、それも家庭や学校での大人の指導不足を原因にあげることが通例のようです。

果たして現代の青少年は、報道されるように大人の手の及ばないほど変わってきてしまったのか、不登校やひきこもり、あるいはオウム事件などと同じように、青少年の問題よりもおとな社会に根があるのか、評論家の意見もさまざまです。

このシンポジウムの企画は、まず実態をとらえ、その克服のためのおとなの関わり方を探ろうとするものです。シンポジストには現場での体験の豊富な四人の方、川邊譲さんは各地の少年鑑別所勤務を経て現在仙台矯正管区医療分類課長として、内外の資料を分析されておられ、川崎道子さんは各地の矯正施設に勤務され現在静岡少年鑑別所長、幅広く青少年の問題に取り組まれています。奥村雄介さんは精神科医として拘留所や少年鑑別所に勤務され、現在関東医療少年院医務課長を、桐生正幸さんは現在山形県警の科学捜査研究室の心理主任研究員として勤務され、学会でも各種の犯罪研究を発表されておられます。そして指定討論者の細江達郎さんは現在岩手大学教授、犯罪をはじめ広い領域の研究を続けておいでです。またフロアの方々からのお話も加え実り豊かなものにしたいと思います。

内田クレペリン検査の本来のねらいとは

企画・司会
話題提供者

函館大谷女子短期大学
井草幼稚園・井草教育研究会
元日本・精神技術研究所
東洋大学

板津 裕己
鈴木 和長
山田 耕嗣
安富 由美子

内田クレペリン検査は、発表されてから約 70 年が経過した。そして、今日にいたるまで、我が国の教育界や産業界などにおいて、適性検査やパーソナリティ検査として最も使われているテストの1つに数えられている。

しかし、使用頻度は高くとも、検査結果を十分に読み取って利用しているのかという疑問が出てくる。単にスクリーニングテストとして使われていることが多いようである。このような結果利用法の問題が生じているのは、著者内田勇三郎が、この検査を通して何を捉えようとしていたのか明文化していないことにも起因している。

また、検査結果処理を機械化しようとする向きは、時代の要請を受けるもので、結果処理の一貫性や迅速化などの長所をもつ。しかし、検査本来の考え方を離れて、単に結果処理を機械化するのであれば、検査の長所が殺されてしまう危険もあろう。あるいは、同種の全く新しいテストになってしまう。

本ワークショップでは、生前の内田と親しく、今日も幼児を対象に作業検査を研究・応用している鈴木や、今日の検査利用状況を知る山田・安富に話題提供をしてもらい、本検査の本来のねらいと今後の検査利用法の可能性について考えていきたい。

研究発表

第1日(午前)

一般・原理

第1日	8月30日(土)	9:30~11:30	A室(6-3 教室)	座長	長塚 康弘	藤田 主一
9:30	1	歯学の産業技術分野におけるontwikkeling の概念の導入について		龍谷大学		田中 昌人
9:50	2	ドイツ国民社会主義期における心理学の 複合的状況		岩手医科大学		田中 潜次郎
10:10	3	福祉心理学を論考するⅡ アイデンティティ理論の再構築		東京経済大学		網野 武博
10:30	4	真の「応用研究」とはなにか(2) — 応用研究の具体例 —		新潟大学人文学部		長塚 康弘
10:50	5	人格の偉大性要因についてⅡ — 大学生による偉大性の因子構造 —		城西大学女子短期大学部 共立女子大学	○藤田 主一 高嶋 正士	
11:10	6	精神テンポに関する基礎的研究(第76報)		日本女子体育大学附属 二階堂高校 早稲田大学 玉川大学	○望月 稔 三島 二郎 寺沢 充夫	

人格・検査・測定 1

第1日	8月30日(土)	9:30~11:30	B室(6-4 教室)	座長	川村 司	関 陽子
9:30	1	多変量解析法による多人数間の 筆者識別(I)		愛知県警察本部 愛知県警察本部 愛知県警察本部 名古屋大学多元数理	○若原 克文 三井 利幸 菅原 博嗣 川村 司	
9:50	2	多変量解析法による多人数間の 筆者識別(II)		愛知県警察本部 愛知県警察本部 愛知県警察本部 名古屋大学多元数理	○三井 利幸 若原 克文 菅原 博嗣 川村 司	

10:10	3	異なる筆具による筆者識別	科学警察研究所	○菅原 博嗣 三井 利幸 若原 克文 川村 司
10:30	4	模倣筆跡の筆者識別	航空医学実験隊 航空医学実験隊 航空医学実験隊	○川村 司 三井 利幸 若原 克文
			菅原 博嗣	
10:50	5	日本人が書いたアルファベットの筆者識別	科学警察研究所	関 陽子
11:10	6	中心視野内の情報が水平感覚の安定性に与える影響	航空医学実験隊 航空医学実験隊 航空医学実験隊	○新田見 教子 竹内 山則 広島 克佳

臨床・矯正 1

第1日	8月30日(土)	9:30~11:30	C室(6-6 教室)	座長 安木 博臣 岡村 美奈	
9:30	1	乳癌患者の危機と心理状態に関する研究	群馬大学医学部保健学科 昭和大学医学部 昭和大学医学部	○藤野 文代 川口 毅 星山 佳治	
9:50	2	ロールシャッハ・テストと予後因子から見る精神分裂病患者の予後予測について	早稲田大学大学院 文学研究科 早稲田大学文学部	○福井 博一 小杉 正太郎	
10:10	3	燃え尽き症候群の研究 ー ターミナルケアにおけるスタッフの心理的 ストレスと満足度 ー	駒澤大学大学院 人文科学研究科	上野 いずみ	
10:30	4	自己効力感の獲得の試み	駒澤大学大学院 人文科学研究科	石風呂 素子	
10:50	5	自己感と虚偽検出検査を依頼された際の 態度	福岡県警科学捜査研究所 函館大谷女子短期大学 駒澤大学	○安木 博臣 板津 裕己 間島 英俊	
11:10	6	業務上横領事件被害者の心理的経過	ヒューマン・リフレッシュ・ センター	岡村 美奈	

看護・発達・教育 1

第1日	8月30日(土)	9:30~11:30	D室(6-7 教室)	座長	清水 幹夫	黒田 淑子
9:30	1	熟慮型－衝動型認知スタイルに関する研究(3) －規定要因の検討－		山形大学		三上 れつ
9:50	2	グループ・エンカウンターを 公立中学校に導入するための要件		千葉大学教育学部		清水 幹夫
10:10	3	問題解決におけるru適用の原因 －力の合成と分解の法則に関して－		山梨大学教育学部		進藤 聡彦
10:30	4	学生の面接時の生活指導における SPIN法の有用性について		札幌医療科学専門学校 札幌医療科学専門学校 札幌医療科学専門学校 西野学園札幌医療科学専門 学校 スクールカウンセラー		○佐藤 和己 中川 敏貴 中山 英雄 大友 達也
10:50	5	大学教育における心理劇(6) －異なる役割体験を重ねること－		お茶の水女子大学		黒田 淑子
11:10	6	女子大学生の生活意識について(2)		東京家政大学		後藤 嘉余子

看護・発達・教育 2

第1日	8月30日(土)	9:30~11:30	E室(6-8 教室)	座長	中野 アツ子	小林 千世
9:30	1	外科実習事前学習における看護学生の 学びと不安の構成要因		山形大学医学部 山形大学医学部 山形大学医学部		○松谷 さおり 星野 明子 根本 良子
10:10	3	看護学生のエイズ患者・感染者に対する態度 と態度に関連する要因の分析		北里大学東病院 山形大学		○根本 明日香 三上 れつ
10:30	4	看護学生の母性意識(第二報)		東京都立北多摩看護 専門学校		中野 アツ子

- | | | | | |
|-------|---|---|-----------------------------------|------------------|
| 10:50 | 5 | 看護学生の清潔に関する研究
—第2報— | 東京都立松沢看護専門学校 | 岡本 清美 |
| 11:10 | 6 | 看護系短大生の看護婦理想像のイメージと
Self Esteem得点による分析 | 信州大学医療技術
短期大学部
日本赤十字看護大学大学院 | ○小林 千世
曾根原 純子 |

認知・感情

- | | | | | | | |
|-------|----------|---|--|----|-------------------------|-------|
| 第1日 | 8月30日(土) | 9:30~11:30 | F室(6-9 教室) | 座長 | 豊村 和真 | 曾我 重司 |
| 9:30 | 1 | Personal Spaceに関する基礎研究(5) | 星学園大学 | | 豊村 和真 | |
| 9:50 | 2 | CFQ(Cognitive Failures Questionnaire)の
妥当性に関する研究 | 東北学院大学大学院
人間情報研究科
東北学院大学
東北学院大学 | | ○布施 淳子
吉田 信彌
小林 裕 | |
| 10:10 | 3 | 他者意識と怒りの動機と反応 | 駒澤大学大学院
人文科学研究科 | | 森 ひとみ | |
| 10:30 | 4 | 目撃記憶の事後情報効果に対する
「反対の論理」の影響・2 | 九州大学大学院文学研究科
九州大学文学部
九州大学大学院文学研究科 | | ○大沼 夏子
箱田 裕司
大上 涉 | |
| 10:50 | 5 | 目撃記憶における情動的ストレスの効果 | 九州大学大学院文学研究科
九州大学文学部
九州大学大学院文学研究科 | | ○大上 涉
箱田 裕司
大沼 夏子 | |
| 11:10 | 6 | 二次元ディスプレイと三次元空間における
知覚特性の比較
— 衝突時間の判断 — | 千葉大学
慶應義塾大学 | | ○曾我 重司
増田 直衛 | |

産業・交通1

- | | | | | | | |
|------|----------|--------------------|----------------------------------|----|----------------|-------|
| 第1日 | 8月30日(土) | 9:30~11:30 | G室(6-10 教室) | 座長 | 丹治 和典 | 稲毛 教子 |
| 9:30 | 1 | 事例問題による職務状況への対応の把握 | ㈱日本能率協会
マネジメントセンター
日本大学商学部 | | ○片岡 大輔
外島 裕 | |

9:50	2	Demand-Control-Supportモデルに関する検討 ～職務満足度を用いて～	早稲田大学文学研究科	田中 美由紀
10:10	3	日本におけるメンタリングの現状	亜細亜大学大学院	関口 和代
10:30	4	秘書におけるストレスとソーシャル・サポート	同志社大学文学研究科 同志社大学文学部	○福岡 欣治 内山 伊知郎
10:50	5	サービス場面における実務能力	札幌国際大学短期大学部	丹治 和典
11:10	6	育児困難を抱える母親の分析	東京国際大学	○稲毛 教子 鈴木 芳子

研究発表

第2日(午前)

社会・文化1

第2日	8月31日(日)	9:30~11:30	A室(6-3 教室)	座長	荻野 七重	田之内 厚三
9:30	1	『運』への帰属と『運命』への帰属	白梅学園短期大学 立正大学文学部	○荻野 七重 斎藤 勇		
9:50	2	異文化コミュニケーションの研究Ⅲ	白梅学園短期大学 駒澤大学文学部	○高橋 浩子 高橋 良博		
10:10	3	生涯学習意識と行動に関する地域的考察	秋田大学	佐藤 怜		
10:30	4	日本人の生活意識(3) —家庭のキーワード—	東海学園大学	高橋 敷		
10:50	5	動物のいる風景(2) —動物の存在が対人関係の認知に 及ぼす影響—	麻布大学環境保健学部	田之内 厚三		
11:10	6	災害時における人間行動(4)	芦屋大学	早坂 三郎		

人格・検査・測定2

第2日	8月31日(日)	9:30~11:30	B室(6-4 教室)	座長	大村 政男	高橋 良博
9:30	1	「血液型性格学」は信頼できるか (第14報Ⅰ) —B型者についての偏見史を尋ねる—	文京女子大学 富士短期大学	○大村 政男 浮谷 秀一		
9:50	2	「血液型性格学」は信頼できるか (第14報Ⅱ) —B型者についての認知(実験と調査)—	富士短期大学 文京女子大学	○浮谷 秀一 大村 政男		
10:10	3	女子学生の性の受容に関する研究	駒澤大学大学院 人文科学研究科	永末 貴子		
10:30	4	大学生の自己像の因子分析的研究	常磐大学大学院 人間科学研究科	田中 道弘		

10:50 5 仏教におけるイメージの研究(12) 駒澤大学文学部 ○高橋 良博
 ー禅心理学的研究(335)ー 白梅学園短期大学 高橋 浩子

臨床・矯正2

第2日 8月31日(日) 9:30~11:30 C室(6-6 教室) 座長 岸田 博 坂原 明

9:30 1 カールロジャーズにおけるサイコセラピー 東京農業大学 岸田 博
 概念の変化と対象の拡大

9:50 2 若い女性のやせ願望(「ダイエット」)の要因に 國學院大學栃木短大 佐藤 秋子
 関する調査研究(1) ーボディ・イメージを中心にしてー

10:10 3 要介護高齢者を介護する家族の 横浜市立大学 加藤 基子
 介護負担感の検討

10:30 4 某鍼灸治療院における患者の精神的 浅沼医院東洋医学 浅沼 恵
 ストレスに関する一考察 鍼灸治療室

10:50 5 女子短大生のストレスに関する研究(I) 聖カタリナ女子短期大学 ○坂原 明
 仙台白百合女子大学 松浦 光和

11:10 6 スクールカウンセリングシステムの研究I 江戸川女子短期大学 福井 嗣泰
 ーネットワークとインタークー

看護・発達・教育3

第2日 8月31日(日) 9:30~11:30 D室(6-7 教室) 座長 稲越 孝雄 草野 美根子

9:30 1 スポーツ選手の健康感に関する研究 日本大学文学研究科 ○殿村 由希
 日本大学文理学部 花沢 成一

9:50 2 生涯学習指導者のイメージ(2) 文教大学 稲越 孝雄
 ー専門家と学生との比較ー

10:10 3 達成動機の調査研究 鹿児島大学医学部附属病院 ○田畑 節子
 ー看護婦の意識調査からー 千葉大学 内海 滉

10:30 4 達成動機に関する要因分析 熊本大学医学部附属病院 ○澤田 道子
 ー看護職に施行した意識調査を通してー 千葉大学 内海 滉

10:50	5	看護教育による看護学生の意識構造の変容(その6)	佐賀医科大学 佐賀医科大学 佐賀医科大学 産業医科大学 千葉大学	○草野 美根子 寺田 敦子 吉田 恵理子 中 淑子 内海 澁
11:10	6	看護婦に施行した情緒的共感測定 (Questionnaire measure of emotional empathy) —読書・余暇行動傾向, コグラムとの比較—	横浜市立大学医学部 附属浦舟病院看護部 千葉大学	○浅野 智子 内海 澁

看護・発達・教育 4

第2日	8月31日(日)	9:30~11:30	E室(6-8 教室)	座長	内藤 哲雄	大塚 廣子
9:30	1	看護臨床実習のPAC分析(1)	信州大学人文科学研究科 信州大学人文科学研究科 信州大学人文学部	○山崎 章恵 阪口 しげ子 内藤 哲雄		
9:50	2	看護臨床実習のPAC分析(2) —小児看護—	信州大学人文科学研究科 信州大学人文科学研究科 信州大学人文学部	○阪口 しげ子 山崎 章恵 内藤 哲雄		
10:10	3	看護臨床実習のPAC分析(3)	信州大学人文学部 信州大学人文科学研究科 信州大学人文科学研究科	○内藤 哲雄 阪口 しげ子 山崎 章恵		
10:30	4	学内実習における患者・看護婦役の体験に対する学生の反応(第2報)	東京都立大塚看護専門学校 千葉大学	○高田 茂子 内海 澁		
10:50	5	患者教育への検討 —看護職に施行した意識調査を通して—	横浜市立大学医学部 附属病院 千葉大学	○尾形 悦子 内海 澁		
11:10	6	看護学生の学校の出来事に関する感じ方 — 学年間分析 —	東京都立府中看護専門学校 千葉大学	○大塚 廣子 内海 澁		

看護・発達・教育5

第2日 8月31日(日) 9:30~11:30	F室(6-9 教室)	座長 大森 智美 松永 保子
9:30 1	精神看護学教育の一環としての 精神病棟見学	日本赤十字秋田短期大学 ○宇佐美 覚 秋田大学医療技術短期大学部 山本 勝則 山口大学医療技術短期大学部 金山 正子 千葉大学 内海 況
9:50 2	看護学生の性の考え方・行動に影響を 及ぼす要因の分析(その6)	山梨県立看護短期大学 ○大森 智美 東京女子医科大学 村本 淳子 看護短期大学 千葉大学 内海 況
10:10 3	Cornell Medical Indexによる看護短大生の 健康調査	岐阜大学医療技術短期大学部 ○森田 敏子 愛知県立看護大学 松田 好美 山形県立保健医療短期大学 松永 保子 千葉大学 内海 況
10:30 4	受持患児の特性が学生の自己評価に 与える影響 ～ 小児看護実習をとおして～	産業医科大学産業保健学部 ○中 淑子 産業医科大学 深田 高一 佐賀医科大学 草野 美根子 佐賀医科大学 寺田 敦子 佐賀医科大学 吉田 恵理子 千葉大学 内海 況
10:50 5	達成動機と職務満足度の要因分析 ー看護婦の意識調査よりー	千葉大学 ○峯岸 廣美 内海 況 澤田 道子
11:10 6	デモンストレーション教授法の看護技術 習得に及ぼす効果(第3報) ー達成動機測定尺度と実技テスト後の アンケートとの関係ー	山形県立保健医療短期大学 ○松永 保子 千葉大学 内海 況 岐阜大学医療技術短期大学部 森田 敏子 愛知県立看護大学 松田 好美

産業・交通2

第2日 8月31日(日) 9:30~11:30	G室(6-10 教室)	座長 向井 希宏 松浦 常夫
9:30 1	高年齢者の作業遂行行動 ーキー入力課題を用いて(その2)ー	中京大学文学部 向井 希宏
9:50 2	職場ストレススケールに関する検討(1) ーコーピング尺度を中心にー	早稲田大学文学研究科 ○島津 明人 早稲田大学文学部 小杉 正太郎

10:10	3	職場ストレススケールに関する検討(2) ーソーシャルサポート尺度の改訂と ストレッサー・ストレス反応尺度との関連に ついてー	早稲田大学文学研究科 早稲田大学文学部	○種市 康太郎 小杉 正太郎
10:30	4	初心運転者の運転態度の変化とその要因	科学警察研究所	松浦 常夫
10:50	5	運転時の感情コントロールが交通事故・違反 に及ぼす影響	同志社大学文学部	内山 伊知郎
11:10	6	勤労者のメンタルヘルスと職場環境(3)	岩手県立盛岡短期大学	雫石 礼子

研究発表

第2日(午後)

社会・文化2

第2日	8月31日(日)	12:30~14:30	A室(6-3 教室)	座長	橋本 泰子	大久保 康彦
12:30	1	家庭男性の生活満足感を構成する 影響要因について		日本大学芸術学部		松本 洸
12:50	2	留学生の生活適応に関する研究 — 自己開示, 孤独感を通して —		流通科学大学 大阪外国語大学 留学生教育センター		○森下 高治 永田 雅子
13:10	3	大学生の価値観の様相 — M・F尺度による検討 —		城西大学女子短期大学部		橋本 泰子
13:30	4	若者の伝統芸能に対する印象 その5		国学院大学栃木短期大学 (株)日本・精神技術研究所		○大久保 康彦 玉井 寛
13:50	5	若者の伝統芸能に対する印象 その6		(株)日本・精神技術研究所 国学院大学栃木短期大学		○玉井 寛 大久保 康彦
14:10	6	居住環境意識が居住環境保全行動に 与える影響		早稲田大学人間科学研究科		高山 彰文

人格・検査・測定3

第2日	8月31日(日)	12:30~14:30	B室(6-4 教室)	座長	寺沢 美彦	成田 猛
12:30	1	心の教育はどうあるべきか — 自己教育力→新しい学力観→生きる力の 礎としての心 —		明治学院大学		矢口 一郎
13:10	3	聖書のことばとセルフケア		オフィ斯拉ポール 社会保険労務士 谷澤田鶴子事務所		谷澤 田鶴子

13:30	4	MSC(創造的構え)テスト改訂の試み(2) 高・大学生の結果	日本福祉教育専門学校 早稲田大学 文化女子大学 黒羽事務所	○寺沢 美彦 久米 稔 伊賀 憲子 高野 隆一
13:50	5	STR-S作成のころみ(2)	秋田桂城短期大学 早稲田大学 早稲田大学文学部	○成田 猛 木島 恒一 久米 稔
14:10	6	MMP I 臨床尺度による学生の評定差-(2)	東邦大学医学部 東邦大学医学部	○草薙 和 稲松 信雄

人格・検査・測定4

第2日	8月31日(日)	12:30~14:30	C室(6-6 教室)	座長	服部 環	川島 大司
12:30	1	ニューラルネットを用いた欠損値の補完	宇都宮大学教育学部		服部 環	
12:50	2	I 対比較と重回帰分析による新たな 感覚評価法	神戸大学発達科学部		市橋 秀樹	
13:10	3	サンプル数の諸問題(8) — 叩打法による個人内変動の検討 —	東海女子大学 早稲田大学		○川島 大司 久米 稔	
13:30	4	若年女性のメンタルストレス負荷とリラクセー ション技法時における自律神経機能の評価	杏林大学保健学部 筑波大学心理学系		○高橋 真理 藤生 英行	
13:50	5	アーチェリー競技場における成績遂行に及 ぼす注意力の影響 — TAISによる検討 —	同志社大学文学研究科 同志社大学文学部		○馬場 理子 内山 伊知郎	
14:10	6	柔道選手の心理的相違 — 選手と部員間の比較 —			飯田 穎男	

看護・発達・教育6

第2日	8月31日(日)	12:30~14:30	D室(6-7 教室)	座長	關戸 啓子	金子 潔子
12:30	1	大学生の食に関する研究(1) — 看護科と栄養科学生の比較 —	川崎医療福祉大学 川崎医療福祉大学 千葉大学		○關戸 啓子 小野 和美 内海 澁	

12:50	2	大学生の食に関する研究(2) —朝型と夜型タイプの比較—	川崎医療福祉大学 川崎医療福祉大学 千葉大学	○小野 和美 關戸 啓子 内海 澁
13:10	3	実習における情報収集の記述の意識	都立府中病院 千葉大学	○生駒 和子 内海 澁
13:30	4	看護学生の子供に対するイメージの構造	佐賀医科大学 佐賀医科大学 産業医科大学 千葉大学	○寺田 敦子 草野 美根子 中 淑子 内海 澁
13:50	5	看護者の看護技術に関する意識	都立板橋看護専門学校 千葉大学	○金子 潔子 内海 澁
14:10	6	患者—看護婦関係の分析 —言語速度を通して—	福岡大学筑紫病院 千葉大学 広島大学	○今富 さゆり 内海 澁 篠原 純子

看護・発達・教育7

第2日	8月31日(日)	12:30~14:30	E室(6-8 教室)	座長	岸本 英男	岡本 善之
12:30	1	音響の看護婦に及ぼす影響 —警報音環境と音楽嗜好性—	愛知医科大学附属病院 千葉大学	○鈴木 千春 内海 澁		
12:50	2	皮膚血流の研究 —深呼吸の皮膚血流に及ぼす影響—	九州大学医学部附属病院 千葉大学	○山下 春江 内海 澁		
13:10	3	医療材質の研究 — タオルとガーゼの感触イメージと皮膚血流 との関連 —	広島大学 千葉大学 福岡大学筑紫病院	○篠原 純子 内海 澁 今富 さゆり		
13:30	4	教育評価の研究(その37) — 生涯学習時代のあり方を問う —	大泉会四期会		岸本 英男	
13:50	5	幼児の自己統制の発達とその規定要因の 検討 — 保育場面における教師評定による 幼児の自己統制尺度の再検討 —	兵庫教育大学大学院		中田 栄	
14:10	6	保育園児の障害事故について —平成5年度を中心として—	麻布大学獣医学部		岡本 善之	

看護・発達・教育8

第2日	8月31日(日)	12:30~14:30	F室(6-9 教室)	座長	青木 玲子	松尾 典子
12:30	1	かかわり方の発展にかんする研究(31) — 母と子の集団活動における幼児の 自己形成 —		文教大学 文教大学 東京女性財団		○小原 伸子 佐藤 啓子 青木 玲子
12:50	2	かかわり方の発展にかんする研究(32) — 母と子の集団活動における母親の 自己形成 —		東京女性財団 文教大学 文教大学		○青木 玲子 小原 伸子 佐藤 啓子
13:10	3	専門学校福祉学科生の授業評価に 関する研究Ⅱ		東京商科学院新宿専門学校 富士短期大学		○佐伯 典彦 岡村 一成
13:30	4	秘書イメージに及ぼす教育の影響		城西大学女子短期大学部		和田 美知子
13:50	5	リーダーシップ特性の研究 — 受動的リーダーシップ調査の試み —		岐阜大学医学部附属病院 千葉大学		○野田 紀子 内海 澁
14:10	6	創作童話を用いて看護学生の自己分析を 試みる		山形大学医学部看護学科 千葉大学		○松尾 典子 内海 澁

*本誌の以下の部分は、大会プログラム掲載のものから変更となりました。(敬称略)

*発表取消(2名)

藤井 博英, 渡辺 妙子

*発表題目変更(4名)

大塚 廣子, 小林 千世, 福井 嗣泰, 福井 博一

*座長変更

松谷 さおり → 中野 アツ子

*氏名訂正

平尾 美生 → 平尾 美生子

シンポジウム
ワークショップ

家庭内暴力をめぐる諸問題

— 親から子どもへの暴力 —

中村昭之

(駒澤大学文学部)

林 潔

(白梅学園短期大学)

趣旨：

家庭内暴力をめぐる問題は、従来子供の暴力行為を中心として理解される場合が多かった。一方、親自身のもつ問題や家庭の機能不全がもたらす、親からの暴力という問題も無視できないものがある。

このシンポジウムでは、子供に対する親からの暴力という視点から問題をとりあげる。

厳し過ぎる体罰や、度を越した叱責、ひいては児童虐待、あるいはよし物理的な暴力という形ではないとしても、暴言、過度の強制や拘束という精神的圧迫も一つの「暴力」としてとらえることができよう。また、「暴力的な」しつけを当然のこととして育った子供が親になった場合、何らのやましさを覚えることもなく、同様な態度で自分の子供に臨むという現実もある。さらには、親の過剰適応の限界、親の何らかのコンプレックスの表現あるいは処理様式として、暴力の問題が表れることがある。

本シンポジウムでは、親からの家庭内暴力とその対応について、応用心理学の果たし得る役割について討議する。

被虐待児の問題：

奥山（1997）によれば、被虐待児の発達の問題は、自己概念と対人関係の問題である。すなわち、自己抑制の力の低下、自己評価の低下、怒りをかう行為、自己の連続性の低下である。

一方当事者には意識されない、児童虐待の連続性の問題（石川、1997）も深刻な課題である。

このテーマについて、Adult Childrenの概念により解明する試みもわが国でなされている（斉藤、1995；他）。Adult Childrenの用語は本来アルコール中毒の親の子どもの問題として用いられた。最近ではその概念が拡大し、機能不全の家庭の子どもの意味で用いられる。アルコール中毒の親の子どもが、やがて同じタイプの夫をもつという傾向も指摘されている。「無意識」の、虐待の連鎖とも関連する。

「虐待」をすする親へのケア：

虐待を受ける児童への対応と併せて、児童虐待の連鎖の可能性を断つための親へのケアが基本的な課題と

なってくる。これは一般には、個々の家庭での課題解決の能力の限界を超えるものであろう。

いうまでもなく、人間にとって家庭は最大の社会的Support源である。しかし家族成員が、Supportの機能を果たし得ない現実も存在する。さらには家族の存在が重圧となっている状況さえある。

家族の問題への処置を、家族成員のみに任せるには危険な状況がいくらでもある。主観的な「愛情」も、その関係如何では、時には逆効果となる可能性をはらんでいる。家族関係や個人的関係による援助のよさは認めるとしても、人間の問題への対応には、専門性を要する必要がある。「子ども」の問題は、家庭と学校、専門家を含む地域の機能とのかかわりの中での処理が求められるはずである。特にPTDSの問題や「病理」を含んだ問題の場合は、訓練を受けない人の対応の限界はある。この個人内、個人間の調整機能に、応用心理学の理論と、その専門家の果たす役割がある。

これらの問題について、本シンポジウムでは4人の話題提供者と1人の指定討論者に検討していただく。

柴田出氏：精神科医の立場から、子ども時代の体験が成長過程で出現することの問題と、子どもへの暴力の連鎖の問題を中心に。

浅井春夫氏：児童福祉の立場から、特に児童への性的虐待を中心に。

椎名篤子氏：子どもへの虐待の連鎖と、親の心のケアの問題を中心に。

平尾美生子氏：教育相談の立場から、親子の心理的メカニズムと早期発見、予防への手がかりについて。

神田久男氏（指定討論者）：主として教育相談の立場から。

本シンポジウムによって、標記の問題への具体的な接近の手がかりが示唆されれば幸いである。

参考：

石川知子 1997 児童虐待を（して）悩む親たち 臨床精神医学, 26, 27-32.

奥山真紀子 1997 被虐待児の治療とケアー 臨床精神医学, 26, 19-26.

斉藤学 1995 魂の家族を求めて 日本評論社.

家庭内暴力をめぐる諸問題

—親から子どもへの—

精神医学の立場から

柴田 出

(柴田クリニック)

キーワード： 陰性外傷 陽性外傷 役割逆転 相補的役割

演者は、精神科クリニックで、多くの患者の精神療法に取り組んでいるが、約15年ほど前から神経症レベルの患者より人格障害—境界性人格障害や自己愛人格障害—のケースが大多数を占めるようになってきた。それらの患者に精神分析的な精神療法を行い展開した過程で、彼らの人格成長にとって最も重要な小児期に焦点が当てられてくることが多い。この小児期は、無力で自主的言動を行うのは未だ不可能である。そのため情緒的なつながりのあるべき親への依存や保護を必要とする発達過程にある。注意深く見守る親よりは、依存・保護を求める子どもの見る目がより深いのは当然である。このような場合、いわゆる健全な親子の間でさえも、心のずれが生ずるのもまた当然のことである。子どもにとってこのことが、親が依存を拒否し、保護を絶たれ無視され、見捨てられたと受け取り、それが心的外傷になり、虐待されたと感知することも十分に有り得る。これは他者の拒絶から生じる陰性外傷といえる。そういえば「無視されるより、親の手で直接虐待を受けた方が良い」とある患者が演者に述べたが、このことは直接的、とりまなおさず侵襲的な陽性外傷の方を期待していたことを物語っている。

最近注目されている性的虐待に的を絞って述べてみる。小児期の性的虐待、特に父親から娘への近親姦が決して稀でないことを認めざるを得なくなったのは最近のことである。日本の文化・社会では、これまでこれらの問題を隠蔽し、否定してきていたが、最近になって自らの子ども時代の被害を精神医療の場で訴えるアダルト・チルドレン（成人となった子どもたち）が登場してきている。

さて演者は精神科外来で、親からの性的虐待それも近親姦に対する屈辱感や憤りや対処の仕方の相談に直接に駆け込んで来た患者に未だ出会ったことはない。前述したように、精神分析的な精神療法の発展過程で顔をのぞかせてくるというのが現状である。

近親姦体験という重大な秘密は、コトバとして口に出すことさえ多大の努力と勇気とを必要とするものである。また虐待する父親からみれば、子どもは愛情の対象であり、世話をし可愛がることの単なる延長線上に近親姦があるかもしれず、子ども側からしても、愛してくれる父親への愛着と依存心が強く、また自分を

特別扱いにしてくれることへの満足感かも知れない。

近親姦が一旦成立すると、今度は別の性質を帯びるようになってくる。親は親としての役割を放棄し、子どもは親のパートナーとしての役割を担うことが始まる。子どもは親の相手をし、時として親の世話をするという役割逆転がおこる。

ガンザリン(R.Ganzarain)が、近親姦の生活史を持つ患者の対人関係の特徴として、あるひとつの対になった相反する相補的役割とそれに付随する感情があり、それが患者の中で、一方から他方へと揺れ動くとしているが、演者も臨床体験で全く同様の体験を数人観察しており、相補的役割に同感である。

(a)「子どもであること」と「親であること」

(b)「犠牲者」と「お気に入り」

(c)「告発者」と「嘘つき」

近親姦体験の秘密を打ち明け、苦痛を誰かと共有し、虐待者を告発したい気持ちと、そうすることは愛してくれる父親への背徳行為であり、家の恥をさらけ出すことであるため、嘘をつき続けようとする気持ちが揺れ動く。

(d)仲間からの「のけ者」と家庭での「特別な人としての特権」

(e)「性のエキスパート」と「無知」

性的行為についてはエキスパートであるかのごとく振る舞い、誘惑してくるが、性の生理などについてはほとんど無知。

などである。

上述したことからも理解できるように、要するに被虐児は、人格の成長にとって最も重要な時期に汚点・精神的な外傷を刻み込まれ、これがその後の安定した心の統合した成人になることを妨げるところか、心的外傷ストレス障害(Post Traumatic Stress Disorder-PTSD)・多重人格障害(Multiple Personality Disorder-MPD-)などの精神障害を残すことも決して稀でないことを付記しておく。

(しばたいづる)

日本における児童虐待の実態

被虐待者のアンケート調査より

椎名篤子

(作家・子ども虐待を考える会代表)

目的

私はかねてより児童虐待についての実態や知識を多くの人々が知ることが予防には必要であると感じており、1994年8月から1996年8月まで、女性向けコミック月刊誌に15回にわたり児童虐待の周辺を漫画化する試みをした。活字離れが進む現代、発行部数が約50万部あり、読者層が子育て中の母親と結婚前の女性であるコミック誌には、情報を発信するメディアの役割が期待できた。漫画化と同時に、子どもの頃に虐待を受けた苦しみ誰にも言えずに大人になった女性、また我が子を虐待してしまう苦しみを訴える母親からの手紙を多く受け取った。私の役割はこうした声を社会に知らせることでもありと考え、被虐待者の実態を詳しく知るためにアンケート調査を行い、その結果をまとめた。また機能的な状況にある被虐待者に対してはそれらを援助できる専門家への仲介を試みた。

2. 対象と方法

対象：女性コミック月刊誌で児童虐待を知り、自分も虐待を受けて育ったと手紙をくれた269人。

方法：①児童虐待の内容を知るためにアンケート調査を行った。②対象者の中で、本人との手紙と電話による接触で、緊急を要すると思われるケースについて、専門家に適切な対応をしていただくように仲介した。

3. 結果

①アンケート調査の結果：対象者269人に65項目のアンケートを実施し、そのうちの107人から適切な回答を得ることができた。

②回答者の年齢は18歳から67歳まで分布していた。

③身体的暴行、心理的虐待、保護の怠慢による虐待を受けて育った者(A)は73人(68,2%)、Aに加えて性的な虐待まで受けて育った者(B)は34人(31,8%)であった。

④A,Bとも年齢の多くは25～35歳間に分布していた。

⑤虐待を受けた年齢は、Aグループは0～3歳から開始し8歳以降まで続いた例が少なくなかったが、Bグループは4～9歳に開始し、10～12歳で終わるものが多かった。

⑥Aグループで子どもがいる者は50人(68,5%)で、自分の子どもを虐待している者は40人(80%)であり、Bグループではそれぞれ22人(30,1%)、15人(68,2%)であった。

⑦Aグループでは実母から虐待を受けた者が一番多く23人(31,5%)、Bグループは実父から12人(35,3%)だった。

⑧自殺を思い詰めたことのある者は、Aグループでは54人(74%)、Bグループでは25人(73,5%)であった。

⑨緊急に対応した例について：自殺や、子どもの命を脅かす虐待をほめかす手紙、電話が届き、緊急かつ個別に、その手紙の発信者の近くにいる援助者をすみ

やかに見つけて結び付けるコーディネーター的な役割が求められ、主に精神科医、小児科医を探して援助を求めた。しかしこの作業は難航したケースもあった。

ケース1) 29歳、未婚の女性

自分は小学校から自殺を思い詰め、自殺未遂を何度かした。いままでに薬物におぼれたり、男性とつぎつぎに交際し、現在は拒食症、外出恐怖で外に出られない。実父に性的な虐待を受け、その記憶に非常に苦しめられているからだと思うから、誰か相談に乗ってくれる人がいたら紹介して欲しいとの手紙を受け取った。そこで彼女の住む町に児童虐待の病理に詳しい援助者を見つけたが、探し出すことができなかった。

ケース2) 母親24歳、男児3歳

子どもを育てられない、愛せないとの手紙が届いた。「昨日子どもの首を絞めてしまった、助けて」という母親の言葉から危機的な状況が心配され、母親の自宅から1時間ほどにある病院の小児科医に急ぎ連絡した。医師の指示を得て「子どものことを相談してみようか」と母親に手紙を書いたところ通院を開始した。夫とは別居中であり、母親は被虐待者であった。

4. 考察

多くの女性の被虐待者は、身近な相談者や治療者を切実に求めていた。漫画を見て手紙をくれた女性を対象にした限られた条件でのアンケート調査だったが、性的な虐待を含んだ児童虐待が31,8%に上り、今まで日本で行われた主な調査では10%以下であったので、実態はこれを上回るのではないかと思われたことと、性的虐待を受けた人は子どもを持つことに積極的ではないことがわかった。自殺を思い詰めたことがあると答えた者はA,Bグループ全体で73,8%にもなり、児童虐待が子どもに及ぼす影響が深刻であることを、改めて認識した。虐待の連鎖はA,Bグループ全体で76,4%にのぼった。

被虐待児が、思春期を経て社会人となり、やがて結婚して子どもをもうけることを考えるとき、早期発見に努力すると同時に、虐待する親にならないよう、被虐待児への速やかで長期にわたる心への治療的関わりが必要とされる。また虐待を起こす親には受容的な関わり、心への治療的関わりが求められる。援助者自身が傷つくほどに児童虐待の病理は深く、援助介入は困難であることが多い。その病理に詳しく、代々受け継がれた家族の歴史と機能不全を知り、適切な介入を行える心の臨床家の育成が急務である。また各地において多職種専門家による援助網が結成され、手紙やインターネット等を含む相談方法の多様化も計り、広く相談者を受け入れることがいま求められている。(しいなあつこ)

子ども虐待の現実

わが国においてもようやく子ども虐待に社会的な注目が集まるようになってきた。しかし虐待に関して統計的に集約される数字は冰山の一角にすぎないのが現実なのである。1996年の児童相談所での調査では、半年間で2061名が虐待を受けており、種別による内訳は、身体的虐待48.9%、不適切な保護または拒否40.4%、心理的虐待5.9%、性的虐待4.9%となっている。この数字は10年前の前回調査より、ちょうど倍増したことになっている。

虐待の持続期間の調査では、3か月から14年の幅があり、平均約3.5年となっており、虐待が強固に持続する傾向をもっているということが出来る。児童相談所における虐待相談件数(95年度)は2722件となっており、前年度より38%の増加となっている。棄児の数を加えると、子ども虐待として把握される数は3千件程度といえよう。

この数字をアメリカと比較すると、最新の統計では314万件が通告件数として把握されており、3分の2は誤報ないしは確定できないケースということであるから、約100万件として、人口比を踏まえると、200分の1の発生率ということになる。

また乳幼児の虐待死の統計をみると、アメリカでは年間約2000件を数えているが、わが国ではこの5年間で154件が確認されており、年間31件となっている。火傷、殴打、放置などで生命を奪われている現実もある。人間を育てる教師と保母が被害児にかかわっていがら、虐待を発見し通告することもできなかったという事実もある。このような重度の虐待では被虐待児自らが言い出さない限り、また死亡事件として発覚するまで虐待は覆い隠されたままになっているのが現実である。「すべての子どもが生命への固有の権利を有することを認める」と謳った子どもの権利条約第6条にかかわる最優先の課題が子ども虐待問題なのである。

子ども虐待とはなにか

では虐待とは何をもって虐待というのだろうか。虐待とは、英語で「abuse」というが、ab/useで子どもに向けられた力の誤った使い方のことをいう。つまり子どもへのおとなによる力の誤用・乱用のことを

いうのである。したがって虐待には、暴力などの具体的な行為としての虐待と、養育に必要な行為をサボタージュする不作為としての虐待に分類することができる。子どもの人権を踏みにじる行為が虐待であるが、人権とは人間の尊厳に関する法律的表現のことをいうのであり、子どもへの養育責任をもったおとなからの、子どもへの不適切な行動・態度を虐待というのである。子ども虐待を定義すれば、「逃れがたい支配・管理・強制関係のもとで、親もしくは力関係の優位にあるおとな

から、自らを守る能力の乏しい子どもの人権を侵害するすべての暴力的行為ないしは不作為的行為である」ということができる。子ども側からいえば「子どもの心身を傷つけ、

健やかな成長・発達を損なう行為」を虐待といえることができる。子ども虐待の種類として

- ①親子心中・子殺し(子どもを私物化し、子どもの意思を踏みにじった殺人行為である)
- ②身体的虐待(身体に傷を負わせたり、生命に危険のある行為をすること)、③棄児・置き去り(棄児は通常は発見されないところへ置き去りは発見できるところへ子どもを放置、すること)、④養育・保護の怠慢および拒否(衣食住などの必要な世話をせず、病気であっても病院にも連れて行かないなどの不作為をいう)、⑤性的虐待(強姦や身体的接触などの性的関係を強要したり、ポルノなどの被写体にする行為をいう)、⑥情緒的・心理的虐待(言動によって子どもを傷つけたり、無視することによって子どもの心にダメージを与える行為をいう)などがあげられ、それらを子ども虐待という。発見できないで事故と病気として報告されている現状もある。

こうした実態のちがいは、子ども虐待へのとりきみの遅れを示しているものであり、子どもの人権に関する国民の認識、専門家の虐待への発見・対応能力、法・制度の整備状況、子ども、自身の虐待への拒否能力の形成などの社会背景に大きなちがいがあるといえよう。

今後の課題として虐待の可能性をキャッチするアンテナを張ることがもてめられている。

第2は、虐待の事実気づいたら、共通認識をもつためにケース会議をもち、虐待者への対応をおこなうキーパーソンを決めるという課題があげられる。その際、対応の基本は、虐待をしている親・養育者を批判することではなく、育児の困難への援助をおこなうことである。継続して援助できる関係をつくっていくことが大切なのである。

教育相談における虐待および不適応への援助

平尾 美生子

(昭和女子大学 心理学科)

1. 教育相談機関における特徴

教育相談機関では、来所および電話により、子どもに関するあらゆる相談を本人・保護者・教師などから受けている。最初から虐待を主訴として申し込まれる事例は稀であるため、統計的な数字にはなりにくい。しかし、不登校(主訴の首位)、非行、集団不適応、いじめ問題、神経性習癖、養育上の問題などの相談過程や、教師へのコンサルテーション活動の中で、虐待が判明する事例が以前よりも増加している。

不登校事例で虐待を伴う場合、家庭が居場所にならず、人の少ない公園や図書館などに逃げるとか、安心できる場(保健室、知人宅)に入り浸るとか、自室に閉じこもるとか、自殺未遂をくり返すなど不安定な状況が認められる。教育相談での虐待は、心理的虐待と身体的虐待が多く、性的虐待と保護の怠慢・拒否が比較的小さい。

教育相談では、子どもの問題や不適応行動の改善を目指して始まるが、虐待が判明した場合は相互の悪環境を断ち切るために、本人および親との信頼関係を形成しつつ、共に親子(家族)関係を見直し、修復に向けての息の長い援助活動が必要である。被虐待児にとって学校生活での適応は殊の外大事であるので、学校や教師との連携を密にしている。また、親子の分離・保護や医療的対応などが必要な事例は適切な機関を紹介し、チームワークにより援助を進めている。

2. 心理的状態および発現の要因

筆者の担当した被虐待児は、前述したような不適応行動や心身症的症状が発現しており、回避的、攻撃的、自己破壊的行動が著しい。多動や衝動性が頻出する子ども、不安や脅えの強い子ども、抑うつや自己嫌悪に陥っている子ども、無気力や無感動になっている子どもなど現われ方は様々である。

子どもは早期より虐待や心の外傷を受けて、基本的信頼感が形成されず、見捨てられ不安や警戒心を抱き、安定した対人関係がもてなくなっている。また適切な養育がなされていないため、向社会的行動が身につけていない。子どもの不適応行動や症状は、援助を求めているサインであるといえよう。

一方、親の特徴としては、親自身に被虐待体験があって安定した対人関係がもてぬとか、社会性が未成熟

である場合が多い。また子どもの状態が親の要求水準と合わず、期待過剰になるとか放置してしまう事例も少なくない。夫婦間(家族)の不和や、身近な人からの援助の不足なども要因と考えられる。中には親自身が精神疾患をもつ場合もある。虐待が父親からか、母親からか、両親からか、全ての子どもに対してか、特定の子どもだけかによっても状況は異なる。

母親は子どもへの虐待に、「かわいくない」、「いない方がいい」、「腹が立つ」などと拒否的感情をもつとともに、「つらい」、「どうしようもない」、「親になれない」などと葛藤やアンビヴァレントな感情を表現し、行動のコントロールがきかない自分に対してもどかしさや罪障感を抱くことが多い。

3. 子どもおよび親などへの援助と諸機関の連携

子どもに関わる相談担当者の基本的態度は、表面的な言動にとらわれず、そのようにならざるをえなかった経緯や、親へのアンビヴァレントな心情などを共感的に受けとめ返しなが、共に考え改善していけるような関係の形成が必要である。担当者との信頼関係を通して、情緒の安定をはかり、ありのままの自己表現をしつつ、向社会的行動や対人関係能力を育成することによって、不適応行動の改善に至るのである。子どもの変化により親が変容していく場合も少なくない。

親に対しても共感的に関わり、子どもへの無理解や虐待を責めない態度が求められ、ありのままの気持ちや葛藤が表出され、わかってもらえたという体験を経なければ、自らの態度の見直しや他からの助言も受け入れないであろう。親の過去からの対人関係の歪みを修復するためには、関わる側との信頼関係の形成が不可欠である。事例に即して、両親や家族の合同面接、訪問相談、グループカウンセリングも有効と思われる。

虐待事例には危機介入的アプローチとインテンシブで息の長い援助の両方が必要であるため、家族、学校、児童相談所、教育相談所、保健所、福祉事務所など地域諸機関(ボランティア団体も)の特性を生かし、効果的な予防および支援の協力体制をつくることを求めてやまない。日頃から支援のチャンネルを多く持ち、しかも適切な連携を推進するには、調整役の機関か人が必要と思われる。虐待や不適応行動に連鎖現象が見られる昨今、人間疎外からの回復が改めて問われよう。

現代の青少年犯罪とおとなの役割

長谷川孫一郎

(大正大学人間学部)

1. 企画の主旨

最近の新聞報道やテレビ番組では、いじめや暴力、浮浪者襲撃やおやし狩り、アベック殺しなどの凶悪犯罪、覚醒剤や麻薬の広がり、少女売春などがとりあげられ、さらにオウム事件や少年殺害事件などを巡って推測を交えた情報が氾濫した。被害者・加害者とその家族の人権問題も提起され、現代の青少年と親や教師の心理的断絶とか、家庭や学校の責任追求など一部専門家の意見も援用した評論が盛んに行われている。

果たして現代の青少年は、報道されるようにおとなの手の及ばないほど変わってきたのか。その実態を明らかにし、青少年をもつ親や教師の関わり方を探り、自信を取り戻すために、応用心理学の研究者として何を提言できるかを追求することが企画の主旨である。

2. 少年非行の動向について

戦後わが国の新聞などに「少年非行の増加」や「凶悪化」がくりかえし報道された。その非行少年には、「少年法」に規定される犯罪少年、14歳未満の触法少年とく犯少年のほか、警察統計の不良行為を含む。警察統計1949～1985年に主要刑法犯で補導の少年の人員と人口比をみると、それぞれ1951年、1964年、1985年をピークとする3つの波がある。主要刑法犯とは、第2波以後急増した交通関係の業過を除いたものである。第一の波は、戦後の動乱期に家や家族を失った少年の窃盗が主であり、第二の波は高度成長期に広がる貧富の差や学歴社会に不満をもつ、特に家庭や学校に適応できない少年であり、第三の波にかけて万引、車の窃盗、殺人や強盗などの凶悪犯、傷害や恐喝などの粗暴犯の増加であった。そして第三の波は、「遊び型非行」と言われるように中流以上の両親のそろうた家庭の少年の非行、低年齢化、薬物乱用、女子の非行、暴走族などの集団非行である。

こういう統計を見ると、注意すべきことは、補導される少年のすべてが検察に送られるわけではなく、検察に送られても家庭裁判所の最終の審判で非行を否定されることもある。その間に少年鑑別所に入所したり審判の結果少年院に送致される少年はずっと少ない。したがって非行の増加というとき、どういふ非行の増加を指すのかを明らかにしなければならない。しかも非行のあった少年の補導は限られており、警察の方針

もその時期や社会状況などに大きく左右される。

また1986年以後の非行をみると、多少の増減はあっても、強盗を除く凶悪犯や粗暴犯などの刑法犯も薬物乱用や道路交通法などの特別法違反も女子非行も減少傾向が続いている。したがって警察統計からみる限り、現代の少年非行の増加とか凶悪化とはいえないし、この期に増加してきた不登校、いじめによる自殺などと、衝撃的に報道されたいくつかのリンチ殺人を指すのだろうか。こうした報道の姿勢が世論形成に影響し、政治的に利用され、親や教師の指導力を疑わせて、また青少年の理解を妨げているのではないか。

3. 青少年の犯罪研究について

戦後の青少年とその犯罪については、精神医学、心理学、社会学、法律学、教育学などの分野で多くの調査研究がある。われわれが専門とする犯罪心理学でも各種犯罪現象の特徴と変容、非行のある少年の特性、家庭や学校の環境、捜査や調査方法、面接やテストによる事例研究、矯正施設の処遇等から、現代の犯罪の実態と、青少年理解のための仮説や実践を提示した。

今回のシンポジストは、現場の実践の中で研究してきた方々で、川邊謙氏は刑務所から各地の少年鑑別所に勤務し、心理テストなどの研究を経て、現在は仙台矯正管区医療分類課長として、最近の資料を分析されており、川崎道子氏は各地の少年院、少年鑑別所などの勤務を経て、現在静岡少年鑑別所長、女子非行に限らず広く青少年の問題に取り組んでおられ、奥村雄介氏は精神科医師として拘留所や少年鑑別所の勤務を経て、現在関東医療少年院医務課長をされ、放火や薬物乱用などの研究をされており、桐生正幸氏は長く山形県警の科学捜査室に勤務され、現在は心理主任研究員として、これまで各種犯罪の捜査心理や放火などの調査研究をなされている。そして指定討論者の細江達郎氏は、現在まで岩手大学社会科学部教授として勤務され、犯罪をはじめ広い領域の研究をしておられ、最近翻訳出版されたA. F. ファーンハムの「しろうと理論」は社会心理学の実験室的な研究でなく一般の人々の「理論・考え・信念」について日常生活の素材を分析したもので、氏の一つの視点を示していると思われるが、参加の方々の意見も交えての討論を期待したい。

(企画・司会 はせがわまごいちろう)

凶悪非行における攻撃性

川 邊 讓

(仙台矯正管区)

キーワード： 攻撃性 フラストレーション アタッチメント 儀式化 規範の相対化

1 最近の凶悪非行の特徴

非行総数・発生率とも減少しているなか、凶悪非行は近年増加に転じている。資質的・環境的負因の小さい少年による強盗が増加しており、凶悪非行は「一般化」しているといえる。また、内容的には、攻撃衝動の統制の悪さが目立つ。

2 凶悪非行における攻撃性の分析

(1) 精神病理

非行臨床の立場からは、凶悪非行における攻撃性の背景にある精神病理は以下のように類型化できる。

a 精神病型（中毒性のものを含む）

精神症状のひとつとしての極度の不安、妄想により攻撃衝動が昂進する。

b 人格障害型

幼児からの対象関係に問題がある。自己中心的で共感性が乏しく、早期から行為障害、特に小動物への攻撃や放火・弄火等が見られ、それが年齢とともにエスカレートしてくる。被虐待場合とノンフラストレーションで生育している場合がある。

c 神経症型

親からの過保護、過剰期待又は過剰支配を受け、一定時期までは「よい子」であったものが、それを維持できなくなると、抑圧していた攻撃衝動が表面化する。神経症症状が見られることもある。力動的には、幼児期における甘え欲求の不充足とその潜在化を巡る問題があり、退行的になることが多い。

d 人格未熟・モラトリアム型

日常生活においてはおおむね適応的であるが、充足感・達成感をもっておらず、漠然とした不全感、不満等を内在させている。このため、状況要因に刺激され、攻撃衝動が表面化する。

明確な生活目標も全力で努力した経験を持たないので、目標達成が阻害されたという意味のフラストレーションはないのだが、漠然とした期待感、優越欲求又は万能感が充足されないというフラストレーション（不快情動）がある。自己のフラストレーションを明確化できないから、攻撃対象も明確化できず、攻撃の意図も自覚できない。したがって、内省も深まらない。

最近増加した強盗はdに該当する場合が多い。

(2) 攻撃行動の機能

比較行動学的に攻撃行動の機能に着目すると、

a 追い詰められ・保身型

b 掠奪型

c なわばり主張型

d 支配・優越欲求型

に類型化できる。最近増加した凶悪非行はdに該当することが多い。すなわち、優越欲求や承認欲求は強いのだが、人格的にも社会的にも自信が乏しく、プリミティブに強さの誇示をする。金銭の強取も被害者を屈伏させたことの証としての意味の方が大きい。また、単独非行では、弱者を狙ったり、空気銃、乗物利用による瞬間的攻撃により心理的対人距離をとり、集団非行では、数を頼みに個人又は小集団を狙うことで自信の乏しさを補う傾向が見られる。

(3) 攻撃抑制機能の低下要因

攻撃抑制機能を低下させている要因には、以下のようなものと考えられる。

a 被疎外体験

b 集団化・一般化

c アタッチメント形成の不足

d モラトリアムの延長・社会的自覚の不足

e 規範の相対化

f 儀式化を含む攻撃抑制刺激の無効化

fについては、示威行為により相手が屈伏しても、攻撃行動に出てしまう、土下座、哀願という儀式が攻撃性を抑制せず、むしろ、優越感を充足させ、攻撃をエスカレートさえさせる、子供・女性・老人等の弱者にも攻撃性が抑制されないといったことが指摘できる。

3 社会の対応について

社会自身が規範の絶対性の維持し、少年たちにモデルを提示することが最重要である。次に、家庭や学校、地域社会が、社会との交渉の場や濃密な対人交流の場をもっと用意し、アタッチメントを強化するとともに、儀式化を含め、攻撃抑制を学習させる必要がある。また、少年保護過程を少年と社会又は法規範との相互交渉過程としてとらえ直し、少年を現実及び自分自身に向き合わせる場としてより効果的に機能させる必要がある。

(かわべゆずる)

現代の青少年犯罪とおとなの役割

—— 非行少女を中心に ——

川崎道子

(静岡少年鑑別所)

1 はじめに

女子による犯罪や非行は、男子に較べるとその発生率が著しく低く、質的にも差異があるというのが、国際的に見ても歴史的に見ても特徴である。また女性の社会進出に伴って、量的にも質的にも変化するともいわれている。戦後の女子非行の変遷を概観し、最近の傾向を把握して、問題の所在を探りたい。

2 戦後の女子による犯罪の動向

昭和20年代は、終戦によって経済生活が破綻するとともに価値観の崩壊による社会生活の混乱も著しく貧困ゆえの生きていくための犯罪が多発した時代である。しかし、戦後第一のピークを示した25年の交通関係業過を除く刑法犯検挙人員の女子比は1割以下で人口比1,000人当たりで見ても1.7(男子は18.3)にすぎない。女子比が1割を超えるのは、第二のピークに当たる38年であり、当時の女子の刑法犯は窃盗と詐欺が中心であり、特別法犯では売春事犯と薬物事犯が目立っていた。女子比は、40年代後半から更に徐々に増加して、50年代には2割近くを持続するようになり、平成になると時に2割を超えるようになっている。

40年代後半以降に女子比を押し上げたのが、いわゆる「遊び型非行」といわれた女子少年による非行であり、万引に代表される初発型の非行とともに薬物非行が増加し、また性の逸脱行動や粗暴非行も目立つようになってきている。特に最近では、いわゆる「援助交際」に代表される少女売春を中心に女子非行が再度注目されるようになっており、9年上半期の交通関係業過を除く刑法犯少年のうちで女子の占める割合は、前年の21.6%から24.6%に急増している。罪種別に見ると、8割が窃盗犯であるが、各罪種において増加していて凶悪犯の増加率ももっとも高い。

3 少年鑑別所入所少年に見る非行少女の変化

女子少年は、男子に較べて非行化しにくいだけに、資質的にも環境的にも男子以上に問題が深刻な少年が多く、年齢的にも年少少年が多いというのが、従来からの特徴である。こうした女子少年の特徴に変化があるのかどうか、平成8年と昭和63年に全国の少年鑑別所に入所した女子少年について比較を試みた。

年齢は、入所時年齢・初発非行年齢ともに高くなっ

ており、学歴も中学在学や中卒が減少して、高校在学や中退が増加し、わずかであるが高卒以上も増加している。知的能力もやや高い方に変化してきて、非行化の要因に学業遅滞が関係している者が減少する傾向にある。家庭の問題や家族との関係も良い方向に変化しているが、指導力不足や交流不足は増加している。

警察補導歴のない者が増加しているが、問題行動歴を見ると、家出歴とシンナー吸引歴が目立って減少している他は、すべて増加しており、覚せい剤は4割、万引は6割以上が経験している。無免許運転や暴走行為を頻繁に行なう者も増加しており、また暴力団関係者が増えているわけではないのに、文身を入れている者が増加傾向にある。

非行動機としては、「誘われて」「うさ晴らし」「好奇心」が増加しており、非行化の要因としては、親和欲求・受動性・学校等における交友関係の不調が増加している。

4 最近の非行少女の特徴

少年鑑別所に入所する少年は、警察や家庭裁判所の段階で一定の選抜をされてくるので、実際に社会で活動している非行少年のごく一部にすぎない。いわゆる「援助交際」の女子高生たちは、現行の売春防止法では立件しにくいし、また、家庭や学校の枠の中で一応生活しているので、「ぐ犯」の要件も満たしにくく、結果的に「援助交際」だけで少年鑑別所に入所することは希である。しかし、仲間や相手の男の影響を受けて、覚せい剤などの薬物を使用するなどして入所する少年があり、そうした中には従来の不適応型の少年とは異質な面を持つ少年がいる。例えば、「今ここを楽しみたい」といった刹那的傾向、「仲間や流行に遅れをとるのは恥ずかしい」といった横並び志向、都合のよい情報をう呑みにし、リスクを軽く見る怖いもの知らずの傾向などが顕著に認められることである。「家庭でも学校でも何ら問題がない女子高生」と見受けられた少年でも、調査してみれば問題を抱えていることがほとんどだが、個別の事情に加えてこうした若者の価値観や考え方が万引・売春・薬物などの非行への抵抗を失わせていると考えられる。

(かわさき みちこ)

現代の青少年犯罪とおとなの役割

――覚醒剤や薬物乱用を中心に――

奥村 雄介

(関東医療少年院)

はじめに

最近、世間を驚かす青少年犯罪が発生し、また、薬物の乱用による犯罪が多発しているのは、憂慮すべき社会現象である。今回は、薬物のうち、覚醒剤使用による青少年犯罪の実態とその対策について話を進める。

1 覚醒剤汚染の広がりとその影響

覚醒剤汚染が広がった原因としては三つ考えられる。

まず、一部の不法外国人による無差別な乱売によって、覚醒剤が入手し易くなったこと。第二は、従来の使用方法が主に静脈内注射であったものが、吸煙方式になり使用し易くなったこと。第三は、ネーミングの問題である。以前は「シャブ」といった暗いイメージがあったが、最近は、「スピード」「エクスタシー」といったネーミングが使われ、また、やせ薬、眠気さましなどと信じ込ませるなど、使用する際の心理的抵抗をなくしていることが挙げられる。

また、覚醒剤使用は、中枢神経系、末梢神経系に影響を与え、疲労感、眠気の除去、気分の高揚、意欲の増進など一時的な精神賦活作用がある。このような快感や精神的利得は一時的で見かけのものに過ぎないことが判明している。

しかし、悲しいことに、現実には刹那的な快感を求めて、覚醒剤に走る若者は後を絶たない。

2 覚醒剤汚染の実態

平成8年度の犯罪白書によれば、保護観察処分や少年院送置処分を受けた少年のうち、薬物を使用したことのある男子は20%、女子は33%に及んでいる。また、特に女子の精神障害が多く、医療少年院に入院している女子の70%が精神障害者で、その90%が覚醒剤に起因している。一つ事例を挙げれば、覚醒剤の長期使用により自発性や意欲が減退し、いわゆる無動機症候群に陥ったある少女は「人生はどうでもいい。やりたいことがない。覚醒剤をやっている時だけ生きている実感がある」と述懐している。

3 覚醒剤が青少年に及ぼす精神的、身体的症状

その症状を疾病、性格、状況の側面から見てみよう。

まず疾病の側面であるが、覚醒剤は中枢神経を侵し、不安、恐慌状態による自殺や幻覚、妄想などの精神病症状を誘発する。あるいは被害妄想、追跡妄想に陥り、大量殺人の例もある。また、大量摂取による急性中毒による突然死を招くこともある。

次いで、性格的側面であるが、成長、発達の途上にある青少年にとって、シナプスと呼ばれる脳神経の組織の成長に悪影響を与え、臨床的には性格偏向や情緒障害をもたらし、冷酷、飽きっぽい、短気、粗暴、ひがみっぽいというような性格変化が現れる。

三番目の状況的側面は、不法な薬物を共有しているという連帯意識から、類は類を以て集まる例えの如く、非行、犯罪グループに入り、反社会的な人間として社会から脱落していく。

4 青少年を覚醒剤の手から守ろう

最後に「青少年」を覚醒剤の手から守るために「おとな」は何をなすべきか提言したい。まず、覚醒剤については、社会全体で覚醒剤のルートを遮断するために徹底した対策を進めなければならない。同時に青少年に対し覚醒剤についての正しい知識を教えることが必要であろう。

次いで、青少年の犯罪防止のため次の観点から考えていきたい。それは犯罪防止のためだけではなく、青少年の人格形成のための日頃の生活指導の中にある。

(1) 覚醒剤使用のような悪環境に染まらないよう、例えばスポーツ、音楽のように魅力ある自己実現の場を与える。(2) 日頃より親子のコミュニケーションにより、豊かな家庭環境をつくる。(3) 自分で責任を持って物事を決める分別力を育てる。(4) 社会の一員としての自覚と、自分の行動が、自分のためにも、社会のためにも役立つよう考えさせる。(5) 自分の人生は自分で選んだという意識を持たせる。

以上のことを考える時、青少年の犯罪防止には、われわれ「おとな」が、まず「隗より始め」なければならないと思う。

放火犯罪を中心に

桐生 正幸

(山形県警科学捜査研究室)

Key words : 放火、青少年、弱者の犯罪、夜の犯罪、ヴァンダリズム

1 はじめに

放火犯罪は「弱者の犯罪」「夜の犯罪」と言われている(中田、1977)。「弱者」とは、例えば子供、女性、精神障害者といった社会的弱者を指し、着火行為という簡易で効果的な手段を用いて、特定の個人を攻撃したり地域社会へ復讐する。川邊(1987)は、社会的な弱さ以外に、自我そのものの弱さが放火犯に見られることを指摘する。「夜」とは、他の犯罪と同様に発見されにくい時間帯であること、夜間の飲酒などが心理的抑制を解除すること、火事騒ぎや炎の燃え上がる様が日中より際だつこと、などの要因により夜に放火が多いことを意味する。放火の動機は、多種多様である。桐生(1996)は、日本とアメリカの先行研究(例えば中田、1977; Douglas et al、1992)に基に、放火の動機を8つに分類してみた。これら区分とともに、精神障害(精神病、ピロマニアなど)の有無、単一か連続か、といった視点もある。動機は複合して現れる場合も多く(中田、1977)、日本で比較的多い「自殺」が欧米ではほとんど見られない、といった動機の文化差もある。近年の日本の放火は、恨み、嫉妬、怒りなどの動機による対個人的放火から、うつぶん晴らし、不満の発散といった動機による対社会的放火に変容しており(上野、1982; 中田、1983)、この傾向は、都市部に限らず農業を主体とした地域でもみられる(桐生、1995)。不満の発散型の放火は、連続的、被害者と犯人の対人関係の希薄さ、衝動的な着火、といった特質を持つ。統計的な分析以外では、放火行為の発生モデルを作成し、その検証から放火犯罪を分析する試みがある(桐生、1995)。このモデルは、放火行為を対人関係のトラブル時における問題解決方略としてとらえ、放火行為時の抑制作用低下、放火実行の場面形成や場面からの誘発的状况を主な要因としたモデルである。また、犯罪捜査の支援(プロファイリング)を目的とした放火犯罪分析もみられる(Rider, 1980; Douglas et al., 1992; Holmes, 1996)。桐生(1996)は、Canter(1991)の分析項目を参考にした放火現場の項目にて数量化Ⅲを行い、5つのタイプを得、各タイプの特性を検討した。またCanterらの地理的分析を利用した犯人の居住地推定の研究も行われている(田村ら、1997; 三本ら、作成中)。

2 青少年の放火の特質

2-1 先行研究 青少年の放火に関する研究として、

Rider(1980)、上野(1982)、淵上ら(1992)などがある。上野は、1976から1979の間、神奈川県にて発生し補導された未成年者18名(87件)の事例分析を、淵上ら(1992)は、1988から1991の間、医療少年院に放火事件によって入院した15名の分析を、また、Rider(1980)は、Yarnelらの研究から、17歳以下の放火犯について分析を、それぞれ行っており、多くの知見が得られている。例えば、「火」が一種の危険信号の意味を持つ小学生の事例があったこと(上野)、共通する性格として、劣等感が強く自我が萎縮しており、傷つきやすく不満や怒りを内部にため込みやすい、論理的思考や抽象的な思考力洞察力に乏しく、視野が狭く固執的な思考をしやすいなどの傾向がみられたこと(淵上ら)、父親不在もしくは父親の影響力の少ない家庭環境で育っていること、全員が性的葛藤を抱いていること(Rider)、などである。

3-2 統計的観点 昨年の日本の放火の全体の検挙件数は、710人であり、そのうち19歳以下の占める割合は15.8%であった。先行研究から、19歳以下の割合を算出すると、植田(福岡県; 1972~1976、181人)では24.9%、上野(神奈川県; 1971~1980、109人)では15.6%、山岡(全国; 1977~1978、1050人)では23.8%、桐生(山形県; 1973~1990、69人)では8.7%である。一方、1969~1978のFBIの犯罪統計を資料としたRider(1980)の分析結果では、19歳以下の全体(125,513人)に占める割合は62.8%、また、イギリスでは、1978年では20歳以下が全体の77.0%、1984年では48.1%であった(Barker, 1994)。これらを直接的に比較するには問題があるが、日本の放火の青少年の割合は、英米と比べ小さい傾向が窺われる。英米では、青少年のヴァンダリズムによる放火が多いこと(Icove, 1987)、すなわち複数で火をつける放火が多いのに対し、日本の青少年の放火ではヴァンダリズム的な放火が少ないことが、要因として考えられる。以上、放火に関する一般的傾向とこれまでの研究知見である。

3 いかに関わるか

私見だが、青少年の犯罪の中には、「退屈」と「閉塞感」を面白く埋め合わせてくれる「何か(例えばお金)」を得るための犯行が増えてきてはならないだろうか。

大会当日は、このような観点から、放火犯罪を含む青少年犯罪に対し、応用心理学や犯罪心理学が如何に関与されるのかを考察してみたい。(きりう まさゆき)

内田クレペリン検査の本来のねらいとは

企画・司会 板津 裕己 (函館大谷女子短期大学)

話題提供者 鈴木和長 (井草幼稚園) 山田耕嗣 (日本・精神技術研究所) 安富由美子 (東洋大学社会学部)

テーマの趣旨

板津 裕己

心理テストとその手引書は、年月の経過に応じて、適宜改訂されていく必要がある。しかし、それぞれのテストの作成者や関係者は、時や使用状況の変化や利用者の要請などに応え、より利用しやすいテストとなるよう努力する一方で、そのテストが意図することがらや基本的な考え方は、忘れてはいけないだろう。

内田クレペリン検査は、発表されてから約70年余りが経過した今日に至るまで、我が国の多様の領域において、適性検査やパーソナリティテストとして最も使われているテストの1つである。そして、翻訳テストの多い中、数少ない日本製テストとしても大事にしていきたいテストである。本ワークショップでは、このテストの本来のねらいを振り返りつつ、今後のテスト利用法の可能性について考えていきたい。

精神的現象と生理的現象の接点

山田 耕嗣

ドイツの精神医学者、クレペリンらの連続加算を用いた作業実験の追実験から、連続加算を一定の単位時間・時系列で実施する方式を設定し、その方法において健康者常態定型を発見し、方式を定めぬ実験段階から一定方式の検査として方向づけ確定したのは内田勇三郎である。現在、採用選抜場面で広く使われている内田クレペリン精神検査の始まりである。

しかし、最初から今のような心理テストとして開発されたものではなく、精神疾患における作業障害や意志障害などを、精神的現象と生理的現象との結びつきという観点から捉えていこうという手法であった。この手法によるデータ蓄積発表が行なわれるにつれ、まず、作業ぶりの個別的特徴がわかり、更には、狭い意味での作業だけでなく、精神活動の様々な面が作業曲線という結果に表出されるものとして多方面に応用されるようになり今日に至っている。

もっぱら心理テストとして活用されているが、心理的側面からだけでは解明できないような意志障害の研究に端を発していることを絶えず念頭ににおいて、いわば心理と生理との接点、狭間としての人間活動という観点を忘れないようにしたいものである。

内田勇三郎の遺志

安富由美子

競争社会の昨今、その人の実際の「ありよう」が、仕事に貢献するような内容であるにもかかわらず、「適性テスト」と称されるもので、不適格と判定されてしまうような事例は、枚挙に暇がない。

内田クレペリン精神検査（以下、内田検査）は、戦中の徴用・徴兵以来、産業心理学に属するものといった誤ったイメージを持たれてきた。しかし、内田は、「青い子には青い光を」ということばに凝縮されているように、その志を曲げなかった。検査結果は、あくまで判断材料であり、解釈する姿勢を欠いては、本末転倒である。数ある心理検査の中でも、内田検査は、その性質が最も強いといっても過言ではない。本人を目の前にして、なぜ、その検査結果（作業曲線）となったのか、その人は、なぜ、そう行動するのかを理解し、受けとめ、また、本人が自分を、「そうあるもの」として理解することで、初めて内田検査の価値が出る。内田検査は、極めて臨床的な性質を持つ検査なのである。検査結果は有効に活用したい。

臨床を主とする

鈴木 和長

内田師が逝去なされて30年になる。生前、8年有余、私は直接、師事をあおぐことができた。その間、私は精神作業検査の幼児用を開発した（井草幼児用精神作業検査）。その結果、曲線型と、それにともなう精神特徴の表れ方は、全く、幼児も成人と同じであることが判明した。内田師は、その幼児用を、児童相談所等でためされておられたが、私が、その結果を1冊の書にまとめたのが、今から20年前であった。現在、同一の幼児に2回づつ施行し、母親に直接その曲線を見せて、精神特徴について話し合う機会を持っているが、幼稚園で施行した曲線型が、小・中学生になっても、そのままに、同じ精神特徴となって現出することが判明した。“臨床を主とする”という師の曲線型への志向が、現在の私の志向となっているように思われる。

いたつ ひろみ、すずき かずなが、
やまだ こうじ、やすとみ ゆみこ

研究発表

蘭学の産業技術における ontwikkeling の概念の導入について

田中昌人

(龍谷大学文学部)

蘭学における ontwikkeling, 現像, 開発, 大庭雪齋, 杉田玄端, 川本幸民, 上野彦馬, 柳河春三, 熱海貞爾

目的 蘭学における ontwikkeling に対応する日本語として「発達」の訳語が成立してくる過程で何が吟味されてきたかに関しては、日本心理学会第61回大会で報告を行う。本報告では、① この語に対応する日本語として「現像」「開発」の訳語が成立する以前の過程を明らかにする。② その際、オランダ人として医学以外の自然科学、産業技術分野の成果を日本にもたらした人々の、ontwikkeling の用法の吟味を合わせ行うことによって、「現像」「開発」の場合は蘭学以後の洋学において導入されたことを明らかにする。

資料 (本報告で取り上げる主なもの)

① Waatschappij: Volks Natuurkunde. 1811. (大庭雪齋: 民間格致問答. 1862.) ② Handelwijze van Daguerre. Nederlandsch Magazijn. 1839. (上野俊之丞の記録, 島津斎彬の書状, 改正増補蛮語箋, 櫻所散人: 印象啓微.) ③ P. van der Burg: Schets der Natuurrkunde. 1852. (杉田玄端: 写象新法., 川本幸民: 遠西奇器述. 1854., 市木四郎: 島津斎彬言行録. 1857.) ④ (原典未詳) 上野彦馬: 舎密局必携. 1862., 柳河春三: 写真鏡函説. 1867., 明石博高: 撮影須知. 1867. ⑤ W. C. Brade: Handboek der Waterbouwkunde. 1844., D. J. Storm Buysing: Handleiding tot de Kennis der Waterbouwkunde voor de Kadetten van den Waterstaat en der Genie. 1844~1845. (熱海貞爾: 治水摘要. 1871.) ⑥ P. F. von Siebold: Nippon. 1832~1851., J. F. van O. Fisscher: Bijdrage tot de Kennis van het Japansche Rijk. 1833., K. W. Gratama: Leraar onder de Japanners. (1866~1872)., A. J. C. Geerts: Japan in 1869, 1870, 1871, 1872, 1873. ⑦ その他 C. J. van Doorn, G. A. Escher, A. T. L. R. Mulder, J. de Rijke による報告資料。

結果 18世紀の蘭-洋辞書に登場しなかった ontwikkeling の言語環境は、オランダが1810年にフランスに占領され、1815年に独立後ベルギーを併合、1830年にベルギーが独立する過程で広がった。生活を一変させる新技術の発明が続き、オランダ語の語彙と文法の近代化の基礎が整ってきた。幕末明治の蘭学はオランダの軍事技術教育の近代化の特徴をもって導入されたが、その基礎学と産業技術への応用学の時代を迎えようとしていた。

資料①では、迷信の打破、奇蹟の否定において自然科学における ontwikkeling の事実への注目が求められている。これ以後、日本へも「窮理ノ学」, 「分析ノ学」, 「生理ノ学」の書が導入され、1860年代にオランダ人による実地教育が開始された。しかし、「生理ノ学」以外では ontwikkeling は用いられていない。

写真技術の現像過程に develop の語が用いられたのは1845年英国、1847年佛国においてである。銀板写真法が発明された時、この語は用いられていない。日本では、資料②で写真機は「印象鏡」, 「印影鏡」で、「影現れ」, 「物象幽微ニ現レ」である。資料③になると、「写真鏡」, 「直写影鏡」で「物象ヲ顕明ニナス」, 「像影全成」となっている。川本幸民、島津斎彬は「写術」, 「現術」にわけて実験を重ねている。湿板写真法登場後は資料④である。上野彦馬は「像影ヲ顕ス法」を述べ、「像影現出スル事」, 「像影顕ハサシムル事」, さらに「消極像」を「積極像」にするとしている。柳河春三は、「画像の顕れ出る」「あらはし葉」, 「画像を鮮ならしめる」「強め葉」, 「変化消滅せしめざる」「洗ひ上げ葉」を述べている。その他『撮影啓蒙』(1871)では、「仮影」, 「真影」が用いられ、「物影見顕」のために「顕勵液」, 「見顕液」, 「固定液」が用いられるとしている。1880年代にコロジオン法がゼラチン法に変わる。C. D. West, W. K. Burton, 小川一真, 石川巖らによって各種の「顕像法」が紹介されていたが、商品化が進み、大衆化し、雑法も創刊され、『写真新法』から1891年に『写真叢話』が登場すると「現像」の語が定着してきた。

蘭学廃止後も明治政府は、統一した治水策を進めるために蘭人工師達を招いた。資料⑤には、ontwikkeling が河流において用いられ、熱海貞爾によって意識されている。1903年に至る資料⑦の調査報告書にも、治水、山林保護策がフランスの手法を基本として述べられている。1890年頃からは「運河ノ効用ヲ充分発達セシムル」といった訳がみられるが、英語で1885年頃から用いられた「開発」の用法はまだみられない。

資料⑥、⑦のように来日滞在し、日本についても研究紹介をしている自然科学者・産業技術者の著述したものに含まれている ontwikkeling の用法は「発達」が基本である。
(たなか まさと)

ドイツ国民社会主義期における心理学の複合的状況

岩手医科大学 田中 潜次郎

国民社会主義期（1933-1945）のドイツ心理学に対する評価は非常に低く、「ナチ体制は心理学の隆盛に終止符を打った」（Wolman, 1979）と言われるように、多くのすぐれた学者がアメリカなどに亡命し、ドイツに残った心理学が無益であるだけでなく、邪悪な政治に迎合した有害なものであったとみなされる傾向がある。

しかし、状況はそれほど単純ではない。この時代には、①政治による弾圧、②ワイマール期からの傾向の持続、③戦争にともなう心理学の職業化、という3つの矛盾する過程が複合的に進行していたといわれる。この状況は前回の発表で大筋を示したが（応心63回、1996年）、今回はそれをできるだけ数量化して記述する。

(1) 政治の影響

1933年の官吏法制定によって、大学の正教授であった15人の心理学者のうち5人がただちに解任された。ドイツ語圏に住むドイツ心理学会会員308人のうち45人がこの時期に他国に亡命した（Geuter, 1984）。1933年の大学の過剰を排する法律によって、大学の全学生数は、1930年の10万人が1938年には4万人に激減した（Titze, 1987）。哲学（哲学、心理学、教育学）の正教授は、1931年に1大学あたり約3人であったが、1938年には約2人に減少した（Ferber, 1956）。心理学の学位授与件数は、1932年の82件から、1938年には52件に減少した（Geuter, 1987）。

(2) 心理学研究室の状況

①1933年の官吏法に関連して、3校の心理学教授職が廃止されたが、1937年から1942年までに6校に教授職ができたので、教授職は3つ増加した。②研究室が大きくなると、実験室や演習室などの名称が「研究室（Institut）」に変更される。ベルリンでは1894年設置の心理学演習室は、1900年に心理学研究室になった。1932年に「研究室」と称する心理学研究室をもつ大学は23校中12校であったが、1942年までに21校になった。③1920年代のベルリンでは、心理学は博士試験の正規の科目ではなく、ゲシタルト学派のMetzger, W. は哲学と心理学を主専攻にして学位を取得した。1926年に心理学を主専攻にして学位を取得できるのは23校中13校であったが、国民社会主義期に21校になった。そのため、大学が縮小したわりには、心理学の学位数は減少せず、教授職が廃止された大学を除けば、維持または増加する大学が多かった。

(3) 防衛心理学の需要

防衛心理学は国防軍で心理適性検査をおこなう業務として第1次大戦後に導入され、1929年に大学外の心理士の半数近くが陸海軍の業務に従事していた。性格学者 Lersch, P. は1925年から1933年まで陸軍の心理士であった。図は、1925年から1942年までの国防軍の心理士と適性検査の数をあらわす。心理士と検査の数は、すでにワイマール期から

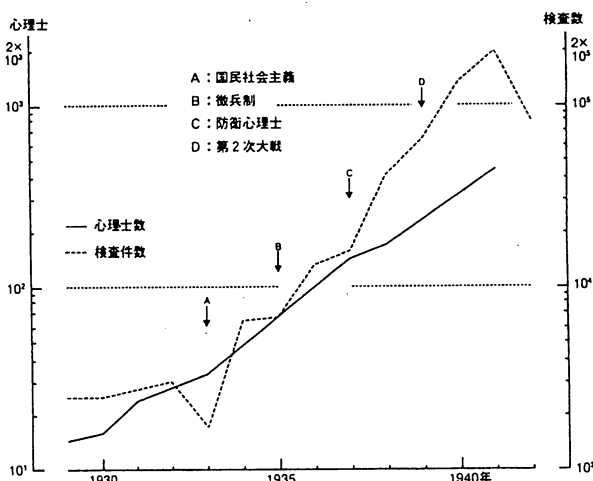


図1. 防衛心理士と適性検査の増加。
(Geuter, 1984; Ash & Geuter, 1985; Lück, u.a., 1987)

増加の傾向があった。心理士は1925年の3人から、1931年には24人に増加した。検査は1928年の1,487件から、1932年には2,980件に増加している。

国民社会主義期になると増加傾向はさらに明確になり、徴兵制の導入や第2次大戦の開戦で、図のように対数グラフであらわすほど加速的に増加した。1933年に33人であった心理士は、最盛時の1941年には約450人になった。1930年代前半に数千件であった検査は、1941年には20万件になった。ところが、空軍が1942年4月に、陸軍が5月に検査をやめて検査所を廃止し、海軍は検査をやめた。廃止の原因は、1941/42年冬のロシア戦線での敗北による国防軍の方針転換にあるといわれる（Lück, u.a.）。

(4) 教育相談の業務

防衛心理士制度の廃止が心理学に及ぼした影響は大きいですが、決定的な打撃ではなかった。1940年から、教育相談が心理学の新しい仕事になったからである。教育相談はもともと精神療法家の仕事であり、心理士はこれから排除されていた。しかし、国民社会主義系の国民福祉団体（NSV）が児童福祉の権限をもつようになり、業務を心理士にまかせることにした。ドイツ心理学会と大学の心理学研究室はこれに協力した。その結果、防衛心理学から排除されていた女性心理士の新しい職業領域が開かれ、Hetzler, H.（大戦後はギーゼン大学の教育心理学教授）が1940年4月に、NSVで最初の女性心理士になっている。

(5) 認定心理士の制度

1941年には心理学固有の学習課程がつくられ、心理学の独立性が強められた。

福祉心理学を論考する 2 : アイデンティティの二つの特性

網 野 武 博 (東京経済大学)

論考Ⅱ：自己と他者の利益 1：福祉心理学からみた
アイデンティティ特性

今回の報告は、福祉心理学における3つの視点のうち、第2の視点、即ち自己と他者の利益<自己と他者の尊厳性及び自己実現にかかわる権利及び義務を実定化しようとする心理的機制>を論考することを目的とする。その心理機制的な重要な概念として、自我意識、自己意識そしてアイデンティティを取り上げ、福祉心理学的に考察する。

1 自我意識、自己意識

近年の意識研究は、様々な近接科学の進展とともにさらなる展開がみられる。とくに、意識を存在として捉えるのではなく、機能するシステムとして捉えることが重要であり、アイデンティティにおける同一、斉一、連続的な自己意識あるいは自我意識というこれまでのアプローチを再検討し、その理論を再構築することが不可欠である。

リカーシブな自己意識の発現は、進化の過程における人間特有のものとしてされる。生後間もなくからのヒューマンな相互作用と言語による固有名詞としての自己へのコーリングや、「わたし」と「あなた」の関係の認知を通じた人称的世界、また鏡像を通じた「わたし」の客観的認知を通じた人称的世界など、ヒューマンな環境にあれば必然的にもたらされ、その高次な段階として、「自ら」と他者の相互性の認識並びに二重の客体化がなされる。そして自我意識は、覚醒、アウェアニス、自己意識、さらに非意識、無意識等と称される機能をも包含した総合的なシステムとして機能する。しかし、自我意識は一つではない。自我の統合性はあっても、普遍的自我はない。常に一回性のダイナミックなシステムとして自己意識、自我意識は機能し、identificationが働く。

2 アイデンティティ

アイデンティティは、自我アイデンティティ、自己アイデンティティの双方の意味で用いられてきた。ここでは、自我アイデンティティのレベルで考える。identity, identificationのそもそもの原義は、idem即ちsameからきている。この「同一」であることが、往々にしてアイデンティティそのものが常に連続的、斉一的で一貫性ある意識でなければならないように受け止められる背景となっている。しかし、「同一」ということの自我意識を深く捉え直すと、一つは他

の何者かと類似、共有している私としてidentified(同一視)される意識、二つは他の誰でもない私としてidentified(同定)される意識である。図1の自我意識、自己意識におけるアイデンティティ形成の基礎に示すように、我々一人ひとりには右下の極の「わたしMyself」として、左上の極の宇宙との連続性の中で存在する。その根源には、遺伝子という'属性'と、生成子、創生子という'個性'の、重要な心理生物学的機制がある。その連続性のただ中での環境とのかかわりを通して、属性と個性の自我意識、自己意識が育まれる。一方では他者への同一視等を基盤とする属性的な意識を発達させる自我機能が育まれる。他方では個人の同定等を基盤とする自らを"他の誰でもない"とする個性的意識を発達させる自我機能が育まれる。前者を属性的アイデンティティと称し、「他者が'自ら'との類同性を、'自ら'が他者との類同性を見出すことによって認知される共存的、類似的、依存的アイデンティティ」と定義する。後者を個性的アイデンティティと称し、「他者が'自ら'との差異を、'自ら'が他者との差異を見出すことによって認知される個性的、独自の、独立的アイデンティティ」と定義する。

'自ら'が、自己と他者の生物学的、心理学的、社会学的利益の衝突に直面するとき、人間はその適応と生存の確保に向けて多様な心理的機制を働かせる。アイデンティティの成立要件は、他者の自我にある。他者との相互性がよく発揮されていくとき、自己意識は解発され、'自ら'の自我機能にしっかりと組み込まれる。図2の、福祉心理学からみたアイデンティティ特性に示すように、属性的アイデンティティは共存性の意識を高め、個性的アイデンティティは個性の意識を高める。それは利他的意識を優越させる方に働く。他者との相互性が困難であったり支障を来すとき、個性は内閉・唯自性に傾き、属性は支配・服従性に傾く。利己的意識、排他的意識が優越しがちとなる。福祉心理学からみたアイデンティティとは、個性的アイデンティティと属性的アイデンティティとが、均衡よく形成されることによって、自我意識の機能として、自己の個性とともに他者の個性を重視し、自己の他者との共存性とともに他者の自己との共存性を重視することのできる統合的アイデンティティが形成されていることである。

真の「応用研究」とはなにか(2) - 応用研究の具体例 -

長塚 康弘
(新潟大学人文学部)

キーワード 応用心理学 問題対処 応用研究 分析・診断 基礎研究

目的:

応用心理学の主目的は実生活における心理学的問題の解決にあるとされる(大脳1967、金子1971、北村1975、丸山 1986など)。しかし問題の解決に心理学的配慮が重要とされる臨床心理学・教育心理学および交通心理学について見ると、前者では「不登校やいじめ問題の解決」が、後者では交通心理学者が狙いとした「交通事故の防止・減少」が達成されているとはいえ、これまでの応用心理学の社会的貢献度は低かったように思われる。応用心理学の存在理由が問われる状況であり、応用研究のありかたを検討する必要がある。

これまでの応用心理学 - 「分析・診断的」応用心理学:

応用心理学の人間生活への貢献度が低い理由は、交通心理学を例にとると、実践研究が少なく具体的な事故減少策を示し得なかったことにあると想定される。わが国の交通心理学は、伝統的に、適性検査の開発とそれに基づく運転者の心理的特性の研究、運転時の心理・生理機能の研究及び交通教育の問題点の指摘等、分析・診断を主とする「基礎交通心理学」だったのである(Nagatsuka 1989, 1995)。

これからの応用心理学 - 「治療・予防的」応用心理学:

事故という社会問題を解決するには、分析・診断による問題の指摘に留まらず、その解決策(治療法)を示し、治療し、そして治療効果の測定・評価をしなければならない。交通心理学は、「治療・予防」を主とする「実践交通心理学」をも推進しなければならない。この考えをもとに長塚(1997)は「事故減少の役に立つ」、問題対処的な真の意味の「応用研究」を目指す実践研究を行った。

応用研究の具体例 - 有効な問題解決策の提案:

心理学的に考えると、事故をなくす方法は「事故原因となった運転者(第1当事者)の“行動”を排除すること」である。事故統計を検討すると、それは、「漫然・わき見、動静不注視、安全不確認などの認知不全行動」であることが明らかになる。このような認知不全行動をなくす対策として、我々は「一時停止・確認」、すなわち、信号規制のない交差点で運転者に意図的に一時停止をさせ、周囲を確認させる方法を選んだ。交差点での停止は周囲の確認の前提条件であること、一時不停止事故もまた統廃しているからである。

研究はアクションリサーチ法(A R)によった。筆者らが頻回現場を訪ね、運転者に事故防止に関する意識調査、小集団討議、安全講話等を行うと共に、一時停止・確認を呼びかけるステッカーを車両の後部に貼付してその積極的実行の促進をはかった。

図1は、新潟市内のタクシー2会社をフィールドとして実施している交通事故防止対策研究の結果を示す。図の縦軸は自社の運転者側に過失(責任)がある事故の回数、横軸は経過年次である。棒グラフがA Rを実施した2社の事故発生数の年次経過を、また下図中の折れ線は対照群のデータ(新潟市ハイヤータクシー協会所属23社の年間平均事故発生件数)を示す。対照群の曲線が横ばいであるのに比べると棒グラフはわれわれの研究開始後に極めて低くなっており、試みた事故対策の事故抑止効果は明らかである。「道路上で具体的に一時停止を実行すれば事故をなくせる」ことを、効果測定・評価を含む研究によって示す事ができた。

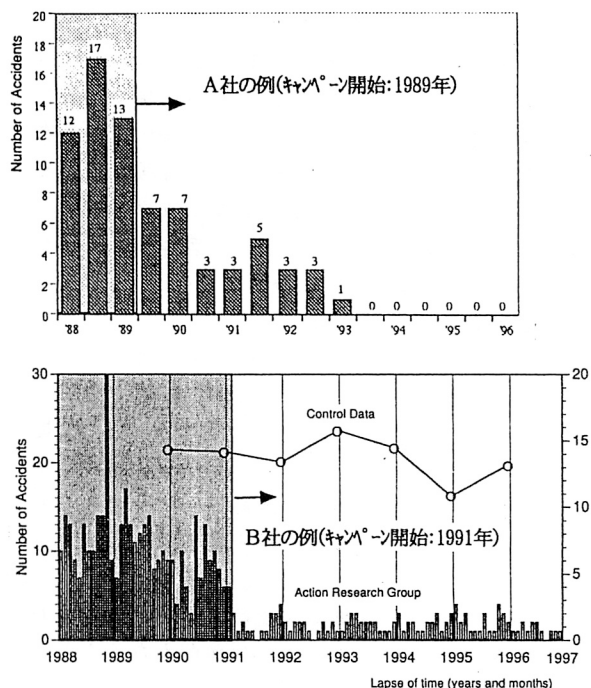


図1. タクシー2会社での事故防止対策研究の結果

われわれの「有効な交通事故防止対策」研究を検討した山形県トラック協会は平成8年度から一時停止・確認キャンペーンを全組織を挙げて開始した。日本交通心理学会も筆者の研究に基づくキャンペーンを全国的に展開する計画を策定中である。

応用心理学に求められる「真の応用研究」

問題の分析・診断・記述に留まらず、それを踏まえた治療、さらに予防に献身する問題対処的な真の応用研究を展開することが応用心理学全般についても必要であることは言うまでもない。

引用文献

- 金子秀彬 1971 応用心理学会は研究プロジェクトを組むための援助を日本応用心理学会会報、No. 17.
- 北村晴朗 1975 福祉心理学の構想 東北心理学研究、25号 23頁
- 丸山欣哉 1986 応用と基礎について 人間工学、22 291-294.
- Nagatsuka, Y. 1989 The current situation of traffic psychology in Japan. International Review of Applied Psychology: Special Issue, vol. 38, 423-442.
- Nagatsuka, Y. 1995 The current situation of traffic psychology in Japan (Part 2) - From 1988 to 1995 - Paper prepared for "JATP Project for Promoting the International Academic Relationships '95." 1-10.
- 大脇義一 1967 国際応用心理学会の結成動機とその今日の構想 日本応用心理学会会報、No. 10.

ながつか やすひろ

精神テンポに関する基礎的研究 (第76報告)

三島 二郎
(早稲田大学 名誉教授)

寺沢 充夫
(玉川大学)

○望月 稔
(日本女子体育大学付属二階堂高校)

目的：前回第75報告の継続的研究として、今回、学生・生徒の学校生活に付随する登校・下校の歩行の速さを解明せんと意図した一連の研究の一つである。

さらに、これら歩行行動が、運動及び聴覚領域における精神テンポとの関連性を、内観調査を参考にしながら検討しようとした。

方法：本研究においては、Aは観察測定、B・C・Dは実験、Eは内観調査の4つに渡って実施した。期間は1995年、1997年の6月～8月に実施した。

この研究方法は下記の通りである。

A. 登校・下校の歩行の速さを路上において測定。

学生・生徒が始業前30分～10分の間において、車の激しくない、観察しやすい場所を選び、一人の登校中のものの歩行の速さを10mの距離を単位として測定した。なるべく、測定されるという意識を持たせないように、10m等の目印は目立たないように、路上に淡い線を引くようにした。

下校においては、その直後30分における歩行速度を登校時と同じようにして実施した。

対象は、中学生 70名 高校生 108名 大学生 259名である。

大学生を対象として、B・Cは運動領域、Dは聴覚領域の精神テンポを次のように測定した。

B. 10mの直線距離を丁度よい速さで歩かせ、その速さを測定する。これを10回試行させ、その平均値を測定し、精神テンポとした。

C. つぎに、打叩の方法は、被験者を椅子に座らせ、閉眼させ、きき手の人差し指で、丁度よい速さで叩かせ、10秒単位で、その数を測定し、5回実施する。さらに、2分間の間隔をおき、5回実施し、その最大頻度を精神テンポとした。

D. 打叩時のようにして、ユニバーサルメトロノームにより、断続音を聞かせ、調整法により、丁度よい速さを選ばせる。回数は、5×5回で、やはり、その最大頻度を精神テンポとした。

E. 内観調査においては、自己の登校・下校の速さを「速い・やや速い・丁度よい速さ・やや遅い・遅い」の5肢選択で報告させた。

結果：A～Eの結果について、Table 1、2、3に示してある。

Table 1 登校・下校における歩行速度の平均値の比較

		登 校			下 校			
		男	女	全	男	女	全	
中 学 生	M	6.64	7.68	6.88	7.62	7.93	7.88	※
	SD	1.07	0.68	1.17	0.59	0.95	0.72	※
高 校 生	M	7.85	7.49	7.42	9.06	9.87	9.71	※
	SD	0.99	1.22	1.26	1.59	1.94	1.85	※
大 学 生	M	6.52	6.54	6.53	7.12	7.32	7.26	※
	SD	0.59	0.43	0.54	0.72	0.74	0.75	※

Table 2 E内観報告(大学生25名) ()内頻度数

	速い・やや速い	丁度よい	遅い・やや遅い
登校歩行%	60.0 (15)	24.0 (6)	16.0 (4)
下校歩行%	8.0 (2)	76.0 (19)	16.0 (4)

Table 3 A・B・C・D間の相関係数

		A.路上		M.T.(実験)		
		登校	下校	B.歩行	C.打叩	D.メトロノーム
路上	登校		.3107	.3165	-.0785	.2571
	下校			.7487*	.5589*	.5750*
M.T 実験	歩行				.5679*	.4712*
	打叩					.6339
メトロノーム						

M.T.=Mental Tempo

Table 1において、中・高・大学生において、登校が、下校の平均値より速く、中高で $P < 0.01$ 、大学生 $P < 0.05$ で有意差が認められた。また、Table 3においては、下校歩行と精神テンポの歩行、打叩メトロノーム(聴覚)との相関があり、下校と精神テンポの歩行との相関が、その中で最も高かった。またそれらは検定で有意差が認められた。

今回は、特に、高校生の人数をふやして、登下校を観察したが、下校において、他にくらべ、その歩行が遅くなっている。

Table 3においては、大学生の数を少し増して調べたが、やはり、下校時、丁度よい速さの反応が76.0%で多く、他の速さにくらべ、 $P < 0.05$ で有意差が認められた。これは、Table 1、3の結果を裏づけるのに参考になると考えられる。

多変量解析法による多人数間の筆者識別 (I)

○ 若原 克文 菅原 博嗣 三井 利幸 川村 司
 (愛知県警察本部) (愛知県警察本部) (愛知県警察本部) (名大・多元数理)

キーワード：筆跡、多変量解析法、多人数

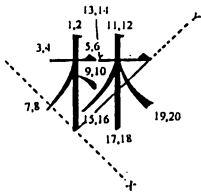
〈緒言〉

実務における筆者識別は、被検筆跡の対照筆跡が限定された、比較的少ない筆者間での筆者識別が一般的である。また、多変量解析をパソコンで計算する場合の容量の問題もあり、多人数の分析ができなかった。今回、筆者等は従来から行なっているクラスタ分析、主成分分析と判別分析の一種で複数のグループに分類するKNN法による分析を用いて、多人数の筆者識別を試みた。

〈方法〉

検討した資料は、「林」字を1人が1cm方眼の原稿用紙に6回書いた試料、60人分、360文字について分析した。

入力データは、筆者等が従来から行っている拡大文字の座標点を読み取り入力データとした。なお、標準化のために基線を決め、その基線の長さで除した数値を使っていたが、今回は試料筆跡が同一の紙面上で書かれた筆跡であり座標点をそのまま用いた。



分析には、ジールサイエンス社の pirouette のプログラムソフトを使用して、クラスタ分

析、主成分分析判別分析のKNN法を用いた。

今回用いたKNNは、試料をあらかじめ60のグループに分類させ、個々のデータがどのグループのデータと類似しているかを計算し、最も類似しているグループに帰属させる方法である。

〈結果及び考察〉

クラスタ分析による結果は、360字を46クラスタに分類して検討すると、同一筆者の6文字が全て同一クラスタ内に混合した筆者は7名、5文字が19名、4文字が15名、以下、表のとおりであった。

表 60名360文字のクラスタ分析結果

6文字混合	7名	3文字混合	16名
5文字混合	19名	2文字混合	21名
4文字混合	15名	分離	73文字

従来行なってきた少人数のクラスタ分析と比較すると、完全に混合する比率はかなり低いと考えられる。しかし、4文字までの混合をみると全体の68%である。また、分離した73文字について検討すると6文字全てが別のクラスタに分離した筆者は1名、4文字分離が2名、3文字分離が7名、2文字が別のクラスタで残りの4文字中2文字づつ別のクラスタが1名であった。1文字が分離した筆者中、2文字と3文字の別のクラスタに分離した筆者が4名で他は5文字と1文字が分離した。この結果から、従来の識別との差は個人内変動の状態についての検討が成されておらず変動の状態も筆者によって相当の違いがあることが明確となり、まず変動の状態を把握して分析する必要がある。次に、今回の分析では、資料条件が同一であり標準化を行わずに分析したが、同一筆者の同一資料条件においても文字の大きさに変動がある筆者の存在が明確になり、また同一クラスタ内の文字中には、全体的な形態は近似するが文字の細部では相違する試料もあり、測定部位の検討も必要と考えられ、今後の多人数で分析を行なう場合の分析手順を示唆している。

主成分分析では、第1主成分の固有値が約43%で従来得ている結果に比べ低くなっている。これは分析量が増大することにより共通項が減少したと考えられる。また、第1主成分の固有値から得られた各測定部位ではY軸に共通項が認められた。

KNNによる分析では、6文字が同一グループとした筆者が11名、5文字が17名、4文字が12名、3文字が9名、2文字が6名、分離が5名であり、クラスタ分析の結果と近似した結果であるが、クラスタ分析より荒い分析結果といえる。しかし、KNN法は分析量が多いケースでは、試料間の近似したデータの検出が、クラスタ分析より容易で、多量のデータを処理する場合はKNN法とクラスタ分析との併用が必要である。わかにはらかつふみ、すがはらひろし、みついとしゆき、かわむらつかさ

多変量解析法による多人数間の筆者識別（Ⅱ）

○三井利幸
（愛知県警察本部）

菅原博嗣
（愛知県警察本部）

川村 司
（名大多元数理）

若原克文
（愛知県警察本部）

キーワード：筆跡、多変量解析、多人数

1 はじめに

前回までは、試料筆跡（筆者不明の筆跡）と対照筆跡とが同一であるかどうかについて検討してきた。しかし、実際の検査では試料筆跡が、複数の人間によって書かれた筆跡と比較し誰の筆跡と最も類似しているかを検査する場合が本来の方法といえる。そこで、今回は5人の筆者が「林、計、治、近」の4文字を5回記載した試料を用いて筆者識別を行った。識別方法は個々の文字ごとと、4文字全てを同時に使用する2方法で検討した。各文字をコンピュータに入力するための数値化の方法は、図に示したような方法で行った。多変量解析法は、すでに報告してきたクラスター分析と主成分分析の他に、複数のグループに分けることができる判別分析の一種であるKNNとSIMCAを用いた。KNNは、対照筆跡をあらかじめ複数のグループに分類する。ついで、試料筆跡がどのグループの筆跡と最も類似しているかを計算し、最も類似している筆跡を含むグループに試料筆跡が帰属されると考える方法である。SIMCAは、対照筆跡をあらかじめ複数のグループに分類し、各グループごとに主成分分析を行う。ついで、試料筆跡がどのグループに帰属するかを計算で求める方法である。

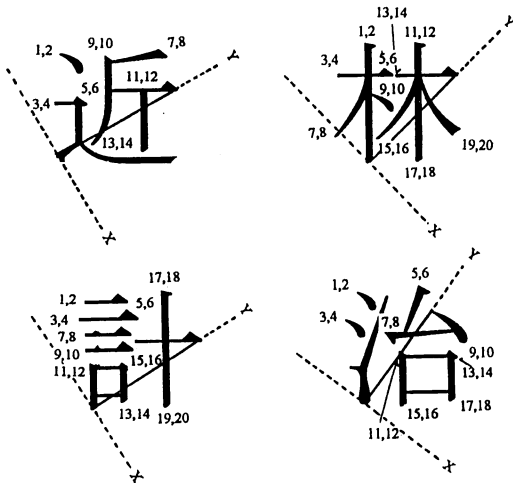


図 「林、計、治、近」文字の基線と座標点の取り方
2 1文字による筆者識別

林：図の方法で文字を数値化し筆者識別を行った結果、クラスター分析では、5人筆跡は完全に分離した

が、KNNでは筆者4と5間の識別が完全にはできなかった。SIMCAでは筆者1と2間が比較的類似していると判定された。

計：クラスター分析の結果では、筆者3以外はすべて個々の筆者間の分離（識別）はできなかった。KNNでは筆者1と5、筆者2と5間の識別が困難であった。SIMCAでは筆者5は他の4人の筆跡のいずれとも比較的類似していた。これらのことから、「計」では筆者識別は不可能と考えられた。

治：クラスター分析の結果では、筆者1と2間の識別は不可能であった。しかし、KNNでは5人の筆者間の識別は可能であった。SIMCAでは筆者1と2、筆者2と4、筆者3と4間が比較的類似しているという結果が得られた。

近：クラスター分析の結果では、筆者1と4間が分離しているのみで、各筆者間の識別は不可能であった。KNNでは筆者1と4間の分離が一部困難であった。SIMCAでは筆者4と5が比較的類似していた。

3 4文字による筆者識別

各文字別の筆者識別では、満足できるような結果は得られなかった。そこで、林、計、治、近の4文字を用いて上記の4方法で筆者識別を行った。ここでは、筆者5の1文字を試料筆跡として計算した。

クラスター分析：各筆者間の分離は完全であった。各筆者間の類似性は、筆者1と2、筆者4と5間が比較的他の筆者間より類似しており、筆者3は他の4人とは明らかに異なっていることが明らかとなった。

主成分分析：第7主成分までの寄与率が86.2%で、各筆者間の類似性は少ないものと判断された。特に、筆者3は第1主成分が他の筆者と大きく異なり、他の4人とは明らかに異なっていた。また、第2主成分で筆者1、2、4、5間の識別が可能であった。

KNN：各筆者間の分離は完全であった。さらに、試料筆跡も筆者5に帰属された。

SIMCA：筆者1と5、筆者2と5、筆者4と5間は比較的類似した結果が得られた。しかし、試料筆跡は筆者5に帰属された。以上の結果から、複数の人々の間での、個々の筆者識別が可能であった。プログラムはジーエルサイエンス社のpirouetteを使用した。

みついとしゆき・すがはらひろし・かわむらつかさ・わかはらかつふみ

異なる筆具による筆者識別

○菅原博嗣

若原文

三井利幸

川村司

(愛知県警察本部)

(愛知県警察本部)

(愛知県警察本部)

(名大多元数理)

キーワード：筆跡、筆者識別、多変量解析、筆具

《はじめに》

前回までの報告では、試料筆跡（各試料の筆者が判っている漢字、平仮名、算用数字筆跡）について、多変量解析法により、各試料間で筆者が同一かどうかの検討を行ってきた。

さらに、我々の検討方法が筆者識別を行なう上で有用であるとの判断を得た。

だが、これまでは筆具に関しては同種のものを使用しており、筆具による影響については、検討を行なってこなかった。

実際の検査では試料筆跡の筆具が異なる場合が少なからずある。

そこで、筆具については最も極端な例と考えられる毛筆とボールペンを使用して、上質紙に成人14名が縦書きに各5回づつ記載した「神家健悟」字の筆跡中の「神」字、計10回分を試料とした。

検討方法については、すでに報告してきた多変量解析法のうちの、クラスター分析及び主成分分析により行ない、同一人が記載した異なる筆具による筆跡において、筆者識別が行なわれるのか否か、また、筆具の差異による影響について検討した。

《実験方法・結果》

試料とする文字をコンピュータに入力するために、図に示したように、「神」字を2次元の座標点に置き換え、字画の導入、転折などの端点を読み取った。



図 「神」字の基線と座標点の取り方

図の方法で文字を数値化し、同一人記載の筆跡について、筆者識別を行なった結果、表に示したように、クラスター分析では、14名中9人は両筆具間で混合したが、5名は分離した。

主成分分析では、14名中8人が混合し、6名が異

なる筆具間で分離した。

また、両分析においてボールペンと毛筆の記載が分離したのは5名で、その5名の筆者の書道の経験年数は1年未満から18年と経験による差異は認められない。

筆者No.	クラスター分析結果	主成分分析結果	経験年数
M-1	分離	分離	4年
M-2	混合	混合	10年
M-3	混合	混合	1年未満
M-4	混合	混合	1年未満
M-5	分離	分離	1年未満
M-6	分離	分離	2年
M-7	分離	分離	18年
M-8	混合	混合	10年
F-1	混合	混合	2年
F-2	混合	分離	5年
F-3	混合	混合	10年
F-4	混合	混合	1年未満
F-5	混合	混合	8年
F-6	分離	分離	2年

表 筆者識別結果

《考察》

以上の検査結果から、同一人の異なる筆具による記載において、約3から4割の試料に分離が認められ、筆具による影響は否定できない。

分離が認められる試料においては、筆者の書道の経験年数からも、特に差異は認められない。

しかし、今回の試料は1文字のみであり、これまでの検討からも複数の文字を使用することにより、正確な筆者識別が可能なことから、文字数を増加して検討する必要がある。

また、今回の試料収集にあたっては、書道の経験については調査したが、ペン習字と呼ばれる硬筆の経験については行なわなかったために、これらの影響についても併せて判断しなければならない。

さらに、試料記載時にいずれの筆具も、上質紙に記載したが、毛筆による記載では半紙とは用紙の質感が異なり書きにくいとの指摘も受けた。

今後は、以上のことを加味し、検討を行なうつもりである。

プログラムの一部は、ジーエルサイエンス社販売のピロエットを使用した。

すがはらひろし、わかはらかつふみ、みついとしゆきかわむらつかさ

模倣筆跡の筆者識別 (II)

○ 川 村 司 菅 原 博 嗣 三 井 利 幸 若 原 克 文
(名古屋大学多元数理) (愛知県警察本部) (愛知県警察本部) (愛知県警察本部)

キーワード 筆跡鑑定、模倣筆跡、偽筆、多変量解析、主成分分析、主成分ベクトル

【 緒 言 】

前年度までの試みは、測定値、主成分得点、因子得点(発散も含めて)、偏差値のクラスタ分析の結果によって0か1をとる変数 X_1, X_2, X_3, X_4 の合成変量

$f = a_1 X_1 + a_2 X_2 + a_3 X_3 + a_4 X_4$ 但し $a_1 = a_2 = a_3 = 1, a_4 = 0.5$ の値で、書き手が同一か、異なるかを判断しようとするものであった。これまでの分析の過程で、変数 X 単独で書き手を分離する精度(正確さ)は、主成分分析が僅差ではあるが他の手法に優ることが経験的に確かめられたので、検査筆跡に似せて他人が書いた作意筆跡と検査筆跡とを識別分離する分析法を主成分分析一つにしぼることにした。従来の主成分得点のクラスタ分析による方法(方法1)では満足する識別率が得られないため、別に検査筆跡混入の前後における第1主成分負荷ベクトルの向きの変化量から書き手の異同を識別する方法を考えて、従来の方法(方法1)と平行して処理をすすめた。検査法の評価は i) 異種筆跡^{*} および書き手の異なる 同種筆跡^{**} を分離し、その一方で、ii) 書き手の同じ同種筆跡を分離しないように認識できる率の高さで決められる。目標とする分離の正確さは i) ii) とともに90%以上とした。

ここで考えた新しい方法(方法2)は検査筆跡混入前、混入後の第1主成分負荷ベクトル v_1, v_2 のなす角 θ の余弦 $\cos \theta = (v_1, v_2) / (|v_1||v_2|)$ の絶対値が0.7以下のとき分離、それ以外を混合とするもので(θ を45度にとってみた)、主成分負荷ベクトルの変化を圧縮して得た数値を判断基準とする方法である。

【 固有筆跡と見本筆跡の分離 】

参照筆跡を複数の固有筆跡の署名とし、これに見本の署名(検査筆跡)1つを混ぜたものを主成分分析して、第3までの主成分得点についてクラスタ分析を行ったところ、固有筆跡が5個、4個、3個のときのいずれに対しても、12人すべてにおいて見本筆跡を分離した。一方、固有筆跡4個(筆跡番号1, 2, 3, 4)に、同じ書き手のもう1つの固有筆跡を検査筆跡として混ぜたもの、および固有筆跡3個(筆跡番号1, 2, 3)に同じ書き手の固有筆跡1個(同4)を混ぜたものは、いずれも検査筆跡を分離しなかった。第1主成分負荷ベクトルの方向変化による方法でもすべての場合に同じ結果が得られた。

【 模倣筆跡と見本筆跡の分離 】

模倣筆跡と見本筆跡を分離識別する率では、模倣筆跡の数に左右されることが少なく安定した値が得られたが、これは模倣筆跡が、まだ固有筆跡の持つ特徴を多く含んでいるためである。以前、文字連について調べて、固有筆跡の第1主成分は文字の全体的な形状を、第2主成分は基線と垂直方向への拡がりを、第3主成分はローカルな部分の形状を表すという結果を得たが、模倣筆跡も固有筆跡ほど顕著ではないものと同じ傾向を示した。しかし同一の書き手の中でのバラツキは大きく、参照する模倣筆跡が3つ以下ではそこに検査筆跡として加えた同一人の模倣筆跡を正しく認識しない率が高かった。しかし参照筆跡として4つの模倣筆跡をとると、ここへ同一人の模倣筆跡を混入させたときも、見本筆跡を混入させたときも正しく認識する率が高くなって、両面の最適化が得られた。また模倣筆跡4つと、そのうちの1つを見本筆跡と交換した4つの筆跡の、主成分負荷ベクトルの変化による筆者異同識別(方法2)では、12人全員が見本筆跡を分離した。

【 主成分負荷ベクトルの方向変化による方法の評価 】

方法1と方法2とでは結果はよく一致した。方法1の分析結果を左右する第1主成分寄与率について、模倣筆跡4つの場合と、模倣筆跡3つ+見本筆跡1つの場合について調べてみたが24例中50.5%のものが1例で他に50%を越えるものはない。方法2は第1主成分を100%見る方法だから、この2つはずこし異なった面から観察している方法といえる。さらに方法2に、第2主成分負荷ベクトルの方向変化も判定材料に加えると、参照筆跡として模倣筆跡が4つ以上ある場合には90%以上の正確さで検査筆跡を認識した^{**}。

【 ま と め 】

模倣筆跡と見本筆跡の書き手の違いを第1、第2主成分負荷ベクトルそれぞれの方向変化量に注目することにより高い信頼度で識別する方法が得られた。

* 1, * 2, 筆跡を固有、模倣、模写の3つの群に分けて、同じ群に属するものを同種筆跡、それ以外を異種筆跡と呼ぶ
* 3, 方法は $a = \cos 35^\circ = 0.82, b = \cos 45^\circ = 0.71, c = \cos 55^\circ = 0.57$ として
①, 第1主成分負荷ベクトルの方向変化角の余弦の絶対値Cがaとbの間であって混合と判断したもので、第2主成分負荷ベクトルの方向変化角の余弦の絶対値Dがc以下のときは『分離』と判定を変える。
②, Cがcとbの間であって分離と判断したもので、Dがa以上のときは『混合』と判定を変える。

かわむらつかさ,すはらひろし,みついとしゆき,わかほかつふみ

日本人が書いたアルファベットの筆者識別

関 陽子

(科学警察研究所)

キーワード : 筆者識別、アルファベット、母国語文字、多変量解析

【目的】 我々は通常外国語に先だって母国語を学習する。また、日常の言語活動は、主に母国語で行われる。このことは、文字に関しても同様である。

我々が文字を学習する過程においては、「文字を正しく書く」ほかに、「その人らしい文字を書く」（この場合、単に「整った字を書く」ということだけでなく、たとえば書字に要する運動が効率的に行われるなど運動的な側面も含む）ことも学習する。その際には、我々は、他人の筆跡、活字やフォントなど、身の回りのさまざまな文字を参照している。母国語文字の場合には、手本となる文字に多くのバリエーションがあるが、外国語文字の場合には、母国語文字に比べて手本となる文字のバリエーションが少ない。このことから、外国語文字の筆跡は、母国語文字の筆跡に比べて異なる筆者の間の個人差が小さいことが予想される。

外国語文字の中には、本来の文字の書き方が、その筆者の母国語文字の書字運動にはあまり用いられない書字運動である場合がある。この場合、その書字運動が母国語文字にない書字運動であることが筆者に認識されることが少ないため、新規の書字行動を学習するよりは、学習済みの書字運動が用いられることが多い。このため、共通の母国語文字を持つ筆者の間では、異なる筆者の筆跡であっても、共通な特徴が見られることが予想される。

また、外国語文字は母国語文字に比べて書字頻度が低いことが多いことから、母国語文字に比べて学習が十分には行われていないことが予想される。

これらのことから、外国語文字で筆者識別を行う場合には、筆者識別の根拠となる個人内恒常性及び個人差の存在が必ずしも保証されないことが予想される。

したがって、外国語文字の筆者識別では、母国語文字での筆者識別に比べて、正しい識別結果が得られにくいことが予想される。

そこで、日本人が書いたアルファベットを用いて筆者識別実験を行い、ひらがなでの筆者識別結果と比較して、外国語文字での筆者識別と母国語文字での筆者識別の相違について考察する。

【方法】 日本人大学生30名（男13名、女17名）が書いた英文エッセイ中から、a、d、e、g、sの5字種を各5個ずつ選び、筆者識別実験に用いた。

座標値を用いて文字を数値化し、多変量解析に基づいて筆者識別を行った。手順は、各文字の任意の箇所の座標を計測→計測点間をスプライン関数で補間して、筆跡を「再構成」→再構成された各文字の字画をあらかじめ決められた数に等分割→分割点の座標を求める、である。

字種ごとに任意の2筆跡の多次元ユークリッド距離を求め、これをもとに筆者識別を行った。筆者識別は、ある筆跡を疑問筆跡、残り149筆跡（30人×繰り返し5回－1筆跡）を対照筆跡とし、対照筆跡から疑問筆跡の筆者と同じ筆跡の筆者を選び出すことと定義した。疑問筆跡と対照筆跡との多次元ユークリッド距離を149筆跡すべてについて求め、多次元ユークリッド距離の小さいものから149筆跡を並びかえた後に、距離の最も小さいものから順に3筆跡を選択し、この3筆跡の中に同じ筆者の書いた筆跡が少なくとも1つ選択されていた場合を正識別とした。この操作をすべての筆跡（30人×5字種×繰り返し5回=750筆跡）について行った。

【結果及び考察】 字種ごとの平均正識別率は、a : 28%、d : 59%、e : 35%、g : 69%、s : 48%であった。これを同様の方法を用いて「か、た、の、は、る」のひらがな5文字で行った筆者識別結果（正識別率は、か : 77%、た : 94%、の : 76%、は : 91%、る : 77%）と比較すると、アルファベットの方が正答率が低かった。また、アルファベットでは、識別に使用する字種によって識別の正答率が大きく相違していた。

同一個人内の変動と異なる筆者間の変動を、ユークリッド距離で比較する（異なる筆者間のユークリッド距離/同一筆者内のユークリッド距離）と、a : 1.17、d : 1.53、e : 1.21、g : 1.53、s : 1.38、か : 1.80、た : 1.86、の : 1.69、は : 1.83、る : 1.88 で、アルファベットはひらがなに比べると比の値が小さかった。このことは、アルファベットでは、同一筆者内の変動に比して、異なる筆者間の変動が小さいことを示している。

日本人の書いたアルファベットでの筆者識別では、ひらがなでの筆者識別に比べると、識別の正答率が低く、字種による正答率の差も大きかった。また正識別率が低いことは、同一筆者内の変動に比べて異なる筆者間の変動が小さいことから説明されることがわかった。

せき ようこ

中心視野内の情報が水平感覚の安定性に与える影響

○新田見教子 竹内由則 廣島克佳
(航空医学実験隊)

水平感覚、安定性、空間識失調

目的：航空機の重大な事故原因としてあげられる空間識失調は¹⁾ 視覚情報を十分に得られない条件（雲中や夜間飛行等）で、急に旋回飛行に移ったり、急激に体勢を復元させた場合に方向感覚や水平感覚の失調として生じてくる。空間識失調を体験したパイロットは、姿勢指示器のチェック漏れや遅延を報告している。これらの対処法として模擬水平線の提示を試みた報告²⁾がある。そこで、夜間飛行で街の明かりや漁り火を水平線と知覚した場合の視覚情報が水平感覚の安定性に与える影響について実験的に検討した。

方法：被験者は健康な成人男子15名（34.9±6.6歳）。重心動揺測定（竹井器機1273型）は測定する足を定位置に置いた状態（手は体側に自然に垂らす）から静かに片足立位となり、安定したところから最高30秒間（右及び左）測定した。被験者は各条件を2回試行した。実験は外光を遮断した部屋で行った。水平情報として、重心計上に立位した被験者の顔面から50センチ前方の目線上に視野±25度の長さの夜光テープ（幅4mm）を水平に提示した。3点視標は夜光テープ（4mm四方）を目線上の0度、25度、-25度に提示した。闇夜を想定した条件（統制条件）として暗所開眼の保持も実施した。各試行終了後に情報や姿勢保持について口頭で質問して回答を得た。生体情報（心拍、呼吸、眼球運動）の測定は、生体用テレメータ（WBE-5000 日本光電）を用いて得た。重心の動揺波形は生体情報処理装置（ATAC-450 日本光電）で25.6秒間をフーリエ変換後、パワースペクトラムを求め保持機能と情報との関係について分析した。

各被験者の左右足保持の移動面積（暗所開眼）について検定した結果、有意な差が見られなかったことから総データ数30（暗所開眼は28）として処理した。

結果及び考察：各条件間の遂行成績（図1）は、3点視標条件の完了者が多く（ $X^2=13.0$ and 11.9 , $p<0.03$ ）、他の2条件より優れていた。水平線では被験者から水平線の運動感が報告された。この感覚は体の動揺に伴う頭部、頸部、眼の反射的な反応がアルベルト効果³⁾と同様の効果を生じさせ、その反復が水平線の運動感を誘発したものと考えられる。保持機能に関する重心動揺の累積移動距離と面積及び波形分析から、条件間に累積移動距離の差は見られなかった。完了者の面積は暗所開眼条件が3点視標より有意（ $p<0.05$ ）に大きい面積で保持し

ていた。移動密度（ $c\ m/cm^2$ ）では3点視標条件が水平線条件より高い密度（ $p<0.05$ ）を示し、パワースペクトラム（図2）も、3点視標条件の左右動揺（0.5～0.99Hz帯）が他の2条件より有意（ $p<0.03$ ）に多かった。これらの変化から、立位条件では、3点視標が体動揺の早期修復を可能にし、主観的な安定感をも得たものと考えられる。また、水平線は頭部の運動や重力の変化が少ない場合には、効果を示すものの、頭部の傾斜角が大きい場合や速い速度で変化した場合には、立位や座位姿勢に拘わらず、位置感覚の過大および過小評価あるいは、水平感覚の安定性を低下させることも否定できない。

まとめ：主観及び客観的な方法を用いて、街の明かりや漁り火を想定した水平な線情報が水平感覚の安定性に与える影響について検討した。3点視標条件は立位保持の安定性を高めた。また、水平線条件では、水平線の運動感覚を知覚した被験者が見られた。

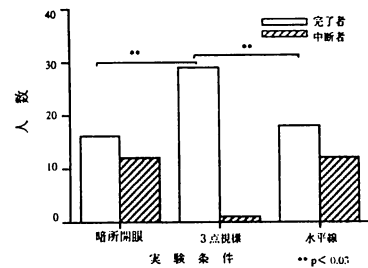


図1. 各条件における保持完了者数の変化 ** $p<0.05$

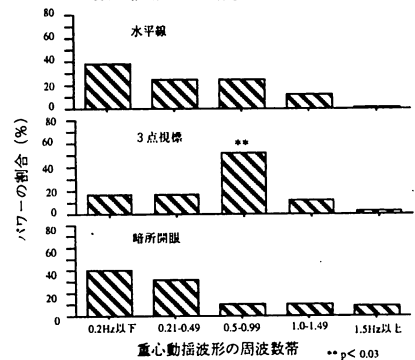


図2. 左右動揺のパワー変移 ** $p<0.03$

- Lyons TJ : Aviation.Space.Environ Med. 1994,(65), 147-152.
- Previc RM : Aviation.Space.Environ Med. 1992,(63),1060-1064.
- 田崎京二 : 新生理学大系 (9) , 1989, 455-458, 医学書院.

にたみのりこ、たけうちよしのり、ひろしまかつよし

乳癌患者の危機と心理状態に関する研究

○藤野文代 川口 毅, 星山佳治
(群馬大学医学部) (昭和大学医学部)

キーワード, 乳癌 危機 TEG S-E

研究目的

フィンは危機から適応までのプロセスを「衝撃」「防衛的退行」「承認」「適応」の4段階に分類している。笹子は「メテ・イカル朝日」に氏が告知した癌患者129名を調査した結果、ショックからの立ち直りに要した時間について53%が1週間以内であり、個人のキャラクターが影響していたと報告している。

今回、我々は乳癌と告知され、乳房切除術を受けた患者の危機と心理状態を明らかにし、適切な危機介入を目的として本研究を行った。

研究方法

対象は乳房切除術(温存術を含む)を受け、術後7-10日経過した研究に協力の得られた患者40名。

方法は1、我々が開発した危機質問紙を用いて、30-60分の面接調査を行い、2、面接時、市販の東大式TEG・S-E・サポ-トについて自己記入後、郵送を依頼した。調査期間は平成9年1-7月。回収率は88%、平均年齢は51.18±10.41歳であった。

結果及び考察

1. 危機質問紙の開発

危機質問紙を危機の4段階に各4項目ずつ、16項目を作成した。衝撃の段階は「①乳癌と告知され、死ぬかもしれない」「②告知されて、ショック」「③不安で眠れなかった」「④先のことが考えられなかった」、防衛的退行段階は「⑤自分は悪い病気であるはずがない」「⑥誰とも口を開きたくなかった」「⑦手術(治療)のことを考えたくない」「⑧今は何も考えたくない」、承認の段階は「⑨じたばたしてもしかたない」「⑩乳癌になって自分は運が悪かった」「⑪どうしてこんな目に合わなければ」「⑫手術を受けようと決心した」、適応の段階は「⑬将来に対して積極的になった」「⑭仕事(家事)があるから頑張れる」「⑮先のみとうしがみえてきた」「⑯来年の仕事を考えるようになった」、以上である。

衝撃の段階①は11名が「はい」と答え、「いいえ」と答えた人の理由は身近に癌でも元気な人がいることであった。②は10名、③は18名が「はい」で、食事や睡眠がとれなくなり、その期間は2,3日から1-3週間であった。

防衛的退行段階の⑥の「はい」は8名で、多くの人々は電話や職場で回りの人に話すことにより気を紛らわしていた。承認の段階⑩の手術は全員が外来で告知された日またはそれ以前に決心していて、「悪い物は早く取ってほしい」と考えていた。適応の段階⑬の「はい」は20名、

50%が退院後の生き方を考えている一方、その他の人は今後の治療が決まらないことや再発の不安も訴えていた。我々が術後1週間目における危機段階を検討した結果、16名(40%)が適応の段階と考えられた。

2. TEGとS-Eの結果

TEGの各平均値はCP=7.94±3.73, NP=16.03±3.18, A=13.46±3.61, FC=12.26±3.95, AC=10.10±4.69, であった。タイプ別人数はCPタイプは6名、NPタイプは10名、Aタイプは10名、FCタイプは1名、ACタイプは8名であった。危機段階と「A」は $r=0.4$ の相関を示した。

S-Eについては表2のとおりで、サポートや一部TEGの間で強い相関がみられた。

まとめ

乳癌術後患者の危機と心理状態を調査した結果、約1週間で半数が危機から立ち直り、個人の特性と関係していることが示唆された。今後、さらに症例数を増やし、一般化していきたいと考える。

(引用: 笹子三津留, 「癌告知・知りたい患者」メテ・イカル朝日, 1995. 8)

表1 TEG相関

	CP	NP	A	FC	AC
CP	1				
NP	-0.21	1			
A	0.15	0.35	1		
FC	-0.10	0.26	0.27	1	
AC	0.20	-0.16	-0.33	-0.45	1

表2 S-E得点 合計 28.86±5.92

1, 自分に満足している	2.60±0.87
2, 自分はまるでだめ	2.97±1.00
3, 見どころがある	2.86±0.93
4, 物事ができる	3.23±0.93
5, 得意がない	2.66±1.01
6, 役立たずと感じる	2.80±1.17
7, 自分は価値ある人間	2.80±1.09
8, 自分を尊敬できたら	2.37±0.99
9, 失敗者と思いがち	3.20±1.01
10, 前向きな態度	3.37±0.96

(ふじのふみよ, かわぐちたけし, ほしやまよしはる)

ロールシャッハ・テストと予後因子から見る 精神分裂病患者の予後予測について

○福井博一
(早稲田大学文学部)

小杉正太郎
(早稲田大学文学部)

Key Words: ロールシャッハ・テスト、予後因子、精神分裂病、予後予測

一目的一

精神分裂病（以下、分裂病）患者の予後予測の研究は、精神医学の見地からはおもに予後因子によって行われ、その研究は膨大な数に上る。そして、予後を予測するいくつかの因子が研究者間でおおむね合意を得るに至っている。しかし、クレペリンの悲観的予後観が否定され、多岐にわたる因子が分裂病の予後に影響するとされている現在、予後の諸因子が必ずしも分裂病患者の予後を十分予測し得ているとはいえない。

一方、心理学における予後予測の研究は、おもにロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テスト）によって行われてきた。というのも、ロ・テストは、人格並びにその変容を反映し、よって、予後予測に適うとされるからである。すなわち、精神医学の見地とは別に、より客観的なサインによる予後の予測可能性を示すといえる。しかし、その研究数は、極めて少ない。

そこで、本研究では、ロ・テスト施行から1年後の予後良好-不良の予測可能性を、従来、予後予測に適うとされるロ・テストの諸サインと、テスト施行時点における予後の諸因子との間で、比較検討することを目的とする。

一方法一

被検者：東京都M市、埼玉県U市の精神病院、並びに東京都S区総合病院精神科において、DSM-IVに依拠して医師により解体型分裂病と診断された入院患者24名〔男性15名、女性9名、平均年齢25.4歳（SD4.46、範囲20~37歳）〕である。

予後因子：予後良好とされる諸因子（吾妻・岩館、1995）から9因子〔女性、初発年齢が高い（20代）、遺伝負因なし、罹病期間が短い（24月未満）、服薬量が少ない（300mg未満）、同居人数が多い（3人以上）、就業経験あり（知的職業、主婦、自営業）、陰性症状なし、IQが高い（IQ=80以上）〕を選択し、そのうち各患者に諸因子がいくつあてはまるかを算定する。

ロ・テスト：従来、予後予測に適うとされているD/D+W%、ΣF+%、修正BRSを取り上げる。

予後：カルテに基づき、検査時点から1年後に、外来通院していた患者14名（検査時点から1年間の平均総入院日数52.2日、SD59.67、範囲0~166日、CP換算

表 予後良好群-不良群別に見る予後良好因子数とロ・テスト諸サインの結果

	良好群 (N=14)	不良群 (N=10)
予後良好因子数	5.1 (1.61)	3.9 (1.87)
D/D+W%	51.1 (17.43)	31.0 (16.41)
ΣF+%	82.5 (13.68)	73.0 (20.11)
修正BRS	-8.7 (17.50)	-25.7 (16.48)

*P<0.05 **P<0.01 (括弧内はSD)

に基づく平均服薬量196.9mg、SD198.19、範囲32.5~646.0mg)を予後良好群、同じく入院していた患者10名(同平均総入院日数203.3日、SD143.26、範囲23~365日、同平均服薬量593.0mg、SD501.52、範囲25.0~1300.0mg)を予後不良群とする。

手続き：ロ・テストは片口法（片口、1990）に、IQは「日本版WAIS-R成人知能検査法」（品川他、1990）に従い、1992年12月~1996年3月の間に施行した。

一結果一

予後良好群と不良群別に、予後良好因子の平均個数とロ・テスト諸サインの平均値を求め、t検定を行った。それらの結果を上記表に示す。

一考察一

(1) 予後良好因子の平均個数では、良好群-不良群別に有意な差は見られなかった。分裂病の予後には多因子が介在し、その各因子の持つ意味合いが患者個人を取り巻く種々の状況によって変わってくるために、予後因子による予後予測の難しさが推察される。

(2) ロ・テストでは、D反応による「現実指向性」を示すD/D+W%（柴田他、1985）と、「人格の統合度」を示す修正BRSとにおいて、良好群-不良群別に有意な差が認められ、何れも良好群が不良群よりも良好な結果を示した。これらのサインが包摂する意味合いが、予後予測をより可能にしていると考えられる。なお、修正BRSに関しては、一定期間においての変化の度合いにこそ意味がある（片口、1990）とされており、今後の課題としたい。

（ふくい ひろいち・こすぎ しょうたろう）

燃えつき症候群の研究

—ターミナルケアにおけるスタッフの心理的ストレスと満足度—

○上野いずみ

(駒澤大学人文科学研究科)

中村昭之

(駒澤大学文学部)

キーワード パーンアウト尺度、ホスピス・緩和ケア病棟、ストレス

日本において、ホスピス・緩和ケア病棟が始められて約10年が経過した。そのサービスの性格や、ホスピスの理念が日本の精神風土に定着していないことなどを考えてみると、ホスピス・緩和ケア病棟での仕事は、そこで働くスタッフにとってかなりストレスフルであると推測される。また、スタッフのストレスの度合いが、そこで提供されるサービスの質を決めることも考えられる。従って、職場でのスタッフのストレスの状況がどんなものであり、ストレスを軽減するにはどのようなことができるのかを探る必要がある。そこで今回の研究では、パーンアウト尺度を中心とした3つの尺度を用い、ホスピス・緩和ケア病棟に勤務する人々のストレス度を調べることとした。まず、ホスピス・緩和ケア病棟との比較のために、同じ尺度を用いて他の病棟（一般病棟）に勤務する医療従事者からデータを集めた。ホスピス・緩和ケア病棟に勤務する医療従事者の十分なデータはまだ集まっておらず、今回は一般病棟従事者中心に述べる。

方 法

調査対象者 I. 8つ病院の一般病棟（リハビリテーション科、内科、精神科、外科等）に勤務する医療従事者165名。看護婦123名、看護士14名、看護助手23名（女）1名（男）、医師（男）1名、職種不明3名。II. 東京近郊の2つのホスピス・緩和ケア病棟に勤務する医療従事者29名。看護婦25名、看護助手（女）1名、医師（男）1名、職種不明2名

質問紙 ①パーンアウト尺度 Maslach & Jackson (1980) による Maslach Burnout Inventory (MBI) に optional items を加え、発表者が訳したもの。25項目5段階評定。②Kahn et al (1964) による Job Related Tension Index (JRTI) を発表者が訳したもの。18項目5段階評定。③梶田叡一 (1990) による生き方意識インベントリー。30項目3段階評定。

結 果 と 考 察

一般病棟従事者から回収した、MBI、JRTI、生き方意識インベントリーの調査結果を因子分析（主因子法、バリマックス回転）し、そこで得られた因子得点を元に、MBIとJRTI、MBIと生き方意識インベントリーの因子の相関係数を調べた。さらに、MBIの因子を目的変数とし、残りの2尺度のそれぞれの因子を説明変数とする重回帰分析を行った。

因子分析の結果、次のような因子が抽出された。① MBI 第1因子は、Maslachの言う personal accomplishment 個人的達成感にほぼ対応している。第

2因子は、同じく emotional exhaustion の因子に対応している。第3因子は、depersonalization に対応している。第4因子は、「ある患者に対する自分の対応があれでよかったのかと思うことがある。」（項目8）などの因子負荷量が大きく、個々の対応に対する後悔 という因子名を付けることができる。②JRTI 1. 過度の仕事量 2. 職場の人間関係 3. 職場での評価 4. 役割の曖昧さ 5. 仕事に対する能力不足の因子が主要なものであった。③生き方意識インベントリー 特に寄与率の高い因子は抽出されなかったが、1. 自己実現意識 2. シニシズム感 3. 自己本位、利他的感覚の3因子を設けることが可能であった。

尺度間の相関であるが、①MBIと③生き方意識インベントリーについては、personal accomplishment と 自己実現意識 の間で有意な負の相関、personal accomplishment と シニシズム感、自己本位、利他的感覚 のそれぞれの間で正の相関が見られた。①MBIの personal accomplishment と②JRTIの5因子との間では、有意な相関は見られなかった。一方、①MBIと②JRTIの重回帰分析の結果によれば、①MBIの emotional exhaustion と個々の対応に対する後悔の因子について、過度の仕事量 が説明変数として寄与するところが特に大きかった。depersonalization の説明変数としては、職場の人間関係 が有意に寄与していた。これらの結果から、パーンアウトを引き起す主要な原因として過度の仕事量が考えられ、医療現場においては、仕事の量に比較してそれをこなすスタッフの絶対的な数が不足していると推測される。

ホスピス・緩和ケア病棟と一般病棟を比べるため、MBIの4因子について因子負荷量の大きかった項目の平均値を、因子別に合計し比較した。ホスピスの personal accomplishment の値は一般病棟より低く、emotional exhaustion、depersonalization、個々の対応に対する後悔の値は高かった。この結果とその他の分析結果を総合してみると、一般病棟従事者は過度の仕事量をこなすため、非内省的で、感情的にならないことを強いられ、一方ホスピス従事者は死にいく人を看取るという仕事の性格上、自分の存在が問われる状況に絶えず置かれ、自己を内省しそのことを消化する努力をしていると考えられる。以上のことから、より深い意味で自己実現を求める人がホスピススタッフには多く、それ故にまたパーンアウトし易いと言う仮説が立てられるのではないだろうか。今後、ホスピス・緩和ケア病棟のデータが十分集り次第、この仮説を検討していく予定である。

(うえのいずみ・なかむらしょうじ)

自己効力感の獲得の試み

石風呂 素子

(駒澤大学大学院人文科学研究科)

自己効力感、自律訓練法

【はじめに】

自己効力感とは Bandura(1977)によると、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信、自己遂行可能感である。心理臨床で問題となるのは自己効力感の高低であり、自己効力感が低く認知されると、状況を自分でコントロールできないと感じ、無気力・劣等感などによって抑うつ状態に陥り、不安、種々の依存症などの精神病理を引き起こしやすくなるといわれている。臨床場面においては、自己効力感を正確に測定し、獲得した自己効力感をどの程度身につけているかを知ることが個人の行動の変容を予測し、効果的な治療の遂行とそのプロセスについて検討を加えることを可能にするといわれている。

自己効力感は①行動の達成、②代理的経験、③言語的説得、④情動的喚起の4つの情報源を通して作り出される。このうち、情動的喚起とは生理的反応が成功の予期に影響を及ぼすという考え方で、心身の弛緩によって緊張を和らげることが生理的反応を抑え緊張の少ない穏やかな行動を可能とし、成功を期待する度合いを強めるというものである。そのための具体的な方法として自律訓練法などがある。

自律訓練法とは Schultz, J. S. により創始されたセルフ・コントロール法である。公式化された自己暗示によってリラックスを体得させることで、心身を整え、ストレスに対する対処能力を高め、自身の健康を自分で保ち心身の機能を向上させるのに適している。

今回は、自律訓練法によって自分の身体をコントロールできる感覚を掴み、それが自己効力感の獲得につながるという仮説を立て、自律訓練法による自己効力感の獲得を試みた。

【方法】

リラクセーションを得る方法の習得を目的として訓練に参加した18歳～20歳の大学生8人(男4人、女4人)を対象とした。訓練は週1回1時間、11回の期間を設け、そのうち自律訓練法の標準公式は7回集団指導した。また、自宅で1日1～3回の訓練を行ない訓練記録用紙の記入を課した。

毎回、佐々木雄二著「自律訓練法の実際」を抄読しながら公式の説明と実際の練習を行い、5週目に第二公式、9週目で全公式の指導を終了した。

一般性自己効力感尺度(以下 GSES)は、訓練期間中の1・3・4・5・6・7・8・9・10回目の9回測定した。GSES は坂野(1987)らによって開発されたもので、個人の長期的な行動に影響を及ぼす一般的な自己効力感を測る尺度である。自己効力感が高く認知されたときの行動特徴を反映するような内容で構成されており、行動の遂行レベルの重要な指標となる。一般的な行動の予測だけでなく未知の状況に面したときの行動を予測できるものとして、臨床的に有用な変数になると考えられている。

【結果】

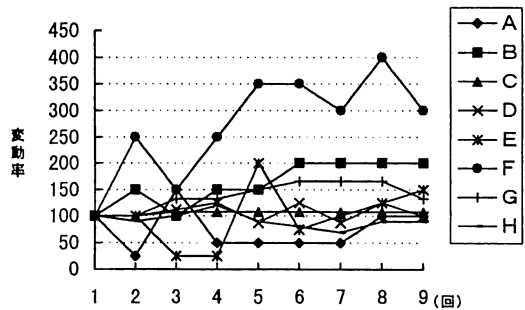


図1. 自己効力感の変動率

個人の GSES 成績は訓練前得点を100として変動率を算出した。GSES の変動率は全体的に確実に上昇しているとはいえない。個々人で見るとばらつきは大きい。第二公式の指導が終了した測定4～5回目までに上昇傾向を示すものもいるが、訓練後半はほとんど上昇は見られない。

【考察】

今回の結果からは自律訓練法による自己効力感の獲得は証明できなかった。原因としては、対象が健常者だったため元々持つ自己効力感を自律訓練法ですさらに高めることがむずかしかった。また、一般性自己効力感尺度は自律訓練法による効力感の変化を捉えきれものではなかった等の可能性も考えられた。しかし、自律訓練法が自己効力感の獲得に否定的な影響を及ぼすものではないと思われた。個々人のパターンにばらつきが大きく、少数の対象者から傾向・要因を引き出すことには無理があったと考えられる為、今後は対象数を増やすと共に、非健常者を加えた自己効力感の獲得について分析し、考察を加えたい。

(いしふる もとこ)

自己感と虚偽検出検査を依頼された際の態度

○ 安木博臣

板津裕己

間島英俊

(福岡県警科学捜査研究所) (函館大谷女子短期大学) (駒澤大学北海道教養部)

キーワード：自己受容、虚偽検出検査、態度

《問 題》

近年、重要犯罪のなかでも現金輸送車襲撃事件やバラバラ殺人などの凶悪事件が多く発生している。そのような情勢の中、警察はどのような凶悪事件にも対処できるように、科学捜査の強力な推進を図っている。

現在、科学捜査の一端として犯罪捜査に利用されている虚偽検出検査（ポリグラフ検査以下：検査と記す）は被検者の任意承諾のもとに実施されているが事件に対しての容疑性が拭い切れない場合、捜査員から事情聴取や検査を受検することを求められることは必至である。そして、検査を承諾する際の立場は、極論に立てば犯罪者が無実者のどちらかである。それゆえ、両者間の検査を承諾する際の態度には当然“意識の相違”が存在していると思われる。その中には、個人のパーソナリティや自己感到起因するものがあるのではないだろうかといった一種の問題が提起される。

そこで今回は、検査を承諾する際の被検者の心理態度の基礎的研究として、自己のあるがままを善悪や是非といった対立概念を入れ込ませることなく、その存在を歪曲せず受け入れること、すなわち、自己を肯定にとらえることではなく、自分自身を肯定や否定を超えてありのままに受け入れる「器」の大きさ・「こころ」の広さをあらわすものと考えられる自己受容性（self-acceptance）とどのような関係にあるかを分析検討してみた。

《方 法》

被験者：大学生、短期大学生および専門学校生の合計488名（男性219名、女性269名）である。

尺度：自己受容尺度（板津, 1989, 1993；5因子・25項目、5段階評定法、以下：SASSVと記す）。仮想犯罪事件（窃盗）に対し、検査を承諾する際の心理内容を問うアンケート（4項目・5段階評定法、以下：アンケートと記す）。

処理：SASSVの尺度合計点およびDBS（下位尺度バランス値）から3群別評価し、それぞれについてアンケートの各質問項目での出現頻度を整理した（なお、アンケートの5段階評定は、非常にある、結構ある・少しある・それほどない、全くない、の3別にて処理をした）。また、SASSVの各3群別は、板津（1989）の分布にしたがった。

《結 果 および 考 察》

尺度合計点とDBSの群別評価に関して、いずれの場合においても、無実者及び犯罪者の立場という2条件への態度が異なる結果が認められた（低得点群の怒り： $\chi^2=11.91$ $P<.01$, その他： $\chi^2=16.52\sim 262.95$ $p<.001$ $df=2$ ）ことから、紙上調査といえども、各被検者がこの2条件を理解想定の上、回答しているであろうことが推定される。

Table 1、2は“不安・恐怖感”“怒り”“安心感”の3観点について無実者と犯罪者の場合の出現頻度の χ^2 検定結果である。

Table 1 尺度合計点の高得点群と低得点群の比較

		全体	男性	女性
無実者	不安・恐怖感	14.21***	8.25*	6.95*
	怒り	0.20	0.30	0.23
	安心感	8.71*	5.88	3.60
犯罪者	不安・恐怖感	0.51	0.45	3.12
	怒り	2.06	2.03	0.68
	安心感	0.40	0.68	0.18
df=2		*: p<.05	***: p<.001	

Table 2 DBSのバランス群とアンバランス群の比較

		全体	男性	女性
無実者	不安・恐怖感	1.48	0.28	1.76
	怒り	2.25	0.12	5.06
	安心感	0.85	2.37	0.66
犯罪者	不安・恐怖感	5.88	1.83	5.67
	怒り	3.54	1.84	1.86
	安心感	4.46	1.58	3.75

DBSバランス群とアンバランス群間には有意差は認められなかった。しかし、尺度合計点の2群間では無実者の場合の“不安・恐怖感”に群間差が認められた。つまり、無実者の場合、高得点群の方が低得点群より検査を承諾する際の不安や恐怖感は少ないのである。このことは、自己受容している人は「気持ちが落ちついているため、素直に検査を承諾できる」ことを意味していると思われる。さらに全体のみではあるが“安心感”に有意差が認められたことは、これを裏づける結果と思われる。

今後は尺度合計点にDBSを重みづけた総合評価の観点、下位尺度レベルからの検討、そして今回取り上げなかった、項目“その他の気持ち”についての記述内容の分析を行なっていきたい。

(やすき ひろみ・いたつ ひろみ・まじま ひでとし)

業務上横領被害者の心理的経過

— 事実関係と要因との関わり —

ヒューマン・リフレッシュ・センター

岡村 美奈

業務上横領 被害者 被害後のストレス 心理的経過

〔目的〕

ここ数年犯罪被害者の研究は様々な形ですすめられてきているが業務上横領の被害者については、ほとんど研究がなされおらず、大企業だけでなく、中小企業や小売店等では被害にあう率が多いが、実際に表面化しない現状がある。業務上横領は社会的に表沙汰にしたいくない事件であり内部処理されるため、研究事例や研究対象となる被害者を捜すことが困難である。しかし確実に職業犯罪増加しており、被害に合っている企業も多くなっており、被害者が被害から心理的・精神的にストレスを受け、場合によっては経済的にも立ち直るのが難しい場合も増えている。

ここでは業務上横領または、結果的に詐欺事件にあった被害者についての基礎的データの整理と、その心理的要因と経過について考察することを目的とする。

〔方法〕

対象：業務上横領、または結果的に詐欺事件に合った都内中小企業経営者、男性20名

方法：業務上横領、詐欺に関する16項目のアンケート調査用紙を作成し、封書か手渡して記入を依頼。後日面談し詳細な状況説明と心身状態や経過等に関する5段階30項目のチェックリストを作成し記入してもらった。

〔結果〕アンケート調査

業務上横領被害：16名 詐欺被害：4名
被害者：平均年齢42.3歳 加害者：平均年齢40.5歳
会社業種：店舗販売14名 卸売業2名 不動産業2名
旅行業1名 工場経営1名

被害額：500万未満12名1000万未満4名
3000万未満2名 5000万未満1名
5000万以上1名

関係：社員 4名 役員 1名 親戚 6名
家族 3名 友人 6名(詐欺4名)

精神的打撃を受けた要因

被害者との関係70% 被害事実25% 被害額5%

二次受傷としての要因

周囲の見方40% 相談先の対応20% 被害者関係15%
会社内部10% 経済的な面10% 裁判5%

チェックリスト 被害後経過年月 平均 8.5ヶ月

項目	平均値	標準偏差
拒否	4.55	0.86
裏切り	4.45	0.67
怒り	4.35	0.96
恥	4.10	0.88
自責感	4.05	0.92
情けなさ	4.05	0.92
飲酒	3.75	1.04
被害感	3.65	0.96
孤独感	3.55	1.02
あきらめ	3.45	1.20
いらいら	3.30	1.19
脱力感	3.30	1.22

平均値の高い項目

被害事実、要因、チェックリストから被害者をタイプ別に分類するため個別別のクラスター分類を行った結果、[友人親戚、低額、横領期間短い、内部処理、返済有、関係性] [社員、勤続・横領期間長、支払いへの影響、警察処理、返済有、二次受傷] [社員、勤続年数短、返済予定、被害事実] [友人家族親戚、勤続年数長、弁護士等の処理、返済無、二次受傷] [社員、被害額低、経理人数多、行方不明]の5タイプに分類され、後者ほど精神的打撃の程度が大きくなる。
〔考察〕

被害が表面化した場合、企業体質や経営者の資質、経営手腕、経営管理が問われこと、周囲からの責め等から企業、被害者を守るため内部処理され、精神的打撃などの要因からみてとれる。加害者との関係性が精神的打撃として大きいのは、経営者が人間的に信頼し任せている、身内だからと信頼している場合であり、そのため裏切りや怒りの項目が高いと思われる。詐欺に関しては結果的であり、これは会社資金を提供したはずが流用されていた、返金する可能性がないのに借りた、違う目的のために資金が必要なのにそれを隠していた等であり、すべてが基礎に長い友人関係がある。この場合、相談先の対応や裁判などで二次受傷し、事実の受入れ拒否と孤独感、あきらめが強く、信頼関係の崩壊と不信感が生じるためと思われる。トラウマティックストレスに対するチェックリストでは怒り、否認、自責感、孤独感とともに、食欲不振、睡眠障害、飲酒量の増加、集中困難、いらいら、感情の爆発、自信喪失があげられる。怒りは、裏切られたこと、自分の管理能力、周囲の見方に対する順で表出するようである。あきらめ、受容は結果が見えた時であり、それ以降ストレスは軽減され、人間関係への不信が和らぎ、新しい関係を作れるようである。 おかむらみな

熟慮型－衝動型認知スタイルに関する研究(3)

－規定要因の検討－

三上れつ

(山形大学医学部)

認知スタイル 熟慮型－衝動型 規定要因 看護学生 重回帰分析

【目的】課題解決過程における個人差研究の一つに「認知的熟慮性-衝動性(R-I)」次元の認知スタイルがある。この個人差は、特定の能力を背景にした認知的課題に対する遂行差であるのか、あるいは課題遂行時の不安、動機、パーソナリティなどの差に起因するのか研究が積み重ねられてきている。昨年、熟慮型(R型)、衝動型(I型)のパターンを示す特徴的な20名を選出し、R-I次元の規定要因と考えられる説明変数に重回帰分析を適用し、第1反応時間(RT)と総誤反応数(Es)の各々の相対的な規定要因について報告した。本研究では、新たな対象グループのR型とI型でも、同様の結果が得られるのかどうか検討を加えた。

【方法】被験者：Y大学看護女子学生3年生51名のうち、R型とI型に分類された33名。測定用具及び手続き：(1)個人検査：Kagan作成の図形照合テスト(MFFT, adult set)を用いRTとEsを算出した。実験中、被験者の視線の動きをビデオで撮影し、各刺激毎の第1反応時間までの標準刺激注視回数を測定した。また、個人検査終了直後に別室で学習動機診断検査(テスト不安)、STAIを施行した。(2)集団検査：個人検査終了後、京大式NX15-知能検査(空間因子)、SEについて被験者の承諾を得て一斉に行った。手続きは、手引きに添って進めた。期間H9.5.11～5.19。結果の処理：(1)各被験者のRTとEsをもとに中央値折半を行い、R、I、FA(速くて正確)、SI(遅くて不正確)の4群に分類し、R型とI型を抽出した。(2)各説明変数が独立の変数として処理可能かどうか因子分析をした。(3)R群とI群について変数間のt検定を行った。(4)基準変数(RT、Es)と説明変数(SE、STAI-特性不安・状態不安、テ

スト不安-促進的緊張・失敗回避動機、標準刺激平均注視間隔、空間因子)について \bar{x} 、SD、並びに変数間の相関係数を求め、重回帰分析を行った。

【結果・考察】1. 認知スタイルの分類とR-I次元の特徴：RTとEsの中央値はそれぞれ35.0(秒)と8.50(個)で、各認知スタイルは、R型17名、I型16名、FA型10名、SI型8名であった。被験者全体のRTとEsの相関係数は $r=-.70(p<.001)$ であった。また、R型とI型のRTとEsの平均は、R型(RT:48.6±7.1, Es:4.1±2.3)、I型(RT:18.3±4.9, Es:15.6±5.4)で、RTとEsの相関係数は $r=-.83(p<.001)$ (図1)であった。2. 説明変数の因子分析：主成分分析、直交回転、バリマックス法で7因子抽出(累積寄与率100.0%)し、各検査毎に因子が分かれたので各説明変数並びにその下位項目を独立の変数として取り扱うことにした。3. R型とI型の変数間の平均値の有意差検定：RT($t=13.7, p<.001$)、Es($t=7.6, p<.001$)、標準刺激平均注視間隔($t=2.3, p<.05$)で有意差がみられた。4. 重回帰分析：RTとEsと説明変数との相関では、いずれも標準刺激平均注視間隔の間で、RT($r=.38, p<.05$)、Es($r=-.37, p<.05$)で有意な相関が得られた。RTとEsを基準変数として7説明変数の予測を目的とした重回帰分析(F値による変数増加法)の結果(表1, 2)、RTでは標準刺激平均注視間隔、SE得点、失敗回避動機で、Esでは標準刺激平均注視間隔、失敗回避動機で有意な標準偏回帰係数が得られた。以上から、R-I次元の規定要因としては、昨年よりR値、R²値は下回るものの、課題解決時の走査方略と動機的側面(失敗回避動機、SE得点)の因子が同様に影響していることが推察された。(みかみれつ)

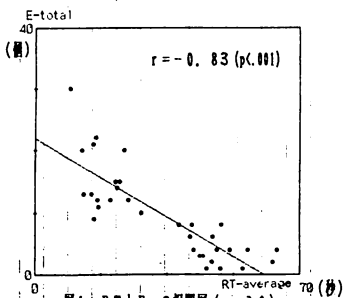


図1. RTとEsの相関図 (n=33)

表1. RTの重回帰分析の結果(階次的方法)

投入順位	説明変数	R	R ²	ΔR ²	β	r	寄与率(%)
1	S注視間隔	0.38*	0.15		0.50**	0.38*	19.0
2	SE	0.46*	0.21	0.06	-0.42*	-0.18	7.6
3	失敗回避動機	0.59**	0.34	0.13	-0.39*	-0.20	7.8

**p<.01 *p<.05

表2. Esの重回帰分析の結果(階次的方法)

投入順位	説明変数	R	R ²	ΔR ²	β	r	寄与率(%)
1	S注視間隔	0.37*	0.13		-0.46**	-0.37*	17.0
2	失敗回避動機	0.47*	0.22	0.09	0.39*	0.26	10.1
3	SE	0.53*	0.28	0.06	0.25	0.02	0.5

**p<.01 *p<.05

学校教育へのグループ・エンカウンター導入要件(2)

-----T公立中学校の取り組み事例の分析-----

清水 幹夫

(千葉大学教育学部)

[はじめに] 平成8年度から準備を始め、平成9年度から年間計画の中にグループ・エンカウンターを組み込もうとしていたT公立中学校の取り組み過程を分析し、グループ・エンカウンターを効果的に導入するための要件として、1)導入の原動力になる課題意識、2)課題への取り組みに熱心で積極的なキーパーソン、3)情報の収集と実践的志気、4)よきモデル授業の体験、5)主体的な試行体験、6)体験の吟味と問題点の共有、7)学校長の積極的支援などを報告した(1997 清水 千葉大学教育実践研究 179-188p)。平成9年度に入り、3学年平行して年間計画が実施されて1学期が過ぎた時点で、グループ・エンカウンターを年間計画の中に組み込んでいく経過を分析することによって、グループ・エンカウンター为学校教育への継続的・組織的導入の要件を明らかにしたい。

[方法] 平成9年4月から8月までの、T中学校における授業年間計画、校内研究会の記録、研究授業案、授業記録ビデオ、研究推進委員会ニュース、研究推進委員とのインタビューなどを総合的に検討する。

[グループ・エンカウンター実施経過]

1. 4月:平成8年9月より約半年かけて、全教員の取り組み課題としてグループ・エンカウンターの年間計画づくりを、研究委員会が中心になって行ってきた。この成果もあって、3月までには、どの教員もグループ・エンカウンターの試行的体験を踏まえて、その実施に向けて期待と意欲が高まっていた。特に平成9年度は研究推進委員会・専門部会の元にグループ・エンカウンター研究部を設置し、6名の委員により「GEのエクササイズの開発」「GEの指導案検討・作成」「GEの年間計画の再検討」「GEの研究授業・研究協議の企画」担当委員を決めて研究部会のグループ・エンカウンター部門の強化をはかった。また、平成9年3月に、教頭ほか3名の教員の移動の発表があり、グループ・エンカウンターの良き理解者がかけてしまうことになった。

4月になり何人かの教員の移動があったことから、また、新学年度の年間授業計画の効果的实施に向けて始業式前日の4月4日に、平成9年度第1回目の校内

研究全体会を開催し、グループ・エンカウンターの年間計画の実施に当たり、教員間の意志の疎通と年間計画の共通理解が図られた。

また、年間計画の最初の企画として4月上旬には、1学年、2学年、3学年一斉のグループ・エンカウンターを活用した学級開きが、4月28日には道徳の授業が実施された。グループ・エンカウンターの時間を正味60分を確保するために、1学期中は他の授業を5分ずつ短縮するなどの工夫をした。

2、5月

学活の時間を利用して、3学年一斉のグループ・エンカウンターを2度、5月14日に道徳の時間を利用して各学年のグループ・エンカウンターの研究授業を行った。

3、6月

道徳の時間を利用し3学年一斉のグループ・エンカウンターを2度行った。6月25日には、外部講師を招き、学活の時間を利用して各学年のグループ・エンカウンターの研究授業を行った。

4、7月

道徳の時間を利用して3学年一斉のグループエンカウンターを1度、1学期の振り返りとして実施した。

[考察] グループ・エンカウンターを継続的・組織的に学校教育に導入するには、年度の始めに次のような要件を満たしておかなければならない。

- 1) 無理のない年間計画の作成(学年間のエクササイズの調整など)
- 2) 年間計画実施に向けてのクラス担任間の共通理解
- 3) クラス担任間の技法的検討(リーダーシップの取り方、授業としての流れ、シェアリングのあり方など)
- 4) グループ・エンカウンターの効果を高めるための工夫(時間、一斉、回数など)
- 5) 参加困難な生徒への対応の工夫
- 6) 新赴任教員への心理的、技術的支援準備
- 7) グループエンカウンター一斉実施後の振り返り方法の検討

しみずみきお

問題解決における $\bar{r}u$ 適用の原因

進藤 聡彦

(山梨大学教育学部)

Key Words: $\bar{r}u$ (ル・バー), 新旧知識の接続・照合, 教授-学習方略, 力の合成と分解

問題

学習者が自生的に獲得した判断基準のうち、不適切なものは $\bar{r}u$ 、素朴理論などと呼ばれる。学習者が $\bar{r}u$ を有する場合、学校教育において適切な判断基準である ru を教授しても遅延事態では $\bar{r}u$ による問題解決が図られることがある。これは矛盾する ru と $\bar{r}u$ が併存し、後者が優先的に適用されているようすを示唆する。そこで、本研究では併存状態を解消するために両者の接続・照合の過程を促進する教授方略を明らかにしようとする。

調査 I

目的 ru として「力の合成と分解の法則」を取り上げ、問題状況による $\bar{r}u$ の適用の程度、状況ごとの解答への確信度、正解提示時の意外性の認識の差異の有無を明らかにする。結果から ru ・ $\bar{r}u$ 間の接続・照合の過程を促進する問題状況のもつ特徴を探っていく。予想された $\bar{r}u$ は分解角度を分力の大きさの非関連属性とするもの($\bar{r}u1$)、分解角度に拘わらず元の力は分力よりも大きいとするもの($\bar{r}u2$)であった。

方法 文系大学生193名を5つに分け、異なる問題用紙を配布した。問題は3問であり、それぞれへの解答後に解答の正しさについて確信度評定を求めた。また、以上の課題終了後に正解を提示し、それがどの程度意外であるか評定させた。

設定された問題は垂直下方向の力 $F1$ と、逆方向で等しい大きさの力 $F1'$ を分解した2分力 $F2, F3$ の3つの力が釣り合っている状況に関して力の大きさを比較させる以下の3問であった。問1は、分解角度が 90° と 130° の場合の1分力の比較、問2は、分解角度が 90° の場合の1分力と $F1'$ の比較、問3は分解角度が 130° の場合の1分力と $F1'$ の比較をさせた。問題用紙の違いは上記の問題が2方向に「2人で荷物を引き上げている(以下、引上と略)」「2機のヘリコプターが荷物を持ち上げている(ヘリ)」「2本のヒモで絵画を吊している(絵画)」「2つのパネに重りを吊す(パネ)」「力の矢印で釣り合っている状態の図示(図式)」の各状況に即して問題が作成されている点であった。

結果と考察 問1から $\bar{r}u1$ 、問2と3から $\bar{r}u2$ でそれぞれ判断した者の割合を算出した。結果を表1に示す。全体的に $\bar{r}u1$ による判断は少ないが $\bar{r}u2$ による判断は多い。また、 $\bar{r}u1$ は「パネ」「図式」といった非日常状況で多かったが、 $\bar{r}u2$ は日常・非日常で区分できるような一定の差は見られない。問3について一定数の対象者があった正答者と $\bar{r}u2$ による誤答者の確信度評定の値を比較したところ、後者で高い傾向があった。また、日常状況で確信度が高い傾向も

確認された。 $\bar{r}u2$ による誤答者を対象にした意外性評定の結果では、日常状況で値が高く、非日常事例で低かった。以上の結果から、 $\bar{r}u$ は日常的な状況で獲得され、それを非日常状況にも適用している可能性が示唆される。また、日常状況に即した焦点事例を用いることが意外だという認識をもたらし、 ru ・ $\bar{r}u$ 間の接続・照合の過程が促進されるのではないかと思われる。

表1 $\bar{r}u1$ と2の出現率(%)

	引上	ヘリ	絵画	パネ	図式
$\bar{r}u1$	5.1	13.2	5.1	23.1	21.1
$\bar{r}u2$	61.5	50.0	82.1	61.5	44.7

調査 II

目的 調査Iでは $\bar{r}u2$ による問題解決を行う者が多く見られたが、なぜ中学時の既習内容である ru が使用されないのか。その原因を探ることを目的に調査IIが行われた。

方法 文系大学生95名に調査Iと同様な問題を「引上」「絵画」「図式」の3状況に即して出題した。解答後、平行四辺形を描けば解けること(ru)を教示した上で選択肢から合致するものを選ばせる解決過程報告課題を課した。選択肢は、① ru は知っていたが、実際に適用しなくても解くことができた、② ru を知っており、実際に適用した、③ ru を適用すれば解けることは知っていたが、その手続きが分からなかった、④ ru のことは言われてみれば思い出したが、問題解決時には忘れていた、⑤ ru は知らなかったが、問題は解けた、⑥ ru は知らなかったし、問題も解けなかった、⑦その他、の7つであった。解決過程報告課題終了後、平行四辺形の作図をして再度、問題を解くように指示した。

結果と考察 問題解決の内容は、調査Iと同様の傾向を示し、 $\bar{r}u2$ による誤りが多く見られた。解決過程報告の結果は表2の通りである。いずれの状況においても問題解決に際して ru は意識されていない。加えて、 ru 自体が剥落しているわけでもないことから、 ru と $\bar{r}u$ が並存していることが分かる。また①~③を選び ru の適用を試みた者は「図式」状況で多いことから、学習時に図式状況で提示された ru が他の状況にまで一般化されていないことが示唆される。

表2 解決過程報告課題の結果

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	計
引上	2	5	1	17	7	0	0	32
絵画	2	3	0	18	5	3	0	31
図式	4	6	3	12	5	2	0	32

なお、作図を指示した後も成績の上昇は顕著ではなかった。具体的な状況にどのように平行四辺形を当てはめていったらいいのかといった ru の手続き的な知識に関する側面の習得が不十分なことも分かる。(しんどう としひこ)

学生の面接時の生活指導におけるSPIN法の有用性について

中川敏貴¹⁾ 中山英雄¹⁾ 大友達也²⁾ ○佐藤和己¹⁾

(¹⁾ 学校法人西野学園 札幌医療科学専門学校 (²⁾ 学校法人西野学園 スクールカウンセラー担当)

キーワード：生活指導、面接、SPIN法

【はじめに】

SPIN法は英国の行動心理学者であるニール・ラッカム等のグループにより開発された実証的かつ科学的な商談のスキルであり、関係各方面より高い評価を獲得し、欧米各国の物産、日本においても多くの一流企業に採用されている。

SPIN法は次の4つの質問語法から構成されている。

- ① カスタマーの現況、事実背景を聞きかぎりを求めているかを把握する「状況質問」
- ② カスタマーの不満点を把握する「問題質問」
- ③ 問題の認識を深める「示唆質問」
- ④ 問題解決に対する欲求を引き出す「解決質問」

これにより多様化する価値観の中で、自ら具体的に何を求めているかを把握できない顧客に対し、顧客自身がその欲求を顕在化できるよう導いていくものである。

【目的】

我々専門学校においても、学生の学力、資質、将来の希望等は年々多様化しつつあり、学生の指導においても多種多様な問題を抱えているのが現状である。その中でも特に少数ではあるが自ら抱える問題に対し自覚的でなく、尚かつ潜在的に現在および過去に対しての不満、将来に対する不安を有し、そのため、学業に対し無気力であったり、生活が不規則となる学生も例年少なからず出現してくる。こうした状況を解決していくためには自らが問題を認識し、相談に訪れる学生だけを面接の対象としているだけでは不十分であることは明らかである。従って、学生が潜在的に抱える不満あるいは不安を引き出し、それを解消、解決していくためには何が必要なのかを自覚させる系統だった技術が要求される。そのための手法として今回、従来企業における商談において、その有用性が知られていたSPIN法を応用した。

【事例】

対象及び状況；学生A(男子、20才)は二年生に進級後それまで続けていたアルバイトをやめ、学業に専念しようとしていた。しかしながら、その結果が定着せず

時間を持て余し、バチ知にのめり込み、欠席が増加した。

面接のブレイク；二年生は卒業年次でもあり、出席率は就職にも大きく影響する事を理解させ、次に自分が希望する方向に進むためにはどうあるべきかを学生自身が進んで提案するような質問語法を前もって組み立て、それに沿って面接を行った。

面接の結果；人の良いA君は友人の誘いを断り切れず、心の中では「これではいけない」と思いつながらも、バチ知に通っていた模様である。SPIN法による面接で問題を自覚するに至り、その後の出席状況は極めて良好である。なお、A君においては一回の面接によって問題のない程度にまで改善が見られたが、通常は数回の面接が必要である。

【考察】

従来の面接では学生に対し教員が「学生指導」という名目のもとにししばし高圧的な指導となっていた。しかしながら、そうした指導方法が学生に反発心を抱かせる事が多く、一時的に改善されたとしても再発するケースが多く見られた。

今回、SPIN法を学生の生活指導を行う際の面接の手法として応用し、その有用性が確認されたが、その中でも特に有意義であると考えられる事は以下であった。

- ① 初回の面接でも相手の知りたい情報を自然に引き出すことが出来る。
- ② 教員が前もって面接のストーリーを描くために余裕を持つことが出来る。
- ③ 学生から目標や目的を引き出し、そのため何をすべきかを学生自身に自覚させる手法であるため押しつけの印象がない。したがって、
- ④ 学生と教員の間で信頼関係が築きやすい。

※ SPINは米国ウェイト社およびダグ・リッジ・リサーチ研究所の登録商標であるが、その名称の使用については了解済みである。

なかむつ としき、なかやま ひでお、おおとも たつや、さとう かずき

大学教育における心理劇（6）

——異なる役割体験を重ねること——

黒田 淑子

（お茶の水女子大学生生活科学部）

キーワード：心理劇，大学教育，役割体験

目的

この研究の目的は、大学教育における心理劇の活用可能性を探り、活動内容や参加者の養成過程に応じた教育プログラムを作成し、その効果や留意点について探究していくことである。モレノによって創始された心理劇は、現在、世界の各地で、それぞれの文化、専門領域に応じて、さまざまに活用されてきている。日本においても、1950年代に導入されてから（外林、松村、石井らによる）、教育、看護、集団精神療法、臨床、矯正他の領域で、それぞれに特色のある実践・研究が進み、1995年には、日本心理劇学会が設立され、相互の共通性、独自性を明らかにしながら学際的な交流を深めるなど、新たな展開の時期を迎えている。本研究における心理劇は、モレノ（1946）によって明らかにされている心理劇の基本的な要件、関係学に基づく心理劇（松村 1961）の理論・技法に学び、日常生活にひらかれた心理劇（黒田 1989）として、活用・開発してきているものである。今回は、心理劇状況における役割体験の仕方に着目し、「役割交代」「役割回転」の諸技法を参考にしながら、重層的な役割体験、特に異なる役割体験を重ねる活動を取り上げ、そのような活動の状況演出技法を明らかにするとともに、大学教育の場で学生に育つものという観点から、重層的な役割体験の意味について、各技法の類似性及び共通性をとらえて考察する。

方法

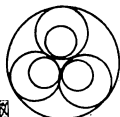
〇大学の「人間関係」「生活臨床」を課題とする授業における心理劇の実習（1990～1996年度、余白のある状況演出での再創造を含む、参加者15～70人）の中から、3つの典型的に異なる心理劇活動を、それぞれ複数取り上げ、上記の目的にそった分析・考察を行う。

結果：心理劇における重層的な役割体験

A. 異なる生活圏での役割体験を重ねること

〈状況演出・具体例〉3つの生活圏（家庭—学校—職場—地域等）を設定して、個が異なる役割を演じる。

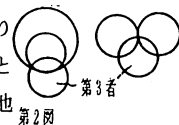
第1図



〈役割体験の意味〉それぞれの役割を担っての人間関係体験の違いとともに個の生活のバランスの状態や問題の所在、その状況の転換のヒント等が明らかになる。

B. 自己・他者・第3者の役割体験を重ねること

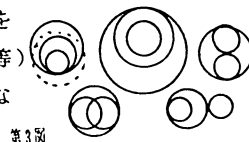
〈状況演出・具体例〉相互支援のあり方や親子関係の対立・葛藤等を課題とする人間関係状況を設定し、自己、他者、第3者の役割を交代しあって新たな展開をはかる。



〈役割体験の意味〉他者の役割を担うことで見える世界が変わり、第3者として関係を支え、間にはたらかける等、自己の感じ方、認識、行為の仕方が変わる。

C. 多様なかかわり方の役割体験を重ねること

〈状況演出・具体例〉人間関係の危機状況（一方的管理等）の転換・変容の可能性を探るために、ある役割（母親等）に限定して、図のように多様なかかわり方を行演する。



〈役割体験の意味〉かかわり方が変わると、個々も人間関係も変わることが参加者の体験を通して明らかになり、日常生活でのかかわり方の可能性が広がる。

総括的考察

(1) 人間関係の多面的・総合的な把握

心理劇A, B, Cの役割体験は、質的に異なるところがあるが、共通しているのは、人間関係の担い方、かかわり方が一面的ではなく、多様に広がっているところである。いろいろな切り口から複雑な人間関係の現象を多面的・総合的に捉えることができる。

(2) 関係状況の担い手としての情動体験

いくつか生活圏での役割体験（A）、立場の違いを実感する役割体験（B）、多様なかかわり方を具現化してみる役割体験（C）は、いずれも、関係状況の内、内側、間において、活動している人の役割体験であり、心をゆさぶられるような情動体験を伴っている。

(3) 役割行為の可能性のひろがり

心理劇における生活縮図的な場面で、異なる役割体験を重ねていくことは、いつもの自己の行為の仕方を見つめる機会になると同時に、いつもと違う自己の新たな行為の仕方を開発していく機会ともなる。全体として役割行為の可能性が広がっていくのである。

[文献] Moreno, J.L. 1946 Psychodrama Vol.1, Beacon House
松村康平 1961 心理劇—対人関係の変革—, 誠信書房
黒田淑子 1989 心理劇の創造, 学献社

（くろだよしこ）

女子大学生の生活意識について(2)

後藤嘉余子

(東京家政大学家政学部)

キーワード：アルバイト従事率、ボランティア活動、生活設計、女子学生

はじめに：女子の大学志向が高まる中で、女子学生の生活や意識にも変化がみられ、多様化した学生の関心、期待等に対応し得る態勢が大学側に求められている。こうした状況の下で、女子大学に学ぶ学生がどのような問題意識を持ち、いかなる生活を送っているのか、その実態を把握しようと、1991年より「女子学生の生活と意識」に関する一連の調査を行って来た。

今回も前回に引続き、社会参加の実状、自己の生き方を中心に、前回調査との比較検討を試みる。

方法：1. 調査対象 家政学部3年 496名を今回の分析対象とした。その内訳は、児童学科 138名、栄養学科 183名、服飾美術学科 175名である。なお、比較対照群として、1991年の調査より家政学部3年 429名分(児童学科 119名、栄養学科 179名、服飾美術学科 131名)の資料も併せて用いた。

2. 調査票の構成 読書傾向、テレビ視聴、趣味、ボランティア活動への関心、アルバイトの実状、尊敬する人、自己の生き方等10項目で構成した。

3. 調査時期・実施方法 1996年10月より1997年1月にかけて、授業時間の前後に集団で実施した。

結果と考察：1. 「アルバイト」の考え方 表1から明らかのように、現在凡そ7割(353名)の学生が

	1991年	1996年
児童学科	77.31	71.74
栄養学科	60.34	70.49
服飾美術学科	65.65	71.43
全体	66.67	71.17

アルバイトを行っており、レジャーの費用(60.1%)、生活費の補助(44.8%)、社会的経験(43.1%)といった生活の充実に重点を

表2 アルバイトのプラス面 (%)

	1991年	1996年
いろいろな人と知り合える	10.14	58.36
社会勉強になる	38.46	51.27
経済的に余裕ができる	11.89	43.91
レジャーのための収入が得られる	12.24	39.94
友達が増える	20.28	29.75
自己の成長につながる	15.38	29.46
時間を有効に使える	2.80	20.11
充実感がある	3.15	17.56
将来の仕事に役立つ	1.75	11.61
技術を習得できる	1.40	6.23
勉学に役立つ	8.04	2.83
その他	2.10	1.13
特になし	0.70	0.28

おいた事柄を目的と

表3 ボランティア活動への関心 (%)

	1991年			1996年		
	児童	栄養	服飾美術	児童	栄養	服飾美術
あり	75.63	51.40	36.64	89.13	55.19	57.71
なし	24.37	46.93	61.83	10.14	43.72	42.29
無回答	—	1.68	1.53	0.72	1.09	—

回の調査時にみられた学科による従事率の相違は認められず、アルバイトを学業と並列して位置づけているものと考えられる。殊に、実験系の栄養学科で従事者が増加している点は注目すべきで($X^2=4.129, p<.05$)、カリキュラムとの関連性の稀薄さがうかがわれる。このことはアルバイトの得失にも及び、プラス面を強調する傾向が見受けられる。アルバイトによって人脈が広がり、社会の仕組みを体得し、経済的余裕も生じるものと約半数の学生が捉えている(表2)。前回の調査(286名)においても略同様の指摘がなされているが、その比率は20%前後に留まり、プラス面の認識にかなりの相違があるように思われる(0.1%水準)。

2. ボランティア活動への関心 表3は、調査時期別学科別にボランティア活動に対する関心の有無をまとめたものである。全体的に、前回より関心ありの比率に上昇がみられ($X^2=13.010, p<.001$)、更に学科別検討では、児童学科、服飾美術学科に関心を持つ学生の増加が認められた(それぞれ $X^2=9.125, X^2=12.494, p<.01, p<.001$)。特に、児童学科では9割近くが関心を抱いていることがわかる。しかしながら、実際に活動経験のある学生は31.3%に過ぎず、社会の要請と相俟って関心は高まったものの、多分に観念的な捉え方をしているものと思われる。

3. 将来の生活 将来設計に仕事は不可欠とする学生が大半を占め、共働き(30.4%)、子育て後再就職(28.8%)、就職以外は未定(23.4%)に集中している。反面、専業主婦希望は僅か5名で、出産退職、結婚退職も7.5%、6.7%と低率である。一方、就職以外は未定が前回は上回るなど、結婚、子育て以上に仕事に執着する傾向があるといえよう。

おわりに：アルバイトを通して社会参加を求め、仕事を第一に選択する生活志向がうかがわれるが、将来を展望しているとは言い難い。今後、読書等文化的側面も加えた生活の実状を追求していきたい。

外科実習事前学習における看護学生の学びと不安の構成要因

○松谷さおり 星野明子 根本良子

(山形大学医学部)

臨床実習・看護学生

【はじめに】我々は、外科病棟実習の直前に、学生が患者をイメージ化し看護を考え実践しやすいよう、事前学習を実施している。内容は、オリエンテーション、周手術期看護のビデオ視聴、術前・術後の看護のロールプレイング、救急蘇生法演習、手術室オリエンテーションである。本研究は、外科実習事前学習において、看護学生が何を学び感じとったのか、その構成要因を明らかにすることを目的とする。

【方法】対象：A大学医学部看護学科4年次生で研究の趣旨に同意、協力を得られた女子学生9名。期間：平成8年5月。分析方法：学生が事前学習終了後（病棟実習開始前）に「事前学習についての感想、実習にあたっての私の目標及び心に湧いていること」について自由に記した感想文を、グラウンデッドセオリーを参考に分析した。分析は、質的研究を経験した複数の研究者と検討し、信頼性の確保に努めた。

【結果】分析の結果20の体験が抽出され、これらより事前学習で獲得したものの8つが抽出され、更に『実習のイメージ』『実習で学ぶための視点』『自己を見つめる機会』の3つが抽出された。

1)『実習のイメージ』は「患者のイメージ」「看護場面のイメージ」「自分の実習態度へのイメージ」から成り、実習で患者に対面して看護を実践していくことがどんなことなのか、自分に引きつけて具体的に思い描けたという意味である。「患者のイメージ」は<人間としての患者の認識><患者とのコミュニケーションがケアには大切だ><患者の個別性に対応する><患者の安全を守らなければならない>の体験から構成され、患者は1人1人異なる尊重されるべき人間であり、関係を作るには良いコミュニケーションが非常に重要であることを、イメージできたという意味である。「看護場面のイメージ」は<実際の場面をイメージできた><ケアの意味が実感できた>の体験から構成され、外科病棟の様子や、そこで自分が患者にケアしていく様子が、イメージできたということである。「自分の実習態度へのイメージ」は<実習中のルール><実習への参加姿勢>の体験から構成され、実習に臨む態度や、学生としてとるべき行動について、自分なりにイメージできたことを表す。

2)『実習で学ぶための視点』は「周手術期看護の特

性の大切さ」「知識と知識活用の大切さ」から成り、外科実習で重点的に学ぶべき点や、実習と講義や演習とのつながりへの見方を獲得したという意味である。「周手術期看護の特性の大切さ」は<周手術期の患者の特性を捉えたい><現場での周手術期看護の実際を学びたい>の体験から構成され、周手術期の患者の看護の特殊性が実習のポイントだとわかったということである。「知識と知識活用の大切さ」は<自分の課題がはっきりした><知識の統合ができた><基本的知識が重要である><知識を実践と結びつけ生かしたい>の体験から構成される。ケアの提供の際には基本的知識が重要であり、自分の不足点をもう一度確認する必要性を実感したということである。また、実習は、学んできた多様な知識を統合し、実践で生かしていく場なのだということを確認したという意味である。

3)『自己を見つめる機会』は「グループ学習による学び」「実習への不安」「自己成長への意欲」から成り、事前学習での体験が自分を見つめ直す機会になったという意味である。「グループ学習による学び」は<グループでの共有が励みとなる><友人の意見・やり方から影響を受けた>の体験から構成され、グループメンバーとの相互作用から、様々な学びがあったということである。「実習への不安」は<イメージが湧かない漠とした不安><初めての体験での不安><イメージができ生まれた不安>の体験から構成され、外科実習に対して具体像が描けずに心配する気持ちや、事前学習で経験したことのない体験をしての不安、事前学習を通して具体像が描けたことから生じた不安等、これからの実習へ抱いている不安である。「自己成長への意欲」は<自己の内面への気づき>の体験から構成され、自分の心の動きを客観的に見つめ、自己を一歩進ませるための意欲としていたということである。

【まとめ】学生が事前学習で獲得したものは『実習のイメージ』『実習で学ぶための視点』『自己を見つめる機会』の3つの要因から構成され、指導者のねらいと合致していた。しかし指導者がねらった‘実習のイメージ化’が図れたために、新たな不安が生じていた。この新たな不安に対し、実習中の効果的な指導方法を更に探求する必要がある。

(まつやさおり、ほしのあきこ、ねもとりょうこ)

看護学生のエイズ患者・感染者に対する態度と態度に関連する要因の分析

○根本明日香

三上れつ

(北里大学東病院) (山形大学医学部)

エイズ患者・感染者 看護学生 態度 要因

【目的】

我が国では将来、時間的経過につれてエイズ患者の増加が予想されている。しかし、医療施設等の体制が十分に整えられているとはいえ、エイズ患者・感染者が安心して医療を受けられるまでには至っていない。

本研究は保健医療従事者が偏見や差別なく患者・感染者に対してよりよいサービスを提供できるように、まず保健医療従事者の態度に焦点を当て、看護学生のエイズ患者・感染者に対する態度と態度に影響を及ぼす要因について検討した。

【方法】

調査対象：A大学看護女子学生1～4年生の計221名。

調査方法：「エイズ態度測定尺度」「態度に影響を及ぼすと考えられる要因」の設問を網羅した無記名式の調査票を作成し、1996年8～9月にかけて実施した。調査内容：Kellyら¹⁾のスケールを参考に「エイズ態度測定尺度」(20問)を作成し、5段階評定をさせた。また、影響を及ぼす要因として①学年、②エイズに対する考え方、③エイズに対する専門知識、④特性不安(STAI)、⑤自己効力感(効力感尺度-Ⅱr)²⁾について調査した。分析方法：「エイズ態度測定尺度」については5段階評定に基づき、患者に対して肯定的なものに5点、否定的なものに1点と得点化し、因子分析を行って尺度の因子構造を検討した。因子分析は主因子解を抽出してバリマックス法による直交回転を行い、固有値、寄与率に基づいて5因子を決定した。なお、 θ 信頼係数は第1因子0.80、第2因子0.80、第3因子0.70、第4因子0.60、第5因子0.70であり、ある程度の整合性が得られたために各因子の因子得点を算出し、その項目内容からそれぞれ「受容」「排斥」「安全性」「共感」「ショック」と命名した。

「要因」についての回答は、学年及びエイズに対する考え方は単純集計、エイズに対する知識では正答に1点を与えて総得点を、特性不安と自己効力感は標準の手続きに基づいて総得点を算出した。

態度の各因子得点と要因との関連は、F検定・対比較を行い、相互の関連性を検討した。なお、分析には多変量解析プログラムパッケージHALBAUを用いた。

【結果】

調査票回収率は回答者209人(98.1%)であった。

1. 単純集計で特筆すべきことは、エイズに対する考え方で「エイズに関心がある」者は71.8%、また、「病院で患

者を受け入れるのに賛成」と答えた者67.0%に対し、「自分が患者を受け持つことに積極的」と答えた者は30.1%であった。また、エイズに対する専門知識は12点満点で、全体平均9.77±1.38点であり、項目別では正答率6割以下はエイズの症状、垂直感染時の抗体検査、HIV検査の時期に関する3項目だった。

2. エイズ患者に対する態度と要因との関連は、学年別では4年生の方がエイズ患者を「排斥」せず、「ショック」も少ないという結果であった。エイズに対する考え方は、患者を受け持つことに積極的な者ほど「受容」的で「安全」であると捉えており、消極的なものほど「排斥」する傾向がみられた。また、エイズに対する態度と知識・特性不安・自己効力感では、知識と態度とのあいだに有意差はみられなかった。特性不安では、低不安群のほうが高不安群よりも「受容」的であった。自己効力感では自己効力感が高い者ほど「ショック」が少なかった。

【考察】

結果より、4年生の方がより肯定的態度であった。これは4年生が臨床実習を通して患者に対する接し方等を学んだ結果、エイズ患者に対しても態度が肯定的になったのではないかと推測された。また、患者を受け持つ事に対する考え方は態度に強い影響を及ぼしていることが考えられた。因子内容をみるとエイズ患者との共存というテーマが鍵になっており、より患者を具体的・身近に感じる事が患者に対する看護ケアの意欲を高めることになると思われる。加えて、不安が低く、自己効力感の高い者ほどエイズ患者に対して肯定的な態度傾向がみられることから、看護学生の不安を軽減し、自己効力感を高めるような教育的介入がエイズ患者に対する態度を肯定的に変化させられるのではないかと推察された。本研究では、知識と態度の間には有意差がみられなかったが、考え方や不安の軽減には正確な専門知識が有用であると考えられる。今回の設問内容からは正確な知識保有量を明らかに出来なかったため、今後はさらに知識に関する設問を検討して、知識と態度の関連を追究する必要があると考えられた。

ねもと あすか みかみ れつ

参考文献

- 1) Kelly JA, Lawrence J, Smith S, Hood HV, Cook DJ: Stigmatization of AIDS Patients by Physicians. *AJPH* 77, 789-791, 1987.
- 2) 浦上 晶則, 効力感尺度-Ⅱr, 名古屋大学大学院教育学研究科より委嘱。

○中野 アツ子

(東京都立北多摩看護専門学校)

内海 滉

(千葉大学)

キーワード：看護学生 母性意識 因子分析

はじめに

母性意識を「将来母となることのできる性質に関する態度や価値観」と定義して、学生の母性意識の実態を調査し、講義や実習指導のてがかりとすることにした。

II. 研究方法

対象は三年課程、二年課程の全女子学生で合計283名。調査時期は平成7年9月。学生の背景や生活環境63項目と、母性に対する価値観ならびに考え方69項目に関する質問紙を作成して、5段階評価とし得点の因子分析を行った。

III. 結果

第一報では学生の母性意識を構成する因子として、バリマックス回転後の因子負荷量から子供肯定因子、親否定因子、母性否定因子、母性懷疑因子、女性権利拡張因子、親断絶独立因子、社交因子など7つの因子を抽出したことを報告した。今回は、主に学生の母性意識を構成する因子と個人特性との関連について述べる。

子供肯定因子は赤ちゃんの世話の体験がない人よりある人、小学校入学以前に子供の世話をしたことがない人よりある人、身じかに妊婦がいない人よりいる人母性・小児看護に興味がない人よりはある人が得点平均が高く、有意差がみられた。

親否定因子は、基礎看護に興味がある人よりはない人、基礎看護が好きの人よりは好きでない人が得点平均が高く、有意差がみられた。

母性否定因子は、三年課程1年次は高かったが、2年次は低くなり、3年次は少し高くなっていた。1年次と2年次では有意差がみられた。老人の病気の世話の体験のある人よりない人、母性・小児看護に興味がある人よりはない人、基礎体温測定をしている人よりしていない人の方が得点平均が高かった。

母性懷疑因子は、三年課程では2年次より1年次が得点平均が高かったが、3年次は低く、1年次と3年次では有意差がみられた。また、姉がいる人よりはいない人、赤ちゃんの世話の体験がある人よりはない人子供の病気の世話をしたことがある人よりない人、分娩に立ち会ったことがある人よりない人、母性看護実習をした人よりはしない人、喫煙している人よりしな

い人に得点平均が高く、有意差がみられた。

IV. 考察

「赤ちゃんの世話をして赤ちゃんとの接触が多かったり、小学校入学以前の子供の世話や身じかに妊婦がいることなどで対児感情が高まる」と、これまで指摘されていた成育環境が子供肯定因子に影響していることが確認できた。また、母性・小児看護への興味の有無により有意差が見られたのは、子供と積極的に接することによって子供の状態がよく分かるため、子供を好きになるということを示しているのではないかと考える。

基礎看護学への興味の有無や、好きかどうかがなぜ親否定因子と関連するのか今後追求してみたい。母性否定因子は二年次で母性・小児看護の講義が始まり現実が見えてくるため低下し、3年次には実習などを通して、現実を直視したためこのような変化があったのではないかと考える。また、老人の世話の体験により人に対するいたわりの気持ちが芽生えるため、母性を否定する気持ちも低下するのではないだろうか母性・小児看護への興味の有無により得点平均に有意差がみられたのは、講義や実習によって妊婦・産婦・新生児に関する理解が深まり判断力がついたためではないかと考える。また、基礎体温を測定している人は母性に対する理解があるため、母性を肯定する気持ちがあるのではないかと考える。

母性懷疑因子は講義や実習を受けることによって、社会の中での母性の役割や母性看護に関する考えなどが理解でき、1年次から2・3年次へと変化したのではないかと考える。姉のいる人は、母性に関する知識が姉から得られることを示しているのではないだろうか。また、赤ちゃんの世話や子供の病気の世話の体験、分娩への立会い、母性看護実習の実施などにより母性懷疑因子が低下してくるのは、妊婦・産婦・褥婦・新生児に接する機会が多くなるとそれだけ理解が深まることを示しているのではないだろうか。「喫煙している」と良心的に答えている学生は、母性のめざめがあるのではないかと考える。

なかの あつこ、うつみ こう

看護学生の清潔の意識に関する研究

— 2年間の意識構造の比較 —

○ 岡本 清美

(東京都立松沢看護専門学校)

内海 滉

(千葉大学)

キーワード：看護学生 清潔の意識 意識構造の変化

1 目的

清潔の意識構造がどのように変化してきているかを明らかにする。

2 方法

1) 対象および調査期間

A群：都立M看護専門学校（三年課程）1995年度在学学生385名。B群：A群と同じ対象集団の、1996年度に2年生になった122名、3学年になった125名合計247名。調査期間：1995年7月下旬、1996年7月下旬

2) 調査法

清潔の意識に関する質問項目60項目について、質問紙を配付し全学生一斉に調査した。

3) 評価

60項目の各項目を5段階評価とした。それらの得点の平均値を標準偏差でt検定した。次にA群とB群とを分けてそれぞれ因子分析（バリマックス回転）を行い7因子を抽出して比較した。

2 結果および考察

同意の得られたA群合計371名(96.0%)とB群246名(99.5%)の有効回答を得た。

1) 項目別平均値の比較

質問紙60項目の平均値の比較で有意差がみられたのは7項目であった。「洗面台に髪の毛が落ちている」「ゴミ箱からゴミがあふれている」「爪の間のよごれ」($P<0.01$)、「飲みかけのジュースを床の上に置く」「えりの汚れ」「掃除場所に物があれば動かして掃除する」「歯磨きセットを持ち歩く」($P<0.05$)などの項目の回答が「不潔」方向に変化してきている。

一年間の看護学校という環境の中で清潔の意識が不潔方向に変化してきている。

2) 清潔の意識と因子構造の変化

A群、B群の因子分析の結果、累積寄与率はA群で46.8%、B群では46.9%でそれぞれ7因子を抽出した

A群の、第1因子は洗い流すことに関連した内容が多いところから洗い因子と命名した。以下、同様に第2因子はゴミ因子、第3因子は床因子、第4因子は掃除因子、第5因子は他人因子、第6因子は生活変容因子、第7因子は自己中心因子と命名した。

B群では第1因子から第7因子まで順に洗い因子、ゴミ因子、倫理道德因子、掃除因子、床因子、集団共

有因子、生活環境因子と命名した。

A群とB群の因子を比較すると、第1因子は洗い因子として変化はないが、「毎日のシャンプー」「洗濯は毎日する」等が組み込まれてきており、洗いの意識が強くなってきている。洗うという意識が清潔感の最も基本になっていることに関しては変化はない。第2因子はゴミ因子として変化はないが、「教室に食べ物の空き袋が散らかっている」「床に飲み物をこぼす」「煙草の吸殻があふれている」等が組み込まれてきており、ゴミの存在に意識が集中してきている。第3因子はA群の床因子から変わって、B群では「濃い化粧」「友達へのヘアブラシを借りて使う」等女性としてのマナーに関連した内容であるため倫理道德因子とした。第4因子の掃除因子はA群、B群ともほぼ同様の内容であり変化はない。第5因子はA群の第3因子の床因子の項目がB群に集約された形となり床に集中していた意識が床にゴミを捨てるという意識に変化してきている。即ち、捨てられた場所から捨てるという行動そのものに変化してきている。A群の第5因子の他人因子は次の第6因子に組み込まれ、「床の上に置いたバックを机の上に置く」「教室の床に教本を置く」「飲みかけのジュースを床の上に置く」等が加わった。学校という集団生活の中で共有することに関連していることから集団共有因子と変更した。第7因子はA群の自己中心因子から、「寝巻と部屋着を区別する」「ぬいだ衣類を床に置きまた着る」「洗顔は自分専用のクリームを使う」等生活環境に関連する内容であるため生活環境因子とした。

3 結論

看護学生の清潔の意識の変化調査した結果、

- 1) 質問紙60項目の平均値の比較で有意差がみられたのは7項目であった。
- 2) 清潔の意識に関する意識構造の中では、第1因子、第2因子、第4因子に類似性がみられた。
- 3) 因子構造の変化が現れていたのは、第3因子、第6因子、第7因子であった。
- 4) 床因子は第3因子から、第5因子に変化した。
- 5) 第5因子、第6因子は他の因子に組み込まれた
おかもと きよみ・うつみ こう

看護系短大生の看護婦理想像のイメージと Self Esteem 得点による分析

○小林千世

曾根原純子

(信州大学医療技術短期大学部) (日本赤十字看護大学看護研究科)

Key Words: 看護婦イメージ, Self Esteem, 看護婦理想像, 看護系短大生, 因子分析

【目的】自尊感情は職業選択や職業に対する態度や適応状態に反映する。そこで、看護系短大生の看護婦理想像のイメージと自尊感情を示す Self Esteem 得点(以下 SE 得点)の関連を明らかにし、看護婦理想像のイメージの要因を検討する。【方法】<調査対象> S 大学医療技術短期大学部 1994 年度 3 年次生, 1995 年度 3 年次生, 1996 年度 1 年次生, 2 年次生, 3 年次生のうち調査に協力が得られた学生 330 名。<調査方法> 直接配布, 直接回収による質問紙調査<調査内容> 1) 属性: 入学動機ほか 8 項目 2) SE 得点: Rosenberg, M. の作成した SE 尺度を星野の邦訳に基づき菅が日本語版に応用した尺度 3) 看護婦理想像: SD 法を用い 7 段階評定で調査 <分析方法> 1) SE 得点による比較群の設定: [平均値 - 標準偏差値] 未満の者を低得点群 (18 点未満: 以下 L 群) と, [平均値 + 標準偏差値] 以上の者を高得点群 (29 点以上: 以下 H 群) を設定した。2) 20 形容詞対: 肯定的イメージと否定的イメージ間の 7 段階評定に 7 点から 1 点までの点数を与え, 形容詞対ごとの得点を t 検定により比較 3) 看護婦理想像のイメージの因子分析を行い, 抽出された因子の因子得点を t 検定により比較【結果考察】1) SE 得点: 全対象の平均得点は 23.68 ± 5.23 点。L 群は 48 名 (16%), 平均得点は 15.33 ± 2.20 点, H 群は 52 名 (18%), 平均得点は 31.17 ± 2.05 点だった。それぞれの群の平均得点は, 菅が低得点の目安とした 20 点以下と高得点の目安とした 30 点以上に該当した。SE 得点が低すぎると劣等感や自己嫌悪感が強く対人関係の中で不適応感を抱きやすく, 看護婦の健康上の問題, ひいては看護ケアの質の低下の問題として注目される Burnout に陥りやすい傾向があると考えられている。逆に SE 得点が高すぎると現実吟味力の欠如や過剰補償などの問題を持つ場合が多いとされている。そこで, L 群・H 群の看護婦理想像のイメージの違いを明らかにし, 自尊感情が看護婦理想像のイメージにどのように反映するかを分析することは, 職業に対する意識や態度, 価値観などイメージの関連要因を検討するのに有意義であると考えられる。2) 形容詞対の比較: 2 群ともにすべての形容詞対の平均点は 4.0 点以上であり, 肯定的なイメージをもっていた。理性的な・自立した・慎重な 3 形容詞対を除き, H 群の方が平均点は高かった。有意差が認められたのは進歩的な・理性的な・

自由な・明るい・楽しいの 5 形容詞対であり (表 1) H 群の方がより進歩的で明るく楽しく自由な看護婦の理想像のイメージをもっていると考えられた。SE 得点の高い人は, 自己の選択した将来の職業に対しより積極的な関わりをするといわれているが, H 群の看護婦理想像のイメージは選択した将来の職業への積極的な関わりを示唆していると考えられた。また, 進歩的・自由な・楽しいの 3 形容詞対は後述する因子分析で f2 就労条件に負荷量が高い形容詞対である。SE 得点の高い人は現実吟味力に問題がある可能性もあり, H 群は就労条件など看護婦理想像に対する期待が高いイメージであるとも考えられた。3) 因子分析(主因子解, バリマックス回転): 固有値の衰退状況および解釈のしやすさを考慮して 4 因子を抽出し (累積寄与率 52.54%), 絶対値で負荷の高い項目に注目して f1 人間性 f2 就労条件 f3 就労意欲 f4 専門職性と命名した。f2 と f4 を命名する際に注目した形容詞対はマイナスの負荷を示しており, 看護婦理想像の就労条件や専門職性を否定的にとらえていると考えられた。4) 2 群間で因子得点に有意差がみられたのは f4 専門職性であり (表 1), H 群の方が否定的に専門職性をとらえていると考えられた。看護職の場合, 看護独自の仕事をしているという実感を持ちにくく, 社会的地位や意思決定において自立性を欠き, 専門職としてのアイデンティティが脅かされることがあるといわれている。本研究の対象者にもこれらの情報が反映していると考えられる。しかし, H 群より専門職性を認めていると考えられる L 群は, 看護婦理想像の専門職性に対する期待が高いイメージであり, 実習中に現実と理想とのギャップから一層自尊感情を低下させたり, リアリティショックを受ける可能性を持つと考えられた。こばやしちせ, そねはらじゅんこ

表 1 形容詞対・因子得点の 2 群の比較

因子	形容詞	L 群 n=48		H 群 n=52		t 値
		平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
f1	親切な	6.46 ± 0.82	6.54 ± 0.64			
	明るい	6.00 ± 0.88	6.42 ± 0.78	2.56 *		
	穏やかな	5.38 ± 1.45	5.52 ± 1.52			
	温かい	6.35 ± 0.84	6.39 ± 0.97			
	あたたかい	5.40 ± 1.13	5.46 ± 1.21			
	清潔な	6.27 ± 1.05	6.29 ± 1.13			
f2	やさしい	5.35 ± 1.38	5.58 ± 1.38			
	意欲的な	6.29 ± 0.80	6.54 ± 0.70			
	自由な	4.83 ± 1.33	5.40 ± 1.40	2.09 *		
	安定した	5.96 ± 1.27	6.12 ± 1.08			
	おもしろい	5.50 ± 1.24	5.85 ± 1.09			
	楽しい	5.25 ± 1.50	5.83 ± 1.28	2.08 *		
f3	進歩的な	5.27 ± 1.32	5.96 ± 0.95	2.99 **		
	深い	5.60 ± 1.07	5.67 ± 1.12			
	多様な	5.90 ± 1.23	5.94 ± 1.15			
	慎重な	6.10 ± 0.97	6.10 ± 0.91			
	積極的な	6.08 ± 1.01	6.42 ± 0.75			
	理性的な	5.00 ± 1.15	4.21 ± 1.58	2.87 **		
f4	自立した	6.04 ± 0.94	6.04 ± 1.19			
	助産な	5.75 ± 0.98	5.96 ± 0.93			
f1	人間性	-0.174 ± 1.168	0.199 ± 1.021			
f2	就労条件	0.049 ± 0.891	-0.034 ± 1.098			
f3	就労意欲	0.039 ± 1.131	-0.270 ± 0.959			
f4	専門職性	-0.299 ± 0.846	0.199 ± 1.203	2.41 **		

**p<0.01, *p<0.05

Personal Space に関する基礎研究(5)

豊村 和真
(北星学園大学)

キーワード: パーソナルスペース, 心理的負荷, マグニチュード推定法

過去数年にわたって、パーソナルスペースに関する実験的研究を行ってきたが、ここで従来のパーソナルスペース概念への疑問を提示し、再検討を行なう。

パーソナルスペースは種々の定義があるが、Sommer (1959)により操作的に「個人が習慣的に他者との間にとる距離」と定義され、これを実際に測定すると考えられるのが stop distance 法である。この方法においては、これ以上接近すると不快であるという距離にまで被験者と実験者が接近する。stop distance 法により得られる値を本報告では「境界線」と呼び「パーソナルスペース」は総称として用いる。

最初の疑問として、個人間で「境界線」は同じ意味を持つかどうかということがあげられる。

痛覚が個人内変動より個人間変動が大きいというのは通説であるが、気詰まりも同様の性質をもつと考えられないであろうか。

この点に疑問を感じて、初期の研究(1990~1991年)では、全て同一実験者で、2種類の「境界線」(通常の「境界線」と接近しなくてはできない課題を行うために意図的に近寄せた結果としての「境界線」)を得て検討した。

次に、「境界線」として定まるパーソナルスペースがある環境の下で絶対的な値として意味があるかどうか第二の疑問である。過去の多くの研究によれば、パーソナルスペースには人種、性、年齢等の人的要因や部屋の大きさなどの環境要因が多数関与している。

従ってパーソナルスペースを決定する条件を研究するために、複数の条件を揃えて、その中で最も基本的と考える条件を基準(仮の原点)と考え、そこからの差分をとるという方法を採用しなくてはならないと考え、その一例として部屋の壁からの影響をこのような考えで発達的に研究した(豊村, 1994)。

第三の疑問として、従来の考え方では「境界線」距離以下では不快、これ以上では不快ではない(平気)ということになるが、実際にこのような、単純な二値的区分がなされるのであろうか。むしろ二者間の距離が近くなるにつれて徐

々に不快さが増すのではないか。

この疑問に答えるために、直接被験者に気詰まりの程度を数値で言わせる、あるいは、握力計の値により表現させることによりマグニチュード推定法的な考察を試みた(都築・豊村, 1995)。その際、正面方向のみならず、側面方向、背面方向についても気詰まりの大きさを表現させ、8方向6地点の値から気詰まりの程度の等高線のようなものを作成した(豊村・都築, 1995)。その結果、気詰まりの程度は(特に正面方向では)ほぼ距離に比例して連続的に変化することが示された。

その際、この方法によるパーソナルスペースの気詰まり度(以後「気詰まり度」とする)と「境界線」との関連についても検討したが、やはり第一の疑問のように、クラスター分析を用いて「境界線」と、「気詰まり度」との関連を検討すると、「境界線」を境に「気詰まり度」が、変化する群と、そうでない群に分かれるが、「境界線」値が少ない(近い)群は、「境界線」の前後で「気詰まり度」が急激に変化するが、そうでない群は緩やかな変化を示すことがわかった。

第四の疑問として、「気詰まり度」が高い位置(実験者に近い位置)では、その気詰まり感を少しでも解消するために、何らかの微妙な動作(体を引く等)が発生するのではないかと、いうものがある。これについては1996年~1997年と検討を続けている。

[文献]

豊村(1994),「パーソナルスペースに関する発達的研究—物理的環境条件の検討—」, 日本教育心理学会第36回大会発表論文集, 34

都築・豊村(1995),「Personal spaceに関する基礎研究(3)」, 日本応用心理学会第62回大会発表論文集, 63

豊村・都築(1995),「Personal spaceに関する基礎研究(4)」, 日本応用心理学会第62回大会発表論文集, 64

(とよむらかずま)

CFQ(Cognitive Failure Questionnaire)の妥当性に関する研究 (I)

○布施淳子* 吉田信彌** 小林裕**

(*東北学院大学大学院人間情報学研究科) (**東北学院大学教養学部)

Keywords: CFQ (Cognitive Failure Questionnaire)、因子構造、人格特性

はじめに

日常の失敗行動を測定する質問紙として、Broadbent (1982)らによって考案された CFQ (Cognitive Failures Questionnaire)がある。これは「本をどこに置いたか忘れる」標識を見落とす」「いい間違える」等の 25 項目の日常失敗行動の頻度を5段階評定するものである。質問項目は認知・印象・記憶の3領域から選んだものとしているが、具体的な因子構造については検討されていない。また、CFQ と EPQ (Eysenck Personality Questionnaire)、MHP (Middlesex Hospital Questionnaire)との関連を検討し、不安、抑鬱、強迫症状の項目のいずれとも正の相関があると示した。山田 (1991)は、因子構造を各被験者群で 3 因子を抽出し、質問項目を 4 群に分けた。また、CFQ と MPI(モーズレイ性格検査)、CAS(不安診断検査)、LOC(Locus of Control)との関連を検討し Broadbent らを支持する結果を得た。

【目的】

本邦では CFQ の因子構造と人格特性との関係を明らかにしたものは少ない。そこで本研究は、CFQ の妥当性を検証する足がかりとして、CFQ の日本語訳(山田, 1991;仁平ら, 1985)を参考に作成し、CFQ 質問項目の因子構造と CFQ と人格特性の関係について検討することを目的とする。

【方法】

対象:Y大学女子学生 212 名(年齢 19.99±1.65 歳)。期間:1997.4.30~5.2。手続き:山田(1991)と仁平ら(1985)の CFQ を参考に CFQ の日本語訳を作成し、MPI(モーズレイ性格検査)、SE(Self-esteem; Rosenberg (1989)の星野命訳)と共に集団調査を行った。分析方法:CFQ の因子分析、CFQ と MPI・SE との相関関係の分析を行った。

【結果・考察】

CFQ とそれぞれの検査の平均得点は、CFQ:45.18±10.86、SE:26.37±4.83、MPI:E(外向性・内向性)尺度 29.00±10.29、N(神経症)尺度 20.59±9.86、L(虚偽)尺度 11.00±5.02 であった。CFQ の得点は、正規性検定では1%水準で正規性を示した。各項目と総得点との相関は、全項目が 0.1%水準で有意であった。

1)CFQ 質問項目の因子構造

因子分析は、主成分分析・バリマックス回転にて行った。固有値 1 以上で累積寄与率 49.8%の5因子を抽出し、F1:目的の忘却、F2:行為の忘却、F3:行為の計画、F4:視覚的注意、F5:認識の失敗と命名した(表1)。因子構造は Broadbent らが述べた「認知、知覚、記憶」の3つに解釈することは難しく、5因子が抽出された。また、山田の結果(女子大生 n=145)と比較すると CFQ と MPI との各尺度間の相関は類似した傾

向を示したが、因子構造は異なるものであった。

2)人格特性との相関

CFQ と MPI・SE との相関を表2に示す。CFQ の得点は、MPI の N 尺度との正の相関および L 尺度との負の相関が有意であった。Broadbent らは「神経症傾向の高い人は環境に敏感に影響されやすいため、注意のコントロールが不安定になり失敗行動につながる」と考えた。今回の結果はこれを支持するものである。L 尺度との負の相関については、CFQ 低得点群には虚偽の報告をした可能性のあるものがいたと考えられる。SE との負の相関については、SE の低い人は自分に自信なく、実際の行動を低く評価する可能性があり、実際の失敗行動を多く報告することが考えられた。したがって CFQ の得点は日常の失敗行動を反映するとは限らない可能性が示唆されたものと考えた。

表1 CFQ 質問項目の因子構造

項目	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
	目的の忘却	行為の忘却	行為の計画	視覚的注意	認識の失敗	
25 言おうとしたことを忘れる	0.750	0.210	0.180	-0.007	0.159	0.667
23 何を買うのか忘れる	0.678	0.032	-0.061	0.248	0.014	0.578
24 物を落とす	0.610	0.265	-0.043	0.840	0.104	0.564
22 のどまで出かけて思い出せない	0.593	-0.053	0.357	0.079	0.071	0.667
2 何をしにきたか忘れる	0.489	0.380	0.216	0.246	0.183	0.600
17 ものをどこに置いたか忘れる	0.277	0.659	0.200	0.181	0.018	0.632
16 約束を忘れる	0.099	0.651	0.860	-0.132	0.237	0.599
18 間違えているものをする	0.208	0.556	0.175	0.083	0.214	0.507
6 戸締まりしたかを忘れる	0.066	0.510	0.180	0.403	0.044	0.559
15 決心するのに迷う	0.061	0.105	0.721	0.015	-0.064	0.542
19 話を聞いているとき他のことを考えてしまっている	-0.027	0.245	0.652	0.075	0.251	0.569
8 失言に後で気がつく	0.085	0.149	0.475	0.222	0.135	0.516
9 話を聞き逃すこと	0.334	0.122	0.462	0.025	0.272	0.454
21 途中から他のことがしたくなる	0.229	0.062	0.400	0.303	0.300	0.442
12 道順を思い出せない	0.184	-0.115	0.036	0.728	0.174	0.627
3 看板や標識を見落とす	-0.045	0.442	0.233	0.651	0.167	0.709
13 目の前の物に気づかない	0.339	0.141	0.111	0.478	-0.044	0.524
11 手紙の返事を忘れる	0.129	0.108	0.100	-0.050	0.725	0.630
1 本をぼんやり読み過ごす	-0.015	0.060	0.248	0.057	0.638	0.506
5 人にぶつかる	0.236	0.248	-0.040	0.338	0.530	0.531
4 左右を間違える	0.126	0.174	-0.043	0.398	0.450	0.418
固有値	6.852	1.596	1.53	1.304	1.163	
寄与率(%)	27.4	6.4	6.1	5.2	4.7	
累積寄与率(%)	27.4	33.8	39.9	45.1	49.8	
α	0.74	0.67	0.69	0.59	0.60	

表2 CFQ と MPI・SE の相関

	CFQ	MPI			SE
		E	L	N	
CFQ	—				
E	-0.003	—			
MPI L	-0.416***	-0.042	—		
N	0.555***	-0.126	-0.371***	—	
SE	-0.287***	0.438***	0.087	-0.277***	—

*** p<.0001

(ふせ じゅんこ・よしだ しんや・こばやし ゆたか)

「他者意識」と「怒りの動機と反応」

森 ひとみ

(駒沢大学 人文科学研究科)

内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識、「怒りの経験」質問紙

「攻撃」反応の状況的要因と、どのようなパーソナリティ要因が関係あるのかを調べる一例として、本研究では「怒りの動機と反応」と「他者意識」を取り上げた。大平(1989)が「自己意識」と「怒りの動機と反応」の関連について先行研究を行っているが、辻(1989)によると、自己意識の私的・自己意識(自己の内面への関心)と、他者意識の内的他者意識(他者の内面への関心)、及び、自己意識の公的・自己意識(自己の外へへの関心)と他者意識の外的他者意識(他者の外へへの関心)との間にはそれぞれ正の相関関係があるという。このような理論を踏まえて、「他者意識」と「怒りの反応と動機」において、以下のような仮説を立てた。①怒りの強さが弱いほど、かつ内的他者意識が強いほど「直接的攻撃」の願望から実行へ移行し易い。②「内的他者意識」が強いほど、「攻撃転化」と「怒りの抑制」の願望から実行へ移行し易い。③高公的・他者意識群は低公的・他者意識群に比べて、「直接的攻撃」と「攻撃転化」の反応パターンにおいて、自らの反応を社会的に正当なものであると感じ、かつ正当だと感じる程度が強いほど願望から実行へは移行されにくい。④「空想的他者意識(他者について空想をめぐらす)」は自己意識とは無相関であるが、「否定的評価に対する恐怖」と高い相関関係があることから(辻, 1989)、「逃避的動機」や「道具的動機」との間に正の相関がみられ、また、「空想的他者意識」が強いほど「直接的攻撃反応」の願望から実行へ移行されにくいと考える。しかし、「空想的他者意識」を持ち易い人は、人に批判されたり笑われたりするような場合を想起し易い(辻, 1989)ということを見ると、被害者意識が強くなることによって、「敵意的動機」を示し、「直接的攻撃」あるいは「攻撃転化」の反応を生起させやすい傾向がみられる可能性がある。

(方法)

大学生の男女123名(男子72名、女子51名)を対象とした。被験者の年齢は、18歳から22歳の範囲に分布している。質問紙は、辻(1993)が作成した他者意識尺度と、Averill(1979)の「怒りの経験」質問紙の日本語版(大淵ら, 1982)を使用した。他者意識尺度は、「内的他者意識」7項目、「外的他者意識」4項目、「空想的他者意識」4項目、合計15項目から成っており、それぞれ「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の5段階で評定させた。

「怒りの経験」質問紙はエピソード法で、主として以下のような質問から構成されている。【怒りの経験の強さ】:過去1週間間に感じた怒りの強さを1~10の10点尺度、【怒りの対象の特徴】:性別、人間関係、社会的地位、【受けた被害】:受けた被害11項目についてそれぞれ「全く受けていない~ひどく受けた」の3点尺度、【怒りに伴う反応】:怒りを感じた時にどのような反応を示したかに関する11項目について、願望水準「したいと思わなかった~したかった」と、実行水準「しなかった~強くした」の両水準とも3点尺度、【怒りの行動後の感情変化】:変化した感

情5項目について、「全く感じなかった~強く感じた」の3点尺度、【怒りの動機】:生じた怒りの行動は何を目的としていたのかについての11項目を「心の中にあつた~全くそんなことはなかった」の3点尺度

(結果)

①他者意識尺度の因子分析

第3因子でバリマックス回転を行った結果、内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識という単純構造が得られた。

②怒りの動機の因子分析

バリマックス回転を行った結果、それぞれの因子について主に以下のような項目が高い負荷を示し、解釈した。第1因子-敵意的動機因子(嫌悪伝達、過去への罪の仕返し、単純な仕返し)。第2因子-自己中心的動機因子(プライド保持、日頃のうっぷん晴らし、自分の為の行動規制、別の期待)。第3因子-道具的動機因子(関係強化、相手の為の行動規制)。第4因子-逃避的動機因子(責任回避、関係解消)。

③怒りによる反応の因子分析

[願望水準] 同じくバリマックス回転によりそれぞれの因子について高い項目と解釈を示す。第1因子-直接的攻撃因子(身体的攻撃、言語的攻撃、相手の大事なものをへの攻撃)。第2因子-非攻撃的解決因子(相手との話し合い、第三者に相談、怒りと反対の表現)。第3因子-攻撃転化因子(人に八つ当たり、物に八つ当たり)。[実行水準] 第1因子、第2因子、第3因子は願望水準と同じような因子構造を成し、それぞれ直接的攻撃因子、非攻撃的解決因子、攻撃転化因子とした。第4因子は怒りの抑制因子(心を鎮める)とした。

④他者意識と怒りの動機の関係

他者意識のそれぞれの因子を構成する下位尺度得点と、怒りの動機の4因子を構成する項目得点を合計したもので相関を算出した結果、相関は見られなかった。

⑤他者意識と怒りの反応の関係

上記と同じ方法で相関を算出した結果、他者意識と怒りの反応の願望水準、実行水準ともに相関は見られなかった。

(考察)

他者意識と「怒りの動機と反応」について相関は見られない結果となったことで、「空想的他者意識」と「怒りの動機と反応」についての仮説④は棄却されたことになる。その原因としては、被験者数の不足、あるいはもともと他者意識との相関はないことなどが考えられる。また、怒りの動機の因子分析での第2因子については「自己中心的動機因子」と新たに名付けたが、この解釈名が妥当なものであるかどうか今後検討する予定である。今後はそれらの検討も含めて、動機、反応の下位項目ずつとの相関関係、男女別での検討、または残りの他の仮説との検証も含めて、「怒りの経験」質問紙の他項目との関連について引き続き研究していく予定である。

(もり ひとみ)

目撃記憶の事後情報効果に対する「反対の論理」の影響 2

○大沼 夏子 ・ 箱田 裕司 ・ 大上 渉

(九州大学文学研究科・九州大学文学部・九州大学文学研究科)

キーワード：目撃記憶・事後誤導情報効果・反対の論理

人がある出来事を目撃した後その出来事に関する誤った情報に接すると、そうでない場合より最初に目撃した出来事の記憶の正確性が低くなる。これを事後誤導情報効果 (misleading postevent information effect) という。この効果の原因については変容説 (事後情報が最初の出来事の記憶を塗り替える)、接触可能性説 (事後情報が最初の出来事の記憶への接触可能性を低める)、共存説 (事後情報は最初の出来事の記憶に影響を与えず事後誤導情報効果は反応バイアスによるものである)、情報源誤帰属説 (被験者は事後情報の情報源を最初の出来事だと取り違える) がある。また被験者が事後情報に信頼をおき自分の記憶の良さを示そうとして事後情報の内容を最初の出来事の記憶として報告するという可能性 (要求特性) もある。D. S. Lindsay (1990) が使用した「反対の論理」 (logic of opposition) による教示を行なうことで要求特性の可能性を排除したうえで、そのような教示自体に事後誤導情報効果を減ずる効果があるか否かを調べた前回の実験では被験者の記憶成績に教示の有無による差はみられなかった。今回は Loftus (1979) が見出した spill-over effect (見え透いた誤導情報を与えられることにより被験者が他の誤導情報にも惑わされにくくなる現象) を加えることで反対の論理による教示の効果が見られるかどうかを調査し、その結果によって事後誤導情報効果の原因を考察することを目的としている。

【方法】

被験者：大学生及び専門学校生 96 名。
 装置：スライド投映機 KODAK CAROUSEL custom 860H
 材料：目撃対象となる最初の出来事として男がある建物に侵入しフロッピーと現金を盗む様子を描写した 27 枚のカラーズライドを作成、使用した。その中に誤導対象要素①部屋のドア (最初から開いている/男が開ける) ②ロッカーに貼られたシール (リング/初心者マーク) ③パソコンにかかった布 (ピンクの無地/ピンクの柄物) ④男がフロッピーを盗む場所 (机上のフロッピーケース/机の引き出し) を設定した。事後の情報としてスライドの内容を詳細に述べた文章の朗読をテープに録音、使用した。文章は 4 要素のうち 2 つについては誤導情報を、残り 2 つについては統制情報 (上位の統制語) を含むよう作成された。また見え透いた誤導情報として、机の上のコーラの缶を烏龍茶として言及した。記憶テストは 4 要素についてそれぞれ 1 問の手がかり再生質問に加えて 8 つのダミーの手がかり再生質問からなる計 12 問の質問紙であった。
 手続き：記憶テストのためによく見るようにとの教示の後 1 枚 5 秒の割合でスライドを提示した。その後記憶テストのためによく聞くようにとの教示に続いて事後情報のテープを流した。2 日後スライドの記憶にもとづいて答えるようにとの教示の後記憶テストを行なった。

このとき反対の論理の教示あり条件の被験者はテープの中には質問の正解となる情報は一切含まれていないという主旨の教示も与えられた。

【結果と考察】

再生反応は誤導・正解・推測のいずれかとして記録した。反対の論理の教示の有無を被験者間変数、要素のタイプ (誤導/統制) を被験者内変数として 2x2 の分散分析を各反応について行なった。

表 1. 各条件における各再生反応の割合

条件	再生反応		
	誤導	正解	推測
教示あり			
誤導要素	.24	.38	.18
統制要素	.12	.48	.22
教示なし			
誤導要素	.31	.39	.17
統制要素	.10	.49	.20

注) 無回答の被験者がいるため合計が 1 にならない。

いずれの反応においても教示の有無による有意差は見られなかった [F (1, 94) = 0.67, n. s. ; F (1, 94) = 0.05, n. s. ; F (1, 94) = 0.26, n. s.]。正解反応において要素のタイプによる有意傾向があり [F (1, 94) = 3.92, p < .10]、誤導反応において要素タイプによる有意差があった [F (1, 94) = 19.79, p < .001]。交互作用は一切見られなかった。

また、spill-over effect の影響を見るために、前回の実験結果とあわせて 2x2x2 (見え透いた誤導有無・教示有無・要素タイプ) の分散分析を行なった。やはりいずれの反応においても教示の有無による有意差は見られなかった [F (1, 188) = 1.73, n. s. ; F (1, 188) = 0.41, n. s. ; F (1, 188) = 2.13, n. s.]。正解反応についてのみ見え透いた誤導の有無による有意差があった [F (1, 188) = 5.72, p < .05] (spill-over effect)。ただし単純・単純主効果では教示あり誤導要素のときに有意傾向があるのみである [F (1, 376) = 2.77, p < .10]。また誤導反応全体では見え透いた誤導有無による有意差はなかったけれども教示あり誤導要素のときにのみ単純・単純主効果の有意傾向があった [F (1, 376) = 2.84, p < .10]。誤導・正解反応について要素タイプによる有意差があった [F (1, 188) = 44.94, p < .001 ; F (1, 188) = 9.18, p < .005]。交互作用は一切見られなかった。

前回の実験で教示の効果が見られなかったことから事後誤導情報効果の原因としては変容説または情報源誤帰属説が妥当である可能性が示されていた。今回もまた教示の効果は見られず、また spill-over effect が教示あり誤導要素のときによりはっきりあらわれる傾向があることから、二説のうちでは情報源誤帰属説の方がより妥当性が高いことが示唆された。

(おおぬまなつこ・はこだゆうじ・おおうえわたる)

目撃記憶における情動的ストレスの効果

○大上渉 箱田裕司 大沼夏子
 (九州大学大学院文学研究科) (九州大学文学部) (九州大学大学院文学研究科)
 キーワード: 目撃証言、情動的ストレス、有効視野

はじめに

事件や事故の目撃といった状況は、目撃者に強い情動的ストレスを喚起させる。このような状況下では、中心的人物、事物といった中心情報には注意が向けられ正確に記憶されるが、場面の背景といった周辺情報の記憶は低下するということが明らかにされている。しかし、こうした現象がなぜ起こるのかという問題は解決されていない。

本研究では、この問題に関する新たなアプローチとして有効視野の概念を取り入れた。情動的ストレスの増大に伴い、有効視野が狭まり、場面の周辺に存在する事物は始めから認知されていないと考えることができる。そこで、情動ビデオと統制ビデオの2種類を用意し、その上映中に画面の4隅のいずれかに呈示される数字を検出できるかどうかを調べる。2条件間の検出数に差があれば、有効視野が狭まった結果であると考えられる。今回は情動的ストレスが及ぼす有効視野への効果について検討する。

方法

被験者 九州大学の学生136人(実験群96名+心拍数測定群40名)

デザイン ビデオ種類(2)×数字呈示フェイズ(3)×数字呈示個所(4)×数字種類(4)の4要因。全て被験者間要因である。

材料

刺激ビデオ 映画「仁義なき野望」(東映)の一部をパソコン(PowerMacintosh8500/150)に取り込み、動画処理ソフト(Adobe Premiere4.0J)で編集し刺激ビデオを作成した。刺激ビデオは情動的場面を含んだ「情動ビデオ」と含まない「統制ビデオ」の2種類を作成した。ビデオは3フェイズ(各13秒間)からなる。フェイズ2以外はカラーバーが呈示される。フェイズ2は、情動ビデオでは、男が車に轢かれ、負傷する場面、統制ビデオでは、車が走り去っていく場面が挿入されている。上映中、数字(視覚1.2°)は3フェイズのいずれかに呈示され、画面の4隅のいずれかに500msec(画面中央から視覚6.7°の位置)呈示される。両ビデオの数字呈示の時間的位置は統制している。数字はKinney, Marsetta and Showman(1966)より誤認されにくい4種類(1,3,4,7)を用いている。

気分チェックリスト 被験者の情動的ストレスを心理的側面から評価する為に UWIST 気分形容詞チェックリスト(Matthews, Jones & Chamberlain, 1990)の日本語版(石田・箱田, 1992)を用いた。これは緊張覚醒度やエネルギー覚醒度を測定し、その時の気分や感情を測定するものである。

心拍計 実験中に喚起される情動的ストレスを生理的側面から評価する為に、POLAR 社製バンテージ XLnew を使用し、5秒間隔で心拍数を測定した。

手続き

実験群の被験者は気分チェックリスト回答後、顎上で頭部を固定し刺激画面から2m離れた位置で刺激を観察した。観察後、数字に気付いたか報告させた。報告後、再度、気分チェックリストを記入させて実験を終了した。心拍数測定群の被験者は発信器を胸部に装着し、心拍数を測定した。以下の手続は実験群と同様であるが、心拍数以外のデータは分析に用いなかった。

結果と考察

数字検出 数字の検出状況を表1に示す。情動、統制各条件について、数字種類、数字呈示個所とフェイズの χ^2 検定を行った。結果、いずれにおいても数字検出数に有意差は見られなかった。次にフィッシャーの直接法を用いて、ビデオ種類とフェイズ間の検定を行った。結果、フェイズ2で情動条件と統制条件間に有意傾向($p < .10$)があることが明らかになった。情動的ストレスにより有効視野が狭まったことを示唆している。

心理的指標 緊張覚醒度とエネルギー覚醒度、それぞれの評定平均値を算出後(図1, 図2)、気分チェックリスト記入時期(2)×ビデオ種類(2)の2要因分散分析を行った。結果、緊張覚醒度は、情動条件でチェックリスト記入前と記入後に有意差($F(1, 94) = 4.57, p < .05$)があり、エネルギー覚醒度も、情動条件でチェックリスト記入前と記入後に有意差($F(1, 94) = 5.68, p < .05$)があった。情動ビデオは緊張覚醒度のみならず、覚醒度全般を有意に亢進させる効果があると考えられる。

生理的指標 ビデオ種類による心拍数の変化については、経過時間の主効果のみが有意であり($F(7, 266) = 12.23, p < .001$)、両条件とも、他に有意な効果は得られなかった。

情動ビデオのフェイズ2で画面周辺に呈示される数字に気づきにくいことから、喚起した情動的ストレスが有効視野を狭めたと考えられる。しかし、その情動的ストレスは心理的指標では、明確な差を確認できたものの、生理的指標では確認できなかった。

表1 各セルにおける数字検出成績

フィルム種類	情動ビデオ				統制ビデオ								
	I	II	III	I	II	III							
呈示フェイズ													
呈示位置	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
呈示数字	1	○	○	×	×	○	○	×	×	○	○	×	×
	3	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
	4	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○
	7	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○
検出数	9				5				14				

*呈示位置のA、B、C、Dはそれぞれ左上、右上、左下、右下を示している。

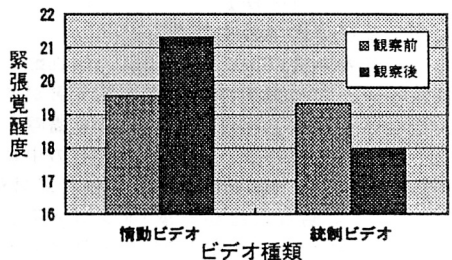


図1 各ビデオにおける緊張覚醒度

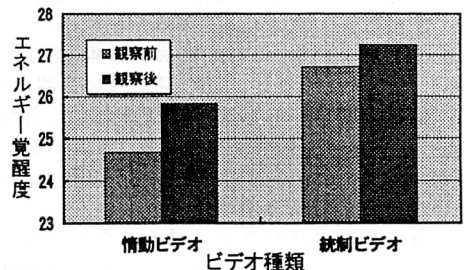


図2 各ビデオにおけるエネルギー覚醒度
 (おおうえわたる・はこだゆうじ・おおぬまなつこ)

二次元ディスプレイと三次元空間における知覚特性の比較

— 衝突時間の判断 —

○曾我 重司
(千葉大学)

増田 直衛
(慶應義塾大学)

【目的】光学機器の進歩やコンピュータグラフィックスの進歩にともない、実際の物理的場面を「幾何光学的」に正確に簡便に再現することが可能になってきた。これによって航空機や自動車などの操作訓練にシミュレータが用いられ、コストや安全性などの面から実際の場面では実施できないような知覚特性・行動特性などをビデオディスプレイ上に提示したシミュレーション場面で検討することが行われることが多くなった。このような試みが多くなるにともない、実際場面とシミュレーション場面の知覚特性についての比較検討が必要とされる。

自動車による交通場面のシミュレーションにおいても様々な変数について検討されている。自車の速度、先行車または前方の障害物との距離および先行車の速度、対向車との距離および速度、カーブの曲がり具合などである。さらに、これらに加えて衝突時間の判断も重要な問題となっている。

衝突時間の実験室的な研究としては、たとえば、Schiff and Detwiler(1979)や Kebeck and Landwehr(1992)などにおいては、対象が観察者に向かって動いてくる、観察者が対象に向かって動く、二つの対象が自分自身の前後で衝突するなどの条件が検討されており、一般に衝突時間判断は過小評価(物理的な衝突時間よりも早く衝突すると感じられる)を得ている。

我々の知覚特性を検討するさいに、様々な変数についての知覚特性の相互関係から統一的な理解を試みる事が重要であるが、ここでは衝突時間の判断に焦点をあてた検討結果を報告する。

【方法】<手続き>被験者は、自分に向かって(または遠ざかって)動く対象を、実際場面またはモニタ上で観察し、提示された対象が「自分自身」にぶつかるとする瞬間に手元の反応スイッチを押す(接近条件)か、遠方にある壁にぶつかるとする瞬間にスイッチを押す(後退条件)。このとき得られる衝突時間の判断値を推定されたTTC(time to collision)とする。

<被験者>千葉大学学部学生6名(男性3名、女性3名)

【結果】物理的TTC(運動対象が被験者に理論的に衝突するまでの時間)を横軸、推定されたTTCを縦軸にとり、運動方向・速度条件毎に図1から図4に結果を示す。

接近・後退の両方向要因群の結果の傾向をまとめると、接近、後退事態ともに推定されたTTCは、原点を通過する45°の直線よりも下にある。これは、物理的TTCよりも、推定されたTTCの方が小さいことを示し、推定された衝突時間は実際の衝突時間よりも早めに判断していることを意味する。

【考察】観察条件間の差を見ると、どの要因の組み合わせにおいても、2D単眼観察条件における衝突時間判断と、3D両眼観察条件と3D単眼観察条件の、二つの観察条件の傾向とは異なっている。ほとんどの要因の組み合わせで、衝突時間の過小評価が起きているが、2D単眼観察条件の高速事態では過大評価が見られる。また、過小評価が起きている場合でも、2D単眼観察条件では、他の二つの観察条件よりも過小評価の程度が小さい。ここで、実際の自動車をを用いて被験者に衝突時間を判断させた、Cavallo et al.(1986)の研究の結果をしてみると、衝突時間は過小評価され、物理的衝突時間が増大すると、その過小評価の程度が増加するという結果を得ている。この傾向は本実験の3D両眼、3D単眼の観察条件の結果と一致している。また、シミュレーション場面で対向車が接近する事態を用いて、衝突時間判断の実験を行った菅野(1993)は、過大評価傾向を示す結果を得ており、本実験の2D単眼高速条件で、過大評価傾向が起きている結果と一致する。

以上のように、衝突時間の判断という限られた知覚特性においてすら、シミュレーション場面と現実場面との傾向は異なることが明らかになった。したがって、今後、さらに他の知覚特性およびそれらの相互作用について、シミュレーション場面と現実場面との相違を体系的に明らかにしていくことが重要である。

(そがしげじ ますだなお)

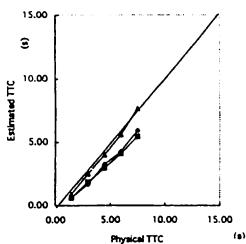


図1 接近・高速条件

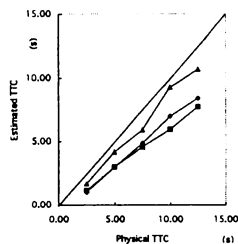


図2 接近・低速条件

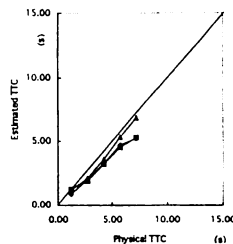


図3 後退・高速条件

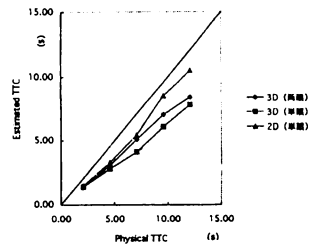


図4 後退・低速条件

事例問題による職務状況への対応の把握

○片岡 大輔 外島 裕

(株)日本能率協会マネジメントセンター 日本大学商学部)

キーワード：職務状況・事例問題

【はじめに】

企業の採用・昇進試験においては、紙筆式による能力テストに加え、実際の職務の場面を想定したさまざまな手法を用いて、対象者を選抜しようとしている。

その主なものにアセスメントセンター方式や状況面接がある。アセスメントセンター方式は、管理職の職務をシミュレートした状況演習課題（集団討議・インバケット・個人発表など）を実施し、管理職としての適性を評価する。状況面接は実際の仕事場面を想定した質問を提示し、どのように行動するかを問う。

どちらの方法も実際の職務をもとにして課題が作成されている。職務状況への対応の適切さを測定しているといえる。また、内容的な妥当性が高く、試験の結果と実際の職務遂行との関連も示されている。しかし、有効な方法である反面、実施にあたってのコストが大きい。

今回の報告では、職務状況を想定した事例問題を提示する紙筆式の検査を構成し、対象者の職務遂行を把握することを試みる。

調査1. 調査用紙の構成（適切な状況・項目の選定）

【方法】

調査用紙：職務状況とその対応を事例問題の形式で記述した30の状況からなる調査用紙（片岡・外島：1996, 日本心理学会第60回大会）を用いた。この調査用紙の各事例は、300字程度の状況の説明と6種類の対応行動の項目から構成されている。

対象者：民間企業のマネージャークラス339人（平均年齢41.8歳・SD7.4）

手続き：対象者は、各状況の対応行動について「不適切である」～「適切である」の5段階で評価する。

得られた回答を用いて、以下の基準で状況と行動項目を選定する。（1）状況の選定 ①各状況において、評価に著しい偏りがない ②適切であるという評価を受けた項目がある （2）各対応行動の項目選定

①1つの状況に対しての対応行動項目に、不適切なものから適切なものまで適切さの水準が確保できる ②適切さの評価が対象者間で一致している

【結果】 状況として22を選定し、各状況について4つの対応行動項目を設定した。

試験として採点するために、各状況において、もっとも適切であると評価された項目1つを2点、比較的適切さの評価が高かった項目1つについて1点を配点とし、4つの選択肢のうちもっとも適切であると思うもの1つを選ばせる形式とした。「満点」は44点となった。

調査2. 実際の勤労者へ試行

【方法】

調査用紙：調査1で構成した全22状況からなる調査用紙を用いた。

対象者：A社営業職62人（平均年齢35.4・SD5.5）。職務遂行の基準として、各対象者の1年間の営業成績（売上金額）を得た。

手続き：対象者は調査用紙の各状況について、もっとも適切だと思う選択肢を1つ選択する。配点にしたがって集計した各対象者の得点と、基準となる営業成績と比較をおこなう。

【結果と考察】

全22状況に対する解答の平均点は34.8点、標準偏差は3.86点、四分位数はそれぞれ、 $Q1=33$ 、 $Q3=38$ であった。設定した満点に対し、平均で79%の「正解」率であった。

$Q1$ と $Q3$ の得点で対象者を上位群・下位群に設定し、売上金額の比較をおこなったものが表1である。調査の得点群による効果を分散分析したところ、得点の上位群と下位群との間に、売上金額で有意な差が認められた（ $F(1, 23) = 5.35$, $p < .05$ ）。また、この分散分析のモデルの寄与率（ R^2 乗値）は、0.189であった。したがって今回の調査用紙の得点が上位群か下位群かによって、売上金額の分散を約20%程度説明できたといえる。

今回構成を試みた事例問題を提示する紙筆式の検査は、職務状況への対応の適切さを問う形式のものであった。今回の結果は、この形式で職務遂行を把握できる可能性があることを示したと考える。

表1. 事例問題の上位群と下位群の売上金額（万円）の平均と標準偏差

	N	平均	標準偏差
上位群	14	7736	2313
下位群	11	5664	2150

（かたおか だいすけ、 としま ゆたか）

Demand-Control-Support モデルに関する検討 —職務満足度を用いて—

田中 美由紀
(早稲田大学 文学研究科)

キーワード：職務満足度・ソーシャルサポート・Demand-Control-Support モデル

はじめに

職場メンタルヘルス活動では、職務満足感にも焦点を当て、主観的健康感の増進を図ることの重要性が指摘されている。そこで、本研究では、職場ストレスア及びソーシャルサポートが、職務満足度に与える影響に関して検討することを目的とする。

研究 1

目的

職場ストレスアと職務満足度との関連を検討する。

方法

分析対象者 電線・通信ケーブルの製造を中心とする企業の従業員 715 名から回答が得られ(回収率=95.3%)、そのうち、回答の有効であった 688 名(平均年齢：36.5 歳、SD=12.25)を分析対象者とした。

調査用紙 職務満足度、職場ストレスア、ソーシャルサポート、及びフェイスシートから構成される調査用紙のうち、本研究では、職務満足度 1 尺度・4 項目(職場全体に対する満足度尺度)、職場ストレスア 2 尺度・18 項目(Job Content Questionnaire; Karasek, 1985 川上ら訳, 1995)、の合計 3 尺度・22 項目を使用した。

調査時期 1996 年 6 月下旬。

分析方法 各尺度得点の中央値により、職場ストレスア 2 尺度をそれぞれ高群・低群の 2 群ずつに分け、2×2 の 2 要因配置分散分析を用いて、各尺度の職務満足度に対する効果を検討した。

結果

図 1 より、交互作用は認められなかったものの、「仕事の要求度」「仕事のコントロール度」の主効果が認められた(それぞれ、 $F(3, 684)=14.98, p < .001$; $F(3, 684)=89.96, p < .001$)。

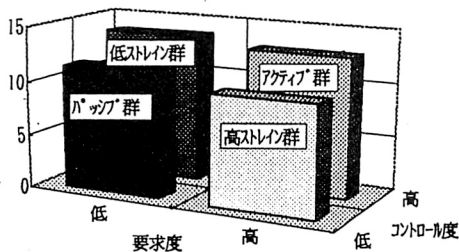


図1 職場ストレスアと職務満足度

研究 2

目的

職場ストレスア・ソーシャルサポートと職務満足度との関連を検討する。

方法

分析対象者及び、調査時期は研究 1 と同様であった。

調査用紙 研究 1 で使用した調査用紙のうち、職務満足度 1 尺度・4 項目、職場ストレスア 2 尺度・18 項目、ソーシャルサポート 1 尺度 8 項目(Job Content Questionnaire; Karasek, 1985 川上ら訳, 1995)、の合計 4 尺度・30 項目を使用した。

分析方法 研究 1 同様に、職場ストレスア 2 尺度・ソーシャルサポート 1 尺度を、高群・低群の 2 群ずつに分け、2×2×2 の 3 要因配置分散分析を用いて、各尺度の職務満足度に対する効果を検討した。

結果

図 2 より、交互作用は認められなかったものの、「仕事の要求度」「仕事のコントロール度」「ソーシャルサポート」の主効果が認められた(それぞれ、 $F(7, 680)=17.03, p < .001$; $F(7, 680)=61.27, p < .001$; $F(7, 680)=44.10, p < .001$)。

考察

仕事の要求度の低下、コントロール度の上昇及び、ソーシャルサポートの増加に伴い、職場全体に対する満足度が上昇することが明らかになった。

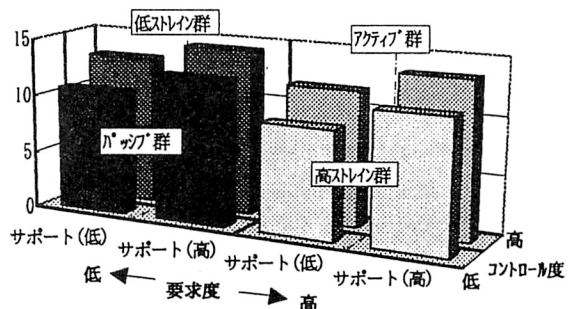


図2 職場ストレスア・サポートと職務満足度

(たなか みゆき)

日本におけるメンタリングの現状

関口 和代

(亜細亜大学大学院経営学研究科)

キャリア発達, 支援行動, 被保護者, メンター, メンタリング

I. はじめに

メンターという用語は、ギリシャ神話に登場するギリシャの英雄オデュッセウスの親友メンートルに由来し、指導、教育、援助、助言などの個人の成長を促す働きをする人をメンター(mentor:以下M)と呼ぶ。また、Mによって支援される個人を被保護者(protége:以下P)といい、そのMによる精神的あるいは物質的な支援行動をメンタリング(mentoring)という。

メンタリングによって提供される機能は、大きく次の2つに分けて考えることができ(Kram, 87)、第一は、スポンサーシップ、指導、保護、表出と可視性、挑戦的な仕事の提供といった、仕事のコツやスキル、昇進の準備など個人のキャリア発達を促進するような支援を提供するキャリア機能(career function)である。第二は、ロール・モデル、カウンセリング、受容と容認、友情といった、MとPの相互信頼や親密さを基盤として提供される心理社会的機能(psychosocial function)で

挑戦する上で重要な役割を果たすものとして認識されている。メンタリングは、一種の社会化の過程として、必要とされるスキル、態度や行動あるいは信頼を十分に獲得することのできる手段として認識されており(Erikson, 73; Schein, 78; Schein, 80; Whitely et al, 91)、個人のキャリア発達、特に初期から中期のキャリア段階にいる人々のキャリア発達に有効であると考えられている(Kotter, 85; Kanter, 93)。

II. 研究の概要

1. 目的 : 本研究の目的は、上記のようなメンタリングが、日本に存在するのか、またどのような形で、どのように機能しているのかを確認することである。

2. 方法 : 本研究は質問紙法により行った。主な質問内容は、a) MとPの有無 b) メンタリングの有無とその程度 c) キャリア、仕事、昇進に対する考え方 e) 仕事と生活全般に対する満足度 などである。

3. 期間 : 調査実施期間は、95年4月中旬から5月中旬にかけての約1ヶ月間である。

4. 対象 : 調査票は、職務経験3年以上の社会人を対象に1150部配布され、655部の有効回答を得た(回収率56.95%)。回答者の主な属性は、次の通りである。

性別 男性393名60.1%、女性261名39.8%(以下単位省略)
年齢(男) 30歳以下 89名(22.7) 31歳以上302名(77.3)
(女) 30歳以下171名(66.3) 31歳以上 87名(33.7)
職位(男) 一般職員33.2 主任・係長46.0 課長以上14.4
(女) 一般職員79.5 主任・係長19.1 課長以上 1.5

III. 結果の概要

1. メンタリング : 通常の職業生活において重要だと考えられる支援行動を36項目用意し、それらの支援行動を受けた程度を3点尺度で尋ね、メンタリング経験の有無と度合いを測定した。その支援行動を因子分析した結果は、Kramの分類を支持した。

男女間で10%以上の差があった支援行動(8項目)を見ると、女性は男性に比べ、特に「表出と可視性」や「挑戦的な仕事の提供」等のキャリア発達を促進するような項目で支援を受けていないことがわかる。また、必要としている支援行動も、女性は、より多くの仕事に関する知識、技術、情報を得ることや、やりがいのある

2. メンター : 一番影響を受けた人(=M)は、「直属の上司」(男52.9/女41.2)、「部署の先輩」(15.2/18.7)、「部署の上司」(9.8/6.5)の順である。さらに女性は、「同僚」(5.7)「学生時代の友人」(5.7)もあげており、上司や職場の上位者との垂直的な関係だけでなく、より水平的なメンタリング関係を形成しているとも考えられる。

3. 被保護者 : 回答者の約60%が、自身も支援行動を行っているとした。男性は、97.5%が男性のMを、86.5%が男性のPを持つが、女性の場合は、女性のMを持つ人は45.8%であるのに対し、女性のPを持つ人は81.2%であった。

IV. 考察

本調査の結果は、メンタリングが日本においても存在していることを示す(管理者を対象とした筆者のその後の調査においても確認)。今後の課題は、メンタリングがキャリア発達にどのように影響するかを明らかにし、個人のキャリア発達を促進する手法としてどのように活用し得るか、またそれを人材育成の手法として利用できるかどうかを検討することである。

(せきぐち・かずよ)

秘書におけるストレスとソーシャル・サポート 一予備的検討一

○福岡 欣治

内山 伊知郎

(同志社大学文学研究科)

(同志社大学文学部)

キーワード：ソーシャル・サポート，職務ストレス，秘書，心理的苦痛，充実感

【序論】

ソーシャル・サポートの概念は、生活上のストレスを緩和する対人的要因として研究が進められてきた。職場でのストレスの問題にも従来から適用されているが、わが国での実証的な研究の数はそれほど多くはない(小野, 1993, 1995; 田中, 1992などを参照)。

本研究では、企業秘書におけるストレスとソーシャル・サポートの問題を取り上げ、心理的苦痛や充実感との関連性も併せて予備的な検討をおこなう。なお、わが国の企業秘書は概して職務上の自己決定をおこなう場面が少なく、自律性が低い職務でのソーシャル・サポートの問題に応用しうる領域であると思われる。

【方法】

被調査者 愛知県内に本社機能を有する一部上場企業計29社の秘書担当部門に勤務する正職員計69名(女性、平均年齢26.9歳)。また職務ストレスに関しては、同部門の責任者(25社25名)も被調査者とした。

尺度 (1)職務ストレス：渡辺(1986)、矢富(1991)などを参考に作成した25項目について、秘書には自分自身について、責任者には部下である秘書のそれを想定させ、それぞれ4件法で回答させた。

(2)ソーシャル・サポート：仕事の手伝い(实际的)、助言・情報提供(情動的)、愚痴を聞く・励ます(情緒的)の3つについて、部署の上司、先輩・同僚・後輩、担当上役、家族・親戚、プライベートな友人、が支えになってくれる程度を、各3件法で回答させた。

(3)心理的苦痛：鈴木他(1995)から抜粋した9項目。過去1週間での症状を4件法で回答させた。

(4)仕事の充実感：秘書職務における充実感。4件法。**実施方法** 事前の予備調査で協力可とした25社に調査員が直接訪問して秘書担当部門の責任者に面接し、あわせて秘書用の質問紙の配布した(他4社は質問紙のみ)。秘書用の質問紙は個別に直接郵送で回収した。

【結果と考察】

職務ストレスの特徴 各項目への秘書と責任者の回答を比較すると、秘書は「担当上役への気配り」「本来業務以外での仕事の中断」などに加え「仕事の将来性が感じられない」「指示内容の矛盾」などの評定も高く、責任者との矛盾が一部にみられた。仕事の量的な負担に関する評定は、秘書の場合には概して低い傾向

にあった。秘書による評定値の低かった5項目を除く20項目で因子分析をおこなったところ「情報と将来展望の乏しさ」「職務の些末性」「仕事の量的・質的負担」と解釈しうる3因子構造が示された。これらについて秘書と責任者の得点を比較したところ、「情報と将来展望の乏しさ」で秘書の評定値の方が有意に高かった($t(64)=2.11, p<.05$; ウェルチの方法による)。ソーシャル・サポートの特徴 サポート源(5)×サポート内容(3)で評定値を比較したところ、实际的、情動的、情緒的サポートのいずれも「部署の先輩・同僚・後輩」が高得点であったが、情動的側面では「部署の上司」も同様であり、また「担当上役」もある程度支えになっているようであった。情緒的側面では「家族・親戚」「プライベートな友人」も高得点であった。なお、低得点であった「家族・親戚」「友人」の実際の側面を除く計13変数で因子分析をおこなったところ、「上司+担当上役」「先輩・同僚・後輩」「家族・親戚+友人」の明瞭な3因子構造が見出された。

サポート，ストレス，心理的苦痛，充実感の関連性

サポートとストレスの各3因子および心理的苦痛、充実感の相関係数を算出したところ、Figure 1のような関連性が見出された。上司・上役のサポートは情報・展望の乏しさ、同僚のサポートは職務の些末性のストレスを主として和らげていること、職務ストレスは心理的苦痛をもたらすが、仕事の充実感には特に情報・展望の乏しさが強く関連していることが示唆された。

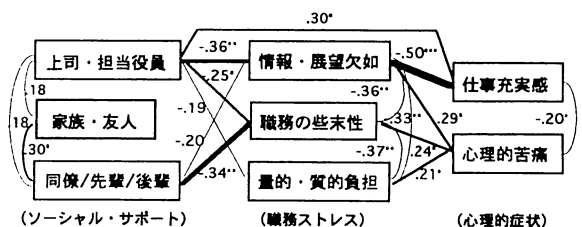


Figure 1 変数間の相関関係のパス図による表現

これらの結果は、秘書における情報や将来展望の乏しさの問題と、それを和らげるものとしての上司を中心とするサポート関係の重要性を示唆しているように思われる。(ふくおかよしはる, うちやまいちろう)

本稿は企業秘書研究会(代表: 静岡県立大学短期大学部中村健壽教授)により実施された調査の一部をまとめたものであり、同大学の平成7・8年度特別研究助成の補助を受けた。

サービス場面における実務能力

丹治 和典

(札幌国際大学短期大学部)

「実務能力」、「イベントとしてのサービス活動」、「出来事全体把握」、「実践共同体への参加」

1. 主題への接近

インターンシップの導入に見られる大学での実務教育への関心の中で、実務能力をどのように規定し、その開発・養成にどのように取り組めばよいのかが大きな課題となっている。ここでは、従来の知識の構造化としての能力観にかわる「状況的学習」に基づく実践学習過程を取り上げ、実務能力の同定とその育成に向けての手がかりを得ようとするものである。

特に、実務の対象として、サービス場面を取り上げるが、この場合、商業・金融業などを含めた第3次産業全般を指すサービス業の業務を想定し、対人サービスを前提としたケースに限定することとする。

2. イベントとしてのサービス活動

サービスという用語はかなり多義的に使用されている。ここでサービスとは、何らかの効用をもたらす活動で対価を支払って得る目的的な活動であり、サービスの提供主体と対象が人間である場合を指定する。いわゆる、対人サービスとしての機能的サービスとしてとらえる。

対人サービスは、提供者と顧客との相互作用として成立するが、提供者にとっては活動、顧客にとっては体験、客観的にはイベント（出来事）である。このイベントは、特定の時と場所で生起するが、その場面において、顧客はその場面に登場し、演ずる役者であって、その場面の外にいる観客ではない。つまり、顧客の存在そのものがイベントを構成する生産活動の一部となる。

イベントとしてのサービス活動は、サービス提供主体と顧客との複雑な相互作用をともなって完結する。

3. 出来事全体把握の視点－“サービスする”－

“サービスする”という表現は、動詞によって表される行為そのものが、行為の主体も行為の対象も言わばその中に融解してしまったような形で提示される。

このような形で提示された行為“サービスする”は〈行為〉というよりは〈過程〉と呼ぶ方がふさわしい。

“サービスする”サービス場面における実務を考察する場合には、サービス提供主体の人間の側面だけではなく、サービスの出来事全体の内的構造、すなわち、人、行為、世界全体を吟味する必要がある。

4. 社会的実践としての実務能力

(1) 関係論的相互依存性

実務能力は、ひとまとまりの抽象的な知識の断片を獲得し、それを後で別の文脈に移し当てはめるといったことではなく、実践の場を構成する人、行為、世界の関係が絶えず進化し、更新される中でつくりあげられていく。

実務能力は、個人という単位で創出されるのではなく、相互依存関係のなかに見出されるものとしてとらえるべきである。

(2) 学習する能力をもつ社会的身体

実務能力として、喋り方や挨拶に見られる立ち居振舞いなど行為にある種の持続的な傾向性を与える認知・判断・行為の全体的なマトリックスによって形成される身体的な知が重要となってくる。実践的な活動自体は、頭の中の認知過程ではなく、社会的行為者間のコミュニケーションのための表現手段であり、状況づけられたさまざまな瞬時の同調作用の集合体としてとらえなければならない。

5. 実践共同体への参加

実践共同体というのは、実践の場を構成する人、行為、世界のさまざまな関わりを指す。実務能力は、この実践共同体への参加を通してはじめて習得することが可能となる。すなわち、実務能力は、まずゆるやかな条件の下で、実際に仕事の過程に従事し業務を遂行するなかで獲得される。

また、状況における瞬時の判断や、状況の変化に対しての微調整をする即興的行為の重要性や一般的構造には還元できない創発的過程も実践共同体への参加によって体験される。

6. サービス場面における実務能力

“サービスする”という表現に見られるように、実際にはある主体がしていることでも、する主体としての人間の姿はなく、ただそのような事態に至ることが強調される場合がある。こうした社会文化的な背景の中で想定されるサービス場面における実務能力は、個々のサービス場面の物理的・社会的・抽象的空間をどのように意味づけるか、あるいはサービス提供者と顧客とのコミュニケーションをどのように組織化するかによって規定される。

育児困難を抱える母親の分析

○稲毛 教子 鈴木 芳子

(東京国際大学)

職業別

〔目的〕最近、子供に苛立ち、育児にストレスを持つ、即ち、育児困難を訴える母親が増加しつつある。本研究は母親の育児困難を引き起こす要因を、母親の職業別分析を中心にして検討していく。

〔調査方法〕就園前の子供(0~4才)を持つ母親(平均30.8才)を対象とし、質問紙法で調査(江東区内保健所と保育園)を行った。総数216枚のうち有効回答は191枚。専業主婦は165人、有職者は26人であった。

職業	育児困難	有	無	計
有	1人	7	2	26人
	2人	5	9	
	3人	1 (50%)	2 (50%)	
無	1人	28	39	165人
	2人	27	50	
	3人	3 (35%)	18 (65%)	
計		71人	120人	191人

〔結果〕育児困難を訴えた人は対象者(n=191)のうち1/2以上(37%)であった。育児困難につながる36項目で強いネガティブ反応を示した項目は殆どなく、若干のネガティブ反応を示した項目は、NO. 8育児で我慢している事が多い、NO. 16子供の事が理解できない、NO. 17他の子と比較してしまう、NO. 22自分の行動に賛同してほしくない、NO. 23感情の起伏が激しい、NO. 24思う通りに行かないと苛々する、NO. 25同じ事の繰り返しでつまらない、の7項目であった。このうちNO. 23、25を除く5項目に育児困難有り無しに差が認められ(0.1~5%以下の有意水準)、さらにグラフ(当日配布)にもあるように、全体的にみて、差が認められる項目が多いのがわかる。

因に、36項目を因子分析にかけたところ、次の因子が抽出された。第1因子・育児による閉塞感(NO. 1~9)、第2因子・夫の協力(NO. 10~15)、第3因子・育児に対する自信欠如(NO. 16~18)、第4因子・子供との関係稀薄(NO. 20~22)、第5因子・母親の未熟なパーソナリティ(NO. 23, 24)である。各因子ごとにみていくと、第1因子では、NO. 2~8に際立って差がみられた(0.1~10%以下の有意水準)。第2因子においても、NO. 10, 12~15に差がみられた(0.1~10%以下の有意水準)。第3因子では、NO. 16~18(0.1~5%以下の有意水準)、第4因子は、NO. 20(2%以下の有意水準)に差がみられた。第5因子・NO. 23, 24(1%以下の有意水準)とNO. 22自分の行動に賛同してほしくない(2%以下の有意水準)も母親の未熟なパーソナリティといえる項目だが、育児困難有り無しとの間に差が認められた。また、NO. 31子供の事を話せる人がいない(0.2%以下の有意水準)、NO. 35

子供の将来に不安抱く事があるにも差がでていた(10%以下の有意水準)。

育児困難を抱える母親の職業別分析では、有職者の方が専業主婦よりもポジティブ傾向が強い。とりわけ、第1因子・育児による閉塞感の多くに差がみられた(NO. 1~3, 7, 8: 2~5%以下の有意水準)。即ち、有職者は専業主婦よりも、NO. 1夫が羨ましいと思わず、NO. 3社会からの孤独感を持っていないといえる。これに続いて、NO. 14夫は私の話を聞いてくれない(2%以下の有意水準)、NO. 18うまく育てていると思えない(5%以下の有意水準)、NO. 30困っても誰にも相談しない(10%以下の有意水準)でも有職者と専業主婦の反応に差がみられた。

育児困難有りを子供数で分析すると、専業主婦は子供の数別では差がみられないのに対して、有職者は、子供1人と2人では差が大いに認められ、とりわけ、第1因子にその差が多くみられた。次の8項目(NO. 1, 2, 5, 6, 8, 9, 12, 24)では1人と2人の差が大きく、なかでも、NO. 1外で働く夫が羨ましいと思う、NO. 8育児で我慢している事が多い、NO. 24思う通りに行かないと苛々する、は顕著な差を示している。つまり、仕事と育児の両立の難しさがにじみ出ている。

〔結論〕有職者は育児困難を多く抱えているとみられがちであるが、一概にはいえないことがわかった。むしろ、専業主婦と比べた場合、有職者の方が育児困難を示す反応が全般的に低かった。しかし、子供1人と2人では、確かに育児困難度が異なり、2人では有職者は育児困難を増している。自由記述に書かれたように、保育時間や病児保育への対応が十分でないことからの負担が、育児で我慢している事が多い、思う通りに行かないで苛々し、夫が羨ましい、ということにつながる。それに対し、専業主婦は子供が1人も2人も同様に育児に我慢し、夫の協力が得られない、即ち、役割分担から来る育児に孤軍奮闘している様が垣間見られる。専業主婦で育児困難有りの母親は、無しの母親と比較して、多くの項目(5%項目)すなわち、NO. 2~8と16~18, 20, 22, 24, 31, 35に差が認められている(5%以下の有意水準)。

(いなげ のりこ すずき よしこ)

「運」への帰属と「運命」への帰属

齋藤 勇
(立正大学)

○荻野七重
(白梅学園短期大学)

序：Heider, F. にはじまる社会心理学の帰属過程の研究は、Weiner, B. によって達成動機に応用された。Weiner は成功、失敗の帰属を二つの次元から説明している。内的要因と外的要因を一つの次元、固定的要因と変動的要因を一つの次元として、この2×2の帰属マトリックスを提唱した。この帰属マトリックスは評価され、多くの追試や修正提案などがなされている。

本研究はWeinerの帰属研究をベースとしたうえで、現在キャンパスで学んでいる学生の具体的な課題について、その帰属過程を知ることが目的としている。筆者らは10年来、Weinerの帰属マトリックスをもとに、大学入試や恋愛など、現代の学生にとって最も重要な課題の帰属過程を調査してきているが、各調査ごとに、マトリックスによる帰属と同時に、オープンアンサーによる自由な記述や疑問などを書かせてきた。その結果、具体的な課題について、Weinerの4分割ではカバーしきれないところが見出された。そこで、これらの点を加味して、4分割にとらわれず、むしろ学生の自由記述や疑問から生じた箇所を重視し、具体的な課題の帰属をカテゴライズした。

その主な点は次の3点である。(1)特に恋愛の成功、失敗について、ラッキーな運と縁があったといわれる運命とを区別した。(2)特に恋愛において帰属先として性格が重要視されたので、これを一項目加えた。(3)特に就職試験の成功、失敗には面接試験の対応の成否が重視されるので、その項目を加えた。さ

らに検討した結果、帰属カテゴリーを、表に示すようなa~jの10のカテゴリーとした。また、本研究では、帰属対象の人物が変わることにより、帰属カテゴリーがどのように変化するかをみるために、帰属対象をA.自分、B.好きな友達、C.嫌いな人、の3種類にし、調査を行った。

方法：質問紙調査法により、大学のクラスで調査票を配布し、実施、回収した。被験者は男女大学生各100名である。調査内容はA~Cの帰属対象者が大学入試、恋愛、就職について成功、失敗したときの原因を推定し、トータルを100%として帰属配分を行わせた。

結果と考察：表1は各対象者別の調査結果である。この表からわかるように、帰属課程は課題項目が同一でも、帰属対象が変わると大きく変化することがわかる。このデータから次のような特徴がみられる。

- 1) 大学入試の成功は、自分の場合、運と努力、好きな友達の場合、努力と能力、嫌いな人の場合、運と能力に帰属、失敗は、自分の場合、努力不足と能力のなさ、好きな友達の場合、努力不足と運、嫌いな人の場合、努力不足と能力のなさに帰属する傾向が高い。
- 2) 恋愛の成功は、自分の場合、性格と運と運命、好きな友達の場合、性格と、嫌いな人の場合、運に帰属、失敗は自分の場合、性格、好きな友達の場合、性格と運、嫌いな人の場合、性格に帰属する傾向が高い。

3) 就職はまだ実際に就職活動をしていないので想像で答えさせたため、結果が不明確である。就職の成功は、自分の場合、能力と運、好きな友達の場合、能力、嫌いな人の場合、運に帰属、失敗の場合、自分の場合、能力、好きな友達の場合、能力と運、嫌いな人の場合、能力と性格に帰属する傾向が高い。

表1 大学入試、恋愛、就職の成功と失敗の原因(全体を100%としたときの帰属配分)

課題	成功/失敗	帰属対象	素性	才能	性格	出身校	努力	対応	課題	援助	運	運命
大学入試	成功	自分自身	1.2	14.2	7.3	7.1	15.8	4.9	6.7	8.5	29.0	3.4
		好きな友達	2.9	24.6	11.4	2.9	33.4	3.8	2.4	3.0	12.6	3.1
		嫌いな人	1.2	15.4	5.2	4.2	19.9	5.1	6.1	6.7	32.8	3.4
	失敗	自分自身	2.0	17.0	10.1	4.7	36.8	6.2	5.0	4.2	11.6	3.1
		好きな友達	0.4	12.4	7.0	3.9	22.9	10.5	11.0	3.2	23.6	5.1
		嫌いな人	1.9	28.2	16.3	1.4	21.2	5.5	3.6	2.6	13.2	6.2
恋愛	成功	自分自身	2.9	6.3	24.5	0.6	3.1	7.5	4.8	8.1	19.9	22.4
		好きな友達	3.5	14.6	41.1	0.1	5.4	5.9	4.4	4.2	9.6	11.0
		嫌いな人	5.1	6.9	15.7	0.7	4.9	9.5	8.0	9.0	30.1	9.8
	失敗	自分自身	5.6	9.8	34.3	1.5	6.9	9.8	6.5	2.5	9.6	13.6
		好きな友達	2.0	8.3	21.7	0.3	4.6	12.3	13.0	5.4	16.5	16.0
		嫌いな人	4.1	11.9	47.0	0.5	4.0	8.6	4.5	1.7	8.0	9.8
就職	成功	自分自身	4.3	21.0	9.5	8.7	7.1	11.8	2.8	8.7	23.0	3.3
		好きな友達	4.6	28.8	13.4	7.9	15.2	7.6	3.2	6.0	10.9	2.4
		嫌いな人	4.4	14.2	5.7	7.8	6.6	10.0	5.8	11.3	28.8	5.4
	失敗	自分自身	5.9	22.7	9.3	13.5	11.0	11.1	5.0	3.4	15.4	2.9
		好きな友達	2.3	15.7	8.3	7.8	9.5	12.5	7.3	6.8	23.9	6.1
		嫌いな人	2.6	26.9	21.6	3.9	10.9	8.4	4.1	2.6	13.6	5.6

異文化コミュニケーションの研究Ⅲ

○高橋 浩子
(白梅学園短期大学)

高橋 良博
(駒沢大学 文学部)

キーワード：異文化、異文化コミュニケーション、海外留学

〔目的〕

前報では、日本人学生の海外経験及び英語に関する意識調査を行い、異文化に関してどの様に感じているか、英語教育がどの様に学生のなかで位置づけられているかに関して報告した。海外渡航の時期（年齢、滞在日数）よりも本人の文化やコミュニケーションについての目的意識が重要であること、一方で、渡航経験のない学生は、英語が学習の対象でありコミュニケーションの手段とは考えにくい傾向があることが推察された。

今回の調査では、実際に長期留学している学生に調査を行い、留学経験が、日本に対する考え方や英語に関してどの様な考え方の変化をもたらすのかを明らかにすることをこころみだ。

〔方法〕調査期間 1996年8月中旬から9月中旬
調査対象 ハワイ大学ヒロ校留学中の日本人学生1年生から4年生までの27名（男性6名、女性21名、平均年齢26歳）

質問紙 前回の調査結果を踏まえ、ハワイの東西文化で使われている文化適応プログラムCulture General Assimilatorの参考に質問紙を作成した。質問文は、1日本に対する考え、2留学生生活、3文化、4差別5語学等に関することに分類され、自由記述とした。
手続き 日本人留学生の会に郵送依頼、心理学科に回収箱をもうけ回収、返送

〔結果〕27名の内留学経験者は9名、残り18名は今回が初めての留学であった。留学目的は、語学の習得が12名(44%)と最多であるが、そのうち8名は、今回が初めての留学である。留学して日本に対する思いや見方が変化した、と回答した人は、20名74%、変化無しは7名26%であった。自分が日本人と自覚した、愛国心が強くなった、日本文化の素晴らしさを認識した、等の回答がみられた。「日本がより好きになったか、より嫌いになったか」という質問では、「日本がより好きになった」という回答は、15名56%、「嫌いになった」は、5名19%、両方が2名7%、どちらでもないが3名11%であった。「好き」と答えた理由は、便利、食事がおいしい、物が日本の方が繊細でデザインも優れている、文化的にも、人間的にも素晴らしい、日本は住みやすい、などだった。「嫌い」と言う理由は、日本がいかにも視野が狭いと言うのがわかった、人の事や、外

見を気にし過ぎる、物価が高い、みんなが同じ、などであった。「留学生生活」の項目で海外で学ぶ意味についての質問に対する回答は、視野が広がる、客観視できるようになる、自分自身のアイデンティティを考える機会が持てる、文化を学べる、考えが柔軟になる、等の回答がみられた。またストレスを感じたことがあると回答した人は、25名92%で、理由は、主に勉強、語学に関することがほとんどでわずかに習慣によるという回答がみられた。「性格の変化」については、変化ありが15名55.5%、なしが11名40.7%であった。変化ありの回答では、自分の事は自分でするようになった、人の目を気にしなくなった、自分の考えを持てるようになった、等の精神面に関する記述であった。「留学生生活で怖かったこと」では、麻薬に関するものが3件、変質者に関するものが2件あった。「英語」に関して、考え方に変化ありという回答は、17名66%で、勉強の対象ではなく意志を伝える手段、英語は何か特別な物だと思っていたが普通の言葉だ、日本で習った文法は役にたつが会話は役に立たない、等があった。「留学後に差別について考えたことがありますか」という質問では、あると答えたのは、18人66.7%で、自分が差別される側になった、ハワイでは、白人が差別されている、などの回答がみられた。

〔考察〕留学の目的が英語の習得であるとあげているにも関わらず、留学の成果に関しては、自国に関する考え方、価値観の変化や精神的な成長についての回答が見られた。これらは海外生活で適応するための重要な段階の一つで、一般的には、肯定的な回答が得られるようである。差別に関して、自分が自らが差別される事を経験するのは初めてである人が多いこと、また言葉に関して、言葉の習得は生活の手段である事に気が付いたといった感想は、日本の地理的要因、教育的要因が大きいと考えられる。また、留学先で出会った地元の学生の年齢、背景、卒業後の予定が多様である事も、国内での留学生活よりも、自分自身や人生について考える機会をより多くしている要因の一つであろうとおもわれる。

(たかはしひろこ たかはしよしひろ)

生涯学習意識と行動に関する地域的考察

佐藤 怜

(秋田大学)

Key Word: 生涯学習、生涯学習のシステム化、地域住民の意識・行動、

1. 目的: 日本の教育の、これまでの学校教育中心の教育体系の改革を推進するための基本的課題として、「生涯学習社会」の実現に視点をあて、文部省では1988年に生涯学習局を設置し、また「我が国の文教施策」といういわゆる教育白書で、これまでの学校教育偏重から生涯学習体系への移行を指摘し各種生涯学習関連事業を展開しているが、地域においても、家庭教育、学校教育及び社会教育と、生涯発達にわたる学習とのシステム化への努力がなされつつある。秋田県でも文部省の委嘱を受け「地域における生涯大学システムに関する研究開発事業」(類型年齢)に取り組んで来たが、その一環として学習者の生涯学習への意向を把握し、研究開発の一助とすることを目的とした。

2. 方法・対象: 方法は郵送法による質問紙調査で、設問の柱として(1)生涯学習経験の内容・動機・今後の展望、(2)生涯学習の評価・活用、(3)広域的学習への意向等を設定した。対象は秋田県内に居住する成人男女994,141人(H.7)の母集団から、5,000人を無作為抽出(抽出誤差比率 $\varepsilon=1.4\%$)した。調査期間は平成7年11月下旬~12月上旬で、最終有効回答数は1,529人で回収率は30.6%($\varepsilon=2.6\%$)である。回答者の属性は①男62%・女38%、②若年層15%・中高年層42%・高齢層43%、③農林漁自営層20%・公務会社団体等就労層45%・主婦無職層35%となっている。なお、実施主体及び分析・検討は、前出の研究委員会が担当した。

3. 結果・考察: 前回(日本応用心理学第63回大会)は性別及び世代別の検討を行なったが、今回は農業経済地帯区分(都市部・農村部・山間部)と行政慣用地域区分(東北・中央・県南)をクロスして、当該69市町村を配分し、そこから各地域毎に無作為に6市町村を抽出し、調査対象数を人口比例配分したものに基いて地域別の検討(χ^2 -test)をする。(1)対象者の属性;性、年代では地域差はないが、職業では差が認められ、都市部にサラリーマン層、主婦層が、農村部に農林漁業層・自営層・勤務層が、山村部に農林漁業層・自営層・無職層が、それぞれ他の地域よりも多い。(2)生涯学習活動の現状;①学習活動者では、都市部62%・山村部57%・農村部50%で、都市部に多い。②学習内容では、都市部に美術・文芸・哲学宗教・法律・語学等の「教養型」、農村部は芸能・民俗・ボランティア

等の「娯楽活動型」、山村部は自然環境・健康医学・地域づくり・手芸・園芸・消費生活・家庭教育の「生活型」として特徴づけられる。③生涯学習活動の動機では、都市部は「仕事・教養・余暇活用品」、山村部は「健康・家庭・地域づくり型」、農村部は「中間・混合型」として指摘され、ライフスタイルの地域的特徴が反映している。④学習場所・契機では、総じて都市部は「個人(自宅・カルチャースクール)型」、農村および山村部は「公共(公民館・児童館・広域センター)型」として捉えられる。(3)今後の生涯学習;①新しく学習活動をする者は、都市部(46%)・農村部(41%)・山村部(31%)の順に上げられ、新規の学習希望はやや少ないが、しかしその内容は学習しないという否定的なものではなく、消極的な無回答が多いことから、今度の動機づけへの開拓が期待される。②新しい学習内容では、都市部では「教養・娯楽型」、農村部では「趣味・娯楽型」、山村部では「生活・消極型」として指摘される。③学習程度では、都市部は「専門型」、農村部は「基礎型」、山村部は「生活型」として特徴づけられる。④学習方法では、都市部は「個人型」、農村部は「個人・公共併存型」、山村部は「公共型」として捉えられる。⑤参加日等では、都市部は「平日型」、農村部は「日曜型」、山村部は「土曜型」として把握される。(4)学習活用・評価;①活用では、都市部は「個人・機会」的、農村および山村部は「仲間・消極」的として捉えられる。②評価では、都市及び農村部は「肯定・受容」的、山村部は「保留・消極」的である。(5)広域的学習;①参加経験では、都市部は「不参加」的、農村・山村部は「参加」的。②広域学習の必要性では、各地域とも必要性を認めているが、農村部・山村部ほど高い。(6)生涯学習の必要性;各地域とも必要性を認めており、都市部ほど強い傾向が見られる。

4. 要約・課題: 生涯学習に対し、3地域間に可成りの差異が認められ、地域状況や地域住民の生活態度が反映していることから、①地域の状況・関心や要望等に応じた学習プログラムの改善、②情報提供・学習相談等による生涯学習への動機づけや啓蒙、③公共機関・学習機関相互の連携・協力・広域化等の努力等により、地域の生涯学習のシステム化が必要とされる。

日本人の生活意識:(3)家庭のキーワード

高橋 敷(おさむ)

東海学園大学・経営学部

日本人生活意識**家庭**キーワード**自治体**

研究の意図

夫婦の軸から見て、また親と子それぞれの立場から見て<家庭(Home)>とは何なのか。日本人の生活の中にある意識を、世界との対比においてキーワードの形に集約しようと考えた。(1)自然環境(2)対人関係などに続いて、将来の地球市民としてのあり方、生き方のズレを分析しようとする調査研究の続編である。

研究方法とデータ

基本的には1994の(1)自然環境[別紙]に紹介の通りであるが、ほかドイツ、スペイン、イタリー・・・(以上最近10年直接)、南米ペルー(依頼)等のアンケート調査計350を加えた。なお日本での調査は東海学園、相愛両大学生、各地PTA会員、また大阪府下教育研究所共同研究による小・中学生アンケートなどを対象としている。世界とはいえ、今回は欧米文化圏に比重を置いた。とくにイメージの記述は重視している。

調査結果の概要

A. 家庭の概念(家庭とは何?)

<独立性>成人対象 上位5例

- 外・・・独自文化、家族を守る、生活レベルの自立、休暇やバカンス、行事・交際などユニークさ、(家庭は城、交際の単位など諺や成語多い)
- 日・・・持ち家(立派な家)、親の権威や甲斐性、仲よし団結、独自文化、マイホーム志向、

<独立を脅かすもの、何からの独立?> 3例

- 外・・・職場や子の学校、国や自治体、外敵、
- 日・・・近隣、イエ(古い意味の)、世の流行、

<何をするとところ?> 対象 外:ドイツ 小4 日:小5

- ド・・・お喋り団欒、個室責任、バカンス計画と実現手伝い分担、プライバシーと交際の本拠、
- 日・・・テレビ・ビデオなど、宿題、ごろごろできる個室の秘密、うるさい処(けど平気)、

B. 食事と対話・団欒 22選択肢 3択[親:子]

外最多・・・家族のニュース+ｽﾀｰ 日最多・・・取り調べ

C. 家庭交際 *近隣10数戸で最も親しい交際は?

(日本の場合 PTA) 1966人

交際内容	回数	割合	約	約
家族ぐるみ	18	2%	10	30%
訪問しあう	23	9%		
おすそわけ、荷物を預かる。	25	1%		
道で会えば計け	20	3%		
会えば挨拶する	8	5%		
付き合いはない	1	6%		

<いつも気にかかること> 40選択肢 3択 子有成人
外・・・誰を招くか、どんな話題、パーティ(服装・遊び)

日・・・盆暮葬祭、訪問の土産、費用、
D. 夫婦の軸 在日外国人の疑問(家庭トップ)
夫婦のデイトは何時しているのか?

E. 親子関係 子育て目的 外=自立人 日=同??

<子の側から・将来、親にして上げたいと思うこと>

評価		小5	中2
+	何でも買って上げる	34.4%M	22.8%M
+	老後世話してあげる	14.5 F	9.2
+	自由できる部屋造る(*)	4.0	4.0
-	あまり関わりたくない	0.2	1.5
-	考えたことがない	5.2	13.3
?	よい学校出てあげる	6.4	8.9
?	何もして貰わなくてよい人	23.1	29.7
?	幸せになって見せる	10.7	10.2

注)M男多 F女多 (*)外 1212人 1150人

F. 子離れ後、熟年家庭の元気は?(家族から見て)

- 外・・・(家族含め)交際、パーティー、個室文化館、外出とおしゃれ、ｽﾀｰと町のうるさ方、
- 日・・・孫、手伝い、寺社訪問、貯金、動植物、但し本人は外・新家庭計画、日・趣味で第二人生を

G. 四タイプに分けて家庭の型を自己評価(実数)

	核家族	核的大家族	大核的核家族	大家族
日本	69	18	33	10
ドイツ	11	3	24	3
南米	26	7	44	5

成人調査 日本思い込み強い(実際は中二項?)

まとめと今後の課題

家庭生活では西欧に比して、日本人の意識のズレが大きい。まず彼らが家庭を自治団体の一つと認知して、国や職場などと対抗していることがある。自治体以下の私事集団の私たちが、企業社会・タテマエ社会に頭が上がらなかったのも当然だろう。キャスターが取り調べであるように、全て自立からスタートする生活と、自立を究極の価値とした育ちの差は埋まらない。

家庭生活のより多くの面からの分析によって、基本概念を抽出し理解し合うことが必要であって、筋書き抜きの模倣、押し付け、混交などは地球市民のとりとてでない。【別紙資料あり】

動物のいる風景（2）

— 動物の存在が対人関係の認知に及ぼす影響 —

田之内厚三

（麻布大学環境保健学部）

目的：ある日常的な風景に動物を加えると、その風景の中の人物がより安全でリラックスしていると認知されるなど、動物の存在によって印象評価が大きく異なる傾向が見られる（田之内、1996）。では、人と人との間に動物を介在させると、二者関係の認知はどのように変化するのだろうか。動物の存在は社会的緩衝剤としての役割をもっていると考えられるので、ある場面に動物を加えると、二人の相互作用の全体的な雰囲気を変化させるはずである。そこで今回は、略画法による応答形式のテストを用いて、動物の存在が反応語の選択にどのような影響を与えるのかを検討する。

方法：提示する絵の風景にはPFスタディの2つのテスト場面を応用した。超自我阻害場面は、犬を連れて女性が男性に向かって「あなたは嘘つきよ」と非難している光景である。自我阻害場面は、すべて転んだ男性に向かって「怪我はありませんでしたか」と犬を連れて男性が尋ねている光景である。2つの場面共に異なっているのは、そこに動物が「いる・いない」の違いだけである。被験者は大学生400名（男247名、女153名）。彼らは4枚の絵の中の2枚を見て、相手の男性がどのように応答するかを、予備実験で用意した反応語の中からその場面にもっともふさわしいと思われるものを1つだけ選択するのである。

表1 反応語の割り振り

方向 反応	超自我阻害場面			自我阻害場面		
	外罰	内罰	無罰	外罰	内罰	無罰
障害優位	×	3	×	3	3	3
自己防御	9	3	5	3	3	3
要求固執	×	3	4	3	3	3

×は反応語の出現しないことを示している。この他、被験者には、①動物の存在が反応語の選択に影響したか、②犬は好きか、について2件法で質問した。

結果：被験者から得た反応語が表1に示した評点因子のどれに該当するかを集計した結果が表2である。これをクロス分析すると、超自我阻害場面では、 $\chi^2 =$

表2-a 超自我阻害場面

	動物がいる(%)	いない(%)	計
外-自	49(12.3)	63(15.8)	112(28.0)
内-障	62(15.5)	50(12.5)	112(28.0)
内-自	44(11.0)	26(6.5)	70(17.5)
内-要	3(0.8)	7(1.8)	10(2.5)
無-自	39(9.8)	49(12.3)	88(22.0)
無-要	3(0.8)	5(1.3)	8(2.0)
計	200(50.0)	200(50.0)	400(100)

10.90 (df=5)、 $P=0.053$ 、で有意な差は認められなかった。しかし、攻撃の方向だけで分析すると犬の効果が認められた ($\chi^2=6.77$, df=2, $P<0.05$)。また自己防御型の反応のみで攻撃の方向性との関連を検討しても有意差が見いだされた ($\chi^2=7.39$, df=2, $P<0.05$)。自我阻害場面では、9要因(方向・反応)×2要因(動物がいる・いない)のクロス検定を行ったところ、 $\chi^2=17.02$ (df=8)、 $P=0.030$ 、で有意差が見られた。また外罰・内罰・無罰の反応語との関連を分析しても犬の効果が認められた ($\chi^2=8.87$, df=2, $P<0.05$)。しかし、犬の存在が反応の型に及ぼす影響はまったく見られなかった ($\chi^2=1.07$, df=2, $P=0.59$)。

考察：誰か他の者から非難・詰問されて、超自我が阻害され欲求不満を招いた場合あるいは人為的・非人為的な障害によって直接に自我が阻害されて欲求不満を惹き起こした場合でも、相手が犬を連れてくるときには、その応答の仕方が攻撃の方向ではより内罰的になり、反応の型ではより自己防御的になる傾向が強い。この傾向は超自我阻害場面特に顕著であり、自己防御型の反応タイプと比較しても、動物がいない場合は外罰的な攻撃が目立つが、動物がいる場合は反対に内罰的な応答が増加している。つまり、動物の存在は、それを連れてくる他者や物あるいは状況への外罰的な攻撃度を減少させ、自分自身に攻撃を転換させる役割をもっていると考えられる。このことは、動物の存在が対人関係での社会的な緩衝剤になっていることを意味している。絵の中に動物を入れることによって被験者は、犬を連れてくるから友好的であろうと相手を「値踏み」することで攻撃を抑制し、ギスギスした二者関係の認知を和らげるのである。こうした心理機制が無意識的なものかは「犬の存在が気にならなかった」が79%もいたということから推測できる。

表2-b 自我阻害場面

	動物がいる(%)	いない(%)	計
外-障	11(2.8)	18(4.5)	29(7.3)
外-自	5(1.3)	15(3.8)	20(5.0)
外-要	1(0.3)	4(1.0)	5(1.3)
内-障	161(40.3)	149(37.3)	310(77.5)
内-自	5(1.3)	4(1.0)	9(2.3)
内-要	3(0.8)	0(0.0)	3(0.8)
無-障	6(1.5)	8(2.0)	14(3.5)
無-自	4(1.0)	0(0.0)	4(1.0)
無-要	4(1.0)	2(0.5)	6(1.5)
計	200(50.0)	200(50.0)	400(100)

(たのうちこうぞう)

災害時における人間行動（４）

早坂三郎

（芦屋大学・教育学部）

キーワード：災害 孤独死 過疎化 高齢化 ストレス

【目的】阪神・淡路大地震が発生してから2年半が経たした。神戸港の全面復旧や災害復興恒久住宅への入居募集及び土地区画整理事業と共に文化的事業も活性化してきている。しかし反面、十市十町の人口は震災前に比し6月1日現在で、約13万7千人減となっており、またインフラの整備や9割の回復をみせている。経済活動とは裏腹に県内の地場産業や中小企業には震災前の3割減の回復に止まる業種もある。① 東京商工リサーチ神戸支社の発表によれば、県内7月の企業生産は前年同月比62.9%増となり、震災特需の減少と景気の悪化が最悪の結果をもたらした。② 被災した分譲マンションの94.7%の再建・補修が決定（東京カネテイの調査）③されたように構造的復興は進んでも未だ自助努力だけでは対応しきれない状況も併存しており、仮設住宅事情に大きな格差をもたらしている。本論では、その仮設住宅での独居死、報道用語でいう「孤独死」について考察を試みるものである。

【方法】応急仮設住宅の過疎化・高齢化が進む中で、直接的調査が憚られるため、従来のように新聞各紙、各市広報や震災関連出版物などの読み取り調査を中心に、災害関連集会・各種報道、更には地元での調査により仮設住宅での動向を観察・記録・分析し、加えて兵庫県警察本部発表の「仮設住宅における独居死亡者数」④の資料をもとに検討した。

【結果と考察】自宅再建・災害復興公営住宅への転居が進み、ピーク時（1995.11）の46,637世帯から8月12日現在29,045世帯となり⑤、激震地からの転出率は3割程度でも他の市・町では空室が5割を超え、それらの扉には「市管理物件」の紙が貼られ、人気のない窓が過疎化と高齢化を象徴している。自治会は居住者減少及びリーダー不在などから運営困難となる悪循環に陥り、仮設住宅での復興状況の格差が一層拡大してきている。ある仮設住宅では不法駐車とゴミが散乱し、深夜まで若者の溜まり場となり、加えて最近の殺伐とした社会的事件が不安感と孤立感を助長している。公営住宅・能力開発事業等の行政的対応とこの隙間を埋める民間の生活支援マネジメントシステムが医師・弁護士・民生員・保健婦・ボランティア団体の連携を強化し活動を展開しているが、死後長期間放置される事態は回避されたものの孤独死は相次いでいる。その

孤独死のほとんどは病死（91.3%）であり、根底には「仮設住宅にいつまでも居たくない」との気持ちがある。更に仮設住宅での不自由さ・住環境・気象変化・偏食・とり残され感・火災等の事故、そして仕事や生活資金などの経済的問題等が不安・緊張・災害ストレスを増幅させ、結果的に鬱傾向・不眠・過敏症と共に持病の悪化をもたらし、防衛機制としてのアルコール依存などに陥り易くさせている。資料④によれば、孤独死の割合は自殺・事故死を含め男性が72%を占め、また年代は60代が突出し37.3%で、以下50代・70代・40代の順である。事故死者に特徴的傾向は見受けられないが、自殺者は40・60代に多く、男女比もほぼ同じであった。40・50代の人と孤独死は関係が薄いように思われたが、34%と高い割合になったのは既述の原因の他に高齢者ほどの関心が中年層に向けられなかったためと考えられる。月別の傾向としては、1995年2月下旬の入居開始直後に1人確認され、5月以降今日まで月平均6.3人の死亡者数となっている。この平均より多い月は、4月、7・8月、12・1・2月である。最近も料金未払いによる給水停止や希望地区災害復興住宅入居落選、そして仕事・経済面での限界感などによる自殺や孤独死が報じられたが、転出の目処が立たないところに生活苦と孤独感、併せて寒暖・大雨、そして年末年始・年度始め・お盆時に抱く将来への不安と寂しさもストレスになっていると考えられる。Selye, H. (1956)の説く警告反応期・抵抗期の頑張りの時期が過ぎ、既述の仮設住宅状況の変化が疲憊期へと進行させ、広汎な精神及び身体組織に影響を与え、悼ましい結果に繋がる可能性は居住者が減少しても逆に増加傾向となることに不思議はない。事実、その後の8月14日現在、死亡者数は169人を数えている。

可哀相だからという理由に起因しない人間の本性的行動として、高齢化・過疎化の中で自立を支援するボランティア活動と明日の高齢化社会への視点を踏まえた行政的対応の両面からのサポートが不可欠である。

そのためのキーワードとしては、量から質への対応策の転換、被災者とくに高齢者を一人にしない、講座・研修と生き甲斐のある生活への積極的支援、障害者・高齢者への特別配慮、地元での人間関係構築と地域社会の活性化等が考えられる。 はやさか さぶろう

「血液型性格学」は信頼できるか (第14報 I)

— B型者についての偏見史を尋ねる —

○ 大村 政 男 (文京女子大学) 浮 谷 秀 一 (富士短期大学)

偏見 血液型 黄禍論 A型人種優秀論 B型人種蔑視論

I 問題 G.W. オールポートは「偏見とは、実際の経験より以前に、あるいは実際の経験に基づかないで、ある人とか事物に対してもつ好きとか嫌いとかいう感情である」とまとめている。ABO式4群の血液型と人間の個性とは、その発見時から人種的偏見に翻弄されていた。A型人種優秀論とB型人種蔑視論がそれである。ここでは、わが国における血液型と個性に関する偏見(とくにB型に対する)を考察してみる。

II 血液型と個性に関する偏見 オールポートの構想に拠って主題を考察してみる。

(1) 歴史的観点 ヨーロッパに発した黄禍論(黄人禍)と、白色人種にA型が多く日本人や中国人にB型が多いという事実が結びつき、さらに、高等な猿類にA型が多く、その他の哺乳類にそれが少ないという事実がその裏打ちになっている。日本の医師でABO式の血液型にはじめて接した原来復(1916)は、『信濃毎日』紙上で「欧米人にB成分の少くして日本人に多き理由を以て直に人間の賢愚を論ずることは酷に失する嫌ひもあるが、性質を異にする点などは余程明瞭なことであらう」と述べている。

(2) 社会文化的観点 わが国に血液型性格判断が定着した要因の1つとして封建時代の四民制度があげられる。士はO型、農はA型、工はAB型、商はB型となる。意志強固な武士、辛抱強く自然と戦い年貢米を納める農民、創意工夫に富んでいる職人、そして、財貨の蓄積に執着する商人という定番の評価になってくる。よく時代劇に武士階級と組んで農民と職人をいじめる悪徳商人が登場してくる。商人・世渡り上手・B型というリンクが成り立っているのではないだろうか。

(3) 状況論点観点 『オール・ザット・血液型』で佐藤達哉と渡邊芳之(1966)は **WONDERLAND** を構築したが、それを通覧するとB型が他よりも偏見の対象になっていることがわかる。たとえば「血液型B型の歌」(作詞:おおくぼ良太., 発禁), マンガ『B型同盟』(高河ゆん), 川柳「あの人はB型だからで片付ける」(『毎日新聞』の「万能川柳」所載)などがそれである。広くゆきわたっているB型揶揄ムードは「血液型ステレオタイプ」(詫摩・松井., 1985)の代表的なものといえよう。大衆は血液型と個性についての歴史的観点も社会文化的観点も知らない。現代人の血液型



「サンデー毎日」91年7月14日号

と個性に関する偏見は、このような単純な状況から育成されていくと考えられる。

(4) 心理力学的観点

ストレスは他者を攻撃することによって偽の解消をすることがある。少数者であるB型(22.1%)やAB型(9.1%)はその標的になりやすい。「ちゃらんぼらんのB型」とか、「二重人格のAB

型」といわれている。もちろん、このような偏見を醸成させる個人の性格構造にも注目する必要がある。熱狂的な巨人ファンや極端なアンチ巨人の人たちにもテストで測れないような性格構造があるように思う。

(5) 定評的観点 B型やAB型に対する偏見の定評にはケース・スタディ的なムードがある。あるテレビ局が発表した「女性が嫌いな女性」の1位に葉月里緒菜(B型), 2位に河野景子(AB型), 6位に宮沢りえ(B型)と並んでいる。また、「男性が嫌いな女性」の3位に宮沢りえ, 6位に河野景子, 7位に葉月里緒菜の名前が見られる。22人の「嫌われ女性」の血液型のカイ自乗検定において、5%レベルで有意差はないが、B型の観察値は10人、期待値は4.9人である。日常よく知られている芸能タレントの行動と血液型とのリンクは、強い印象を一般の人びとに刻印していくのである。

III 神戸市須磨区の少年Aの血液型 257人の女子大生に少年Aの血液型を推定させたところ、Table 1のような結果を得ている。カイ自乗検定では1%以下の危険率でAB型だとするものが圧倒的に多い($\chi^2_0 = 404.8$)。これもAB型に対する偏見であろう。

Table 1 あの少年Aの血液型の推定 (単位:人)

	O型と思う	A型と思う	B型と思う	AB型と思う	合計
観察値	12	86	46	113	257
期待値	80.9	95.9	56.8	23.4	257.0

(注) 顔写真を見たもの79人においてもAB型が優位であった。

おおむらまさお うきやしゅういち

「血液型性格学」は信頼できるか (第14報 II)

— B型者についての認知 (実験と調査) —

○ 浮谷秀一 (富士短期大学)

大村政男 (文京女子大学)

血液型 B型 印象構成 血液型性格判断

I 問題 ABO式4群の血液型のうち、B型はテレビのバラエティ番組でもしばしば取り上げられている。ここではB型について多くの人がどのような認知を持っているかについて、実際にB型の美人学生を被験者にしてアプローチしていこうと思う。

II 実験 被験者・評定者・実験に用いたアンケートは次のとおりである。

(1) 被験者 右の写真のSRさん。日本大学文理学部心理学科の学生。B型。



(2) 評定者 日本大学文理学部教育学科の女子学生と川村学園女子大学文学部心理学科の学生が評定者となった。

(3) アンケート B型の特徴10項目を含む40項目のアンケートを使用した。ただし、どの項目がB型の特徴(能見正比古の『血液型で人間を知る本』1979による)であるかは明らかにされていない。

(4) 手続き 評定者は、血液型性格判断を信じている群(B群)と、信じていない群(F群)とに分けられる。そして、アンケートの40項目に回答するとき、SRさん本人が評定者の前に出場している場合(A条件)と、写真だけを見ている場合(P条件)とに分けられる。そこで評定者は、BA群・BP群・FA群・FP群の4群になる。なお、写真はアンケート用紙に鮮明にコピーされているので、A条件の場合も本人とともに写真も見ているのである。

アンケートの項目は次にあげたとおりである。このうち、1~5と21~25の10項目がB型の特徴である。ここではこの10項目だけについて報告をする。

III 結果 評定者4群の相互比較において、有意差が3つ以上現われている項目は、1平和的である、2おだてにのりやすい、5束縛をきらう、21マイペースな暮らしを望む — の4項目である。血液型性格判断を信じているものは、そうでないものよりも、B型の特徴に○を付けやすい傾向がある。B群がF群よりも全体的に強いことを見てもそれが理解できると思う。

SRさんは評定者にとっては初対面の人物であるのに、「私はB型です」といっただけで多くのB型の特徴を貼付されてしまうのはおどろきである。

Table 1 40項目 (略記)

特 徴
1 平和的である
2 おだてにのりやすい
3 アイデアに富む
4 意志が弱い
5 束縛をきらう
6 直観力に優れている
7 忍耐強い
8 自信に満ちている
9 ロマンチック
10 一言文句が多い
11 睡眠不足に弱い
12 物事を客観的に判断する
13 よく気がつく
14 要領がよい
15 りくつっぽい
16 食事はムード派
17 常識を大切にする
18 悲観的になりやすい
19 責任感が強い
20 理想が高い
21 マイペースな暮らしを望む
22 柔軟な考え方をする
23 気分のゆれが大きい
24 ざっくばらんである
25 人間関係の変化に敏感
26 向上心強く耐乏生活にも強い
27 信念強く一本気な生活をする
28 気分が安定している
29 ホットな人間味を求める
30 自己主張が強い
31 趣味を大切に生活
32 評価分析が得意である
33 冷静な面と気ままな面
34 にこやかでソフト
35 当事者よりも第三者的
36 堅実な暮らしを望む
37 ちみつな積み重ねが得意
38 気持ちを抑えることがよくある
39 サービス精神旺盛
40 協調・チームワークを重視

Table 2 特徴1 (平和的である)

	BA	BP	FA	FP
BA		∇**		
BP			>*	>**
FA				
FP				

Table 3 特徴2 (おだてにのりやすい)

	BA	BP	FA	FP
BA				∇*
BP				∇**
FA				∇**
FP				

Table 4 特徴5 (束縛をきらう)

	BA	BP	FA	FP
BA		>**	>**	>**
BP				
FA				
FP				

Table 5 特徴21 (マイペースな暮らしを望む)

	BA	BP	FA	FP
BA				>**
BP				>*
FA				>*
FP				

うきやしゅういち

おおむらまさお

女子学生の性の受容に関する研究

永末貴子

(駒沢大学大学院人文科学研究科)

青年期女子、女性性の受容、因子分析

女子青年の性同一性の形成が困難であるという指摘は過去の研究において多くなされているが(藤原 1981、河合 1967他)、価値観が多様化し、女性の社会進出もめざましく、男女の区別が不明瞭になりつつある現代社会においての女性は、従来の伝統的女性像のみにはとらわれない一方、取り入れられる新たな女性像も確立されているとはいえ、そのモデルを取り入れることが困難であるといえよう。このような中で現代の女子青年は「女性としての自分」をいかにして受け入れていくのであろうか。本研究では女性性の受容を性同一性の一概念として捉え、その同一性形成過程にあると思われる青年期女子の女性性受容の特徴を吟味していきたい。

目的

現代の女子青年が女性であるということをものように入れ込んでいるかについて、女子大学生を被験者として調査し、女性性の受容をあらわす尺度を作成する。

方法

(1) 項目の収集

駒沢大学の女子学生50名に、女性性の受容に関する反応文を求めた。その結果、182の文章が集められたが、これらの中から出現頻度が多く、表現が適切であることを基準とし、30文を抽出した。さらに同大学女子学生120名により、抽出された文が女性性の受容を適切に表現しているかという判定がおこなわれた(なお、判定はYES, NOの2件法による)。

(2) 因子分析

判定項目の特徴を抽出、分類するため、主因子法による因子分析をおこない、後にバリマックス法による直交回転をおこなった。

さらにその後、項目と尺度についての信頼性に関してクロンバックの α 信頼性係数を求めた。

結果と考察

因子分析により、5個の因子を得た。その結果を表1に記す。なお、各因子についてのクロンバックの α 信頼性係数は、それぞれ高い値が得られた。

各因子の命名は、次のようにおこなった。第1因子

は「外見、美」の因子、第2因子は「家庭生活」の因子、第3因子は「独立性-依存性」の因子、第4因子は「母性」の因子、第5因子は「性(別)の評価」の因子である。

各因子は、一見従来より女性像のステレオタイプとみなされていたものとほとんど一致するといえよう。しかし総合的に見た場合は、「母性」「家庭生活」の因子が、「外見、美」「依存性」と同次元に並び、女性性の受容に組み込まれているという大きな特徴があることが伺える。後者の因子が現在の女性としての自分をイメージしているとするならば、前者は女性全般的なイメージであり、両者にはおそらく距離感が生じていると思われるが、そのまま混在している。このように断片的な女性像がつなぎあわされて一つの尺度になったという結果は、現代女子学生において女性性の受容の混乱が生じているであろうことが推測される。

表1 因子分析結果(バリマックス回転後)

NO.	項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
19	私は服装や髪型、化粧などに気を使う。	.8276	.1140	-.1789	.1644	.2961
14	私はファッションやおしゃれを楽しみたい。	.7490	.3180	-.0120	-.1326	-.1455
5	私は美しくありたい、みせたいと思う。	.6083	.1725	.0303	.1001	.0472
22	私はかわいい、きれいと言われると嬉しい。	.6066	.0308	-.1866	.0098	-.2393
27	私は男性に恋愛感情を持つ。	.5626	.3006	.0711	.2625	-.0029
21	私は女性らしい体型が好きである。	.4899	.2864	-.1045	.1813	-.2634
9	私はやさしさや気配りが出来る。	.4615	.3998	.2267	.2267	-.0262
3	私は男性と交際したいと思う。	.4322	.3758	.0155	.2243	.0592
28	私は力では男性に負ける。	.4063	.1580	-.1850	-.0080	.1472
10	私は乱暴な言葉は使わない。	.3042	.1394	.0249	.0190	.0515
6	私は結婚したいと思う。	.3103	.7166	-.0007	.1478	-.0599
7	私は子供を育てたいと思う。	.1720	.7422	.0619	.1998	.0437
23	私は料理などの家事をこなしたいと思う。	.3926	.5174	.0471	.0265	-.0292
18	私は甘いものを食べたい。	.3676	.4271	-.1219	-.2206	.0633
12	私はかわいらしいものが好きである。	.3252	.4078	-.1674	.1488	-.1766
4	私は女性らしい格好が好きである。	.1957	.4042	-.1662	.2345	-.1068
29	私はウエディングドレスを着たい。	.3045	.3454	-.3330	.1581	-.3210
13	私は泣いても男性より許されると思う。	-.0140	-.1257	-.6617	-.0946	-.0956
11	私は男性中身の強さに甘えたい。	.0755	.1359	-.6246	-.0167	-.1239
25	私は力仕事は男性に任せようと思う。	.0156	-.1181	-.5222	-.1168	-.0431
26	私は妻という永久就職につきたい。	-.1897	.0082	-.5201	-.3344	-.0086
8	私は男性に守られたいと思う。	.2083	.1523	-.4927	.1366	-.0016
20	私は母親になりたいと思う。	-.0909	.1227	.0299	.6987	-.3608
30	私は同性本能がある。	.2450	.0550	-.0586	.6274	.0054
2	私は子供を産むことに関心がある。	.0140	.2559	.0924	.4930	-.1797
24	私は生まれ変わっても女性になりたい。	-.0081	-.0424	-.0593	.1515	-.6665
17	私は男性に生まれ変わらうとは思わない。	-.1303	-.0091	-.0557	-.0146	-.6101
1	私は女性に生まれてきてよかった。	.0721	.1665	-.1490	.1726	-.5638
15	私は夜遅くは一人でお出かけしない。	.1028	.1779	.0219	.1496	.0720
16	私は女としての立場をわきまえない。	.1389	.1416	-.1480	.1377	-.0501
CONTRIBUTION (%)		13.5193	9.5417	6.7878	6.0375	5.6304

(ながすえたかこ)

大学生の自己像の因子分析的研究

田中道弘

(常磐大学大学院人間科学研究科)

キーワード Self-esteem, Rosenberg, M., 自尊心, 向上心, 世間体

問題と目的】

近年、欧米で開発された心理学は、特に非欧米の文化は適応しにくいこと (Azuma, 1984) や、アメリカ合衆国で発展した社会心理学は、必ずしも universal なものではないこと (Kim&Yamaguchi, 1994)、あるいは欧米の自己観と東洋の自己観は質的に異なること (Larkus&Kitayama, 1991) などの指摘がされている。

確かに、翻訳に頼ってきた過去の研究が、我が国の心理学に発展をもたらしたことは言うまでもないが、研究成果を解釈するにあたっては、多くの誤解も生み出していることもまた否めない。特に、日本人の情緒的側面におけるプラス面が見逃されたり、また一方ではマイナス面だけが浮き彫りにされてしまう傾向を生んでいる。

山 (1995) らも、日本人の動機づけのメカニズムを説明する際に、ものごとくに失敗したときの自己批判や自己卑下の感情の源泉には、実は努力や向上心という前向きな動機よりも潜在的な感情があるかもしれないにもかかわらず、このことを必ずしも従来の研究では説明することになっていないことを示唆している。その意味では、我が国で最も広く知られている Self-esteem Scale の 1 つである Rosenberg の Scale によって測定された Self-esteem 得点が低い場合であっても、それは、現状に満足していないものの、将来は現状よりも良くしたい、良くなりたいたいという前向きな態度が内在している場合があることも否定できないのである。そこで、本研究では、“現状に満足せず、謙虚な気持ちで、何か目標を持って、それに向かって努力する気持ちや態度” といった、いわゆる「向上心」の概念を導入することにした。

一方、社会生活を営む上では、他者を意識することをなく除外できないものと考えた。特に、我が国において自己の研究をする場合は、なおさらのことと思われる。例えば、高田 (1993) の「自己概念の他者規定性」、Markus & Kitayama (1991) の「相互協調的自己観」の指摘などから、この考えを支持するものと考えられる。つまり、ここでは、“自分に対する他者からの評価や思惑を気にし、面見栄などを重要視する態度” といった、いわゆる世間体」の存在を意味しているものと考えられる。

以上のことから、本研究では「Self-esteem」「向上心」「世間体」といった視点から、大学生の自己像の因子構造を探求し、今後の研究の基礎とすることにした。

【方法】

Rosenberg の Self-esteem 項目 (星野訳) に加えて、新たに向上心、世間体を表すと思われる項目を設定し、合計 35 項目からなる質問紙を作成した。調査は 1995 年 12 月、2 つの大学の大学生 (短大生を含む) 386 名を対象 (有効回答数 359) として実施した。質問紙は、項目の順序による偏りを少しでも避けるため、乱数表を用いて順序を並び替えたものを 2 通り作成した。なお、逆転項目は採用しなかった。また、項目間の距離を保証するために系列範疇法を用いて尺度構成し、被験者の回答をその尺度に従って変換を施した上で因子分析を行なった。

【結果と考察】

因子分析の結果、4 因子解が最も単純構造を示したので、その結果を採用した。因子の解釈にあたっては、因子負荷量 0.4 以上のものを採用することにした。

第 1 因子は「自己不確実」と命名した。この因子には、自己確実なものとは不確実なものが交錯し、行動として動き出せないといった不安や戸惑いの態度を示したものが含まれていると考えられた。第 2 因子は「謙虚な向上心」と命名した。ここには、自分に向けられた態度 (表現する際には他者を意識するが) であり、謙虚な気持ちで、何か目標を持って努力する気持ちや態度が示されたものと考えられた。第 3 因子は「人並み意識」と名づけられたが、これには、人並みになりたい、評価されたいといった意識が示されたものであり、また、これは世間体に対する意識とも一脈通じるものと考えられる。第 4 因子は「自信」と命名したが、これには一見否定的と思われる項目も含まれているが、実は自分に自信があり、心に余裕があり、そのゆとりから派生した揺るがない自信や、自己信頼を示したものと考えられた。

以上、本研究によって見られた大学生の自己像は、「自己不確実」、「謙虚な向上心」、「人並み意識」、そして「自信」によって構成されると考えられた。しかし、この結果を確固なものし、今後の研究に発展させるためには、さらに面接調査などを通じて、継続した検討を重ねていかなければならない。

仏教におけるイメージの研究(12)

— 禅心理学的研究 (335) —

○ 高橋 良博
(駒沢大学 文学部)

高橋 浩子
(白梅学園短期大学)

キーワード：イメージ面接、イメージ、十牛図、東洋的行法

〔問題〕本研究は、観法などの東洋的行法から、イメージ療法などの臨床の場に応用可能な技法を探索する目的で資料の収集と整理、検討を行う一連のものである。その流れの中で前報に引続き「十牛図」を取り上げる。この「十牛図」とは、いわゆる「牧牛図」と呼ばれるものの一つであり、本邦では十牛図と言う場合、廓庵禪師による十牛図を示すことが多い。これは、臨済の禅の見性の過程を一般に分かりやすく布教する目的でつくられた図版とされる。

心理学の立場では、この「十牛図」が本来の自己を探索するプロセス、あるいは自己のアイデンティティを探索する過程を示す図として解釈され、特にユング派の人々が多く引用したりするものである。

一方、歴史上の記録では将軍、足利義満が公務の傍ら繰り返しこの十牛図を眺め、修禅の助けとするなど、一種の観相の対象としても用いられたようである。

そこで演者らは、このような一定の順序で、一定の図を繰り返し眺める事による心理的効果に関心を持ち、検討を試みた。特定の場面を順序どおりに見ていくという点は、イメージ療法の指定イメージ法に類似し、また、繰り返し同じ場면을眺めるという側面は、問題場面での一種のメンタル・リハーサルの効果を持つのではないかと予想した。そこで、日心61回大会報告の「仏教におけるイメージの研究10」では、十牛図に基づき、その宗教的な文字情報を除いた「創造性調査票」を作成し、大学生を被験者として、この十牛図の図版を元にした、ストーリーの作成課題を課した。

この結果、被験者によって多少の記述量あるいは、ストーリー展開の差が見られるものの、日常とは違った幻想的なストーリーが作成されることが多く、また空白の図版(第8図版)についてもかなり独特の反応が見られることがわかり、宗教的な頌や和歌を除いた基本的な図版のみでも、作成された物語の中に、被験者個人の内的な問題が投影される傾向が観察された。さらに、日心61回大会報告の「仏教におけるイメージの研究11」では、一連の図を見てストーリーを作成する作業の、繰り返しの効果が検討された。これは、前述の創造性調査票を用い、同じ図版で2週間おきに3回の物語作成の課題を大学生に課すものであったが、その結果、3回の物語作成のなかでストーリーのパターンと、調査前後に行われたYG性格検査によるいくつかの特性項目に変化が観察された。そこで、本報告では、主に一連の図を見、ストーリーを作成する事が、なぜYG上の、各特性に影響を与えるのかという点について考察を展開してみたい。

〔考察〕十牛図の配列は、前述したように廓庵禪師の製作したものに關しては、一連の図のパターンが決まっており、第一から第七図版までは、人物と牛、及び風景によって構成されるものであるが、これは、それ自体、なにがしかの情報を含む図になっている。ただし、この一連の図版の中の第八図版だけは空白の円図形が位置し、そして、その後再び、風景および人物が描かれている図が、第九・第十図版と位置している。この図によるストーリー作成の過程は、第一図版から第七図版までの流れと、第八図版によるストーリーの作成、また、その後第九図版、十図版の流れなどの間に多少の違いが予想された。被験者が図を見て、あるストーリーを作成する場合、当然の事ながら、各図版の中に含まれる情報と、その図を受け止めて想像を働かす、個人の内的な過程との関わりで、あるストーリーが生み出されると考えられる。

このような形は第一図版から、第七図版まではそのまま当てはまると思われるが、第8図版は空白の円図形のみが示されて、それまでのストーリー作成の流れに関わっていた図からの情報が極端に減少する状態となる。そこで、図を眺めてストーリーを作成する被験者は、一瞬、いまままでストーリー作成の背景に働いていた自己の内的な過程と向き合う体験を持つことになり、その体験が後の第九・第十図版によるストーリー作成の中で、また再び物語の流れの中に自然にまとめられ、統合されると予想される。

これは、廓庵禪師が、当時すでにあった様々な種類の「牧牛図」を参考に独自の「十牛図」の図の配列を考えたと、経験に基づいて意図的に構成した仕掛かと思われる。このように図の配列自体が、一定のストーリーを誘導しやすく考えられており、その、ストーリーの流れのワクの中で、少しだけワクを離れる体験が用意されているのであるが、一方ではそのワクを離れる体験自体が、架空のストーリーの流れの中に統合されるような図の配列になっている為に、わりあいと抵抗が少なく、またかなり薄められたソフトな形で、自己の内的な過程に目が向けられることになり、こうした体験の繰り返しだが、一方では自己への気づきへとつながり、他方では性格検査の一部の特性項目の変化をもたらすものになるのではないかと予想された。現時点では、この十牛図を基にした創造性調査票による物語作成課題への、被験者の反応の方向や強さについての十分な調査が必要と考えられるが、今後は禅の芸術療法の一つの可能性として検討してゆきたい。

(たかはし よしひろ、たかはし ひろこ)

カールロジャールにおけるサイコセラピー 概念の変化と対象の拡大

岸田 博

(東京農業大学)

〔本研究の目的〕

カールロジャールの業績の正確な理解と認識を願って、昨年から彼の業績を理解しようと試みているうちに、俗に言われている基本的態度三条件は世間に流布されている形で彼の理論の中核に長く止まっていなかったこと、治療が主になっているように理解されていても、それは年とともに異なっていく、その対象にも変化がきていることなどが分かってきた。その一端をここに報告し、諸賢の参考に供したい。

〔ロジャールの独自性〕

1930年代半ばといわれている放火癖の子どもの治療の失敗にその遠因を見る。それまで全幅の信頼を置いていた理論と技術になにか欠陥があるのではないかという気づきが、後年の臨床を基盤にするという彼の態度の出発点であったと思われる。更に、1940年12月のミネソタ大学での講演があげられる。

彼は、1940年に発表した論文の中で、方法論の基になる知見を述べている。それは後年、if then 理論、もしセラピストがひとつの雰囲気醸し出すことが出来れば、必ずクライアントに人格には変化が生じるというものである。それは具体的に、①情緒・感情の重視、②現在の重視、③治療関係は成長関係という形になって出ているのであり、その基盤に①豊かな体験が面接の中に含まれていること、②やりとりを必ずテープで録音すること、③入念で正確な逐語記録をとることがある。

この頃にこのようなことを臨床の場面で言い出したのは、彼ひとりであったろう。この時点で、彼の独自性の一端が見て取れるのである。

彼のセラピーの独自性は彼が相手になっている人を患者と呼ばずに来談者と呼んだことにも挙げることが出来る。それは相手の人を自分と同じひとりに人間と見ていたことを示しているからである。

〔概念の変化〕

1942年に出版されたCounseling and psychotherapyには、彼の基本的態度条件のひとつが紹介されている。受容である。1951年に出版されたClient Centered Therapyの中にその他の態度条件、一致、共感的理解が登場して、彼のセラピーへの姿勢が技法よりも態度に重点が移っていたことが分かる。それは

クライアントの自己実現を純粋に尊重する態度」にはっきりと示されている。

しかし、彼のこのような臨床への姿勢に批判の矢が多く出てくるようになり、それへの対処として1954年に出版したPsychotherapy and personality changeがある。

これら一連の研究結果が1956年の、アメリカ心理学会からの科学功労賞に輝く基になるのであるが、これから彼の記録から妥当性のある論述の展開が始まるのである。それは過程尺度の研究に認められるが、この頃から、彼の基本的な鍵概念に変化が始まるのである。即ち、受容が、無条件の肯定的な配慮へと変化している。その内容も、1942年のものから、温かさ、好きになること、尊敬、同情、受容などの態度を含んでいると分かるのである。これは、概念の内容が大きく広がっていることを示していよう。1948年にリップキンが提唱して彼も好んで使った一致は1957年の論文では純粹、統合、の概念も使われるようになり、その意味が「現実の体験がその自己意識によって正確に表現されるという意味である」ことが説明されている。一致も約10年後にはこのように概念の変化を来しているのである。同じ論文の中で「このような基本的な意味で、自己のありのままであるならば、それで十分なのである」とあることから、その変化が示唆されるのである。共感的理解についてはこの時期には概念に変化は認められない。

〔対象の拡大〕

1953年のSome directions and end points in therapyにおいて、彼は、表明された現象よりも本質へのアプローチを必須に考えている。このような観点を持っていた彼は、当然その対象者を特定の場所を訪れる人から、教育、ソーシャルワーク、看護、宗教、経営、家庭の主婦、軍隊の中間管理職へとその対象を拡大していったのである。これは、彼の1940年の信念を実践しただけであった。

これらは、「今日の前にいる人に最も効果的な接し方はどれか」という彼の終生の命題に繋がっているように感じる。

女子学生のボディーイメージとやせ志向の形成要因

佐藤秋子

(國學院大學栃木短期大學)

キーワード：女性 ボディーイメージ ダイエット

《問題と目的》 最近、ダイエットに興味・関心をもつ若い女性が多くみられる。なかでも、ボディーイメージに起因したやせ願望による過度のダイエットを行った結果、体重を急激に減少させ、無月経や各種の身体的変調をきたしている女性が増加している。ボディーイメージの歪みの原因は、成熟拒否や女性性拒否、精神的ストレスによる摂食障害など多様な検討がなされているが、最近では「やせている」ことに価値をみだし、それに魅力を感じている傾向がみられる。

そこで、今回の調査研究においては、若い女性はボディーイメージに関して、全体として、また、部分的にどのようなイメージをもっているのか、その実態を明らかにしたいと考えた。

《調査方法》 対象：栃木県的女子学生282名、平均年齢18.7歳、手続き：1997年1月から4月の期間に授業時に実施。部分的イメージに関しては、自分の身体部分20項目に対する満足度を、「とても不満である-1」から「とても満足である+4」の4件法により調査した。全体的イメージについては、シルエット法によるボディーイメージを、25項目のスタイルの印象について、「やせ-1」から「肥満+5」の5体型を使用し点数化した。

《調査結果と考察》

身長・体重の実際と理想のサイズの平均値を示したものが Table 1 である。理想身長は標準より高く、

理想体重についてはより少ない数値を示している。ま

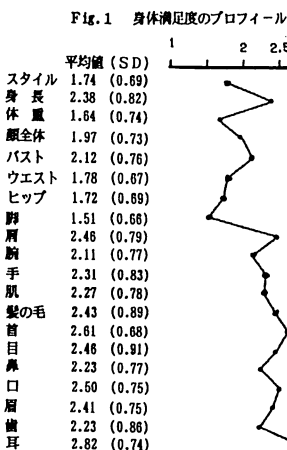


Table 1 身長・体重の測定値・理想値・差異値の平均値 (SD)

身長	計測値 (cm)	158.23 (4.53)
理想値	181.57 (3.82)	
差異値	3.79 (5.82)	
体重	計測値 (kg)	53.73 (7.31)
理想値	46.17 (4.93)	
差異値	6.99 (8.13)	
希望体重減量値 (kg)	5.30 (3.55)	

た、BMI (肥満判定法) からみると「やせ」が3割、「標準」5割強、「やや肥満から肥満」は1割弱である。自分の身体部分20項目の満足度の調査結果は Fig. 1 である。全体として不満傾向が強いが、特にスタイルと体重、ウエ

スト、ヒップ、脚の不満傾向が強い。さらに20項目間の相関係数を検討すると、スタイルと体重、ウエスト、ヒップ、脚 ($r=0.748 \sim r=0.310$) の相互間には相関が認められる。また、スタイル・体重・ウエスト・ヒップと減量 ($r=-0.542 \sim r=-0.315$) 間は逆相関の関係

Table 2 シルエットによるボディーイメージの種類

第I因子 (寄与率 15.65%)	因子負荷量
2.美しい体型は	0.7682
8.魅力的な体型は	0.7652
18.あなたの理想体型は	0.7009
22.将来社会人になった頃の体型は	0.5879
7.優美な体型は	0.5853
6.均整のとれた体型は	0.5155
21.異性が理想とする体型は	0.5099
3.女らしい体型は	0.4676
5.すなりとした体型は	0.3913
第II因子 (寄与率 7.10%)	因子負荷量
24.将来熟年期 (中年期) の頃の体は	0.6059
15.お母さんらしい体型は	0.5425
4.成熟した女性の体型は	0.4701
16.中年女性の体型は	0.3975
20.あなたの母親の体型は	0.3971
23.将来育児期のあなたの体型は	0.3586
1.健康的 (活動的) な体型は	0.3293
第III因子 (寄与率 7.07%)	因子負荷量
11.女優の体型は	-0.7295
10.アイドルの体型は	-0.7220
9.ファッションモデルの体型は	-0.4773
第IV因子 (寄与率 5.61%)	因子負荷量
13.大学生の体型は	-0.6563
12.高校生の体型は	-0.5595
14.OLの体型は	-0.5054
第V因子 (寄与率 4.13%)	因子負荷量
25.将来老人になった頃の体型は	-0.6553
17.老人の体型は	-0.6342

にある。シルエットによるボディーイメージの因子分析の結果、5因子が抽出された。(Table 2) 第I因子は、美しい、魅力的、理想体型などの因子で、「理想的」因子と命名した。第II因子は、熟年期のあなた、お母さんらしい、成熟したなどの因子で「成熟的」因子と命名した。第III因子は、女優、アイドル、モデルの因子で「憧れの」因子と命名した。第IV因子は、高校生、大学生、OLで「青年期的」因子と命名した。第V因子は老人のあなた、老人で「老年期的」因子と命名した。

《まとめ》 今回の調査研究では、ボディーイメージを決定づけている要因は、体重、ウエスト、ヒップ、脚といった後天的な自らの努力によって修正可能な部分に関してであり、それらに対する不満が高い、それがスタイル全体のイメージを決定づけていると考えられる。また、女子学生はボディーイメージに対して5つの因子 (理想的、成熟的、憧れの、青年期的、老年期的、) によって構成されていることが判明し、ボディーイメージに影響していることが予測された。

過度のダイエットはボディーイメージの歪に起因すると考えられるが、それは潜在的諸因子のなかの成熟的因子がその規定する要因ではないかと示唆された。このことを明らかにすることが次回の課題である。

さとうあきこ

要介護高齢者を介護する家族の負担感の検討

加藤 基子

(横浜市立大学看護短期大学部)

介護負担感、在宅療養コミットメント、介護状態、介護者年齢、在宅ケア施設サービス

目的：在宅療養をしている高齢者の QOL は家族の介護能力に大きく影響される。また家族の生活も高齢者の要介護状態の影響を大きく受ける。介護する過程で生じる負担感とは身内のケアによってどの程度被害をこうむっているかの介護者自身の受け止めの割合をさし、負担感へ影響する要因と、その軽減に関する検討がされている。また、介護者に与えるプラスの側面も把握する概念として、介護負担感をラザラスのストレス-コピング理論によるストレスの認知と介護者のコピングパターンとの検討がされている。本研究ではストレス-コピング理論をもとに介護負担感モデルを作成し、このモデルを検討した。

方法：1.対象：訪問看護ステーションを利用している高齢者と家族 126 名。2.変数の測定：1)在宅ケアアセスメント表 (HCAI) 得点の主成分分析から、「高齢者の生活状態」、「介護状態」、「在宅療養へのコミットメント」の3因子を抽出し、変数とした。2)介護負担感の測定は Cost Care Index (CCI) を用いた。CCI は介護負担感を5領域(社会的制約、心身の健康、介護意欲、不愉快、経済的負担)で評価する尺度である。3)介護者の年齢。4)社会資源の利用。社会資源のなかで CCI と関連が高かった在宅ケア施設サービスの利用を変数とした。施設サービス利用が3種類以上を1、1~2種類を2、利用がなしを3とした。3.モデルの設定：以上の変数を図1に組み入れた。要介護高齢者の状態と介護状態をストレスとし、その認知が介護負担感とした。また高齢者と介護者両者の在宅療養へのコミットメントの度は負担感の認知に先行して存在し、負担感に影響すると考えた。また在宅ケア施設サービスによるソーシャルサポートは介護状態、介護負担感に関連すると考えた。これに介護者の年齢を外変数とし、モデルにしたがって重回帰分析をした。

結果：表1にモデルの各変数の得点の平均、SDを示す。表2に介護負担感モデルにそった重回帰分析の結果を示す。図2はパスダイアグラムである。1.介護負担感のRは5%水準で有意であった。5変数のパス係数では介護状態と在宅ケア施設サービスが有意に関連した。2.在宅療養コミットメントと介護負担感は無相関で強い関連が認められたがパス係数は有意でなかった。在宅療養コミットメントを従属変数としたRは1%水準で有意であった。パス係数は在宅ケア施設サービス

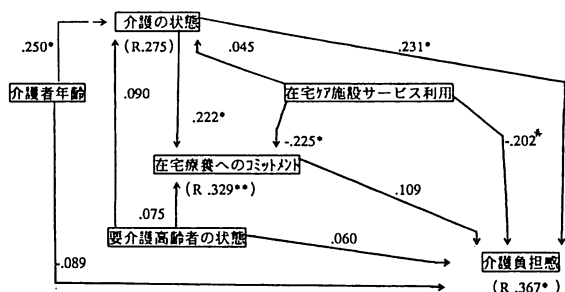
と介護状態が関連し、高齢者状態との関連は低かった。3.介護者の年齢は介護状態と有意に関連し、年齢と負担感は無の関連を示した。

考察：1.ストレスとしての高齢者状態と介護状態 1)要介護高齢者の状態は介護負担感への影響は低かった。本調査の対象者は寝たきり状態が41%、現疾患は脳血管障害44.4%、痴呆症15.1%で、要介護の程度は高いと思われる。2)介護状態のパスは直接効果としても、在宅療養コミットメントを経由しても認められた。2.負担感に影響する要因 1)在宅療養コミットメントの負担感へのパスは低かった。この変数は介護者の介護意思、介護関係、高齢者の在宅療養意思から評価した。有意なRからこの変数が介護状態と在宅ケア施設サービスによって説明されることが示されたが、在宅介護へのコミット度を反映しているか今後の検討が必要である。2)ソーシャルサポートとしての在宅ケア施設サービスは有意な直接効果があった。3.介護者の年齢は介護状態とは正の、負担感とは負の関連をした。年齢が若ければ介護状態は十分だが、負担感が高くなる傾向は介護者の統柄が反映していると考えられた。

表2 介護負担感への重回帰分析

従属変数	独立変数	重相関係数(r)	標準偏回帰係数(β)	相関係数(t)
介護状態	介護者年齢	.275	.250*	.245**
	要介護高齢者状態		.099	.038
	施設サービス		.054	.109
在宅療養コミットメント	介護状態	.329**	.222*	.201*
	要介護高齢者状態		.075	.147
	施設サービス利用数		-.225*	-.164
介護負担感	介護者年齢	.361*	-.089	-.069
	介護状態		.231*	.227*
	要介護高齢者状態		.060	.156
	在宅療養へのコミットメント		.109	.238**
	施設サービス利用数		-.202*	-.237*

図2 介護負担感のパスダイアグラム



かとう もとこ

某鍼灸治療院における患者の精神的ストレスに関する一考察

淺沼 惠

(淺沼医院東洋医学鍼灸治療室)

キーワード： 環境変化 ビジネス 診断情報 カウンセリング

1 [研究目的]

国際化社会を迎えることにより、グローバル化の進展は、共生のための政治・社会・経済の国際的融合をもたらした。しかし、一方では、環境の変化をもたらした社会的、経済的問題を抱えており、その内容は複雑多岐に渡っている。現代社会の推進者であり、生活者である「現代人の心」に焦点を当てるならば、急激な社会環境の変化と日常生活の変化への適応といった面から、我々はストレスを意識するとしなやかに関わらず躁鬱的な状態になっていると言えるのではなからうか。この多面的なストレスへの対応の失敗はネットワーク社会において社会的な問題となり、強いては政治社会、経済に悪影響を与えることとなり、その進展をも阻害する一因となる可能性がある。ストレスのない社会生活はあり得ないし、心因性が主たる要因であるため完全な治癒は難しく、ストレスとの調和といかに図るかが今後の課題となる。本報告においては、この観点から鍼灸治療院における患者の精神的ストレスへの対応について患者のケースから実践的提言をする。

2 [方法]

当院は夫婦の共同経営であり、院長は治療に専念している。筆者は患者の予備診断による治療の事前情報の提供と事後における継続的治療に関するカウンセリング担当が役割となっている。治療に際しては、事前に「鍼灸治療のための自己診断」を配付し、全19項目の記入と特に最近の症状及び心理状態の項目について直接確認する。院長は事前診断情報に基づいて問診後、脈診→舌診→爪の状態→皮膚→体の歪み→腹診→呼吸(声)の状態→胸の圧痛点など全身の状態を見てツボを選んでから治療を実施していく。具体的な治療としては、①カウンセリング②治療③カウンセリングを施し、再び③から①へ診断情報をフィードバックする。これは治療とカウンセリングを併用することによって治療効果を高める目的として実施している。

3 [結果]

鍼灸治療院としての特性から治療法として、各人が持つ自然治癒力を活性化させることに重点を置いている。自ずから精神的ストレスに対するカウンセリングが重要になってくる。この観点から、開業以来17年を経過しているが、隣接する内科医院の対症療法と日

常生活における健康食、生活の指導などについても参考として、開業5年以降から「鍼灸治療のための自己診断」を独自に作成し、同時に患者を含めた付添者にアンケート調査を実施してきた。自己診断、アンケート調査から、ストレス感やストレス関連疾患の変化については、開始時は日常生活による精神的ストレス患者が大部分を占めていたが、最近では会社(職場)の人間関係によるストレス、ハイテクノロジーの進出によるテクノストレス、痴呆性高齢者の介護者のストレスなどがある。グローバル化の影響による外国人患者と多種多様となっている。この結果、疾患と精神的ストレスとの関係については精神的ストレスからの疾患、疾患から精神的ストレスになるという相関関係が見られた。両者の関係は、相互関係作用によって良化し、悪化もする状況が理解できた。

4 [考察]

鍼灸治療は心身面からの自然治癒力を活性化する方法であり、医者、カウンセラー、患者、付添者、が一体感をもって協力することが治癒の前提条件となり、治療とカウンセリングを併用することによって高い効果を挙げることができた。しかしながら、ここで患者の疾患と精神的ストレスの変化と多様化に対する医者カウンセラーの適応力の問題が発生する。医者、カウンセラーに対しても、カウンセリング、行動療法、人間学的療法などの専門分析はもちろん、社会常識一般に対する識見が必携となる。当院においても院長は、西洋医学を含めた関連科学について研修を重ねており筆者もカウンセラーとして応用心理学の必要性から今回の研究発表を行って、我々自身の適応力(研鑽)を高めることが、患者の治療にもっとも必要と考える。

おわりに、報告をまとめるに当たり、淺沼孝明室長の協力に心から感謝する。

あさぬまめぐみ

女子短大生のストレスに関する研究（1）

—生活ストレスサーテストの作成—

○坂原 明

松浦光和

(聖カタリナ女子短期大学)

(仙台白百合女子大学人間学部)

Key Word: ストレスサー、ストレス、女子短大生

1. 問題と目的

坂原・松浦(1994)は、4年制大学と短期大学の学生のストレス構造の差異に注目して女子短期大学生用のストレスサーテスト(STJCS: stressor test for Junior College Students)を試作し、女子短大生のストレスサー因子として6因子(「対人関係」「学業」「家族関係」「自己評価」「学校評価」「将来の方針」)を抽出した。しかし、上記の研究では、調査対象校が2校と少なく地域(いづれも地方都市の短大)にも偏りが見られた。そこで本研究では前回の結果に鑑み、対象地域を拡大し、前回使用した質問項目についても再検討を加えながらSTJCSの改訂版を試作した。

II. 方法

(1) 調査用紙 STJCS(坂原・松浦,1994)試作に使用したプリ・テストを基に94の質問項目を作成した。

回答方法は3件法で、ストレスサーが存在するか否かによって「はい」、「?」、「いいえ」で行うようにした。

(2) 調査対象者 前回の調査(1994)に関わっていない6校の短大生計851人(1年生661人、2年生190人)。内訳は、都市部の短大は2校で計314人。地方の短大は4校で計537人であった。

(3) 調査時期と実施方法 調査は、1996年4月から1997年1月にかけてそれぞれの大学で集団で実施した。

III. 結果と考察

回答に対する配点は、3点(ストレスサーが有る場合)、2点(どちらともいえない場合)、1点(無い場合)である。

STJCSの改訂版を試作するために、ストレスサーの因子構造を検討し、下位尺度を構成する。この検討作業では調査結果に主成分分析と直交バリマックス回転を施行するが、その際不要項目を除外した。ここでいう不要項目とは、因子負荷量0.40未満の項目を指す。その結果、9因子(50項目)を得た(累積寄与率は53.3%)。

各因子は以下のように解釈し、同時に下位尺度の構成を行った。第1因子は、友人関係を中心とする対人関係の項目が主であるので「対人関係」因子(「友人関係との関係がうまくいかず悩むことがある」他12項目、寄与率12.8%)。第2因子は、就職を含む自分の将来についての項目が主であるので「将来の方針」因子(「将

来の目標が見つからないことを悩んでいる」他6項目、寄与率6.3%)。第3因子は、学業についての項目が主であるので「学業」因子(「どの科目も苦手である」他6項目、寄与率6.1%)。第4因子は、家族との関係についての項目が主であるので「家族関係」因子(「家族と意見の合わないことがとても気になっている」他6項目、寄与率5.8%)。第5因子は、自分の大学に対する評価が主であるので「学校評価」因子(「この学校の雰囲気には強い不満を感じる」他3項目、寄与率5.3%)。第6因子は、就職の可否に関する項目から成るので「就職」因子(「就職試験に受かるかどうか、とても気になる」他2項目、寄与率5.1%)。第7因子は、自己についての評価に関する項目から成るので「自己評価」因子(「人前であがりやすいことが気になっている」他2項目、4.6%)。第8因子は、異性関係に関する項目から成るので「異性関係」因子(「異性の友人のことでとても悩んでいる」他3項目、寄与率4.1%)。第9因子は、自己の健康状態に関する項目から成るので「健康」因子(「自分の健康状態がとても気になる」他1項目、寄与率3.3%)。

各因子の内的整合性を確認するためにCronbachの α 係数を算出した。それぞれの α 係数の値は第1因子から0.90,0.78,0.79,0.72,0.73,0.70,0.78,0.66,0.61であった。

ところで本研究では、前回の研究では抽出されなかった「就職」、「異性関係」、「健康」という新たな3因子が抽出された。これらの新因子が抽出された理由は、調査対象者の数・地域・学校の量的な増加に伴って、調査対象者の質がより多様になり、それが回答結果に質的变化をもたらしたものと推測される。

今後は調査対象者の数・地域・学校をさらに増やし、日本の全女子短期大学学生の約1%にあたる3000名規模の調査を行う予定である。また、そこから得られる結果に基づいて新STJCSを作成し、このテストの使用を推奨して女子短大生の健康に寄与したいと考えている。

坂原 明・松浦光和 1994 女子短大生用ストレスサーテストの作成(1) 第58回日本心理学会大会論文集 p205.

(さかはら あきら、まつうら みつかず)

スクールカウンセリングシステムの研究 I

— ネットワーク と インテーク —

福井 嗣 泰

(江戸川女子短期大学)

スクールカウンセリング ネットワーク インテーク

はじめに

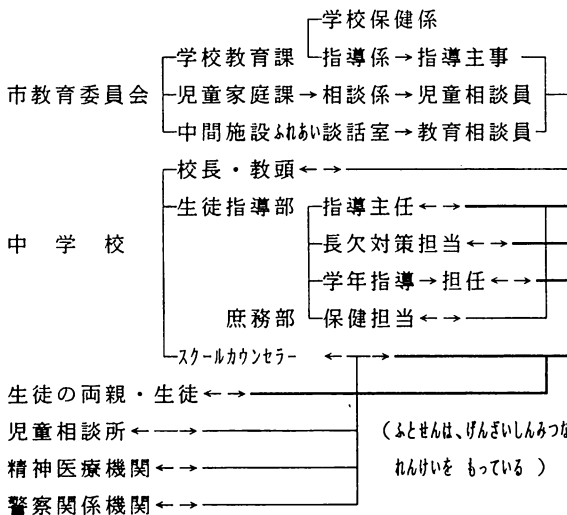
社会的問題となった「苛め」・「不登校」等の対策として、平成7年から一連の文部省の方針によるスクールカウンセラー（以後 SC）の教育現場への導入が進行している。併し、現場での組織的対応となると未整備で、より効果的な児童・生徒への援助システムが焦眉の問題となっている。今回の研究の命題は、中学校現場の体験を通し、より効率的、そして、早期対応型のコミュニティ スクールカウンセリングシステムを形成して行くことにある。

目的

1. 協力体制を組む地域資源ネットワークとしての関係各所・各員、その連係、ケースカンファレンスの方法、役割等の明確化を行うシステムの考案する。
2. クライアント（以後 CL）及び、その家族が経験する各所での繰り返しのインテークと一元化した措置の無さを取り除き、統合的・連係的に対応できるシステムを考案する。
3. 生徒・両親・教員の問題意識や知識の向上を計る教育システムを考案する。

方法

1. は、市教育委員会・学校（教頭・生徒指導主任・長欠対策担当）・SCの会合により、下記地域資源の統合システムを形成したい。



2. は、窓口となる、担任・長欠対策担当・SC・教育委員会関係者等と相談の上、下記インテーク表の

統一を計りたい。

- ①主訴・状態〔長欠、逸脱、苛め（原因：学業不振、人間関係のトラブル→教師 友人 両親 兄弟、精神障害、家族崩壊の危機、経済不安、転校→帰国子女 転校 新入学 クラス換え、クラブ活動、その他 _____）〕。社会的逸脱（暴力 めすみ=万引き 夜遊び 酒 タバコドラッグシナ）。服装（髪・染める ピース マニキュア ルーズソックス ミニスカート）。閉じこもり（自分の部屋家の外に出られる 友達と遊べる 学校に入れない）〕。
- ②CLの性格〔明るい 普通 暗い、真面目 普通 ルーズ、おおらか 普通 神経質、優しい 普通 粗暴、気分の変化激しい 普通 安定〕。
- ③適応〔できる 普通 出来ない〕。
- ④意欲〔ある 普通 なし〕。
- ⑤知的発達〔よい 普通 問題あり〕。
- ⑥身体発達〔よい 普通 問題あり〕。
- ⑦一日の状態〔タイムテーブル：起床 昼寝 就眠、身体不調帯、精神不調帯、不調と関係する状況、食事等〕。
- ⑧両親の身上〔氏名、年齢、職業、性格（複数回答：悲観的・うつ傾向・不安傾向・神経質・過敏・情緒不安定・社会性不足・自己中心的・無関心・過干渉・口うるさい・無口・命令的・怒り口調・感情的でゆっくり話せない・会話にならない・過去の事にこだわる・その他 _____・普通・問題がない）〕。
- ⑨家族構成〔兄姉弟妹・祖父・祖母の年齢職業、（家族関係：夫婦不仲・親子不仲・まじだい不仲、嫁姑不仲、その他不仲 原因 _____）〕。
- ⑩心理的アセスメント。
- ⑪育成歴。
- ⑫治療歴。
- ⑬飲んでいる薬物。
- ⑭守秘義務の伝達。
- ⑮対応と心理的治療の説明と同意

3. は、生徒指導主任を中心に下記の企画を検討してもらう。①生徒や親が相談窓口気軽に訪れることができる雰囲気づくりの講演の企画。②教員のカウンセリング基礎教育講習の企画。③担任によるクラス生徒の人間関係訓練指導講習の企画。

現在の進行状況

1. は、1997・9・29 教育委員会を中心に関係者が集合、枠組みと体制作を検討する事となった。
2. は、長欠対策担当、担任、SCによって今年度中にフォーム決定し、市の基準インテーク表としたい。
3. 教員の講習会7月から開始した。残る生徒と親は1998・3・末までに終了予定。 ふくいつや村

スポーツ選手の健康感に関する研究

○ 殿村由希

花沢成一

(日本大学文学研究科) (日本大学文理学部)

キーワード：スポーツ選手 健康感

【緒言】スポーツを科学として考えた場合、①健康スポーツ科学②教育スポーツ科学③競技スポーツ科学の3つに大別できる(白山, 1997)。例えば健康スポーツ科学の中では、心身症の予防・治療にも有効であると考えられる、つまり身体面への効果のほかに精神面への改善がなされるからである(白山, 1997)。すなわちスポーツを行うことによって、身体への運動刺激と共に精神面にはリラックス感を得られた状態であるといえよう。

競技スポーツ科学を考えた場合、一般にスポーツ選手は明るく快活で、忍耐強くどんな困難にも頑張りがきくイメージが、実際とは異なる(原・高橋, 1997)といった報告があるように、競技スポーツ選手にとってスポーツは、健康に対してかなりのリスクを負っている可能性が考えられる。

では実際のところ、幼少期からスポーツを継続し大会経験を持つ競技スポーツ選手の健康感はどうであろうか。今回はこの点に着目し調査を行った。

【目的】スポーツ選手(過去に大会出場経験を持ち、かつ現在もスポーツを継続している大学生)と、一般の大学生の間の健康感及びリラックス感の比較検討を行う。

【方法】①健康感尺度：心的健康を把握するために作成された尺度(相馬, 春木, 野呂, 1990)。全33項目4因子からなる項目中、以下に述べるリラクゼーション項目と重複する因子及び、スポーツ選手に対して不向きと判断した項目を削除し、25項目を採用した。

② Relaxation Inventory(Crist, Rickard, Prentice-Dunn & Barker, 1989)：リラクゼーション効果を測定するために開発された質問項目。全45項目中類似項目の統合、重複表現・難解表現の削除を行い、35項目を採用した。

以上の作業は、健康感、リラックス感に精通している者とともにを行い、計60項目の質問紙 Health Awareness Inventory (HAI) を作成した。回答形式は5件法とした。この質問紙を集合調査法により対象者自身に回答記入させた。

対象：NT大学学生200名(以下、スポーツ群)、N大学学生120名(以下、一般群)の計320名。平均年齢は

18.8歳(SD=0.96)、男性200名、女性120名であった。

調査期間：1997年5月23日～6月5日

【結果】健康感に関してはスポーツ群の平均が82.9点、一般群の平均では76.1点であった。t検定の結果、 $t(232.5)=4.47, P<.01$ であった。HAIでは得点が高いほど健康感が高くなる。従ってスポーツ群の方が健康感が高いと言える。項目別にも検定を行ったところ、健康感では14項目すべてでスポーツ群が得点が高く、有意差がみられた。リラックス感では9項目に有意な差がみられた。

【考察】健康感を項目別に見ると、最も得点の高い項目が「16,じっとしているのは嫌いなほうだ」の4.0点であり、また「19,家に一日中こもっていることが多い(反転項目)」でも得点が高く、スポーツ群の特性が示されている。一般群の最も得点の低い項目を見ると、「3,疲れやすいほうだ(反転項目)」であり、スポーツ群の高得点項目と対比すると基礎体力が低下している可能性があると考えられる。

リラックス項目では、9項目中4項目「28,緊張のために汗ばんでいる」「29,いつもより身体が熱い感じだ」「31,いつもより呼吸が速い」「38,心臓がいつもより速く打っている」(以上、反転項目)が一般群の方が得点が高かった。よって、やや一般群はリラックス感を得ていたと考えられる。

スポーツ群で全項目を通して最も得点が高かったのは「49,横になってくつろぎたい気分だ」であった。これはスポーツ群であることを考慮すると、疲労が蓄積している状態を表しているのではないかと推測することも可能であろう。

【今後の展開】スポーツ群は様々な身体的肉体的緊張状態にさらされていることや、先行研究によると、一般群に対して健康感が低いのではないかとという結果は、今回の調査では得られなかった。スポーツ群の現在のスポーツ状況を厳密に分類できなかったことが原因の一つであると考えられる。しかし、今回調査したスポーツ群は健康スポーツとして生かした、理想的な対象群であった可能性も考えられる。今後は、さらに厳密に競技スポーツ継続者をスポーツ群として、比較検討してみたい。(とのむらゆき・はなざわせいいち)

生涯学習の指導者のイメージ（２）

—教育学部学生と都道府県生涯学習研修者との比較—

稲越 孝雄
（文 教 大 学）

＜研究の目的＞ 学校教育の中で、いじめ、不登校など学校不適応問題が、社会問題化してきている。治療的な研究も必要であるが、他方では、生涯学習社会の中での学校教育のあり方を、学校教育担当者が理解することによって対応が異なる事も考えられる。本研究では、そのような立場から、教員養成学部の学生の生涯学習に関する知識と、生涯学習に携わる指導者のイメージについて調査する。

1. 調査期間 1996年8月
2. 対象 C大教育学部学生94名（男子33、女子61名）
3. 調査項目 ①生涯学習に関する知識10項目②A.生涯学習指導者に求められる特性13項目②B.小中学校教員に求められる特性13項目③A.生涯学習指導者の人物像13項目③B.小中学校教員に求められる人物像13項目④生涯学習指導者としての具体的イメージ（自由記述）

＜結果の処理＞

1. ①について得点化（10～0.の範囲）を行った。
2. ①に基づいて得点上位群と下位群に分け②A、③Aの平均値の差を比較した。
3. ①の結果と生涯学習指導者の結果（前回大会発表）とを比較した。
4. ②A、③Aをコミにして因子分析を行い、その結果を生涯学習指導者のものと比較した。
5. ②B、③Bをコミにした因子分析を行い、その結果を4の結果と比較した。

＜結果＞

① 生涯学習に関する知識

10項目にわたる知識項目（例：「生涯学習は高齢期の学習をいう」「社会の変化に伴って、職業技術の再教育を必要とする」など）について「生涯学習」の考え方に合うか否かの判断を求めたが、適中率の低い項目の中で、肯定的項目として「職業技術の再教育の必要性」（31.9%）、「自己教育力を身に付ける必要性」（37.2%）が顕著であり、否定的項目としては「人間は毎日何か新しいことを自然にやっているのもそれで良い」（12.8%）などがある。この中で「職業技術の再教育」については性差があった（男子42.4%、女子26.2%）。

② 生涯学習に関する知識と指導者の特性、人物像の関係
知識の上位群（得点4点以上；40名）と下位群とに分けて、特性、人物像の平均値に関して差の点検を行った。特性に関しては「学習者への動機づけの技法」「学習結果の評価への技術」「成人の心理的特性の知識」についての評

価が上位群は下位群に比較して高かった。人物像に関しては「人に対する誠実」が上位群の評価が高く、「周りとの調和を求める傾向」は下位群の評価が高い傾向があった。

③ 指導者の特性、人物像の平均値を学生と都道府県生涯学習研修担当者との比較

特性13項目について平均値の差を比較したところ、「成人の発達特性に関する知識」「成人の心理的特性の知識」については、学生の方が求めるところが多かった。また、「集団運営の技術」「学習者への思いやり」についても、高く求める傾向があった。これに対して「学習の結果の評価の技術」については、学生の評価が低かった。

④ 「指導者の特性、人物像」についての因子分析結果の学生と生涯学習研修担当者との比較

生涯学習研修担当者についての因子分析結果は、前回（応用心理学会第63回大会抄録p103）発表したが、5因子まで抽出し、各々に①社会的規範性②指導技術性③心理的指導性④カウンセリング性⑤学習者への配慮性と命名した。この中で①はほとんど人物像を中心とした因子であった。これと比較するために、教育学部学生についても、第5因子まで抽出したところ、生涯学習担当者では5因子までで累積寄与率が60.7%であったのに対して、学生の場合には35.8%でイメージが集約されておらず、かなりあいまいであることが分かった。得られた因子構造は第1因子は研修担当者と同じく人物像が中心で、社会的規範性因子であった（負荷量の高い10項目中6項目が共通）。しかし第2因子は人物像の中で「人とのつながりを重視する」事に負荷量が高く、これに特性として「自分への不確かさ」が加味されている対人関係重視の因子であった。以下は負荷量の多い項目が1～2項目で因子が構成されている第3因子（内容についての専門知識）、第4因子（発達についての知識）、第5因子（集団運営と結果表かの知識）という結果であった。

⑤ 「生涯学習指導者の特性と人物像」と「小・中学校教員の特性と人物像」との因子分析結果の比較

特性、及び人物像について、同一項目を用いて、教育学部学生に「生涯学習の指導者」と「小・中学校の教員」について回答を求め、各々を因子分析して、その構造を比較した。第1因子は人物像を中心とした社会的規範性因子であった。第2、3因子は特性の因子であった。第4因子に人物像の中で「個性、独自性」に負荷が高く第5因子は学習者への配慮性の因子であった。

達成動機の調査研究 — 看護婦の意識調査から —

○田畑節子

(鹿児島大学医学部附属病院)

内海 滉

(千葉大学)

澤田道子

(熊本大学医学部附属病院)

達成動機 職場環境 看護婦

はじめに

継続教育は専門分野に関係する教育と、個人的な成長を高める教育との二つに分けられる。看護婦は、専門職業人として、看護サービスのニーズに答え、情報や知識を習得し、自己向上をめざして、主体的に、自ら学ぶ姿勢を養うことを求められている。マックレランドは、人には4つの主要な動機(達成、性、親和、権力)があり、就中、達成動機を高めること、自己の能力を高める上で必要とされ、目的意識と主体的行動に、密接に関係するとしている。

今回、看護婦の達成動機に影響を及ぼす要因を明らかにする目的で、調査研究を行った。

[研究方法]

1. 対象: K大学医学部附属病院看護職(329名)
2. 調査方法: 留置法による質問紙調査
3. 内容: 1) マックレランドらの「達成動機の基準」により、上田、澤田が作成した達成動機調査項目に基づいて一部修正、作成した(30項目)
2) 稲岡文昭による職場環境要因調査項目(15項目)
3) 年齢、経験年数、職位、婚姻の有無、研修などの要因

4. 分析方法: 調査項目の因子分析と因子得点の比較
[結果及び考察]

1. 達成動機調査項目の得点を因子分析(バリマックス回転法)により、累積寄与率48.08%で、6因子を抽出した。
「優良職場環境因子」「積極的職場実践因子」
「積極的職場環境因子」「非職場的自己実現因子」
「看護職場肯定因子」「客観的観察因子」
2. これらは、年齢、経験年数、部署での経験年数などによる影響をうけていると考えられる。
3. 経験年数、婚姻の有無、講読している専門誌、学会の参加などに6因子の平均値には差がみられた。
4. 年齢別にみた「積極的職場実践因子」の平均値に有意差を認めた。21歳群、22~24歳群が高く、年齢が増えるとともに低くなる傾向を示した。経験年数により、いったん向上するが、その後、職場環境に順応してしまう傾向にあると思われる。

5. 現部署での経験年数による因子得点の変化は、20~29歳群と30~39歳群とに差がみられ、異なる分布を示した。経験年数を重ね、充実していく反面、その中で満足してしまう傾向があると思われる。部署での経験年数は、3~4年が適当な時期であり、特にローテーション時、本人の希望、目標が、明確であれば、この傾向は変化すると思われる。

6. 研修参加群と年齢(20~29歳群と30~39歳群)との関係を見ると、1年間の院内研修、院外研修において、「積極的職場実践因子」に20~29歳群で、有意差があった。研修参加群は、20~29歳群では自己向上をめざし、意欲的に取り組んでいる姿が窺える。30~39歳群は、意欲を持って参加しても、自分の意図と異なっていたり、満足が得られなかったことの現れとも考えられる。

7. 研修参加群、非参加群の比較と、年齢別にみた参加群において、特定の傾向がみられた。参加者は自己の目標を明確に認識して参加することが、研修効果の前提と思われる。

8. 達成動機は、さまざまな要因が関係し、構成されており、年齢や経験年数などの影響を受けて変化するものとする。

[結語]

1. 看護職に施行した意識調査から達成動機が6要因より構成されていることが認められた。
「優良職場環境因子」「積極的職場実践因子」
「積極的職場環境因子」「非職場的自己実現因子」
「看護職場肯定因子」「客観的観察因子」
2. そのうち3つの要因は年齢、経験年数、現部署での経験年数などにより、これらの因子に影響を及ぼしていると考えられる。
3. 年齢、経験年数、現部署での経験年数は因子への影響の及ぼし方に特徴があり、それぞれ一定の傾向がみられた。
4. 達成動機の因子得点からみた現部署での経験年数研修参加と年齢の関係にはある一定の特徴がみられた。

たばた せつこ, うつみ こう, さわだ みちこ

達成動機に関する要因分析

—看護職に施行した意識調査を通して—

○澤田道子

内海 澁

(熊本大学医学部附属病院) (千葉大学)

達成動機 因子分析

一人ひとりの看護婦(士)が自己の内的形成に促されて主体的に学習を続け、仕事を通じて自己を生かし、人間的成長につながっていく姿が理想である。人には主要な4動機があり、その中でも特に達成動機は、自己の能力を活かし、目的への主体的な行動を誘発すると考える。今回、達成動機に影響を及ぼす要因を明らかにする目的で、意識調査を行った。

〔研究方法〕K大学医学部附属病院看護職421名を対象に達成動機調査58項目、東大式エゴグラムなどを留置法による質問紙調査を行った。(クロンバックα係数0.8968)

〔結果〕1. 因子分析(バリマックス回転法)により達成動機から8因子を抽出した(累積寄与率41.5%): F1積極的情報関与因子, F2消極的情報吸収因子, F3積極的学習行動因子, F4積極的職場固執因子, F5積極的看護行動因子, F6積極的職場固執因子(-), F7客観的評価因子(-), F8非看護行動因子。

2. 達成動機因子と有意な相関関係がみられたのは次のようであった。(相関関係係数r)

	F1	F4	F6(-)	F7(-)	F8
年齢	.132*	-.117*			
臨床経験			.137**		-.098*
現部署での臨床経験				-.018*	

*P<.05 **P<.01

3. 各因子において年齢別に分散分析をした結果、全因子に有意差を認め、F1では21歳から24歳までの群が最も低く、年齢に比例し高くなる傾向がみられた。F2 F6 では21歳から24歳までの群が最も高い。経験年数別では、6因子に有意差を認め、経験年数6年からF1は高くなり、26年以降が最も高かった。

4. 年齢別と現部署での経験年数別との二元配置法分散分析により、年齢の影響が現部署での経験年数よりも大きいことを認めた。21歳から30歳までは、現部署での経験年数1年から4年が最も低く、31歳からは現部署での経験年数にほとんど影響を受けていない。41歳からは現部署での経験年数には関係なく高い傾向がある。また、F2に関して、現部署での経験年数1年未満において、21歳から24歳までが最も高く、順次低くなり41歳から50歳になると再び高くなる傾向がみられた。

〔考察〕達成動機はさまざまな要因が関係し構成され年齢や経験年数などの影響を受け変化をしていた。い

つまでも好奇心を失わず、わからないことは人に聞き本で調べと自己学習できるの方が望ましい。これに関与している第一因子「積極的情報関与因子」は年齢に大きく影響を受け、年齢を重ねる毎に平均因子得点が高くなっている。特に、現部署での経験年数1年未満の21歳から24歳<現部署での経験年数3~4年の21歳から24歳<現部署での経験年数1年未満の25歳から30歳<現部署での経験年数3~4年の25歳から30歳と高くなっている。また反対に、「消極的情報吸収因子」は、21歳から30歳までが高い。これらから、自分の行った看護が振り返られるような、日々の仕事の中で自分の看護に対する考え方が深まるような育て方ができる職場環境で、就職後の24歳まで、いわゆる卒後3年間の看護婦は育てられていると考える。また、看護の世界には「ありがたい姿」をイメージできる先輩ナースの生きた存在が必要である。「看護婦としてとても尊敬している人がいる」ことは、成長を促進させていると考える。25歳から30歳までは、「積極的情報関与因子」「客観的評価因子」が低い。しかし、「積極的学習行動因子」は高いことから、自己同一性の「早期完了」後の職業的自己同一性の「拡散」の時期ではないかと考える。研修で習得した「知識」や「知的能力」は使う機会の遭遇や頻度に影響される。学習の内在化を進めるためには、機会と経験を多く持たせ研修で学び取った「看護観」も常に考えておかないと、研修効果が無くなるといわれているように、職場の教育的環境が大きく影響する。「客観的評価因子」は、31歳から高くなる傾向がみられる。これは、臨床の場である程度経験を積んでいくと、無意識のうちに看護婦としての自分のあり方、仕事の仕方、人へのかかわり方ができあがってくる。言葉を換えれば専門家として、仕事をするための自己像ができていく過程である。エリクソンによれば、30歳代は自己を問い、役割の「拡散」を行う中で、パーソナリティを発達させる重要な時期であり、看護婦として成長するのに欠かせない時期と思われる。仕事を始めて10年目ぐらいから、キャリアの発達が促進される点から、30歳代をどのように過ごすかが、看護婦として、人間としての成長に影響を及ぼすと考える。

さわだ みちこ うつみ こう

看護教育による看護学生の意識構造の変容（その6）

— 小児看護実習前と終了後の比較 —

○草野美根子 寺田敦子 吉田恵理子 中 淑子 内海 澁

（佐賀医科大学医学部） （産業医科大学産業保健学部） （千葉大学看護学部）

看護教育 小児看護実習 看護学生 意識構造の変容

<目的>第54回日本応用心理学会から看護教育や看護実習指導の評価と示唆を得るため自由感想文によるアンケート調査を行い、看護学生の意識構造の変容の実態の結果を報告している。今回は、小児看護実習における病棟実習と保育園実習の教育的効果を検討するため、実習開始前と実習の中間と実習終了後において看護学生が子供をどのように捉えているか、看護学生の意識構造の変容を明らかにしたので報告する。

<研究方法>対象：S大学看護学生30名（病棟実習を先に体験するA群15名と保育園実習を先に体験するB群15名の看護学生）。

子供についてのイメージ（35項目）について7段階評価を行った。アンケートは実習開始の当日、中間と終了後は各々の実習終了時の3回調査した。

表2 因子スコアの群別比較

項目/因子	実習開始前			中間			終了後		
	第1	第2	第3	第1	第2	第3	第1	第2	第3
健康状況の良い者 -それ以外		*							
		T=1.8							
		M=0.7,SD=2.2,N=15							
		M=0.7,SD=2.1,N=15,DF=28							
子供の面倒をみる こと好き-それ以外		*			*				
		T=1.63			T=1.77				
		M=-2.1,SD=6.6,N=15			M=0.7,SD=2.2,N=15				
		M=2.3,SD=7.5,N=15,DF=28			M=-0.7,SD=2.4,N=15,DF=28				
兄弟のいる者 -それ以外		*			*				
		T=2.0			T=1.53				
		M=1.4,SD=5.0,N=19			M=2.0,SD=12.8,N=19				
		M=2.6,SD=5.5,N=11,DF=28			M=-3.4,SD=6.4,N=11,DF=28				
									P<0.05

フェイスシートでは育児環境、学生の性格、課外活動や健康状態、子供と聞くと何歳をイメージするのかなどについて40項目質問紙に記入してもらった。不安調査（STAI）も同時に実施した。

<結果>因子分析の結果、表1のように3因子を抽出した。また群別比較による検討を行った結果、有意差を認めた項目を表2に示した。

<考察>小児看護実習前後の因子構造の比較では子供興味因子は実習前と終了後には、因子構造に大きな変化はなかった。第2因子の子供活動因子と第3の子供肯定因子では実習終了後に第2因子が第3因子へと第3因子が第2因子へと因子構造の内容が変化していた。

A群学生は、第1因子の明るいイメージに好き、かわいいとなり、第2の活動的イメージに積極的、楽しいイメージが残っている。また子供の強さの印象は複雑、粗野なイメージに広がりを見せた。つまり病棟実習での子供の明るさの中に患児の複雑さを体験したものと考える。病棟での影響は保育園実習を終了するまで続いていたことがわかった。

B群学生は保育園実習で感じた子供の明るく、積極的なイメージに対して子供の性質そのものに愉快さや子供のすなおさ・デリケートさへのイメージへと広がりをみせた。

これらAB群学生の意識構造の変化は病棟や保育園実習上の体験により違いが認められたが、このことが教育や実習形態選択の決定への判断材料とは言えない。今後の研究により関連要因についても明らかにしたい。

表1 因子分析による因子負荷量

第1因子	第2因子	第3因子	項目内容		
0.79	0.08	0.11	18. 好き	子供興味因子	
0.79	0.03	0.03	25. かわいい		
0.77	0.10	0.03	1. やさしい		
0.77	0.09	0.11	19. 興味ある		
0.73	0.03	0.22	5. 美しい		
0.71	0.28	0.18	16. 愉快的な		
0.69	0.21	0.07	9. 暖かい		
0.14	0.70	0.25	15. 動物的な		子供活動因子
0.24	0.68	0.04	34. 積極的な		
0.22	0.66	0.04	24. 動的な		
0.16	0.64	0.01	13. 賑やかな		
0.15	0.61	0.30	21. 激しい		
0.20	0.56	0.06	14. 一時的な		
0.21	0.55	0.18	22. 粗野な		
0.04	0.07	0.77	12. 大きい	子供肯定因子	
0.09	0.01	0.66	10. 鋭い		
0.26	0.12	0.51	32. 速い		
0.24	0.40	0.49	30. 複雑な		
0.05	0.05	0.48	4. 強い		

累積寄与率 42.7%

くさのみねこ てらだあつこ よしだえりこ
なか よしこ うつみ こう

看護婦に施行した情緒的共感測定 (Questionnaire measure of emotional empathy) 読書・余暇行動傾向、エゴグラムとの比較

○浅野智子

内海 混

(横浜市立大学医学部附属浦舟病院看護部)

(千葉大学)

Key Words: 看護婦, 情緒的共感測定, 読書・余暇行動傾向, 因子分析, エゴグラム

【はじめに】看護婦は、適切な看護ができるように患者の立場に立って考えようと、関わっている。そのために、患者の苦しみ・悩み・生きがいなどを、共感的理解をもって接しようとしている。しかし、現実には、患者の感情の表出に対しての看護婦の反応はさまざままで、共感として示す反応にも違いがみられる。

「共感」には、認知的理解の側面と、情緒的反応の側面の共感がある。今回、看護婦の反応の違いを、情緒的反応としての共感の側面から調査し、情緒的共感に関わりがあると思われる読書・余暇行動・自我と情緒的共感との関連を分析した。

【方法】Y大学病院看護婦 340名を対象に、10日間の質問紙留置法にて調査した。質問紙は、Mehrabian, A. & Epstein, N. の情緒的共感傾向測定を使用。原文の33項目8段階評定法を、翻訳にあたり不確かな項目1つを外し32項目とし、回答が明確に分布しやすい4段階評定法とした。読書13項目・余暇行動20項目も4段階評定法とし、東大式エゴグラムも行った。

【結果及び考察】有効回答率は75.4%、平均年齢は27.2歳。平均看護婦経年数は6.8年であった。

情緒的共感傾向測定の質問紙32項目の回答数列表を、バリマックス回転による因子分析し累積寄与率51.95%で8因子を抽出した結果が右表である。

NO	項目内容	因子命名
18	いじめられているのを見ると腹がたつ	同情因子
25	苦しんでいるのを傍観するわけにはいかない	
14	ひとりぼっちでいる人は不親切な人であろう	冷淡因子
4	不幸な人を見ると、いらいらする	
19	まわりの人々が騒いでも冷静でいられる	客観性因子
31	まわりが興奮していても冷静でいられる	
17	小説の中の人物の感情に巻き込まれてしまう	感化因子
30	映画のストーリーに引き込まれてしまう	
6	幸福をみせびらかしている人ははからしい	反発因子
3	公衆の前で愛の表現をしていると腹が立つ	
12	友がうらたえても、うらたえることはない	感傷因子
13	悲しい人はいつまでもつくりたい	
32	子供が泣いていてもたいした理由はない	無関心因子
21	人々がどんなに笑っても、一緒に笑えない	
28	身寄りのない老人には身につまされてしまう	利他因子
13	悲しい人はいつまでもつくりたい	

第1因子は同情、第2因子は他人への思いやりに欠けると解釈し冷淡、第3因子は感わされないうで平静であると解釈し客観性と因子命名した。以下も同様に、感化・反発・感傷・無関心・利他と因子命名した。因子分析を行い情緒的共感の中に、同情・感化・利他といった共感への肯定的なプラス因子、冷淡・反発・無関心といった共感への否定的なマイナス因子、そして客観性といった相手の反応を認識しても影響されない因子があることがわかった。年齢で見ると、客観性感化・反発因子得点に有意の相関がみられた。また、

同情・感化因子得点でも、分散分析にて有意差がみられた。このことから、20から23歳の看護婦は、同情・客観性・反発傾向が低い感化されやすく、27から29歳の看護婦は、同情傾向が高い。また、27歳以上の看護婦は感化されにくいといえる。

読書13項目・余暇行動20項目の4段階評定法の回答数列表をバリマックス回転による因子分析にかけ、累積寄与率53.7. 52.2%で、それぞれ3因子・6因子を抽出した結果が

読書	項目内容	因子命名
f1	医学・看護の参考書や新聞雑誌	思慮深さ
f2	エッセイ・ドキュメントなど	リラックス
f3	推理・冒険・怪奇・時代小説	味わい
f3	純文学、和歌・俳句集、伝記	味わい
行動	項目内容	因子命名
f1	植物園、神社、寺、散歩、読書等	静思
f2	テレビゲーム、カラオケ、盆栽	自己没頭
f3	スポーツ観戦、映画を見る	受動的な高揚
f4	海に行く、スポーツをする等	動的
f5	テパート、仲間とおしゃべり	大衆的
f6	観劇、旅行、登山・ハイキング	関心

右表である。情緒的共感因子と年齢、読書・余暇行動因子とに有意の相関がみられたものは、下表に示した。

年齢	情緒的共感 (T>2.0)							
	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8
読書 f1 (思慮深さ)	.17							
★ f2 (リラックス)								.15
f3 (味わい)	♦.22							
行動 f1 (静思)			♦.20					
f2 (自己没頭)		♦.16						
f3 (受動的な高揚)								
f4 (動的)								
f5 (大衆的)								
f6 (関心)								

印♦は、読書・行動因子得点が-1未満、-1~1、1以上の3群によって差がみられた。これらの内の一つをみると、味わい読書因子得点が高いと、同情・客観性因子得点が高くなっている。つまり、純文学などの味わい傾向を読む人は、同情傾向を高める反面それを客観視できる傾向にあるといえる。また、テレビゲームをよくする人は、感化されにくく他人への思いやりにかける傾向があるといえる。

エゴグラム結果では、同情因子得点の低い群はNP低位型、客観性因子得点の低い群はCP・ACが高くNP・Aの低いU型に類似していた。この他にも、利他因子得点の低い群、無関心因子得点の高い群はNP低位型に類似していた。

Mehrabian, A.らは共感を、『他者の行動を観察しておこる情緒を経験することから生じた情緒』と説明している。個々の看護婦が、マイナスへ働く因子傾向をどの程度もっているかにより共感のエネルギーの方向が決定され、表面に現れる反応の違いとなるのではないかとと思われる。

うつみ こう あさの ともこ

看護臨床実習のPAC分析(1)

○ 山崎章恵 阪口しげ子 内藤哲雄

(信州大学人文科学研究科) (信州大学人文学部)

キーワード：成人看護実習、外科病棟、臨床実習の振り返り、PAC分析

【目的】内藤ら(1996、1966)は教育実習の振り返りにPAC分析が有効であることを明らかにした。そこで本研究シリーズ(1)(2)(3)では、看護臨床実習の振り返りにPAC分析を利用することを目的とした。研究(1)では、成人看護実習の外科病棟での実習の分析にPAC分析を用いた。

【方法】<被験者>S短期大学看護学科3年の女子学生8名のうち1名のデータがとりあげられた。

<手続き>あらかじめPAC分析の実施方法を指導した後、「今回の臨床実習において、患者さんや家族に対してあなた自身が心がけたこと、また実際にしたこと、患者さんや家族の反応、病棟の雰囲気など、どのようなことが気になったり、重要であると感じていましたか。」と教示し、連想反応を得た。次に重要順に並べ換えさせた後、各項目の直感的イメージ上の類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由、単独の+-イメージを質問した。

【結果と考察】クラスター分析の結果は図1のようになった。被験者Aの解釈の概要は以下のごとくである。

「時々プランニングを……～患者の回復に……：主に実習の進め方についてのイメージ。実習でやらなきゃいけないことが沢山あるんだけど、それがなんでやらなきゃいけないかをあんまり考えないでやっていたことが多かった。だから頭の中で覚えている援助しかできなくて、関連づけていればひとつの観察ポイントから沢山の援助が考えられるはずんだけど。だから、ひとつひとつの援助を関連づけて行うことが大切だと思った。…と同時に、時々プランを確認して、大切な援助を見落とさないようにしていこうと思った。患者をよくみていれば、必要な援助も浮かび上がってくると思います。患者さんの回復は、予測していたけど思った以上に速かった。だから、ここまでできていたら(次は)こうするっていうのを考えていくことが大切だと思った」

「患者にとって……～他の患者にも……：患者さんや家族の接し方についてのイメージ。私は一方的に勉強させ

てもらっているんで、きちんと目的をもって実習すること。一人の人間として患者さんのことを考えることはとても大切なことだと思いました。」

「ナースの注意は……～ナースから言われたことは……：看護婦さんからの指導の受けとめ方についてのイメージ。実習中に看護婦さんに何か注意されると、とても緊張してしまう。言われていることはとてもためになることだし、的確なアドバイスなので素直に学ぼうという姿勢で聞く。くよくよしないで前向きに考えていこうと思っていた。それから、この看護婦さんはこう言ったのにあの看護婦さんはこうじゃないと言ったとか、こういうことができてしまうので看護婦さんに言われたことはまず自分の中で納得してからおこなっていこうと思った。」

上記のクラスターは、<状態の変化に応じた看護計画と看護行為の統合>、<自分本位ではなく患者本位の看護>、<先輩ナースの指導内容の意味を考える姿勢>と命名することができよう。第1クラスターの「患者の回復のスピードに…」と第2クラスターの「他の患者にもあいさつをし…」を結節する要に、第3クラスターの「ナースから言われたことは自分の中で…」が位置することから、次のように解釈できよう。「術後の患者の変化を予測し、対応できる看護計画を立案し、看護行為を統合しながら実践すること」や「患者本位の視点からの看護を実践していく」ためには、「先輩看護婦の指導内容の意味をとらえ、それを納得して理解できることが必要」だということを意識化することなくとらえていると解釈できよう。

(やまざき あきえ/さかくち しげこ/ないとう てつお)

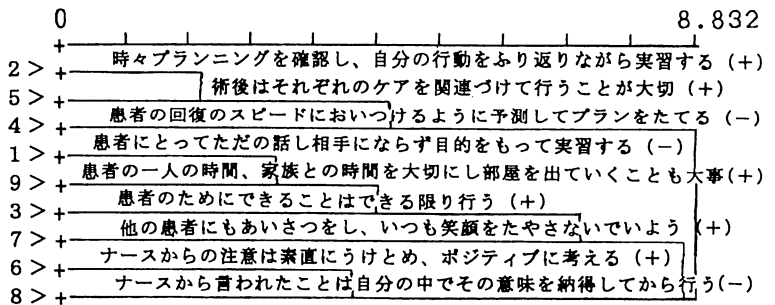


図1. 学生Aのデンドログラム [左の数値は重要順]

看護臨床実習のPAC分析(2)

○ 阪口しげ子 山崎章恵 内藤哲雄

(信州大学人文科学研究科)(信州大学人文学部)

キーワード：小児看護、臨床実習の振り返り、PAC分析

【目的】本研究では、小児看護実習の振り返りにPAC分析を用いることの有効性を、事例を用いることで検討することを目的とした。

【方法】<被験者>S短期大学部看護学科3年生、女子42名中1名のデータが取り上げられた。

<手続き>研究1と全く同様な方法で実施した。

【結果と考察】クラスター分析の結果は図1のようになった。被験者Bの解釈の概要は以下のごとくである。

「患者さん、家族に・・・子どもがイライラして・・・子どもに接するときの注意点がまとまっているように思います。まずは、病棟の雰囲気考えたかな。病室は患者にとって生活の場だし、挨拶・礼儀は大切にしなければならないって思いました。子どもって、こっちがムスとしていたら近づき難いだろうし、笑顔が大切だなあ。また学生は受持ち以外の子でも平等に接することが必要なんだと感じました。」

「使い終わった針な・・・乱暴な言葉使いをした。子どもの特徴を知った上で看護婦が気をつけなければならないことがまとまっていると思う。子どもって何やるか分からないから、こっちの観察はすごい大切だね。使い終わった針とか、誰でもイタズラできる所に置いてあったし、子どもは小さいから看護婦さんも気づかなかったりする。あと、テレビとか、走り回ったりしていると、こっちの言っていることがぜんぜん耳に入っていないから、やっぱり観察が必要だなあ。子どもって難しいこと言っても分からないし、結構繰り返し言うのと、むこうもイライラしてきちゃって、よけい話を聞いてくれなくなっちゃうから・・・こっちの話し方を工夫しなきゃいけないかなあ。」

「お母さんがいなかった・・・処置をする時は・・・お母さんと子どもに対する気遣いかな、病棟をまとめる上で、必要な看護でまとまっていると思う。お母さんって結構長く入院してたりすると、処置だとか、他の人達のこともよく知っているし、とくに大部屋だから、人に知られたくないことがそれぞれあるから、そこら辺での気遣いが必要なんだよね。あと、処置室で子どもが泣いているのとか、結構簡抜けて、他の子もびっくりしちゃう。だから、周りに気を使った看護が必要だと思う。」

上述の各クラスターは、<子どもとの関わり方>、<子どもへの教育的関わり>、<子どもを取り巻く人々への配慮>と命名できよう。子ども(病児)とその母親にはじめて接した学生Bは、子どもたちと良い関係をとることに努め、子どもたちに教育的に関わり、子どもたちの周囲の人々にも積極的に関わったことを示すスキーマが出現している。しかし、一方で、連想や解釈が具体的な行為のレベルにとどまり、抽象レベルで個々の行為を、看護の展開、看護技術として意味することができていない。このことは、看護教育上の注意すべき事例と言えよう。

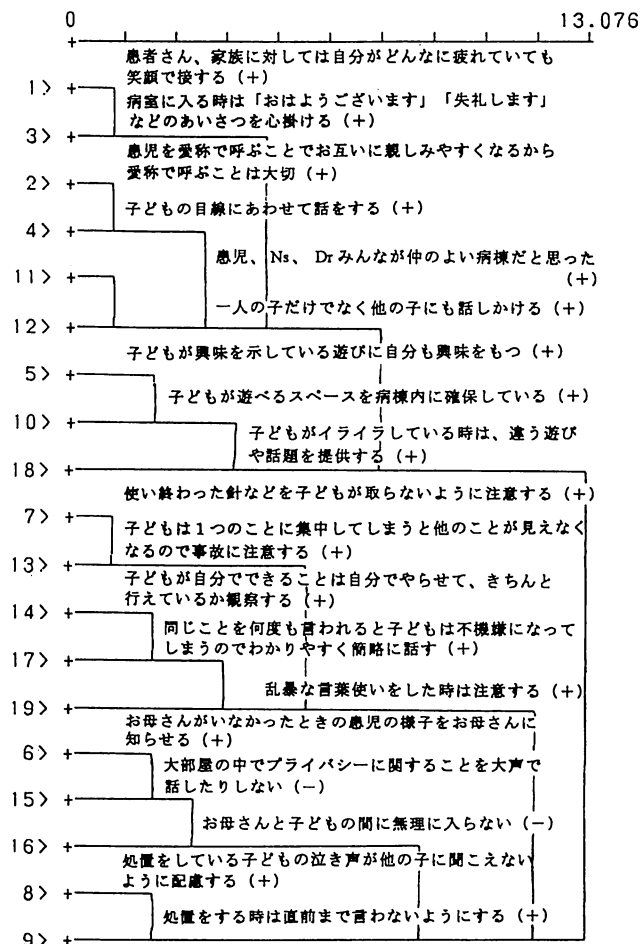


図1. 学生Bのネット・グラム [左の数値は重要順]

(さかくちしげこ/やまざきあきえ/ないとうてつお)

看護臨床実習のPAC分析(3)

○ 内 藤 哲 雄 阪口しげ子 山崎章恵

(信州大学人文学部)(信州大学人文科学研究科)

キーワード：看護実習、PAC分析、集団発表

【目的】本研究では、まず学生を2人ずつの組にして被験者と実施者の役割を交替させ、互いに相手の臨床実習体験をPAC分析させた。これに続き、集団事態を、ペアに実施した結果を発表させた後、さらに実習指導者(教官)が補足説明した。「被験者となることで「自省」「他者への実施による技法理解の深まり」「(他者による)自分の結果の考察の報告」「他者の分析結果との比較」の一連の作業を通じた、振り返りの総合的効果を統計的に検討することが目的である。

【方法】<被験者>研究(1)(2)に参加した学生50名。<手続き>ペアに実施したPAC分析の結果を8名から11名の集団事態で発表させた後、さらにそれぞれに実習指導者が補足説明した。集団発表では、各自が実施者として分析したデンドログラムを拡大して提示し、結果の概要を説明した。最後に12項目からなる質問に、「そうは思わない」「いくぶんかそう思う」「そう思う」の3件法で回答させた(表1参照)。なお表1では、逆転項目は否定文から肯定文に、また得点も逆方向に変換されている。“PAC分析とその結果の集団発表の効果”の存在を検討するための χ^2 検定は、(逆転項目は変換前の)肯定と否定の間でおこなわれた。

【結果と考察】まず、外科と小児科の合計値の高い順に項目を並べ、MとSDを算出した。両群の合計値が否定的傾向を示すのは、「PAC分析は難しい技法で

ある#」の1項目だけである。ついで、群間の差をも検定で検討したところ、全ての項目で有意差がなかった。そこで、外科と小児科の両群を合わせて、肯定と否定の間で χ^2 検定を試みたところ(逆転項目では回答1と2の合計者数対3の人数)、全項目で有意差がみられた。すなわち、「難しい技法である」が否定方向での差を、他の全ては肯定的な効果を示すものであった。とくに半数以上が「そう思う(逆転では、そうは思わない)」の、「分析結果が実感とズレていない」「かえってわからなくなったと思えない」「臨床実習の振り返りに有効」「分析結果は納得できる」「体験を意識化できた」と回答したことは注目される。結局、「内面深くまで分析されたとは思われない」が50人中14名であること、また「PAC分析は難しい技法であると思う」が15名であることを除いた10項目では、効果を否定する回答者は8名(16%)以下である。

以上の結果から次のことが導き出される。すなわち、PAC分析の被験者と実施者の両方の体験を持ち、さらに実施者として発表をし、複数の他者の結果と比較し、実習指導者から深い分析の考察を示されることが、次の効果をもたらしていた。「実習の振り返りに有効」であり、「体験を意識化」でき「自身の結果を自分の問題として受けとめ」「自分の課題を発見」し、「具体的な改善策を導くのに有効」で、「体験の構造を理解

できる」ほどに内面深く分析するのに、ある程度有効であったと結論できよう。また、これらの効果には、小児看護と外科看護における実習内容の方向づけや質的な違いによっても全く差が生じないことを示唆するものであった。

表1. PAC分析と集団発表の効果

質問項目	外科		小児科		1 そうは 思わない	2 いくぶんか そう思う	3 そう 思う	P
	8名		42名					
	M	SD	M	SD				
分析結果は実感とズレてはいない#	2.8	0.5	2.7	0.5	1	11	38	**
かえってわからなくなったとはいえない#	2.8	0.7	2.7	0.6	4	8	38	**
臨床実習の振り返りに有効である	2.6	0.5	2.5	0.6	2	19	29	***
分析結果は納得できる	2.6	0.7	2.5	0.6	3	17	30	***
体験を意識化することができた	2.5	0.5	2.5	0.7	4	19	27	***
結果を自分の問題として受けとめることができた	2.3	0.7	2.5	0.6	3	23	24	***
学生一人一人の分析に有効である	2.3	0.7	2.4	0.7	5	21	24	***
自分の課題の発見につながった	1.9	0.8	2.2	0.6	8	27	15	***
具体的な改善策を導くのに有効である	2.3	0.5	2.1	0.6	5	32	13	***
体験の構造を理解できた	1.8	0.7	2.2	0.6	6	32	12	***
自分の内面深くまで分析されていた	2.1	0.6	1.9	0.7	14	25	11	*
PAC分析は難しい技法ではない#	1.5	0.8	2.0	0.7	15	26	9	***

#は逆転項目で肯定文に変更してある

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

(ないとうてつお/さかくちしげこ/やまざきあきえ)

学内実習における患者役・看護婦役の体験に対する学生の反応 第2報

○高田 茂子

(東京都立大塚看護専門学校)

内海 滉

(千葉大学)

キーワード ・学内実習 ・患者役 ・学生の反応

はじめに

看護技術の授業方法として、学生に患者役・看護婦役をさせる学内実習は、看護の対象を具体的にイメージさせ、看護への関心と主体的学習意欲を高めるための目的で展開しています。

実習中、学生が行う患者役・看護婦役の体験は、その後の学習意欲に左右するきわめて大切な要因ではないかと考えます。そこで、授業方法を考えるために、学内実習で患者役・看護婦役を必要とする5項目の看護技術に於いて、学生の体験について調査し、第1報(看護協会・看護教育学会)では患者役・看護婦役の緊張感と羞恥心について報告しました。

今回は、患者役の体験から学生の反応について検討しました。

研究方法

調査対象は、3年課程1年生で調査に当たり全て承認した87名です。年齢は、18歳が80.5%を示し、出身地は、東京が49.4%で次いで埼玉、神奈川で、通学生が80.5%、寮生は19.5%です。

調査項目は次の5項目です。

- ①下着を付けた状態での「寝衣交換」
- ②直接胸を聴診する「呼吸測定」
- ③「洗髪」
- ④下ばきをつけた状態での「全身清拭」
- ⑤「食事介助・口腔ケア」

調査方法は、それぞれの学内実習終了時に質問紙により行いました。

結果及び考察

- ①患者役になり、「援助を受けての感想」について。
楽しかったは「寝衣交換」が40.0%で、次に「食事介助・口腔ケア」であった。不快と答えたのは「食事介助・口腔ケア」で14.0%であった。これは、「寝衣交換」が楽しかったとしているのは、授業開始後初めて学生同士で行う実習と考える、食事介助については楽しいとするも、日常生活行動として何気なく行っている食後の歯磨きが、援助されるとなると、理由にもあるように「口内を見られること」「歯磨き後の水を出すこと」が嫌だという不快の反応を示していることから実習項目とし「快」「不快」となるものの組み合わせに検討が必要と考える。
- ②患者役なり「緊張した」については、かなり緊張したのは、「全身清拭」39.5%「食事介助・口腔ケア」37.2%「呼吸測定」32.1%でした。全く緊張しないが「洗髪」で29.3%でした。

介助・口腔ケア」のそれぞれに相関がみられた。

このように、全身清拭・呼吸測定では直接体に触れられたことと考えます。また「呼吸測定」と「食事介助・口腔ケア」に相関がみられたことは、呼吸測定時に胸部をみられることと、口の中をケアされることの緊張は同じ種類のものではないかと推測できる。

③「恥ずかしかった」については、かなり恥ずかしかったと答えた学生は「全身清拭」64.2%次に「食事介助口腔ケア」45.4%「寝衣交換」が42.0%でありました。そして患者役をして嫌だったについての理由として・いつまでも肌を露出されたこと・時間がかかることと言うことである。

「呼吸測定」は35.7%だったのは、学内実習は3～4人のグループで実施しているが、「呼吸測定」は2人1組としてカーテンの中での実習と言うことで配慮があったことも関係することから、「全身清拭」においてもグループ人数を少なくすることや、時間短くする方法を考える必要が判りました。

④患者役をして「理解したこと」については、「全身清拭」と「食事介助・口腔ケア」では患者の羞恥心や援助されることの疲労が理解できたこと。

「寝衣交換」「洗髪」と「全身清拭」では看護婦の声かけがないと不安になることや看護婦の態度で患者の気持ちも左右される事を上げている。

今後は看護婦役について検討していきたい。

表1. 学内実習における患者役・看護婦役の体験に対する学生の反応 (n=87)

項目	快	不快	緊張	羞恥心	理解
①寝衣交換	40.0%	14.0%	35.7%	29.3%	35.7%
②呼吸測定	32.1%	14.0%	35.7%	29.3%	35.7%
③洗髪	29.3%	14.0%	35.7%	29.3%	35.7%
④全身清拭	39.5%	14.0%	35.7%	29.3%	35.7%
⑤食事介助・口腔ケア	37.2%	14.0%	35.7%	29.3%	35.7%

「呼吸測定」と「全身清拭」「呼吸測定」と「食事介助・口腔ケア」のそれぞれに相関がみられた。 たかだ しげこ うつみ こう

患者教育への検討

看護職に施行した意識調査を通して

○ 尾形 悦子

内海 滉

(横浜市立大学医学部附属浦舟病院整備担当) (千葉大学)

キーワード：患者教育、因子分析、

【はじめに】

入院短期化が強調される今日、いかにして効果的な患者教育を行うか、技術の問われる所である。

患者教育は医療者の関わり方や内容、方法、時期などによりその受け止め方が異なり、のちの患者のセルフケアに影響を与える。今回、看護職の患者教育に影響する要因を明らかにする目的で、意識調査をおこなった。

【調査対象】

Y大学医学部附附属病院、新人以外の病棟勤務の看護職281名で、平均年齢は25.8歳で、看護経験平均年数は4.67年あった。

【調査方法】

留置法による質問紙調査を行った。患者教育についての研修や患者教育する上での困難なこと、主にどのような内容について教育を企画するか、などを記述式にしてデータを収集した。

分析方法は、患者教育に影響する因子を探るため、調査データについて項目別にまとめ6段階評定による得点でバリマックス回転法を使い因子分析を行った。

【結果及び考察】

6因子を抽出し、累積寄与率は43.53%であった。第1因子は「患者の家庭内での位置、役割や立場」「どんな文化背景をもち、どんな習慣をもちているか」などの項目から構成されており、看護職が患者の背景を理解するための要素と考え「患者背景を十分認知する因子」と命名した。第2因子は「受講していない人は患者教育に不安がある」「看護婦になって患者教育について自己学習又は研修受けた」「受講していない人は機会があれば受講したい」などの項目で構成され、教育研修未受講時の患者教育に対する態度と考え「教育未受講因子」と命名した。第3因子は「患者教育で困難なこと、個性」「患者教育で困難なこと、受容と実行、自主性と評価」などの項目で構成され、患者教育に対して現在直面している問題と考え「患者教育実践困難因子」と命名した。同様に、第4因子は「対患者信頼因子」第5因子は「患者教育内容因子」、第6因子は「患者理解因子」とそれぞれ命名した。

次に、平均得点の差の検定から各因子がどのように

関係するかを検討した。出身校が第4因子に、勤務場所は、第3因子因子に関係している。(P<0.05)

経験年数の平均得点と因子の比較では、第2因子において6年～7年目が最も高く、11年～15年目が最も低くなるという傾向を示した。しかし、第4因子においては8年～10年目が最も高く、11年～15年目が最も低いという傾向を示した。これは、8年～10年目は患者の信頼関係が取れていると思っはいるが、11年目では信頼関係が取れていないという事に気が付いた、ということが言えるのではないかと考える。出身校別で各因子別に見てみると、第1因子では、4年制大学が最も高い正の値を示し、専門学校も同じ正の値を示した。また3年生短大が最も低いという結果を示した。第3因子では3年短大と専門学校が正の値を示し、4年制大学は最も低いという負の値を示した。

経験年数と患者教育に対する不安とのt検定では、4因子に有意差が見られた。第1因子において、不安をもっているのが6年～8年目で最も高く、1年～2年目が最も低い値を示した。

勤務場所と患者教育に対する不安との関係については、第1因子、第2因子、第5因子の3因子に有意差が見られた第1因子では、外科が「不安がなし」に、最も低い値を示しているが、第2因子では、外科が最も高い値を示し、内科が最も低い値を示した。看護経験年数と患者教育に関する研修の希望の関係については、すべての因子に有意差があった。第3因子においては、9年から10年目に最も低い値を示し11年目以上で最も高い値になっていた。第4因子では、1年目が最も低く、9年～10年目が最も高い値を示していた。第6因子においては、1年目が最も低く、9年～10年目が最も高い値を示していた。全体的に1年目と2年・3年目が境になっており、また9年・10年目と、11年目以上が境となっていた。年代が高くなるほど患者教育研修に対して反応が大きいことや、また、信頼関係や不安に対しても高い値を示していることなどから、経験のみでは患者教育が困難であるということが示唆される。

おがた えつこ うつみ あきら

看護学生の学校の出来事に関する感じ方

—— 学年間分析 ——

○大塚 廣子 内海 滉
(東京都立府中看護専門学校) (千葉大学)

キーワード：看護学生、学校生活、出来事の感じ方、学年

〔目的〕

看護学生は人間関係の良否や学校生活の出来事の感じ方により、学校生活の適応に違いが出る。そこで、看護学校生活の出来事に対して、学生がどの様に感じているか学年との関連を把握することで、学生の傾向をとらえた教育に示唆を得たいと考え、明らかにした。今回は学年間からの分析を報告する。

〔方法〕

F看護専門学校生を対象に学校の出来事に対する感じ方、入学動機、学生の背景について質問紙による調査を行った。

統計処理の方法は学校の出来事に対する感じ方を4段階尺度とし平均値及び標準偏差により観察し、バリ

マックス法により7因子を抽出し、t検定、分散分析で有意差を求めた。

〔結果および考察〕

看護学校の生活上の出来事に対する感じ方の特徴は「授業共同快楽因子」「親愛的因子」「計画的学習因子」「入学動機因子」「逆境克服因子」「校内生活関心因子」「ぶりっこ良い子因子」の7因子で構成され累積寄与率は41.9%であった。

学年別有意差のあったものは因子1・2・3・5・6であった。各学年間の有為差をしらべると、因子1では1年生は2・3年生に比べて因

子得点が高い。

グループで協力して学習する授業形態の方法が技術演習や各教科の課題学習でとりいれられ、独りで学習するより共同で助け合って学習することを習慣づけられ

学年別分散分析 (F検定)

		変動	自由度	分散	分散比
因子1	群間	127.73	2	63.86	102.37**
	群内総計	207.74 335.47	333 335	.62	
因子2	群間	18.95	2	9.47	9.93**
	群内総計	317.64 336.59	333 335	.95	
因子3	群間	10.84	2	5.42	5.54*
	群内総計	325.44 336.28	333 335	.97	
因子5	群間	16.17	2	8.08	8.42**
	群内総計	319.65 335.82	333 335	.95	
因子6	群間	26.10	2	13.05	14.05**
	群内総計	309.21 335.31	333 335	.92	

*P<0.05 **P<0.01

学年別 (t検定)

学年	人数	因子名	因子1 授業共同快楽因子 平均 標準偏差	因子2 親愛的因子 平均 標準偏差	因子3 計画的学習因子 平均 標準偏差	因子5 逆境克服因子 平均 標準偏差	因子6 校内生活関心因子 平均 標準偏差
		1年生	131		0.74 0.78	0.06 1.02	-0.06 1.11
2年生	123		-0.65 0.76	-0.28 0.99	-0.13 0.86	0.19 0.92	-0.03 0.84
3年生	82		-0.21 0.83	0.33 0.86	0.31 0.95	-0.37 0.96	-0.42 0.97
1・2年 t検定	自由度 252		14.38**	2.68**	0.42	1.13	2.72**
1・3年 t検定	自由度 211		8.30**	2.08*	2.73**	3.05**	5.08**
2・3年 t検定	自由度 203		3.91**	4.66**	3.39**	4.17**	3.00**

*P<0.05 **P<0.01

因子分析 (バリマックス法)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
11. グループワークの頻度 (少ない)	0.14	0.16	0.00	0.02	0.14	0.04	-0.13
9. 講義より実習は (楽しい)	0.14	0.24	-0.06	-0.06	0.07	0.04	0.06
6. 実習中の課題学習 (少ない)	0.14	-0.21	0.07	-0.01	-0.08	0.12	-0.07
5. 講義での学習課題 (少ない)	0.14	0.09	0.12	-0.04	-0.29	-0.15	0.07
12. グループワークは (好き)	0.14	0.32	0.06	-0.09	0.09	0.07	-0.08
25. 人との会話 (好き)	0.08	0.02	-0.16	-0.05	-0.17	0.21	-0.14
36. 自分の性格は看護婦に似ているから	0.22	0.08	0.08	0.15	0.04	0.00	0.11
13. 学校の友人との関係 (良好)	0.03	0.03	-0.03	-0.05	-0.24	0.15	0.00
4. むずかしい授業科目 (少ない)	0.08	0.03	0.05	0.05	0.01	0.15	-0.06
3. やさしい授業科目 (多い)	0.14	-0.01	-0.02	0.02	0.02	0.03	-0.11
19. 予 (復)習 (できていない)	-0.04	0.33	-0.03	0.04	0.04	-0.01	0.15
35. 経済的なめんどうで選択した	-0.07	-0.13	0.15	0.00	0.09	-0.02	0.04
31. 家族や親戚など他人に勧められて	0.05	-0.02	-0.01	0.00	-0.04	-0.08	0.01
32. 自分の学力に応じて	0.00	0.26	-0.00	0.02	0.02	-0.01	0.13
22. 体調 (良好)	0.18	0.24	-0.01	0.00	0.00	0.10	-0.02
27. あなたの居住環境 (快適)	-0.01	0.19	0.11	0.05	0.00	0.06	-0.19
21. 家族との関係 (良好)	-0.14	0.01	-0.03	-0.15	0.07	0.07	0.23
17. 好きな教員 (多い)	0.15	-0.05	0.17	0.01	0.01	0.00	0.23
18. 好きな臨床指導者 (多い)	0.31	0.01	0.12	0.00	-0.00	0.00	0.09
23. アルバイト (しない)	0.08	-0.05	-0.04	-0.09	-0.14	-0.10	0.00
34. 看護学校の教育内容を調べて	0.07	0.21	0.03	0.39	0.09	0.09	0.00
寄与率 (計41.9%)	11.46	6.63	5.74	5.09	4.37	3.94	3.86

ていることも、意識を助長していると思われる。2年生にこの因子得点が低いのは個人で学習する機会が増え、学力に個人差が生じ、グループで一定のレベルまで学習を進めるには負担が生じるため、低くなっていると考えられる。因子2と3は3年生が一番高く、因子5・6が一番低くなっている。臨床実習は計画的に学習することで、実習の達成感や充実感、やり甲斐感を感じている。この体験が一層、学習に費やす時間を多くし、教員や臨床指導者から認めてもらうために、患者により看護を提供したいために意識を高めていると考えられる。その結果、自分自身の健康への振り返りや、快適な居住環境への努力、家族との関係への配慮ができていく生活をしていることがうかがえた。おおつか ひろこ、うつみ こう

精神看護学教育の一環としての精神病棟見学

宇佐美 覚

山本 勝則

金山 正子

内海 滉

(日本赤十字秋田短期大学) (秋田大学医療技術短期大学部) (山口大学医療技術短期大学部) (千葉大学)

キーワード 精神看護学・講義・見学・意識調査

はじめに：精神看護は理解が難しい教科の一つである。そこで患者の生活空間である病棟を見学することで講義の理解が深まると考えた。今回はそうした中で学生が精神病についてどのような意識を持っているかその意識が講義により変化するのかを調査した。

研究方法：対象は本学短期大学看護学科2年生80名であり、精神看護概論受講中である。講義の内容は、①精神病・病者、法律・歴史②入院形態③精神分裂病④躁鬱病⑤痴呆性疾患⑥薬・管理⑦レク・作業・生活療法・デイケア・社会復帰⑧は試験である。

調査方法は精神病に対する意識の質問紙を用いて、講義が一回終了する毎にグループで入院病棟を見学、終了後に質問紙調査を行った。質問紙には、演者の一人、金山が考案した23項目の質問紙を使用した。

分析方法は回答を5段階とし、「非常にそう思う」を5、「まあそう思う」を4、「どちらでもない」を3、「あまりそう思わない」を2、「まったくそう思わない」を1として数量化し、分散分析を行った。

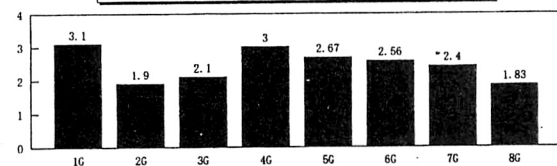
結果：グループ間で優位差が認められた問は、問1問6、問16、問21であった。「問1」の平均は2.43である。グループ別に見ると、1グループがもっとも値が高く、8グループがもっとも低い。2・3グループを除けば経過にしたがって減少傾向を示している。1グループに対する2グループの減少は急激であり、3グループに対する4グループの増加もはっきりしている。「問6」の平均は4.33であり、全体的に高い数値

である。グループ別に見ると、1グループがもっとも値が高く、8グループがもっとも低い。6・7グループを除けば経過にしたがって減少している。5グループに対する6グループの増加は急激でありその後のグループは減少している。「問16」の平均は2.18である。グループ別に見ると、1グループに対し、2グループが急激な上昇を見せている。また3グループが1グループと同じ数値で、6グループまで上昇し、7グループから減少している。「問21」の平均は3.24である。グループ別に見ると「問16」と同じ形態である。1グループに対して2グループの数値が上昇し、2グループに対し3グループの数値が減少している。3グループより4・5・6グループと数値が上昇し、6グループが最高点となっている。そして7・8グループの数値が減少している。

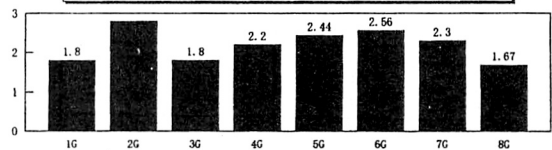
考察：結果より、学生は精神病に対し、講義により途中から誤った考え方が生じたのではないかと。そして講義が終了する時点において正しい知識を得ることにより修正されていったのではないかと思われる。また初めての精神病棟の見学であり、不安・緊張が強かったため、学生の受け止めた患者の対応・反応などによって違いが表れたものとする。したがって精神病に対する看護学生の意識構造の変化においては、講義という学習体験と見学においての患者が学生に与える影響により変化する。

うさみ さとる ・ やまもと かつのり
かなやま まさこ ・ うつみ こう

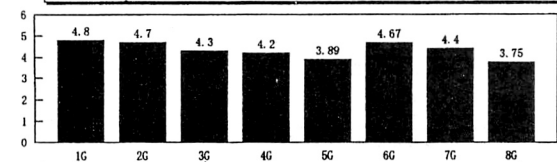
問 1 精神疾患患者は近づきにくい



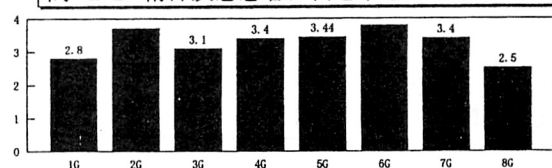
問 16 精神疾患患者は知能障害がある



問 6 精神疾患患者を支えることが必要である



問 21 精神疾患患者は何をするかわからない



看護学生の性の考え方・行動に影響を及ぼす要因の分析（その6）

○大森智美

村本淳子

内海滉

（山梨県立看護短期大学）

（東京女子医大看護短期大学）

（千葉大学）

キーワード：看護学生、性行動、性の考え方、性自認、性度

<はじめに>

看護学生の性の考え方、性行動に影響を及ぼす要因について、第58回の本大会から報告を行ってきた。

今回は、性の考え方・性行動に性自認の実態を追いかけて調査し、それらと性度がどのように関係しているかを明らかにすることを目的とした。

<方法>

調査対象は、都内の3年課程の私立看護短期大学の1年生97名、2年生81名である。

調査方法は、選択法の質問用紙を用い、アンケート方式で調査した。質問内容は、性行動に関する項目4項目、性自認に関する項目4項目、性の考え方に関する項目5項目とした。性度に関する項目は、性度測定尺度であるベンスケールに基づいて、安達圭一郎ほかにより開発された質問項目60項目を使用した。

分析は、性度の項目をバリマックス回転法により因子分析し、6因子を抽出した。性行動・性の考え方・性自認の13項目と抽出された6因子との関係を分散分析とt検定によって検討した。

<結果と考察>

回収率は1年生93名（95.9%）のうち有効回答87名（93.9%）で、2年生79名（97.5%）、有効回答79

名（100%）であった。

1. 性行動・性の考え方・性自認の実態

性行動の実態は1993年の全国平均と比較すると、性行為の体験、疑似性行為の体験は、一般大学生よりやや多かった。性の考え方では、「性について学習したい」、「学校で性について学習したい」の項目は、「はい」と「いいえ」の回答が、ほぼ同数であった。性自認については、女性であることを肯定的にとらえているという回答が多かった。

2. 性行動・性自認・性の考え方に関係する要因

性度の項目を因子分析した結果、表に示したように6因子が抽出された。この6因子を安達らの開発した3つの性度尺度から見ると、第1因子は全て男性性尺度、第2因子は全て女性性尺度、第3因子は全て中性性尺度、第4因子は女性性と中性性尺度、第5、6因子は3つ全ての尺度の項目から構成されていた。

性行動と各因子との関係は、性行為の体験がある、疑似性行為の体験がある、セクシャルハラスメントを受けた体験がある、の3項目について第1因子に関連が見られた。

性自認と各因子は全て第2因子と関連が見られた。「女性であることを恥ずかしく思う」という質問項目は第5因子に関連

が見られた。性の考え方と各因子は、いろいろな因子に分散して関連が見られた

因子分析の結果（因子負荷量表）

項目	f 1	f 2	f 3	f 4	f 5	f 6	因子名
力強い 判断力がある 決断力がある 統率力がある 指導力がある たくましく 行動力がある 行動心がある 立派である	0.70 0.69 0.69 0.68 0.66 0.63 0.63 0.61 0.60	0.15 0.07 -0.01 -0.00 0.23 0.08 0.23 -0.18 0.18	0.06 -0.19 -0.11 -0.03 -0.09 0.18 0.07 0.10 0.06	-0.11 0.05 -0.08 0.28 0.27 -0.20 -0.30 -0.13 -0.11	-0.06 0.14 -0.08 -0.08 -0.08 -0.03 -0.10 0.14 0.03	-0.03 -0.02 -0.11 0.28 -0.22 -0.07 -0.01 0.15 -0.01	積極性 因子
やさしい 親切である 思いやりがある 子供が わいがる 母性がある	0.14 0.27 0.18 0.06 0.28	0.72 0.67 0.66 0.65 0.58	-0.19 -0.19 -0.15 -0.07 -0.05	-0.08 -0.16 -0.04 -0.10 -0.07	0.02 0.17 0.14 0.05 -0.09	0.14 0.03 -0.04 -0.06 -0.28	やさしさ 因子
ふまじめである ふろくである 意気である 怠情である	-0.00 -0.06 -0.08 0.01	-0.10 -0.02 0.07 0.06	0.74 0.69 0.60 0.60	-0.08 -0.11 -0.18 0.12	-0.28 0.10 0.09 -0.15	0.08 -0.03 -0.28 0.15	ふまじめ 因子
もの静か 明るい ユーモアがある 快活である つまらない 変きようがある	-0.08 0.33 0.30 0.37 -0.06 0.23	0.17 0.16 0.18 0.23 -0.17 0.38	0.02 0.07 0.08 0.05 0.28 0.04	0.72 0.72 -0.65 -0.60 -0.58 -0.57	-0.06 -0.08 0.05 0.07 0.25 0.08	0.18 0.00 0.27 -0.01 -0.19 0.07	積極 因子
健全である 誠実である 正直である	0.17 0.18 -0.13 -0.11	-0.00 0.28 0.18 0.16	0.07 -0.23 0.14 -0.15	0.08 0.01 0.07 -0.36	0.61 0.52 0.54 0.51	-0.02 0.19 -0.02 0.27	まじめ 因子
誰に対しても 接する ことが 平等に できる 寛容である 寛大である	0.13 -0.29 0.19	0.01 0.24 0.19	-0.15 0.23 0.15	0.08 -0.00 -0.29	-0.01 0.39 0.05	0.56 0.41 0.48	安定 因子

累積寄与率 46.27 %

おおもりともみ むらもとじゅんこ うつみこう

Cornell Medical Indexによる看護短大生の健康調査

○森田 敏子

松永 保子

松田 好美

内海 滉

(岐阜大学医療技術短期大学部) (山形県立保健医療短期大学) (愛知県立看護大学) (千葉大学)

キーワード; CMI, 健康調査, 看護学生

はじめに

看護学生は過密カリキュラムのなかで医療や看護について学び、患者の健康問題に対処していくため、臨床現場というストレスフルな状態に身を置かざるを得ず、心身の健康が保ちにくい状態にある。

そこで、平成9年度の本学の女子学生を対象に、看護学生の健康状態をCornell Medical Index(以下、CMI)を用いて把握し、平成7年度、8年度調査と比較検討し、若干の知見を得たので報告する。

方法

調査は平成9年4月に行い、各学年毎に健康調査の趣旨を説明し協力を求め、自分の常識的な判断で普段の自然な気持ちで回答するように教示し、調査用紙を配付し、記入後に回収した。

データは単純集計にて各項目の出現率を求め、愁訴数の有意性はt検を行い、神経症領域分布は、金久、深町の判定基準に従って4領域に区分した。

結果

回収率は1年75名(100%)、2年74名(92.5%)、3年80名(100%)、全数229名(97.4%)であった。

1. 愁訴数区分および愁訴率

愁訴数区分で30以上の愁訴数を示したのは、1年生18名(24%)、2年生34名(45.9%)、3年生22名(27.5%)であった。

愁訴の出現率50%以上は4項目、40%以上5項目、30%以上13項目にみられた。30%以上を示したのは身体的、精神的項目それぞれに11項目があった。

身体的自覚症の有訴率で3学年共に50%以上の有訴率を示したのは、ANo2 遠い所の物を見る時眼鏡がいる、HNo97 月経のとき痛みを感じる、DNo46 間食をするくせがあるの3項目であった。

精神的自覚症の有訴率で3学年ともに50%以上の有訴率を示したのは、PNo175 他人の批評が気になるの1項目であった。この他2年生で、50%以上の有訴率を示したのは、PNo175 他人の批評が気になる、MNo153 決断がつきにくい、MNo154 助言してくれる人がいつもほしい、RNo191 暗いところで物が動いた音をきくとおびえる、の4項目であった。

2. 項目別愁訴数の比較

項目別の愁訴数を学年別に比較すると、1年と2年

において有意差があった項目はB呼吸器系、C心臓脈管系、D消化器系、G神経系、I疲労度、K既往症、L習慣、M不適応、N抑うつ、O不安、P過敏、Q怒り、などほとんどの項目であった。

2年と3年において有意差があったのは、A目と耳D消化器系、E筋肉骨格系、G神経系、M不適応、P過敏、R緊張であった。1年と3年において有意差がみられた項目は、A目と耳、C心臓脈管系、F皮膚、Q怒りであった。

平成8年と平成9年の1年生を4月の時点で比較すると、D消化器系、G神経系、H泌尿器、I疲労度、L習慣、M不適応、N抑うつ、O不安、P過敏、Q怒り、R緊張に有意差があった。

3. 項目別愁訴数の通学形態別比較

通学形態別で有意差があったのは、1年のK既往症と3年のD消化器系の2項目である。平成7年12月に有意差があったのはE筋肉骨格系、J疲労度、O不安であり、平成8年4月には有意差はみられなかった。平成9年4月になるとK既往症で有意差があった。

4. CMIの領域分布

神経症領域分布を深町らの判定基準に従って4領域に区分すると、80%の学生がI群とII群の正常範囲に位置しており、16%の学生がIII群に、2%の学生がIV群に位置していた。

考察

愁訴数30以上が情緒障害を判定する基準であり、2年生が高い愁訴数を示したが、この学年特有のものと思われ、心身のフォローの必要性が示唆された。

項目別愁訴数は通学形態により、D消化器系やO不案にみられ、家族と共に生活する自宅生と自炊を余儀なくされる下宿生に影響がみられたと思われる。

愁訴の出現率が30%以上を示したのは22項目あったが、眼鏡や月経痛、間食などの項目は、今日の社会では健康な領域に入ると判断されることから、これらの項目をCMIの質問項目から削除する等の検討が必要である。また、CMI開発から50年を経ていることから、質問項目の尺度化による因子分析等の手法による再検討が必要であると思われる。

もりたとしこ、まつながやすこ、
まつだよしみ、うつみ こう

受持患児の特性が自己評価に与える影響

— 小児看護実習をとおして —

○中 淑子、深田 高一、草野 美根子、寺田 敦子、吉田 恵理子、内海 凜
(産業医科大学) (佐賀医科大学) (千葉大学)

キーワード：臨床実習、小児看護、自己評価、受持患児特性

【目的】

看護学生の臨床実習評価に影響を及ぼすものとして、①学生の健康状態、②受け持つ患者の発達段階を始めとするさまざまな疾病状況や家族の背景、③学生が意欲的に臨床実習に取り組める教育的な環境などがあげられる。今回は効果的な実習指導と実習評価の関係を患児とその家族の特性に視点当てその関係について調査したので報告する。

【方法】

- 1) 対象：看護学科学生3年生57名。
- 2) 調査期間：平成8年1月。
- 3) 調査表：(2種より構成)

(1) 質問紙Ⅰ— 小児看護実習の実習課題として指定した項目の達成度を自己評価：6項目。その項目は、(A)実習目標の達成度、(B)看護過程の展開、(C)実習に取り組む姿勢、(D)看護技術に対する態度、(E)対象へのコミュニケーションの態度からなり、合計63の細項目により構成されている。

(2) 質問紙Ⅱ— 患児や家族の特性をみるものとして、1. 子どもの要因では①患児の性別②発達段階、③出生順位、④子どもの人数、⑤子どもの情緒の安定、⑥子どもの学生の受容、⑦学生とのコミュニケーション、2. 家族の要因では①家族形態、②母親の年齢、③母親の疾病理解、④母親の面会、⑤母親の就労、⑥母親とのコミュニケーション、3. 子どもの疾病的要因では、①疾病経過、②重症度、③入院回数、④受持期間、⑤安静度、⑥隔離の有無、⑦手術経験の有無、⑧身体的ケアの多さ、⑨精神的ケアの多さ、⑩指導的

看護の有無など合計23項目から構成されている。

4) 評価：質問紙Ⅰは、よい、から、わるいまでを5段階評定尺度で、実習終了時に自己評価させ、その後バリマックス回転による因子分析をおこなった。質問紙Ⅱでは各質問項目毎に学生が判断した群に区分し、因子分析で得た因子得点の平均値を群毎に算出し、t検定と比較した。

【結果・考察】

1. 因子分析：

累積寄与率56.09%にて4つの因子を抽出した。第一因子より順に看護過程展開因子、家族への態度因子、第一患児への態度因子、第二患児への態度因子とした(表1)。因子の内容は例年ほぼ一定であるが、順位は実習教育年度の重点指導目標に左右されるという傾向を我々は発見していて、平成8年度の重点指導目標に看護過程指導を当てたという経緯がある。したがって、第一因子に看護過程展開因子が位置しているのはその結果と考えられる。

2. 各因子と受持患児の特性との関係：

各因子と受持患児の特性の関係で有意差を示すものが多数見出されている(表2)。

子どもの要因では、発達段階、患児の学生受容、子どもとのコミュニケーションが有意差を認めている。家族の要因では家族形態、母親の年齢、母親の面会、母親の就労、母親とのコミュニケーションが有意差を認めている。さらに、子どもの疾病的要因では疾病経過、重症度、入院回数、受持ち期間、隔離の有無、指導的看護の有無が有意差を認めている。

表2 因子分析

N = 57

質問項目	f1	f2	f3	f4	因子命名
15 クラスタリングと解釈	.79	-.04	.08	-.16	看護過程展開因子
16 看護課題の抽出	.79	.07	.23	-.05	
13 追加情報の収集	.73	.13	.08	-.24	
3 問題解決過程を展開する能力	.71	-.03	.21	-.22	
14 一次アセスメント	.71	.15	.09	-.22	
60 家族への積極的な態度	.05	.88	-.09	-.01	家族への態度因子
58 家族への融通ある聞き方	.17	.87	.12	-.06	
62 家族への適切な言葉使い	-.02	.87	.12	-.02	
56 家族への積極的な姿勢	-.07	.86	-.01	-.09	
50 家族への礼儀正しさ	.04	.81	.26	-.00	
45 患児に対する関心	.02	.24	.72	-.16	第一患児への態度因子 (保育)
39 患児に安心への配慮	.39	.15	.69	.07	
47 患児に対する真摯さ	.19	.35	.67	-.15	
63 患児へのいとおしさ	.14	-.06	.67	-.13	
23 患児と楽しく遊び	.41	.12	.65	-.29	
51 何でも断るムードづくり	.17	.39	.32	.66	第二患児への態度因子 (医療)
2 患児と信頼関係を築く努力	.24	.06	.18	.85	
44 患児への看護効果の確認	.10	.25	.27	.84	
28 患児と良好な関係形成と維持	.33	-.12	.46	.57	
53 患児について主治医と相談	.38	.42	.49	.57	
寄与率 (%)	35.89	10.04	5.69	4.47	
累積寄与率 (%)	35.89	45.93	51.62	56.09	

表2 因子と受持患児特性の関係

項目	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子
子ども				
2 発達段階		*	*	*
6 学生の受容				*
7 子どもとのコミュニケーション				*
家族の要因				
8 家族形態		*	*	*
9 母親の年齢	*	*		
11 母親の面会	*		*	
12 母親の就労		*		
13 母親とのコミュニケーション	*	*	*	
子どもの疾病的要因				
14 疾病経過			*	
15 重症度	*			
16 入院回数	*			
17 受持期間			*	
19 隔離の有無	*			
23 指導的看護の有無				*

なか よしこ
ふかた こういち
くさのみねこ
てらだ あつこ
よしだ えりこ
うつつみ こう

* : t検定で有意差をみたもの

達成動機と職務満足度の要因分析 —看護婦の意識調査より—

○峯岸廣美

内海 晃

澤田道子

(横浜市衛生局)

(千葉大学)

(熊本大学医学部附属病院)

達成動機 職務満足度 看護婦

<はじめに>

人には、主要な4つの動機がある。達成の動機は、これだけはやり遂げようという目標を立て、それを達成しようとするものである。看護婦が、「より良い看護」という目標に到達しようとする意欲は、達成動機に当てはまる。一方、行なったケアに対する受けとめ方は、仕事に対する満足感の一部であり、目標を達成できた時や、その過程で感じる満足感でもある。

そこで、看護婦の達成動機と職務満足度を構成する要因と、その関連について検討した。

<研究方法>

質問紙による調査研究。

1. 調査対象 Y大学附属U病院の、管理職を除いた看護職員 358名

2. 調査内容

達成動機 McClellandらの「達成動機の基準」に基づき、上田、澤田らが作成した調査用紙を一部修正した。

職務満足度 Stampsが作成し、尾崎らが日本語訳した職務満足度調査を一部修正した。

対象者属性 年齢、部署配属年数、職業継続意志等

<結果及び考察>

1. 調査項目の得点を因子分析し、達成動機および職務満足度より、それぞれ6因子を抽出した。

達成動機 f1「進取の気性因子」f2「自己主体因子」
f3「行動実行因子」f4「自己建設因子」
f5「看護建設因子」f6「消極的因子」

職務満足度 f1「看護職員相互因子」f2「時間不足因子」
f3「自己能力発揮機会不与因子」
f4「看護評価因子」f5「看護自尊因子」
f6「他職種不満因子」

2. 看護婦継続継続意志の有無により、因子得点を比較したところ、看護婦を続ける人の方がやめる予定の人、その他の人よりも達成動機、職務満足度ともに高い傾向が認められた。このうち、達成動機のf1、f2、f4、f5、職務満足度のf2、f5、f6に有意差が認められた。

3. 所属部署が希望の所であるか否かにより、因子得点を比較したところ、希望部署でない方が、達成動機のf3は有意に低く、f2、f6は有意に高くなった。

4. 部署配属年数による分散分析で、4因子に有意差が認められた。f2「自己主体因子」は、年数が増えるに従って高くなるが、配属3年で一旦低くなった。これは、部署にある程度慣れ、自己の役割を模索している時期と考える。f4「自己建設因子」は、独自性を追求しようとする因子であり、年数が増えるに従って低くなった。経験が長くなるほど、チームの一員としての自己を重視するようになり、その部署のやり方、考えかたに同調している。f4「看護評価因子」f6「他職種不満因子」は、年数が増えるに従って高くなった。経験を積むことで、自分の看護に自信が持てるようになり、ほかの職種や病院全体にかかわる問題が見えてくるものと考えられる。

5. 部署配属年数による変化を、20代と30代とに分けて比較すると、f4「自己建設因子」は、30代では(+)の得点を保つが、20代では4年未満の部署経験ではほとんど(-)のままだった。f4「看護評価因子」は、30代は長期にわたり(-)の(つまりより高い)得点だが、20代では部署経験4年以上で(-)に転じていた。20代の看護婦が自分の看護に自信を持つようになるのは、配属後4年以上である。

6. 達成動機と職務満足度のいくつかの要因間に相関が認められた。f2「自己主体因子」と「看護評価因子」とに強い相関が認められた。主体的な行動は、自己あるいは第三者が、自分の看護実践力を評価しているという自信につながり、逆に、自分の仕事に対する自信が、主体性を高めると考える。f5「看護建設因子」とf5「看護自尊因子」とに強い相関が認められた。2因子は、どちらも看護を肯定的にとらえている点で共通している。f4「看護評価因子」はf2「自己建設因子」と負の相関が認められた。自分の独自性を追求する意識が高いほど自分の看護に対する評価が低いことが明らかになった。

(みねぎしひろみ うつみあきら さわだみちこ)

デモンストレーション教授法の看護技術習得に及ぼす効果（第3報）

— 達成動機測定尺度と実技テスト後のアンケートとの関係 —

○松永 保子

森田 敏子

松田 好美

内海 滉

（山形県立保健医療短期大学）（岐阜大学医療技術短期大学部）（愛知県立看護大学）（千葉大学）

デモンストレーション教授法、看護学生、達成動機

<目的>

看護の技術教育においては、「モデル」となる熟練した看護婦や教師の行動を見ることにより「観察学習」を行い、「モデル」に習って何度も体を動かし「感覚運動学習」を身に付け、その技術を獲得する方法が用いられてきた。

Winterbottom や McClelland の達成動機は、Lowell や French により、その高値者が課題の遂行成績において優れているということが見出された。学生の達成動機と学習意欲を向上させることが、看護技術を習得させることにつながると考えられる。

今回は、提示されたデモンストレーションを範として練習を重ねた後、実技テストを行い、その終了直後のアンケートならびに達成動機との関連を検討した。

<方法>

対象は、N看護短期大学の1年次97名。堀野緑・森和代（1991）による23項目7段階評価の「達成動機測定尺度」を実施した。

まず、「無菌操作」の基礎的な知識について1回90分の講義を2回行い、2回目の講義の1週間後に15分間のペーパーテストを行った。

そして、1人ずつデモンストレーションとしての無菌操作のビデオを見せ、同時にテープを聞かせた。10分間の練習の後、10分間の実技テストを実施し、25項

目を1項目1点で評価した。

さらに、実技テスト終了直後に16項目のアンケートに答えさせた。

<結果および考察>

達成動機23項目からバリマックス回転法により6因子を抽出した。第1因子を積極姿勢因子、第2因子を他人意識因子、第3因子を未来希望因子、第4因子を自我満足因子、第5因子を対社会因子、第6因子を地位成功因子とした。

各因子と実技テスト後のアンケートとの関連は、分散分析により、アンケートの16項目中「あなたはカストの中を汚染させずに扱えたと思いますか」の第1因子、「無菌操作を難しいと思いますか」の第4因子が危険率1%未満で、「あなたは鑷子を汚染させずに扱えたと思いますか」の第1因子、「あなたは医師が取りやすいように物品を渡せたと思いますか」の第5因子が危険率5%未満で有意であった。

積極的姿勢の強い群は、物品を汚染させずに扱えることと技術的なことに自信を持っており、社会的意識の強い群では、相手の意向を汲み効率よく行動する姿勢がみられ、自我満足の強い群では、技術的完璧を期する態度が窺えた。

まつながやすこ、もりたとしこ、まつだよしみ、うつみこう

鑷子を汚染させずに扱う

第1因子				
	変動	自由度	分散	分散比F
群間	5.83	2	2.92	3.41*
群内	80.41	94	0.86	
総	86.24	96		

カストを汚染させずに扱う

第1因子				
	変動	自由度	分散	分散比F
群間	8.68	2	4.34	5.26**
群内	77.56	94	0.82	
総	86.24	96		

医師に物品を渡す

第5因子				
	変動	自由度	分散	分散比F
群間	8.82	2	4.41	4.75*
群内	86.29	93	0.93	
総	95.11	95		

無菌操作の難易度

第4因子				
	変動	自由度	分散	分散比F
群間	8.74	2	4.37	4.91**
群内	83.72	94	0.89	
総	92.46	96		

*: p < .05
** : p < .01

*: p < .05
** : p < .01

高年齢者の作業遂行行動

キー入力課題を用いて(その2)

向井 希 宏

(中京大学 文学部)

【問題】 加齢と作業能力との関係について検討するため、これまで、組立作業やキー入力課題を用いて動作面の特徴について分析を進めてきた。今回は、キー入力作業遂行状況について、作業量や作業ミスの推移、入力ミスの特徴を明らかにし、技能の習熟レベルという観点から考察を加える。

【実験】 高年齢被験者は5人(A:79歳(男), B:75歳(女), C:70歳(男), D:60歳(女), E:62歳(男))である。いずれの被験者も、キー入力に関しては全くの未経験者であり、1人の被験者につき2時間程度拘束して、1回5分間のパソコンのキーボードからの入力を、10回連続で行わせた。被験者には、アルファベットがランダムに80文字示されている課題用紙を提示し、5分間にできるだけ多く、正確に入力することを求めた。指使い等の指示はせず、自由に入力させた。

【結果】 図1は、5人の被験者の試行にともなう入力ミス数の推移を示し、表1は、入力ミスの形態別発生数を被験者別に示したものである。比較のため、学生被験者の結果もあわせて示した。両群とも、10回の試行で技能習熟傾向は顕著であるが、入力文字数に1.5倍、ミス率では2倍以上の開きが存在する。ミスを形態別にみると、高齢者に余分なキー入力があったが、これは、入力の間違いをその場ですぐ訂正したため、若年者では、ミスが少ない分、ミスに気づかずそのまま作業が進められる。また、5人という少ない被験者数ではあるが、特に高年齢被験者間にきわめて大きな課題対応の個人差が存在するのに対して、学生被験者5人の作業経過は、比較的均一な傾向を示している。

表1 入力ミスの形態別発生数と群別ミス率の比較

ミスの形態	被験者					高年齢者					若年者				
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J					
入力ミス	2	2	4	0	0	3	5	8	0	1					
小計(%)	8(8.2%)					17(39.5%)									
余分入力	4	7	17	4	4	0	0	0	0	0					
隣接	10	4	14	3	3	1	1	1	3	1					
小計(%)	70(71.4%)					7(16.3%)									
入力なし	3	2	0	1	1	1	0	3	5	0					
抜け	0	0	4	0	0	0	0	7	0	2					
隣接	0	3	0	3	3	0	0	0	0	1					
行末他	20(20.4%)					19(44.2%)									
小計(%)	98(100%)					43(100%)									
合計	19	18	39	11	11	5	6	19	8	5					
平均入力数(ミス率)	114.2(2.0%)					178.4(0.9%)									

【考察】 今回の実験では、被験者全員に着実な技能習熟傾向がみられたものの、これまでの実験と同様、高年齢被験者間に大きな個人差の存在が明らかになった。その個人差は、入力速度を優先させるか正確さを重視するかという作業者の課題への取り組み姿勢や、性格的な違いによる面もあるが、入力する文字を確認後、キー入力を開始するまでの時間の長さ、入力ミスに対する考え方の違いにも依存している。高年齢者の場合、入力ミスをその場で訂正することに多大な注意が払われるようであるが、その他のミス形態には差は少ない。

高年齢者の行動の特徴として、これまでの研究から、

- (1) キー位置の把握と動作の協応が遅い
 - (2) 思い込みが激しく、思考の柔軟性に欠ける
 - (3) 意識としての作業のまとまり形成に時間を要する
 - (4) 積極的に指を動かしてみようとする姿勢に欠ける
- 等が指摘されているが、今回の高年齢者の行動にも、いくつかの共通点はうかがえる。特に(4)については、これまで、高年齢者は、『新しい課題へのとっかかりが悪い』と表現してきたことの行動の中身が、キー入力時間と入力ミスの訂正行動により一部明らかになった。しかし、さらに習熟が進んだ段階での行動の特徴についての検討も必要である。

【参考】

向井(1995): 日本心理学会59回大会発表論文集, 404.

向井(1996): 日本応用心理学会63回発表論文集, 81.

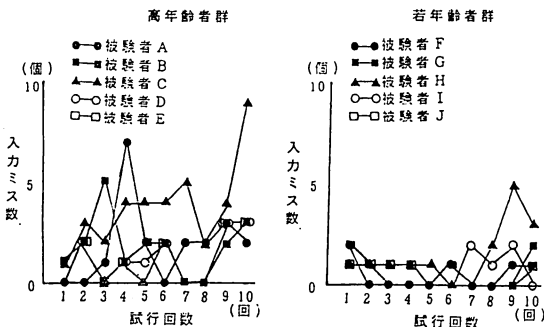


図1 被験者別入力ミス数の推移

職場ストレススケールに関する検討 (1)

—コーピング尺度を中心に—

○島津 明人

小杉 正太郎

(早稲田大学 文学研究科)

(早稲田大学 文学部)

Key Words : 職場精神衛生・職場不適応・職場ストレススケール・コーピング方略

【はじめに】

就業状況に原因して心理的不調を自覚する、いわゆる職場不適応者への対応では、彼らの職場ストレスとストレス反応の質を把握した上で、ストレス低減・緩衝要因としてのコーピング方略を操作することが有効であると考えられる。そこで本研究では、彼らが自覚する職場ストレスに応じて、適切なコーピング方略を選択できるよう援助する際の手掛かりとするため、次の2点に関する検討を目的とする。

- (1) 個人が自覚する職場ストレスと、個人が用いるコーピング方略との関連。
- (2) 個人が自覚する職場ストレスと、ストレス反応の低減に有効なコーピング方略との関連。

【方法】

調査対象 自動車メーカー研究所従業員 611 名、および建設会社従業員 636 名を対象に調査を実施し、合計 1170 名から回答が得られた。そのうち、回答が有効であった 878 名を分析対象とした (男性 753 名、女性 125 名：平均年齢 40.1 歳、SD=9.59)。有効回答率は、75.0%であった。

調査票 職場ストレススケール(島津・布施・種市・大橋・小杉, 1997)。本研究では、ソーシャルサポート尺度を除く、職場ストレス尺度(4下位尺度, 28項目)・コーピング尺度(5下位尺度, 31項目)・ストレス反応尺度(6下位尺度, 37項目)を分析に使用した。

調査時期 1997年1月中旬～2月中旬。

【結果】

まず、個人が自覚する職場ストレスと、実際に用いられるコーピング方略との関連を検討するため、職場ストレス4尺度とコーピング5尺度との相関係数を求めた(Table1)。その結果、量的負荷(過度の負担、過度の圧迫)を自覚した状況では、積極的な問題解決を行うとともに、行動・感情を抑制するコーピング方略の傾向が認められた。また、質的負荷(役割不明瞭、能力欠如)を自覚した状況では、問題から逃避したり、問題解決を諦めてしまい、積極的な問題解決は行わないコーピング方略の傾向が認められた。

Table 1 ストレッサー尺度とコーピング尺度との相関係数行列

職場ストレス	積極	逃避	援助	諦め	抑制
過度の圧迫	.277 ***	-.059	.076 *	-.060	.146 ***
役割不明瞭	-.196 ***	.237 ***	-.016	.216 ***	.073 *
能力欠如	-.332 ***	.245 ***	-.028	.266 ***	.017
過度の負担	.239 ***	.036	.035	.009	.168 ***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

次に、個人が自覚する職場ストレスと、ストレス反応の低減に有効なコーピング方略との関連を検討するため、「最も強く自覚しているストレス」と「最も特徴的なコーピング方略」とを要因とし、ストレス反応6尺度の合計得点を従属変数とする4×5の2要因配置分散分析を行った(Figure1)。その結果、交互作用は有意でなく、各要因の主効果のみが有意であった。コーピング方略の種類に関する下位分析の結果、直接的なコーピング方略はストレス反応を低減させることが、回避的なコーピング方略はストレス反応を上昇させることが明らかになった。

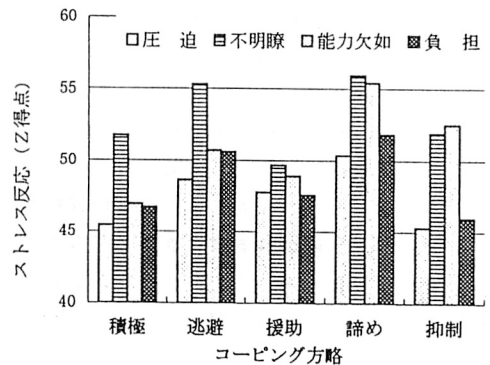


Figure1 「ストレス」 と 「コーピング方略」 によるストレス反応得点の比較

【考察】

職場ストレスのうち、特に質的負荷に原因して心理的不調を自覚している者に対しては、彼らのコーピングを回避的な方略から積極的な方略へと操作して、ストレス反応の低減を図ることが重要であると考えられた。

(しまず あきひと・こすぎ しょうたろう)

職場ストレススケールに関する検討(2)

—ソーシャルサポート尺度の改訂とストレス・ストレス反応尺度との関連について—

○種市康太郎
(早稲田大学文学研究科)

小杉正太郎
(早稲田大学文学部)

Key Words: 職場ストレススケール、ソーシャルサポート、ストレス緩衝効果

〔目 的〕 我々は、企業の従業員におけるストレス、ストレス反応、および関連要因(コーピング、ソーシャルサポート)を、同一質問紙内で測定できる職場ストレススケールを作成した(島津, 布施, 種市, 大橋, 小杉, 1997)。

そのうち、従来のサポート尺度は、サポート源別にサポート人数を選択する形式であった(種市, 布施, 島津, 大橋, 小杉, 1996)。これは簡便(5項目)かつ信頼性の高い($\alpha = .950$)尺度であるが、被調査者の一部に同一回答を繰り返す者がみられ、回答形式に問題があると考えられた。

そこで本研究では、(1)ソーシャルサポート尺度(以下サポート尺度と略す)の改訂と内的信頼性・交差妥当性の検討、(2)改訂版サポート尺度による、ソーシャルサポートとストレス・ストレス反応との関連の検討を目的とした。

〔方法〕 尺度の改訂: 従来のサポート尺度をサポート源別(会社内、会社外、家族)にサポートの入手可能性の程度を問う形式に改訂した。

調査対象: 自動車メーカー研究所A社および建設会社B社の男性従業員それぞれ1643名、960名に調査を実施した。そのうち、1問以上無回答のあった625名を除いたA社1262名(平均年齢38.1歳, $SD = 7.96$, 有効回答率76.8%)、B社716名(平均年齢40.5歳, $SD = 9.98$, 有効回答率74.6%)、合計1978名を分析対象とした。

調査票: 職場ストレススケール(島津他, 1997)。これは、ストレス尺度(4尺度, 28項目)、ストレス反応尺度(6尺度, 37項目)、コーピング尺度(5尺度, 26項目)、改訂版サポート尺度(5項目)の4尺度、および緩衝項目、虚偽項目各10項目より構成される尺度である。

調査時期: 1996年10月中旬～1997年4月中旬。

〔結果〕 (1)改訂版サポート尺度の内的信頼性・交差妥当性の検討: サポート尺度について、サポート源別および企業別に α 信頼性係数を求めた。その結果、会社内、会社外、家族の順にA社では0.905, 0.930, 0.910、B社では0.896, 0.926, 0.912と、いずれも高い値が得られた。その結果、本尺度は内的信頼性の高い尺度であることが明らかとなった。また、それが異なる企業においても認められたことから、交差妥当

性が保証された。改訂前にみられた同一回答への偏りは、改訂後には認められず、問題点は改善された。

(2)サポートとストレス・ストレス反応との関連の検討: サポート尺度とストレス尺度との相関係数を表1に、ストレス反応との相関係数を表2に示す。各相関は年齢の影響を除外した偏相関係数である。また、ストレス反応尺度のうち、抑うつ尺度は追加した尺度であるため、分析対象数は異なる。

改訂前の尺度による結果と比較し、次の4点が特徴的であった。①全体的には、サポートと、ストレスとの間に有意な負の相関が認められ、サポートを多く有しているほどストレス・ストレス反応は少ないという傾向がみられた。ただし、改訂後の相関係数は改訂前より大きい負の値を示した。②サポート源別には、職場内サポートと、ストレス・ストレス反応との相関が比較的大きい負の値を示した。③ストレス因子別には、役割不明瞭、能力欠如とサポートとの相関が比較的大きい負の値を示した。特に改訂後は、会社内のサポートが上記ストレスと強い関連を示した。④ストレス反応尺度については、サポート尺度と抑うつ尺度との相関が比較的大きな負の値を示した。

次に、サポートのストレス緩衝効果仮説を検討するため、年齢を共変量、ストレスとサポートを2要因、ストレス反応を従属変数とする共分散分析を行った。各因子の組み合わせによる72組の分析の結果、5組において交互作用が有意となった。そこで、単純主効果の検討を行った結果、5組共、逆のストレス緩衝効果仮説(限界効果仮説)を支持することが、交互作用から明らかとなった。それ以外の67組中61組の組み合わせにおいては、ストレス反応に対する直接効果仮説が支持された。

〔考察〕 結果より、次の3点が示唆された。①問題点を改善した改訂後のサポート尺度は、内的信頼性・交差妥当性が保証された尺度である。②サポートとストレス・ストレス反応との関連に関する結果は改訂前後で一貫し、改訂後は改訂前よりそれらの傾向が顕著に認められる。③サポートのストレス緩衝効果仮説については、改訂後も実証されず、仮説の再検討が必要である。

表1. サポート 時点とストレス 時点の偏相関係数

サポート 時点	ストレス 因子別時点				合計時点
	過度の圧迫	役割不明瞭	能力欠如	過度の負担	
会社内	0.035	-0.446 ***	-0.366 ***	-0.108 ***	-0.372 ***
会社外	-0.059 **	-0.213 ***	-0.215 ***	-0.111 ***	-0.240 ***
家族	0.036	-0.157 ***	-0.171 ***	-0.012	-0.131 ***
合計	0.003	-0.350 ***	-0.332 ***	-0.101 ***	-0.320 ***

表2. サポート 時点とストレス反応 時点の偏相関係数

サポート 時点	対人場面での						合計時点	抑うつ	合計時点2
	怒り	調理器具の不調	緊要性	雇 労	通 販	対人場面での			
会社内	-0.243 ***	-0.154 ***	-0.197 ***	-0.257 ***	-0.186 ***	-0.286 ***	-0.379 ***	-0.351 ***	
会社外	-0.171 ***	-0.128 ***	-0.205 ***	-0.182 ***	-0.145 ***	-0.234 ***	-0.284 ***	-0.281 ***	
家族	-0.135 ***	-0.083 ***	-0.127 ***	-0.095 ***	-0.004	-0.135 ***	-0.252 ***	-0.211 ***	
合計	-0.236 ***	-0.158 ***	-0.229 ***	-0.231 ***	-0.137 ***	-0.283 ***	-0.366 ***	-0.365 ***	

注) N=1978。ただし、表2の「抑うつ」および「合計時点2」についてはN=155。

初心運転者の運転態度の変化とその要因

松浦 常夫
(科学警察研究所)

初心運転者 運転態度 パネル調査 運転経験 性差

1 問題

初心運転者の運転態度（特に安全運転態度）の変化についての考え方には、いったん悪化して再び良好になる（Klebersberg, 1977）と経験を積むに従って安全性への考慮が減少する（Naatanen & Summala, 1976）の2通りがある。これらを検証した研究は少ないが、それによれば確かに免許取得後数年間の安全運転態度は不良になるようである（例えばForsyth, 1992）。しかし、再び良好になるとしたらそれはいつ頃か、安全運転態度というのは何を指すか、運転技能との関連性は？等、課題は多い。

そこで本研究ではこういった問題を解決するために、初心運転者の免許取得後5年間の運転態度の変化を縦断的方法（パネル調査）によって調査し、また運転態度の変化が性・年齢等によってどう異なるかを調べた。

2 方法

被験者： 自動車普通免許取得者234名を対象に、免許取得後5年間に5回の質問紙調査を実施した。対象者のうち男性は106人で18-19歳が62%を占めた。女性は128人で18-19歳の割合は51%であった。

手続き： 1回目は運転免許試験場で集団式質問紙調査をし、2～5回目は各々免許取得半年後、1年後、2年後、5年後に郵送調査を実施した。有効回収率は初回が100%、それ以後は60～70%。

質問内容： 態度の尺度として各調査時に共通して質問したのは不安感（5項目、3段階評定）、危険性評価（10項目、5段階評定）、免許・運転の意見（7項目、4段階）、不安全運転行動の頻度（7項目、4段階評定；ただし初回は調査せず）であった。また、各調査時に共通して性別、年齢、運転頻度、運転目的、運転車種を質問し、初回には家族の車保有状況、同乗経験等を質問した。

3 結果

3.1 態度の各尺度の因子分析

各尺度の項目数が比較的多かったこととその意味を明確にするために因子分析を行った。因子分析は各調査時ごとではなく、5回の結果をプールして（つまり、被験者数は5倍になる）実施した。その結果、各態度尺度から共に3個ずつの因子が得られた。以後の運転経験に伴う態度変化の分析はこの因子得点を用いた。

3.2 運転経験年数以外の説明要因の抽出

運転経験（免許取得後5回の調査時期）に加えて、被験者属性や間接的運転経験等の要因も態度に影響する可能性がある。そこで態度尺度の各々について、各調査時ごとに重回帰分析を行った。その結果、態度を説明する要因として、性、年齢、運転頻度、レジャー目的の運転、使用車種としての乗用車が有意であることが多かった。ただし、最後の2つの変数と運転態度との関係は因果関係というより、単なる相関関係であった。

3.3 運転態度に影響する経験年数、性、年齢の要因

態度尺度を被説明変数とし、経験年数（5時期）を繰り返しのある説明変数、性（男・女）と年齢層（若い・年長者）を繰り返しのない説明変数とした分散分析を各態度尺度ごとに実施した。その結果は以下の通り。

・運転経験が影響する態度

不安感； 操作不安と他車不安（初心ほど不安）
危険性評価； 現状追認違反（初心ほど危険と評価）
免許・運転意見； なし

不安全運転頻度； 不注意運転（初心ほど頻度が少ない）

・性が影響する態度

不安感； 操作不安と他車不安（女性が高い不安）
危険性評価； 現状追認違反（女性ほど危険と評価）
免許・運転意見； 車志向態度（男性ほど車志向）

不安全運転頻度； 技能未熟運転（女性ほど未熟）と不注意運転（男性ほど不注意運転が多い）

・年齢が影響する態度

不安感； なし
危険性評価； 現状追認違反（年長者ほど危険と評価）
免許・運転意見； なし

不安全運転頻度； 不注意運転（若者ほど多い）

・2次交互作用は経験と年齢で見られた（下図参照）。

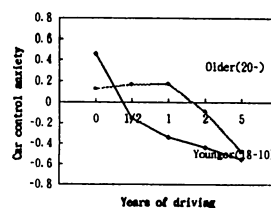


図 運転経験別と年齢別にみた運転操作不安

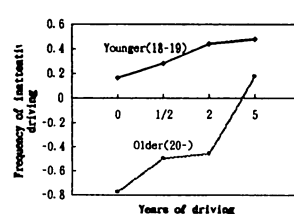


図 運転経験別と年齢別にみた不注意運転行動頻度

(まつうらつねお)

運転時の感情コントロールが交通事故・違反に及ぼす影響

内山伊知郎

(同志社大学文学部)

キーワード：感情、コントロール、交通事故、違反

運転者は、運転中に感情的な事態におかれることがたびたびある。その感情が優勢な運転行動様式になると交通環境に不応となり、事故に結びつく原因になると考えられる。本研究では、運転場面での感情とそのコントロールが、交通事故、違反に及ぼす影響を検討した。

方法

被調査者 運転免許を有するJAF会員961名(男性631名、女性330名)。

質問紙

(1) 運転に関する意識： 運転場面における「安全性」、「他者配慮」、「性急さ」に関する意識を調べるために、4段階評定による6項目からなる質問紙(内山1995)を使用した。

(2) 運転場面における感情： 内山(1996)から、運転場面において生じる4種類の感情を測定する質問紙を作成した。「怒り」、「あせり」、「恐怖」、及び「罪悪感」について、各2項目、合計8項目を設定し、5段階評定で回答を求めた。

(3) 運転時の感情コントロール： 運転中に生じる負の感情のコントロールに関すると思われる6項目を設定した。

手続き 返信用封筒を同封した郵送法にて質問紙を配布・回収した。

結果と考察

運転に関する意識項目の分析

因子分析の結果、3因子が確認された。そして、「安全性」が高く、「性急さ」が低い運転者は、違反が少なく、また、「他者配慮」が高い運転者は、違反が少ない傾向があった。

運転場面の感情に関する項目の分析

各項目の分散分析の結果、「ウインカーを出さずに割り込んできた車には腹が立つ。」、「運転中、マナーの悪い車には、怒りを感じる。」、「渋滞していると、いそがなくてとはあせる。」、「遅い車の後ろにつくと気持ちがあせる。」などの項目の評定値が高い運転手は、違反の経験が有意に多い。

次いで、因子分析を行った結果、内山(1996)の4因子が確認された。各因子を代表する項目の平均値について、事故、違反経験別に分散分析を行ったところ、

違反経験について、怒りとあせりの感情に統計的有意差が認められ、怒りやあせりの感情を感じる程、違反が多いことが明らかになった。

運転場面の感情のコントロールに関する項目の分析

各項目の分散分析の結果、「いらいらを発散するためにスピードを出すなどして気分をほらす。」項目の評定値は、事故や違反経験の多い運転者が高い。また、「窓を開けるなど、新鮮な気持ちになるようにする。」項目は、反対に、事故、違反経験の多い運転者の評定値が低い。

感情のコントロールに関する項目について因子分析を行ったところ、2因子が抽出された。第1の因子は、「いらいらを発散するためにスピードを出すなどして気分をほらす。」項目に代表される「イライラ発散」因子である。第2の因子は、「窓を開けるなど、新鮮な気持ちになるようにする。」項目に代表される「気分転換」因子である。

これらの因子について、事故、違反経験別に分散分析を行ったところ、ともに統計的有意差が認められ、事故や違反が多い運転者ほど、いらいらを直接発散し、気分転換をしていないことが明らかになった。

感情コントロールの形成に関する検討

感情コントロールの形成に関する要因の検討を行った。その結果を図1に示した。図から、「イライラ発散」は、性急さの意識からあせりの感情を通して生じ、また、性急さの意識も直接高い負荷をもっていることがわかる。他方、「気分転換」は他者配慮や安全性の意識から罪悪感の感情を通して生じる傾向が見られる。

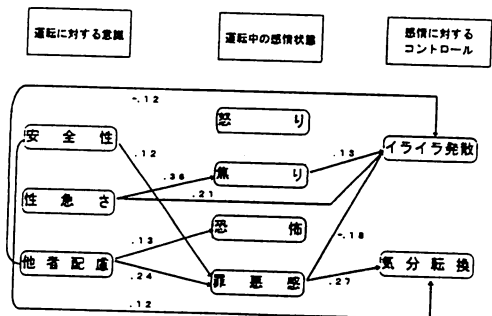


図1 感情コントロールの形成過程

(本調査は、JAF中部本部交通安全実行委員会のもとで行われた。)

(うちやま いちろう)

勤労者のメンタルヘルスと職場環境 (3)

筆 石 礼 子

(岩手県立盛岡短期大学)

キーワード コンピュータ機器利用者 SDS コンピュータ不安 職場満足度

目的 コンピュータ機器利用者のメンタルヘルスを SDS、コンピュータ不安尺度、職場満足度尺度を使用して検討する。

方法 調査は平成7年6月から12月に、4企業の従業員を対象に無記名で行われた。アンケートの内容は基本的属性、健康習慣・生活意識、SDS、コンピュータ機器利用状況、コンピュータ不安尺度、職場満足度尺度の計95項目から構成されている。

結果 (1) 対象者とコンピュータ機器利用: 回収数292中、欠損値のない260のデータを分析の対象にした。性別と年齢構成は、20代まで53人(男17、女36)、30代84人(男女同数)、40代60人(男21、女39)、50代以上63人(59、女4)で、50代以上は殆ど男で占められていた。コンピュータ機器の利用状況は毎日使用する者159人(61.2%)、1週間に一度位・1か月に一度位・使用しないを便宜的に非使用としてまとめると101人(38.8%)だった。毎日使用者159人中、男は70、女は89で女がやや多く、両者の1日平均使用時間は3時間だった。なお使用するコンピュータ機器の種類(複数回答)は、オンライン端末54.1%(男38.6、女66.3)、ワープロ43.4%(男47.1、女40.4)、パソコン37.7%(男57.1、女22.3)オフコン29.6%(男22.9、女34.8)、その他11.9%の順であった。

(2) SDS: 性、コンピュータ使用の有無で差を認めなかったが、年齢で20代まで(40.9)が50代以上(37.9)に比し有意に得点が高かった(図2)。

(3) コンピュータ不安: 総合得点で女(56.5)が男(52.2)より、また年齢で40代以上(56.5)が20代(52.4)、30代(53.0)よりも有意に得点が高かった(図3)。コンピュータ使用の有無別で差はなかった。

(4) 職場満足度: 性、コンピュータ使用の有無別で差を認めなかったが、年齢で50代以上(80.9)が20代(70.9)、30代(72.0)、40代(75.9)のいずれに比しても、また40代も20代に比し有意に得点が高かった(図4)。

考察 コンピュータ機器利用者のメンタルヘルスについて3つの測度を使用して評価したが、機器利用の有無ではっきりした結果は得られなかった。3つの測度とも年齢で差がみられ、若い世代ではSDS得点が高く、高年者ではコンピュータ不安が高い。しかし、コンピュータ不安は女でも高く、若い世代に女の占める率が高いことと、若い世代の職場満足度の低さを考えると、コンピュータ機器利用者のメンタルヘルスに関わって、業務内容、利用の方法等の吟味が必要である。本研究は、中屋重直(岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学教室)との共同研究の一環である。

(しずくいしれいこ)

図1 対象者の年齢構成

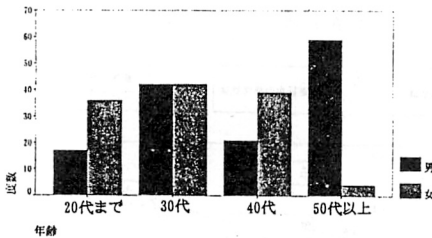


図2 SDS総合得点の平均値

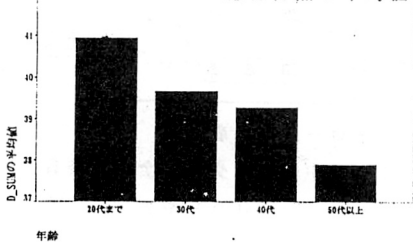


図3 コンピュータ不安総合得点の平均値

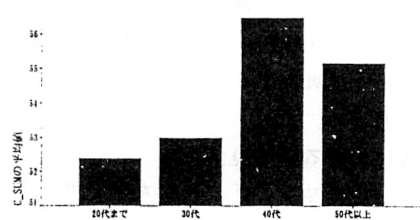
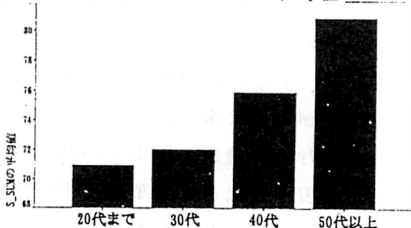


図4 職場満足度尺度の平均値



家庭男性の生活満足感を構成する影響要因について

松本 洸

(日本大学芸術学部)

キーワード：生活満足感, 家庭, QOL

研究の目的

生活満足感として意識に反映される場合の構成要因は、それぞれの立場によって異なる。その中でも比較的どの立場の者にもあげられる構成要因として、人間関係要因、時間要因、経済要因、自己概念要因などがある。筆者は、これまでに地域住民の生活満足感(日本心理学会第39,44,47回大会発表論文集)および大学生の学生生活充実感の要因分析(日本心理学会第58回大会発表論文集)について調査してきた。筆者のめざす研究課題としては、QOL(クオリティ・オブ・ライフ)を構成する要因を、狭義のQOLではなく一般の生活者(もともとQOLは一般生活者を対象に出された概念である)の意識要因としてどう構造化すべきかをテーマにしている。

今回はその観点に立って、家庭男性(既婚男性)の生活満足感(生活充実感や幸福感も含む)を構成している影響要因を構造的に明確化しようとするものである。このテーマは、昨年同学会第64回大会一コマで発表した継続研究で、昨年は「家庭婦人」を対象に発表した。

研究の方法

生活満足感を規定する要因と構造を知るために、2通りの方法での調査設問を作成し、家庭男性に調査した。第1の設問方法は、あらかじめ用意した生活項目について評定段階(4段階評定)で満足感を問うた設問である。生活項目として、地域環境、家庭環境、人間関係、経済環境、個人行動などの36項目を用意し、これに加えて、幸福感について評定設問を用意した。第2の設問方法は、文章完成法による自由反応語を引き出すための設問である。文章完成法の指示文は、(1)わたしの家庭生活をより充実させるために、.....を充実させたい(を欲しい)、(2)わたしの家庭生活をより充実させるために、.....を自分で得たい(を持ちたい)、(3)わたしの個人生活をより充実させるために、.....を充実させたい(が欲しい)、(4)わたしが幸せを感じる時は、.....の時です(です)、の4通りとし、反応語はそれぞれの指示文について4語以内とした。

調査対象は20歳以上の家庭男性166名で、調査実施は平成8年2月～平成9年3月におこなった。調査方法は、面接手渡しの後には郵送による回収とした。

集計・分析は、評定段階法の設問については単純クロス集計の他に、生活項目について因子分析と重回帰分析をおこなった。因子分析は、セントロイド法・因子軸の回転はバリマックス法でおこない、生活項目36項目を説明変数とした。重回帰分析は、外的変数を幸福感項目とし、説明変数を因子分析で得られた因子得点とした。

文章完成法の取りまとめは、学生4名(男女2名ずつ)によるK-J法を用いた反応語構造図の作成をおこなった。

結果と考察

生活項目の因子分析の結果、固有値1以上の因子が11因子(累積寄与率62%)抽出された。因子解釈の結果、「F1:家庭生活」、「F2:仕事」、「F3:近隣の便利さ」、「F4:心のゆとり」、「F5:経済性」、「F6:達成行動」、「F7:自由時間」、「F8:友人」、「F9:町の住みやすさ」、「F10:高級志向」の因子名称がつけられた。これらは、家庭男性がもっている生活満足感に結びつく意識分野と考えてよく、これらの因子に対する因子負荷量の高い項目は生活満足測定として利用できる項目と考えられる。

これとは別の視点から、幸福感を自己評価した項目を外的変数(4段階評価点)にし、上記の因子分析の各因子の因子得点を説明変数とした重回帰分析をおこなった。生活分野としてQOL尺度として必要な分野を明確化するための分析である。重回帰分析の結果、重回帰係数の高い因子は、「F4:心のゆとり」、「F1:家庭生活」、「F2:仕事」が有意に識別力のある因子であった。幸福感に強くかかわる生活要素であることがいえる。

さらに、家庭男性の生活意識構造を図式化するために、K-J法による要因マップを描いてみたが、『家庭生活を充実させる』には上述の要因以外に「自己啓発」、「健康」、「住宅と住生活」、「老後の準備」が指摘され、前回の家庭婦人では「友人・地域のつながり」、「家事」の要因があったが家庭男性にはない。『個人生活を充実させる』では、「余暇の時間」が個人生活充実の鍵になっている。家庭婦人では「家族の自立」が鍵になっていたが家庭男性にはこの意識要因は出てこない。『幸せを感じる』では、「自己達成感」、「休憩のひととき」が幸せの意識要因が家庭男性には大きく影響している。家庭婦人に強かった「自己存在感」、「一人のとき」の要因は、家庭男性では見当たらないことも興味深い結果だ。

留学生の生活適応に関する研究

— 自己開示, 孤独感を通して —

○ 森下 高治 永田 雅子¹⁾

(流通科学大学) (大阪外国語大学留学生教育センター)

キーワード: 留学生, 自己開示, 孤独感

問題) 95年, 96年に続き, 対人関係にかかわる自己開示の問題を留学生を対象に分析する。問題点は, 以下の通りである。1. 彼らの日常生活での自己開示の程度はどれほどか。2. 孤独感, ソーシャル・サポートについてもどの程度か。3. 日本人学生との比較を通して順次, 検討する。

方法) Jourard, S.M., 加藤を参考に9領域, 3項目, 4対象からなる開示調査票を作成し, 96年12月-97年1月にかけて調査を実施した。

今回の分析対象は, R大学留学生男子20名, 女子21名, 計41名と日本人学生男子38名, 女子29名, 計67名である。開示調査票に加え, 孤独感とソーシャル・サポート尺度の記入を求めた。

なお, 孤独感の測定は, 落合(1983)のLS0を中心にUC LA-LSの改訂版も参照し, 30項目からなる調査票を作成した(森下, 1996)。

結果と考察) 1. 留学生の自己開示性について

表1. から領域別では, 男女とも趣味・関心が最も高く, 2.24, 2.49を示す。次に, 学校生活が2.00, 2.13と高い。逆に, 開示が少ない領域は, 金銭が1.65, 1.60, 異性対人が1.82, 1.79で男女ともほぼ同じ傾向を示す。また, 特徴のある項目は, 趣味・関心の4.好きな, 嫌いな食べ物, 5.好きな映画, 音楽などでこれらの開示は2.59-2.28と大である。一方, 金銭の23.経済状態, 24.差し迫ってのお金は, 1.67-1.46で開示は少ない。さらに, 男女とも総開示量は差異がないことが明らかになった。

2. 留学生の孤独感, ソーシャル・サポートについて

表3に示すように, 孤独感尺度の対人理解・信頼性は, 男子が414.7(72.06), 女子は400.0(39.37)で有意な差異($P>.05$)は認められなかった。

これに対して, 個別・独自性は男子が, 277.8(78.30), 女子は370.7(60.84)で男子の方が得点は低く, ひとりぼっち感が逆に高く, 強い結果($P<.001$)が見いだされた。また, 項目別ではQ10, 14, 21の項目が, 男子は女子より低く, 個別・独自性傾向が強いことが明らかになった。これに対して, 対人理解・信頼性のQ17, Q27, Q29, Q30の項目は, 女子が男子より高く, 対人理解がより強いことが示された。Q12は女子の方が男子より得点が低く同じ考えの人は世間にいるとの肯定的な反応を示した。ソーシャル・サポート尺度の全体得点は, 男女とも殆ど同じで差異はない。また, 対人関係尺度は, 地域での対人関係が男子(3.35)より女子(4.10)の方が高く, 逆に, 男子は地域社会へのとりこみがよい。

表3 留学生の男女別孤独感尺度とソーシャル・サポート尺度の結果

孤独感尺度 / 対人理解・信頼性	個別・独自性	SS尺度 / サポート得点
男性 N=20	414.7(72.06)	277.8(78.30)
女性 N=21	400.0(39.37)	370.7(60.84)

表4 日本人学生の男女別孤独感尺度とソーシャル・サポート尺度の結果

孤独感尺度 / 対人理解・信頼性	個別・独自性	SS尺度 / サポート得点
男性 N=38	425.9(60.44)	304.5(64.98)
女性 N=29	461.8(44.86)	304.4(63.01)

3. 日本人学生との比較について

日本人学生の自己開示性の総開示量は, 男子が2.01, 女子は2.12で留学生よりわずかに大, また, 留学生も同じであるが, 女子は男子より開示量は多い。8領域のなかで, 性格, 同性対人, 異性対人は, 日本人学生がより開示傾向にある。逆に, 意見・態度は留学生の方が, 話す傾向にある。また, 金銭は日本人学生の方が開示傾向にあるが, 数値は低く, 8領域のなかでは留学生の開示量は最も少ない。

孤独感の対人理解・信頼性は, 日本人学生の男子は, 425.9(60.44)で, 女子は461.8(44.86)を示し, 女子の方が高く, 対人理解が強いことが明らかになった($p<.05$)。一方, 個別・独自性は男子が304.5(64.98), 女子は, 304.4(63.01)で差異は認められなかった($p>.05$)。

表2, 表4参照。

表1 留学生の男女別開示領域別結果

開示領域	身体・外観	趣味・関心	学校生活	性格	意見・態度	同性対人	異性対人	金銭	家庭・家族	総開示量
男性 N=20	1.89	2.24	2.00	1.92	1.92	1.84	1.82	1.65	1.93	1.91(8.79)
女性 N=21	1.94	2.49	2.13	1.94	2.01	1.92	1.79	1.60	2.09	1.99(8.82)

表2 日本人学生の男女別開示領域別結果

開示領域	身体・外観	趣味・関心	学校生活	性格	意見・態度	同性対人	異性対人	金銭	家庭・家族	総開示量
男性 N=38	1.97	2.34	2.08	2.16	1.64	2.07	2.15	1.98	1.68	2.01(8.77)
女性 N=29	2.09	2.54	2.25	2.27	1.54	2.27	2.26	1.87	1.98	2.12(8.79)

大学生の価値観の様相

M・F尺度による検討

橋本泰子

(城西大学女子短期大学部)

キーワード* 大学生 価値観 M・F尺度
 目的* 近年、技術進化による情報量の増加と共に人間行動の多様化、空間、時間的拡大が認められる。急速な社会変容は、青年の価値観にも影響を与えている。その特徴として、自閉、主体性志向の増大(白井1992)男女間における平等志向(見田1985)が挙げられる。今回、M・F尺度における高低によりどのような価値観に相異が認められるか検討した。
 対象と方法* 首都圏の4年制、短大生の男子135名、女子265名にPAQ(The Personality Attributes Questionnaire:Spence&Heimreich,1978,竹内,1996)を118年10月に実施。男子のM尺度の $\bar{X}=3.04, SD=0.56$ 、女子のF尺度の $\bar{X}=3.6, SD=0.39$ 。Xから1SD±の対象を選択しM高群(35名平均年齢=21.2歳)、M低群(22名平均年齢=21.3歳)、F高群(21名19.4歳)F低群(24名19.0歳)の4群に区分した。質問紙は職業、結婚、教育、家族、社会、宗教の6領域に関する67項目からなり、5段階法で評定された。
 結果と考察* 有意差の認められた項目を表に示す。
 1、M高群*F低群15項目(22.4%)に有意差。表1
 結婚:女子は、結婚相手に地位、家柄や共感性、人生観の一致など高い理想を求めている。
 家族:女子は、夫婦仲良く暖かい家庭像に賛成。
 職業:女子は、「女は家」古いに賛成。雇用条件の整っている企業へ就職希望。
 社会:差別を受ける、「好きな国で生活」女子賛成
 教育:女子は「子どもに理想を押し付けない」賛成
 「子どもを塾に行かせない」反対。母親的発想。
 F低群は結婚相手の一体観を求める他者志向。社会進出を肯定する男女平等型。しかし、子どもの教育は従来よりエリート志向が認められた。
 2、M低群*F高群7項目(10.5%)に有意差。表2
 宗教:男子は、信仰よりも自分を高める。宗教団体を、利益、社会組織と認識している。
 職業:男子は、興味と職業の一致に賛成。女子は、女性性を生かす職業に就くことに反対。
 結婚:女子は妻が夫に従うに強く反対を表明。
 M低群は、興味と職業の一致を要望。宗教に頼らず自立志向。F高群は、職業は平等志向で妻が夫に従う保守伝統型にも反対である。
 3、F高群*F低群7項目(10.5%)に有意差。表3
 低群は、教育の「子どもを塾に行かせない」に反対。他の4領域に賛成している。
 結婚:相手の地位、家柄、理解。友人の来る家庭。
 家族:寛げる家庭。職業:興味と職業の一致。
 社会:女子は差別を受けることが多い。
 低群は、結婚相手の属性を重視。職業選択は男性と同じ基準。子どもには、エリートコース志向。
 4、M高群*F高群6項目(9%)に有意差。表4
 低群は、職業の「女性性を生かせる職業に就く」に反対。以下の項目に賛成をしている。
 職業:友人の評価を気にする。教育:子どもを厳しく育てる。理想を押し付けない。宗教:信仰よりも自分を高める。結婚:友人が遊びに来る家庭。低群は、職業に関して平等志向でありながら体面を気にする。宗教に対しては、自立志向。子どもの教育は両面的で、やや自信のなさが認められる。
 5、M高群*F高群4項目(6%)に有意差。表5
 男子は、興味と職業の一致に賛成。
 6、M低群*F低群1項目(1.5%)に有意差。表6
 要約: M、F尺度により男女4群に区分し価値観を比較した。M高群とF低群間に多く相異が認められた。F低群は、結婚は他者志向。職業は平等志向。子どもの教育は、エリート志向。M低群は、職業選択の時、体面を気にする。教育は、両面的。宗教は、自立志向。自信の無さが認められた。F高群は、職業、結婚、教育に関して、平等志向が認められた。なお、男子とF低群は、職業と興味的一致を望み、遊び感覚の延長で

あろう。これは、年功序列、終身雇用制度が崩れてきていることに対応した現象かと考えられる。
 結論、M、F尺度の高低、すなわち自己同一性のありようが価値観に影響を及ぼすものと考察される。

表1 M高群:F低群間で有意差(t検定)の認められた項目

項目	M高群		F低群	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
結婚 地位、家柄のよさで結婚相手を選ぶ	1.9	1.01	3.1	1.19***
友達か遊びに来る家庭	3.8	0.93	4.8	0.41***
いろいろなことに共感できる人	3.9	1.20	5.0	0.26**
よく理解しあう	4.3	0.95	5.0	0.00*
人生観の一致する人	3.6	1.19	4.4	0.81*
家族 家族は多いほうがよい	3.1	0.73	3.9	1.22**
仲良く暮らす	4.5	0.86	5.0	0.00*
寛げる家庭	4.4	0.96	4.9	0.26*
職業 女は家という考えは古い	3.8	1.00	4.5	0.91*
雇用条件の整っている企業に就職	3.9	0.85	4.6	0.73*
社会 女性は差別を受けることが多い	3.5	0.77	4.3	0.70**
海外に行き、好きな国に住む	3.7	1.09	4.9	0.90*
教育 子どもに理想を押し付けない	3.6	1.00	4.6	0.61***
子どもを塾に行かせない	3.2	0.82	2.6	0.62**
宗教 宗教に良いイメージない	3.3	1.29	4.2	0.86*

表2 M低群:F高群

項目	M低群		F高群	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
宗教 信仰するより、自分を高める	4.7	0.75	3.8	0.75**
冠婚葬祭以外、宗教は必要ない	3.8	1.21	2.8	0.75*
宗教団体は、利益団体と同じ	3.8	1.12	2.8	0.87*
職業 興味と職業を一致させる	4.0	1.11	3.0	0.63*
女性性が生かせる職業に就く	2.8	1.01	1.9	1.14*
結婚 結婚したら妻は夫に従う	2.8	1.26	1.8	0.75*
教育 子どもは厳しく育てる	3.8	0.10	2.6	1.11**

表3 F高群:F低群

項目	F高群		F低群	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
教育 子どもを塾に行かせない	3.5	0.67	2.6	0.62**
結婚 地位、家柄のよさで選ぶ	1.8	0.98	3.1	1.19**
よく理解しあう	4.5	0.67	5.0	0.00**
友達か遊びに来る家庭	3.9	0.11	4.8	0.41*
家族 寛げる家庭	4.6	0.49	4.9	0.26*
社会 女性は差別を受ける	3.4	0.66	4.3	0.70**
職業 興味と職業を一致	3.0	0.63	4.1	0.83**

表4 M高群:M低群

項目	M高群		M低群	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
職業 就職、友人の評価が気になる	2.3	0.99	3.2	1.03**
女性性を生かせる職業に就く	2.2	0.90	2.8	1.01*
教育 子どもを厳しく育てる	3.1	0.85	3.8	0.10*
子どもに理想を押し付けない	3.6	1.00	4.3	1.04*
宗教 信仰よりも、自分を高める	4.2	0.79	4.7	0.75*
結婚 友達か遊びに来る家庭	3.8	0.93	4.4	0.60**

表5 M高群:F高群

項目	M高群		F高群	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
結婚 いろいろなことに共感できる人	3.9	1.20	5.0	0.26*
子育て男性参加する必要なし	1.8	0.80	1.5	0.73*
家族 家族が多いほうがよい	3.1	0.73	3.9	1.22*
職業 興味と職業の一致	3.7	0.84	3.0	0.63*

表6 M低群:F低群

項目	M低群		F低群	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
結婚 地位、家柄よさで選ぶ	2.1	1.20	3.1	1.19*

***p<.001 **p<.01 *p<.05 はしもと たいこ

若者の伝統芸能に対する印象 その5

○大久保 康彦

玉井 寛

(國學院大学栃木短期大学)

(日本精神技術研究所)

「キーワード」 若者、歌舞伎、関心

はじめに

これまで、若者の日本古来の伝統芸能に対する印象や態度をとらえるために、過去十四年間、さまざまな角度からの調査分析をすすめてきた。本学会においても、その報告を二回にわたっておこなっている。

その結果は、歌舞伎鑑賞導入に際して、当今の若者の感覚や関心にマッチした演目の選定や鑑賞直前の刺激の与え方などの配慮と工夫が肝要であることが判明した。すなわち、若者は、「楽しく」、「面白く」、「わかりやすく」、「納得できる」ものを期待しているが、それがやがて伝統芸能—歌舞伎への興味や嗜好につながっていく可能性をもつことが考えられた。

目的

今回は、1. 従来の歌舞伎への関心についての継続調査と、2. 多くの日本の古典芸能に対する認識や関心についての調査を試み、若者の伝統芸能についてのとらえ方を見いだすとともに、その中での歌舞伎の位置付けを探ってみることにした。

方法

本年6月、第50回国立劇場歌舞伎鑑賞教室解説「歌舞伎のみかた」と福内鬼外(平賀源内)作「神霊矢口渡」一幕を、短大女子学生608名が鑑賞した直後に(1)歌舞伎への関心(2)歌舞伎の魅力(3)歌舞伎のイメージなど従来からの継続調査と、次演者の報告する(4)日本の古典芸能(15項目)への知識度(5)古典芸能に対する関心と(6)それらへの関わりなどについて調査を行った。

結果と考察

(1)歌舞伎への関心は、前年度との対比においては、観劇後「好きになった」ものは著しく低下し、「関心をもった」ものは減少傾向を示した。これは、前回の演目よりもとつき難さが反映したものと思われる。(表1)

(2)歌舞伎の魅力については、「舞台の美しさ」に次いで「衣装の美しさ」を認めているが、「役者の魅力」、「演技のよさ」においてやや前回は下回っている。(表2)これもキャストイングに関わりがある事かもしれない。

(3)歌舞伎のイメージについては、「むずかしい」、「ピンとこない」、「縁遠い(親しみのもてない)」「遠い」印象となっ

ており、ここでも歌舞伎初心者に対する演目の選定の難しさがあらわれているようである。すなわち、若者にとって親しみやすさがなによりも大切であるように思われる。

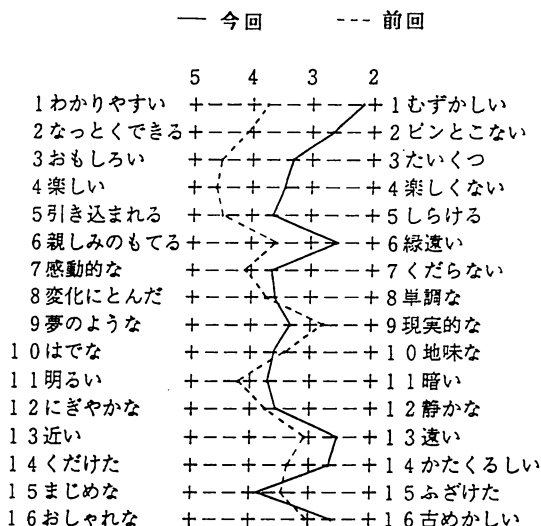
表1 歌舞伎を鑑賞して、好きになりましたか。

	1 好きになった	2 関心をもった	3 変わらない	4 嫌いになった
全体	45名 (7.4%)	288名 (47.7%)	243名 (40.0%)	11名 (1.8%)
国文学科	18 (12.4)	85 (60.7)	35 (25.0)	1 (0.7)
家政学科	4 (3.4)	50 (42.4)	59 (50.0)	4 (3.4)
初等教育学科	6 (4.5)	48 (36.4)	77 (58.3)	1 (0.8)
日本史学科	11 (9.2)	70 (58.8)	31 (26.1)	1 (0.8)
商学 科	6 (6.1)	35 (35.4)	41 (41.4)	4 (4.0)

表2 歌舞伎の魅力 (人数、%)

	全体	国文学科	家政学科	初等教育学科	日本史学科	商学 科
1 物事の楽しさ	79 (4.9)	20 (5.1)	12 (3.8)	13 (3.8)	20 (6.3)	14(5.7)
2 舞台の美しさ	352 (21.8)	86(22.0)	78(24.9)	76(22.0)	61(19.2)	51(20.7)
3 三味線音楽の楽しさ	149 (9.2)	30 (7.7)	26 (8.3)	35(10.1)	34(10.7)	24(9.8)
4 花道使用の面白さ	208 (12.9)	49(12.5)	42(13.4)	47(13.6)	40(12.6)	30(12.2)
5 役者の魅力	199 (12.3)	48(12.3)	42(13.4)	39(11.3)	40(12.6)	30(12.2)
6 女形の魅力	198 (12.3)	45(11.5)	37(11.8)	40(11.6)	51(16.0)	25(10.2)
7 演技の良さ	124 (7.7)	28 (7.2)	26 (8.3)	27 (7.9)	21(6.6)	22(8.9)
8 セリフの楽しさ	72 (4.5)	16 (4.1)	14 (4.5)	14 (4.0)	15(4.7)	13(5.3)
9 衣装の美しさ	216 (13.4)	62(15.9)	34(10.9)	51(14.7)	34(10.7)	35(14.2)
10 その他	17 (1.1)	7 (1.8)	2 (0.6)	4 (1.2)	2 (0.6)	2 (0.8)

図1 16対印象語のプロフィール



おおくほ やすひこ、たまい ひろし、

若者の伝統芸能に対する印象 その6

○ 玉井 寛

(日本精神技術研究所)

大久保 康彦

(國學院大学栃木短期大学)

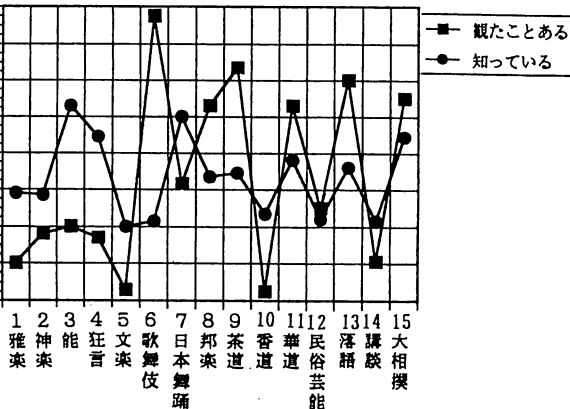
「キーワード」 若者、伝統芸能、態度測定

目的
日本の古典芸能のうち、ここでは15種類を挙げて、それらに対する印象、関心、興味などについて聞き、若者古典芸能に対しての態度を掘り下げ、歌舞伎への印象も関連づけた。

方法
前演者と同様の方法で短大女子学生を対象にアンケート調査を行った。

結果と考察
1) 古典芸能に対するイメージ
わが国の伝統的な芸能の中から図の見出しのように15種類を挙げ、「観たことがある」、「知っている」もについて聞いた結果が、下図である。この15種類の典芸能は、ほぼ4区分される。即ち、A. 古来の古典能(1~2) B. 舞台芸能(3~6) C. 趣味的芸能(7~11) D. 大衆芸能(12~15)となる。まず、「観たことがある」があるとして上位にあるのは、6.歌舞伎、9.茶道、13.落語など古来の古典芸能を除くものである。

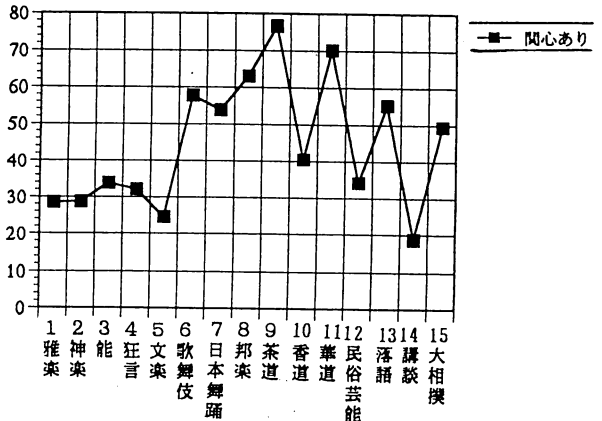
に、「知っている」ものとしては、3.能、4.狂言、7.日本舞踊、15.大相撲など、同じく舞台芸能、趣味的芸能大衆芸能の順となっている。反対に、「観たことがない」として、10.香道、5.文楽、1.雅楽などであり、「知らない」として、5.文楽、14.講談、6.歌舞伎などが、高くなっている。この結果より、6.歌舞伎については、観たことはあっても、その内容は本当に知っているとはいえない程度である。逆に、観た経験はないもの、古典芸能として、3.能、4.狂言、7.日本舞踊、など挙げる多さは意外である。



(2) 古典芸能に対する関心の有無について

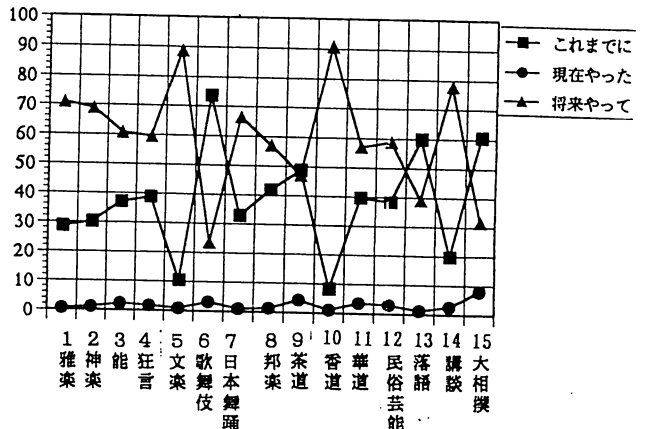
ここでは、関心の強さを聞くことにより、日常的な場面における古典芸能との関わりの様相が伺われる。「関心がある」ものとして、9.茶道、11.華道、8.邦楽などが高い。これらはどれもC. 趣味的芸能に属するものであり、日常的に密接している領域である。また、「関心がない」ものとしては、14.講談、5.文楽、1.雅楽などが高く、普段、なかなか接する機会が少ないものである。こ

うした中で、歌舞伎に対する反応は、「関心がある」が57%、「関心がない」が42%とで、僅かながら「あり」の方が多くなっている。



(3) 古典芸能に対する関わり

これら15種類の古典芸能に対して、これまでの関わり、現在及び将来の関わりをもつ可能性については、下図のような傾向を示している。これまで(過去)に観た、やった、という経験では、観劇直後でもあり、明らかに歌舞伎が最も多くなっている。次いで、13.落語、15.大相撲など大衆芸能の領域である。また、これから(将来)やったり、観たいという希望では、日頃接する機会が少ない種類が目立つ。中でも、10.香道、5.文楽、の多さが際だっている。その他では、14.講談と1.雅楽、2.神楽などの古典芸能である。「現在」での関わりでは、いずれも低い割合でしかないが、15.大相撲を除くと、9.茶道、11.華道といった自分自身が参加可能な趣味的芸能の領域である。それに対し、歌舞伎は今回の鑑賞体験から、今後観たいという希望は、他のものに比べて少なくなっている点は気がかりである。



たまひ ひろし、おおくほ やすひこ、

居住環境意識が居住環境保全行動に与える影響

畠山彰文

(早稲田大学大学院人間科学研究科)

キーワード：居住環境意識、居住環境保全行動、認知的側面、感情・情緒的側面

1. 問題

本研究では、先行研究(原科, 1990; Rosenberg, 1960)を基にして、居住環境に関する意識を「認知的側面」と「感情・情緒的側面」とに分類した。本研究の目的は以下の仮説を設定し、これらの仮説の是非について検討することである。

仮説1; 居住環境意識の認知的側面と感情・情緒的側面とは関連する。

仮説2; 居住環境意識が高くなるほど、居住環境保全行動意図は高くなる。

2. 方法

(1) 調査の方法 調査は1996年11月に留め置き法により行われた。調査対象者は墨田区、中野区の一戸建、集合住宅に住む住民各100名ずつの計400名である。回収率は、いずれも100%であった。

(2) 調査項目 本調査においては居住環境、子育てをする環境、高齢時の居住環境、近隣の環境を調査項目としたが、そのうち本報告においては以下の項目が分析対象とされた。いずれも5段階で評定を求めた。

(1) 居住環境意識の「認知的側面」(「施設・設備」の評価、「便利さ」の評価、「周辺の物理的環境」の評価、「住居」の評価、「プライバシー」の評価、「地域・近隣の状況」の評価、子育てをする環境としての評価、住み心地) 8項目

(2) 「感情・情緒的側面」(地域に対する愛着感、地域問題に対する関心、地域に対する好悪、地域に対する評判、地域に対する悪口、他地域への転居後の再訪、地域の急激な変化による引越意向、自分の本拠地としての程度、地域全体に対して考える機会) 9項目

(3) 住民の地域における活動・行動(地域活動への参加、居住環境保全行動への参加意図) 2項目

3. 結果及び考察

(1) 居住環境意識に関する平均値 一戸建て、集合住宅の別にみたところ、「住み心地」は一戸建て居住者(M=3.53)の方が集合住宅居住者(M=3.31)よりも有意に高く($t=2.27, df=397, p<.05$)、「地域問題に対する関心」は一戸建て居住者(M=3.1)の方が集合住宅居住者(M=2.87)よりも有意に高いことが見出された($t=2.54, df=389, p<.05$)。その他の居住環境意識、住民の地域における活動・行

動に関する項目の平均値は居住形態別において有意な差が認められなかった。

(2) 居住環境意識間及び居住環境意識と住民の地域における活動・行動との相関 居住環境意識間の相関をみると、一戸建てでは「感情・情緒的側面」の項目と $p<.05$ 以上の有意に相関する数が「周辺の物理的環境に関する評価」、「プライバシーに関する評価」、「地域・近隣の状況に関する評価」、「住み心地」の項目で5項目、また「認知的側面」の8項目すべてと「地域に対する評判」が有意な相関があった。集合住宅では「感情・情緒的側面」の項目と $p<.05$ 以上の有意に相関する数が「住居に関する評価」と「住み心地」の項目で7項目、また「認知的側面」の8項目すべてと「地域に対する好悪」が有意な相関があった。一方、居住環境保全行動意図は一戸建て、集合ともに「感情・情緒的側面」に関する項目と $p<.05$ 以上の有意な相関であるものが多かった(一戸建て、集合ともに8項目)。以上の結果より、居住環境保全行動意図は居住環境意識からみると「認知的側面」よりも「感情・情緒的側面」と関連が強いことが示唆された。すなわち、仮説1が部分的に支持された。

(3) 居住環境意識と地域(環境保全)活動との因果関係 居住環境保全行動意図を基準変数、居住環境意識に関する項目を説明変数としてパス解析を行った。一戸建てで居住環境保全行動意図に対するパス係数が有意であったものをみると、「地域問題に対する関心」(.41)、「地域に対する愛着感」(.34, いずれも $p<.0001$)等いずれも居住環境意識の感情・情緒的側面であった。一方、集合住宅では認知的側面が「住居に関する評価」(.22, $p<.001$)等の居住環境保全行動意図に対するパス係数が有意であった。また、感情・情緒的側面では「地域問題に対する関心」(.45, $p<.0001$)等の居住環境保全行動意図に対するパス係数が有意に高かった。「地域問題に対する関心」をはじめとした居住環境意識の感情・情緒的側面が居住環境保全行動意図に対して有意に影響を及ぼすことが示唆された。また、集合住宅では一戸建て住宅よりも認知的側面も居住環境保全行動意図に対して有意に影響を及ぼすことが示唆された。すなわち、仮説2が部分的に支持された。(はたけやま あきふみ)

矢口 一郎

(明治学院大学)

◎心の教育は、人と人との触れ合いから ◎心の教育は、未来への前向きな志向から

はじめに 一般に、人間として生きるための心の在り方を探ると、日々の生活の中で、自己対峙→自己追求→反省→自己の可能性への認知→自己の弱さ・醜さを是正→目標への自己志向へ、との歩みをしていると考えることも出来る。これらの心の変革や改善を経て主体的に自己教育力を湧出させ、生きる力が漲ることが出来るものとする。やる気、元気、根気の力の根源には、困難に逢う・悩む・危機感を持つなどからそれに立ち向かう場合と、他からの援助を得て立ち向かう勇気を与えられる場合があるように考える。

最近の若者は、後者の方が多いと言う。この原因が今までの日本の高度経済成長などで物の豊かさがもたらしたことによる甘えの風潮が醸し出したものと受けとめている。

さて、私が3つの大学（青山学院大・聖心女子大・明治学院大）で、過去6年間に担当している4つの講座を希望した学生たちに授業前に幾つかのアンケート調査した中からテーマに関わるものを2・3取り上げてみる。下の表1は中・高生時代に悩んだ事柄である。この表で2～6位に注目する必要がある。(5,6既説)

<table border="1"> <tr><td>無事35%</td></tr> <tr><td>1位 10人 32%</td></tr> <tr><td>2位 11人 27%</td></tr> <tr><td>3位 10人 25%</td></tr> </table>	無事35%	1位 10人 32%	2位 11人 27%	3位 10人 25%	<table border="1"> <tr><td>無事38%</td></tr> <tr><td>1位 11人 34%</td></tr> <tr><td>2位 10人 28%</td></tr> <tr><td>3位 10人 24%</td></tr> </table>	無事38%	1位 11人 34%	2位 10人 28%	3位 10人 24%
無事35%									
1位 10人 32%									
2位 11人 27%									
3位 10人 25%									
無事38%									
1位 11人 34%									
2位 10人 28%									
3位 10人 24%									

(X1226・X2473 合計 3699 名、平成3-8年の4年度と調査結果)

また、これと併用して調査した、「人間とは」、「人間の教育」とは、についてみると、人間にとって大切なものは多々あるが、1 昨年の阪神淡路大震災に被災した者のほとんどが、人と人との心の支えを得て生きる力が湧いてきたとの答えが大部分を占める。つまり、副題とした生きる力の礎として、昭和58年中・教・審の小委員会の「自己教育力」が主体的に学ぶ力、学び方を取り上げ、昭和62年教育課程審議会が「新しい学力観」に豊かな人間性を強調し、それが第十五期中・教・審への「生きる力」として継承されてきた。これは紙面の関係で簡略にせざるをえないが、学校における論理的思考を通じた道徳的判断力を育てるとともに、人間としての大切な欲求である自己実現を図ることにつくる。

次に、心の教育の場について考えてみたい。これはまさに学校・家庭、そして社会とくにボランティアの場が大きい。私が、視た18カ国の内、数カ国では体験学習（海外の研修やインターシップ等）が大学の単位として認定されている。最近日本でもこの重要性が認識されつつあるが、学校外における生き方を学び、自覚し、今までの自己改善の出来る体験学習の重要性は声を大にする必要がある。

一方、教育には、様々な問題が山積している。特に9万人を超える登校拒否、そして、いじめは見逃せない。これらは、学校現場における偏重値や社会の学歴偏重などの要因はある。しかし、チェスの人間対ロボットのよう人間が機械の虜に偏っていきつつある現実は注目すべきことである。この他、幼児期に人間社会（とくに母親や家族）と隔絶されては、イタールのアペロンの野性児の例えの如く、ヒト社会における心による他者との関わりの中で社会規範を学び、パーソナリティの発達を図る心の土台作りは欠かせない。この場における人間としての言語・感性を如何に身につけるかが未来への第一歩である。更に、過保護による問題がある。大人になることを先送りしたモラトリアムへの逃避は、後の社会との遊離、困難からの逃避、無責任なアイデンティティ拡散症候群やアグルト・チルドレンを生む要因ともなる。つまり理性の無い若者を作り出してしまふ。今日、これがとてつもない犯罪をも生むと指摘される。

まとめ 前記の心の悩みを解決できたとした学生と面接して、「自己教育力」が湧き、「生きる力」が出たのは、人間としての「愛」を感じた時であったという。ここで注目すべきことは、この愛即ち心（生きる力）は自然の中での体験やボランティア活動の中でより多く得ているということである。それは、同年令・異年令とを問わず人として人との肌の付き合いともいえる。また、人と接することで、人の心を知り、相互援助や人の心の痛みの理解・支え合いが生まれる。

- 基本的な事ではあるが、
 - a 如何なる条件下でもそれらを冷静に見極め、その奴隷とならないための主体的な判断力をつける。
 - b 人と人との接点を大切に、失敗や困難に悩む立場の者への温かい思いやりや励ましておく広い心を養う。
 - c 自己実現への「生活様式」(註1)を身につける。
- (註1) Adler Alfred (1870-1937) の著「「教育の目標」の跋。
- (やぐち いちろう)

問題意識：親子関係に関する子どもの心理的状態を規定する概念として、ブラック、フリエルらにより A C (アダルト・チャイルド) が提唱された。もともと A C は、アルコール依存症の親の元で育った子どもを指した概念であったが、現在では広く、機能不全家族の元で育った人々を指すようになった。

A C の行動特性パターンには、スーパーチャイルド (優等生的行動特性)、スケープゴード (問題児的行動特性)、ロストチャイルド (不存在的行動特性) クラウン (道化師的行動特性)、ケアテイカー (世話焼き的行動特性) の 5 つの特性が見られるとされている。機能不全の家庭で成育した子どもは、環境に過剰に適応しようとして上記の 5 つの役割性格を形成し、そのまま成人として成長することも多い。このような A C は、成人となっても役割性格が固定化して、本当の心理的成長が阻害される。そのため人間関係がうまくゆかず社会的な行動に心理障害を感じることとなる。

社会的相互関係の基本となる「自己開示」は、家庭という社会経験の中で生まれ、信頼関係や愛情などと同時に獲得できて行くものであるが、A C の場合、本質的な自分を見失っているため、開示しようにも開示できない心理状態だと考えられる。

社会的な発達を促す自己開示へのプロセスは、成功や失敗、裏切りや悔しさなどの「直接的体験」の積み重ねによって形成されるとされているが、A C の場合そういった直接的体験ができない。しかしながら、

「言葉による間接体験」によって、そうした自己開示へのプロセスを導くことができるのではないだろうか。

その条件としては、言葉を十分に理解できる年齢と自己変革させる自己意識が必要であろう。

研究の目的：自己開示の発達プロセスを間接体験によって形成した A 子さん (女性・40 歳・既婚・男児 1 子) の例を報告する。

内容：A 子さんは、女兒に拒否的養育態度を持つ父とその父と仲の悪い母の間に生まれた。そのため生まれたときから「我が家に女兒は必要ない」という家庭に育ち、7 歳下の弟が生まれると、家庭の愛情は弟に注がれたため、獻身的に弟の面倒を見ることによって親から「良いお姉ちゃんだね」と呼ばれ、そのことで、家庭内での自己の存在場所を確保していった。

この家庭状況では、自分のわがままを極力抑制し、親が求める「弟の面倒を見る良い姉」を演じることが、自分の存在そのものであるという意識が定着し、自発的行動や創造的な意識が発達しなかった。

つまり、本来であれば、自発的に弟を可愛いと感じることによって姉弟の絆が形成されるものであるが、A 子さんは、「親の目」という視点から弟と接したのである。親の前で「弟が可愛い、可愛い」と言えば言うほど、親に誉められるが、その反面、親の愛情対象である弟への憎しみと自己否定感が増大していった。

また、夫婦の会話がないために、A 子さんが父と母と別々に話し、両親の意思疎通媒体としての役割も付加された。それによって、弟への直接的な憎しみはなくなり、両親の媒体として「うまくやろう」という役割性格がさらに強化されていった。

ここに、A 子さんの心理的発達の阻害原因があり、自己開示が妨げられ、A C 環境が決定的となった。

35 歳までそうした家庭環境に適応していったが、心の安らぎを求めキリスト教会へ行き、聖書を学びはじめた。ある夜、夢でイエスキリストに出会い「私は決してあなたを離れず、あなたを捨てない」という言葉をかけられた。さらに、「私の目にはあなたは高価で尊い。私はあなたを愛している」という言葉を聖書に見つけた。

この言葉がきっかけとなって自己意識が明確となり自己開示が少しずつできるようになった。

結論・考察：自己開示への発達プロセスは、成功や失敗という直接的な経験ではなく、言葉による間接的な経験であっても促されることがわかった。親の求める子ども像に過剰適応した自分から、自我を確立するという点では、児童期の崩壊が 35 歳に生じた、ととらえることもできるかもしれないが、スーパーチャイルドが過剰適応ではなく勤勉さへ、スケープゴードが問題児行動ではなく行動力へ、ロストチャイルドのいないふりから冷静さへ、クラウンの道化から明るさへ、ケアテイカーの世話焼きから交渉力へと心理的昇華がなされたところに大きな差があると言えよう。

今後はさらに聖書の言葉によって生起された自己受容へのプロセスを明らかにしたい。

たにざわたづこ

MSC (創造的構え) テスト改訂の試み (2)

高校生の結果

○寺沢 美彦 久米 稔 伊賀 憲子 高野 隆一
 (日本福祉教育専) (早稲田大学) (文化女子大学) (川越少年刑務所)

キーワード: 創造的構え 信頼性 高校生

[はじめに]

昨年大学生を被験者に用いて改訂したMSC (創造的構え) テスト (日本応用心理学会第63回大会論文集参照) を高校生に実施し、その標準化および信頼性の検討をおこなった。

[方法]

被験者: 秋田県内公立高校2年生男女 129名。

検査: MSC (創造的構え) テスト。

MSC (創造的構え) テストは自己信頼性、客観性、慎重性の3パーソナリティ特性と挑戦性、探究性、持久性の3動機づけ特性の計6特性で構成され、各特性8項目、計48項目からなる質問紙である。

手続き: 上記テストを「あてはまる」を2点「あてはまらない」を0点 (逆転項目はこの逆)、「どちらともいえない」を1点の3件法で実施し、尺度ごとの平均値、標準偏差値ならびに尺度間の相関係数、信頼性係数等を求めた。

[結果と考察]

表1は高校生における尺度別の平均値および標準偏差値である。平均値では挑戦性がやや高く、客観性ももっとも低くなった。標準偏差値はどの尺度もほとんど変わらない。

因子間の相関係数は表2の通りである。慎重性がすべての尺度と負の相関を示した。これは他の尺度がすべて積極的な面を測定しているのに対し、慎重性尺度が消極的な面を反映しているためであろう。これ以外では挑戦性が客観性や持久性と負の相関となっている。これは動的な要素と静的な要素との関係があらわれたように思われる。他の多くの尺度と高い相関がみられたのは客観性で、持久性 (.416)、次いで自己信頼性 (.399)、探究性 (.367) の順であった。

6尺度の因子構造 (バリマックス解、表3) は第1因子では客観性、持久性、探究性、自己信頼性 (負荷量順) が高い負荷量を示し、第2因子では挑戦性、自己信頼性、慎重性 (逆転) の負荷量が高くなった。第1因子は発想の積極的な構えを示しているように思われる。一方、第2因子は慎重性の対極にある挑戦性を中心とした変化への構えを示しているように思われる。自己信頼性は両因子において比較的大きな因子負荷量を示しており、これは創造的構えに共通した要因であ

らう。本研究者らは理論的に創造的構えにパーソナリティ側面と動機づけ側面との2つの側面を想定し、自己信頼性、客観性、慎重性の3尺度ををパーソナリティ尺度としてまとめ、挑戦性、探究性、持久性の3尺度を動機づけ尺度としてまとめているが、因子構造はこれとは異なるものとなった。

48項目を用いた信頼性係数はスピアマン・ブラウンの折半法によると .7106となった。

表4は平均値と標準偏差値を用いて作成したプロフィール表で、満点はすべて16点であり、各尺度ごとに5段階で評価することができる。各段階の比率は、1が10%、2が20%、3が40%、4が20%、5が10%となっている。

表1 高校生の結果

尺度名		平均値	標準偏差値
パーソナリティ	自己信頼性	7.88	3.41
	客観性	7.39	2.92
	慎重性	9.77	3.35
動機づけ	挑戦性	10.48	3.43
	探究性	8.41	3.04
	持久性	7.71	3.47

表2 因子間の相関係数

	客観性	慎重性	挑戦性	探究性	持久性
自己信頼性	.3994	-.2756	.2200	.3158	.2315
客観性		-.1424	-.0273	.3666	.4160
慎重性			-.1556	-.0450	-.1295
挑戦性				.1648	-.0238
探究性					.2101

表3 因子分析結果

	第1因子	第2因子
自己信頼性	.53966	.54498
客観性	.83313	.03781
慎重性	-.15352	-.58304
挑戦性	-.14010	.81433
探究性	.57038	.27166
持久性	.73038	.08507
寄与率	35.0%	19.5%
累積寄与率	35.0%	54.5%

表4 高校生のプロフィール

尺度	1	2	3	4	5
自己信頼性	0~3	4~6	7~9	10~12	13~16
	0~3	4~5	6~8	9~11	12~16
	0~5	6~8	9~11	12~14	15~16
挑戦性	0~6	7~8	9~12	13~14	15~16
	0~4	5~6	7~10	11~12	13~16
	0~3	4~5	6~9	10~12	13~16

(てらさわ よしひこ、くめ みのる、いが のりこ
 たかの りゅういち)

S T R - S 作成の試み (2)

○ 成田 猛
(秋田桂城短期大学)

木島 恒一
(早稲田大学)

久米 稔
(早稲田大学文学部)

目的

昨年、我々は、都市部で働く人々のストレス、ストレス・コピングなど一連の過程を把握出来、この人々に対してストレス・マネジメントが可能となる調査票(Stress Survey; STR-S)を作成した。今回は、このSTR-Sで測定されたものに、1)働く健康成人群と働きながら通院する群では異同があるか、2)サハル式SCI(Stress Coping Inventory)には、それがいかに反映されるかを検討する。

方法

1 対象:働く健康成人(男性11例 平均年齢32歳9ヵ月 女性9例 31歳1ヵ月)働きながら精神科クリニックに通院する神経症患者(男性11例 平均年齢33歳2ヵ月 女性8例 33歳4ヵ月)。これらを対象に、STR-S、SCIを実施した。調査はすべて本人の承諾を得て行なった。

2 分析方法:STR-SのI事態 II展望 III経過 IV期間 V影響 VI気晴らし VIIものの見方・考え方の一連の過程のうち、I事態に対して、II III IV V VIの反応がどのようになされているかを見た。その際、II展望(見通し:1 解決可能 2 解決不可能 3 その他)を基準にして、III IV V VIの反応を各々分類した。本発表では、これらの過程のうち、最初と最後の反応だけを取り上げた。

上記の分析の対象になったのは、各群に共通性のある領域である「職場の人間関係」(健康成人 男女共 出現頻度第1位 該当者7人)、「仕事に対する適性・職業の再考」(通院患者 男女共 出現頻度 第2位 該当者6人)という事態であった。各々のデータは分析基準(昨年の基準を一部訂正)に準拠して分析された。

SCIの、計画型(Pla)、対決型(Con)、社会的支援模索型(See)、責任受容型(Acc)、自己制御型(Sel)、逃避型(Esc)、隔離型(Dis)、自己評価型(Pos)の各下位尺度の得点が算出された。個人のプロフィール(得点を1-5の段階点に変換)を、STR-SのIII経過:対応の型(10個)と比較した。

結果

STR-S、SCIの順に記述する。健康成人群は、事態に対する見通しは、解決可能3人(以下、人省略)、解決不可能4であった。前者は、最初の対応で、自己解決型1、放棄・放置型2であった。その時のストレス反応は、軽度2、重度1であった。気晴らしは、気分転換型1、代償型1、未記入1であった。最後の対応では、勇躍型1、放棄・放置型1、他者依存型1であった。ストレス反応は、軽度3であった。気晴らしは、気分転換型1、ぼやき型1、未記入1であった。各々の対応により、事態は部分解決3であった。ストレス状態の解消は、一部解消1、未記入2であった。

後者では、最初の対応が、距離を置く型2、勇躍型1、

放棄・放置型1であった。その時のストレス反応は、軽度3、重度1であった。気晴らしは、ぼやき型3、気分転換型1であった。最後の対応では、距離を置く型2、混合型1、無関心・無頓着型1であった。ストレス反応は、重度2、軽度1、中等度1であった。気晴らしは、気分転換型2、ぼやき型2であった。各々の対応により、事態は未解決2、部分解決1、未記入1であった。ストレス状態の解消は、部分解消2、未解消1、未記入1であった。

通院患者群では、事態に対する見通しが、解決可能4、解決不可能2であった。前者は、最初の対応で、自己解決型4であった。その時のストレス反応は、軽度4であった。気晴らしは、ぼやき型2、未記入2であった。最後の対応では、自己解決型1、勇躍型2、距離を置く型1であった。ストレス反応は、軽度2、中等度2であった。気晴らしは、気分転換型1、代償1型、未記入2であった。各々の対応により、事態は部分解決1、解決1、未解決2であった。ストレス状態の解消は、解消1、未解消1、未記入2であった。後者では、最初の対応が、空想型1、他者依存型1であった。その時のストレス反応は、軽度1、中等度1であった。気晴らしは、ぼやき型2であった。最後の対応では、混合型1、距離を置く型1であった。ストレス反応は、中等度1、重度1であった。気晴らしは、気分転換型1、未記入1であった。各々の対応により、事態は未解決1、未記入1であった。ストレス状態の解消は、部分解消1、未解消1であった。SCIのプロフィール(Pl, Acc, Posの段階点4)、(Seeが4)をもつ者は、STR-Sの対応の型(健康成人:勇躍型)、(通院患者:他者依存型)の者と対応した。他は対応しなかった。

考察

展望(見通し)の違いで、両群の反応の差異が認められた。健康成人群では、解決可能とした者が、事態の部分解決を得ている。解決不能とした者は、最後の対応のストレス反応が中等度、重度である。事態は部分解決、未解決である。ほぼ見通しの通りである。両者とも対応の仕方に類似性が存在するのは、場面依存性によると推測される。通院患者群では、見通しを解決可能とするが、事態は殆ど解決していない。最後の対応のストレス反応は、中等度、重度に変化している。ストレス状態も殆ど解消されない。結果には、両群の現実に対する認識の相違が反映されている。STR-Sの結果とSCIの下位尺度とがあまり対応しなかった理由は、両者の測定している次元の相違かも知れない。今後の研究課題としたい。なお、本研究は、「宇宙環境利用フロンティア共同研究」プロジェクトの一環として行なわれたものである。(なりた たけし、きじま つねかず、くめみのる)

MMPI臨床尺度による学生の評定差—2

○草薙和美 稲松信雄
(東邦大学医学部)

〔目的〕MMPI尺度を用いて最近の6年間の医学部学生の評定差及び解答内容について検討する。

〔方法〕被検者男子学生90年度54名、91年度47名、93年度69名、95年度58名、96年度63名、女子学生90年度36名、93年度26名、95年度30名、96年度32名。

検査用紙：MMPI冊子式I型を使用し、上記の年度ごとの尺度の差を比較検討し有意差が見られた臨床尺度に対しては解答内容を分析する。

〔結果〕妥当性尺度、臨床尺度も偏差値30-70の間に含まれ正常範囲と言え、そこで男女に分け年度ごとに検討した。'90と'96の男子学生のPa(偏執性)のT値2.44は5%の有意差があり、Ma(軽躁性)のT値2.61は1%の有意差が認められた。男子学生はその他の臨床尺度において有意差は認められなかった。'90と'95の女子学生の結果ではPaのT値3.17、Pt(精神衰弱)のT値2.85でそれぞれ1%の有意差があった。'91と'95の女子学生ではMaのt値2.72は1%、Pt(精神病質的偏り)のT値3.92は0.1%、PtのT値3.12は1%でそれぞれ有意差が認められた。'91と'96年度女子学生はMaのT値2.48で5%の有意差があった。

〔考察〕学生のテスト結果を見るとどの学年の平均値も正常範囲内で同じ様なプロフィールを示す。その中でPa尺度'90:'96の男子学生、'91:'95の女子学生において有意さが認められた。これらはT得点が53-60の範囲内であり、この値を示している人の特徴は寛大、思いやりがあり、人を信用し、自発性があり、自我関与が深いなどがあげられる。しかしその反面、依存的、神経過敏、心労傾向と言う特徴も示す。40

項目に渡る質問には精神病的行動を取り上げる質問“時々悪魔にとりつかれる”、“誰かが毒殺しようとしている”などがある。これらの質問に対して皆無とは行かないまでも極めて低い値を示した。Paの質問項目は非社会的行動様式を知るだけでなく、人の敏感さや公平さ、自我の安定さを知るための尺度でもある。正常範囲で有意差がみられたという点からみると年度ごとの質問内容に対する理解度あるいは項目の中にデリケートな内容を示すものもありこれらの弁別の差が現れたと考えられる。学生の実習態度等を見ていると学年ごとにより変化しているように見えるが、男子学生においては質問項目や臨床尺度の検討からも大差は検証されないが、女子学生では有意差が認められた尺度が多かった。今回は女子学生の結果に焦点を当て変化を検討したい。

MMPI臨床尺度の平均値、SD&差の検定

臨床尺度	'90(M)	'96(M)	t	'90(F)	'95(F)	t
1 Ha(お話し)	Mean 15.94	15.47	0.60	17.41	14.83	2.32*
	SD 4.28	4.07		4.47	4.13	
2 D(話し)	Mean 25.66	25.03	0.82	25.03	23.06	2.27*
	SD 4.25	4.34		5.21	3.66	
3 Hy(たじろ)	Mean 24.38	23.26	1.27	24.75	21.90	2.28*
	SD 5.03	4.49		5.23	4.89	
4 Pd(話し)	Mean 23.05	23.55	0.63	22.94	20.10	2.39*
	SD 4.47	4.13		5.13	4.38	
5 Mf(話し)	Mean 24.90	26.06	1.56	33.36	32.03	1.15
	SD 4.05	3.94		4.27	5.00	
6 Pa(話し)	Mean 10.51	11.92	2.44*	12.25	9.78	3.17**
	SD 3.11	3.06		3.54	2.64	
7 Pt(話し)	Mean 27.72	28.39	0.77	27.69	23.73	2.85**
	SD 4.52	4.83		5.71	5.54	
8 Sc(話し)	Mean 29.83	30.82	1.01	29.91	28.06	2.09*
	SD 5.08	5.54		6.58	5.78	
9 Ma(話し)	Mean 16.83	18.87	2.61**	17.02	15.60	1.35
	SD 4.25	4.18		4.56	3.87	
0 Si(話し)	Mean 26.31	28.04	1.09	27.66	26.73	0.49
	SD 6.71	8.34		8.52	6.59	

* P<0.05 ** P<0.01

ニューラルネットを用いた欠損値の補完

服部 環
(宇都宮大学教育学部)

キーワード：ニューラルネット、欠損値、補完、PRINQUAL、重回帰分析

本稿は1つの変数のみに欠損値があるとき、その欠損値をニューラルネットを用いて補完する方法を提案し、他の手法との間で推測精度を比較検討する。

《方法》(1)データ構造 便宜的に、欠損値がある変数を外的基準、他の変数を説明変数とする。

(2)ニューラルネットの入出力 次の①～③のニューラルネットを検討した。①入力信号は説明変数と外的基準が欠損値であるかどうかを示すダミー変数である。ダミー変数の値は外的基準が得られたときを1とする。教師信号は説明変数と外的基準の値であるが、外的基準が欠損値のときは対応する教師信号の値を0とする。

②入力信号を説明変数、出力信号を外的基準とする。

③「欠損値に平均値を代入してニューラルネットによる非線形主成分分析を実行し、欠損値に対応する出力信号を入力信号に代入して改めて非線形主成分分析を実行する」という手順を、入力信号と出力信号との差異が十分に小さくなるまで反復する。

(3)欠損値の補完 ①学習後、欠損値のあるケースのダミー変数の値を1、説明変数の値をそのままにして入力信号を送り、外的基準の出力値を補完値とする。②学習後、欠損値があるケースの説明変数の値を入力し、出力値を補完値とする。③反復計算が終了した時点で、欠損値に対応する出力信号の値を補完値とする。

(4)実験に用いたデータ 実データを用いて実験を行った。説明変数は表1に示す陳述に対する尺度得点、身長(cm)、体重(kg)、外的基準は減量希望量(kg)とした。実験に用いたケースは平均年齢18.7歳、標準偏差1.7歳の1658名の女性からランダムに抽出した200名である(表2)。以上から、例えば、①はユニット数が3のとき図1、②はユニット数が2のとき図2、③はユニット数が3のとき図3になる。

(5)実験 2つのデータセットを作成した。1つは100名、もう1つは180名の減量希望量を欠損値とした。

《結果と考察》学習時に欠損値として扱った減量希望量の値を真値とみなし、真値とニューラルネット、SASのPRINQUAL(MTVオプション)、重回帰式による補完値との絶対値誤差および相関係数を求めた(表3)。ただし、③のニューラルネットは安定した補完値を得ることができなかったため、ここでは結果を省略する。

ニューラルネットはいずれのデータでも、PRINQUALよりも真値に近い補完値を得ることができ、さらに、100名の外的基準を欠損値とした場合は重回帰分析と同

程度の推測精度が得られたと言える。しかし、180名の外的基準を欠損値としたデータでは、重回帰分析よりも良い補完値を得たとは言えない。

今後はデータセットの特性(欠損値の生起状況やケースと変数の数など)を変えたシミュレーション実験を行い、適切な適用状況を探ることが課題となろう。

表1 説明変数の値を与えた尺度名とその陳述

尺度名	陳述
ダイエット	食事に関するセルフコントロールをしている ダイエット食を食べている 自分が食べる食物のカロリー量を知っている
体型不満	自分のお尻は大きすぎる 自分の腹は大きすぎると思う 太ももが太すぎる

(注)「まったくない」を0、「常にある」を5点とする6段階評定とし、3陳述の合計を尺度得点とした。

表2 実験に用いたケースの記述統計量

	ダイエット	体型不満	身長	体重	減量希望量
平均(n=200)	3.0	9.7	158.2	51.5	4.8
標準偏差(n=200)	2.4	4.2	5.0	6.4	4.2

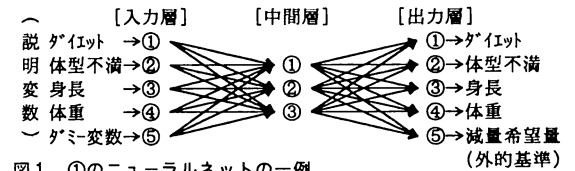


図1 ①のニューラルネットの一例

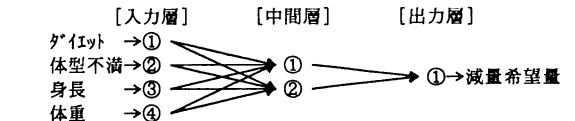


図2 ②のニューラルネットの一例

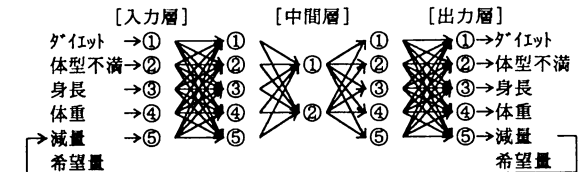


図3 ③のニューラルネットの一例

表3 真値と予測値の絶対値誤差の平均、標準偏差および相関係数

	ニューラルネット①			ニューラルネット②			PRINQUAL			重回帰分析
	5	4	3	4	3	2	4	3		
100名の外的基準を欠損値とした場合										
平均	1.75	1.83	3.63	1.64	1.67	1.73	2.63	3.77	1.72	
標準偏差	1.38	1.78	2.74	1.29	1.32	1.41	2.11	2.50	1.51	
相関係数	0.85	0.80	0.58	0.87	0.87	0.85	0.80	0.67	0.85	
180名の外的基準を欠損値とした場合										
平均	2.24	2.38	8.72	1.97	1.96	1.86	3.06	2.75	1.83	
標準偏差	2.93	2.18	3.59	1.99	1.92	1.78	2.44	2.30	1.76	
相関係数	0.41	0.64	0.38	0.77	0.76	0.77	0.74	0.61	0.78	

《文献》 村瀬・小山・石田 1994 パソコンによるカルマン・ニューロコンピュータング 森北出版 (はっとり たまき)

1 対比較と重回帰分析を用いた新たな感覚評価法

市橋秀樹
(神戸大学発達科学部)

感覚評価、1 対比較、重回帰分析

はじめに

感覚の測定法の1つに1対比較法がある。その分析方法であるThurstone法(T法)およびScheffe法(S法)は、いずれも総当たりの比較を必要とするため検体数が多い場合には通していない。1対比較法のこの欠点を改善した新たな感覚分析法を考案したので、その妥当性を検討した結果を報告する。

方法

【新たな分析法(PM法)] n個の検体について総当たりの比較対を設け、どちらが質問に妥当か回答させ、妥当と答えた人の割合を求め、次式に当てはめる。

$$y = c_1x_1 + c_2x_2 + \dots + c_nx_n \quad (1)$$

$$\text{ただし } c_1 + c_2 + \dots + c_n = 0 \quad (2)$$

ここでyは、ある質問に対し「i番目の検体の方が妥当であると答えた人の割合(p_{ij})」-「j番目の検体の方が妥当であると答えた人の割合(p_{ji})」である。このとき、x_i=1、x_j=-1、x_k(k≠i,j)=0とする。(1)式は次のようになる。

$$c_i - c_j = p_{ij} - p_{ji} = 2p_{ij} - 1 \quad (3)$$

総当たりの対比較を行うと(3)のような式がn(n-1)/2個得られる。これらと(2)式から最小2乗法によりc_iを求める。本法では、このc_iを感覚の指標とし、c_i-c_jによりp_{ij}を推定できるところに特徴がある。

【T法およびS法との比較] 9種類の野菜の好き嫌いに関するT法による分析例(第1表)および4種類のジュースの味に関するS法による分析例に、PM法を適用して、その結果を比較検討した。

【比較数の検討] 検体数nを8とし、n、1.5n、2n個の対比較を行った場合(簡易PM法)でも総当たりの場合と同じ結果が得られるか検討した。

第1表 野菜の好き嫌い(出典:新編 感覚・知覚心理学ハンドブック)

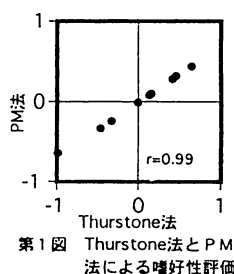
野菜	A	B	C	D	E	F	G	H	I
A かぶら	50	82	77	81	88	89	90	89	92
B キャベツ	18	50	60	72	74	74	81	85	85
C ふだんそう	23	40	50	56	74	68	85	80	82
D アスパラガス	18	28	44	50	56	59	68	60	73
E にんじん	12	26	26	44	50	49	57	71	76
F ほうれんそう	10	26	32	41	51	50	63	68	62
G さやいんげん	10	19	16	32	47	37	50	53	64
H えんどう	11	16	20	40	29	32	47	50	62
I とうもろこし	7	14	18	27	24	37	36	37	50
Thurstone法	-1.0	-0.5	-0.3	0.0	0.1	0.2	0.4	0.5	0.6
PM法	-0.6	-0.3	-0.2	0.0	0.1	0.1	0.3	0.3	0.4

左の欄の野菜よりも上の欄の野菜の方が好きだと答えた人の割合(%)。

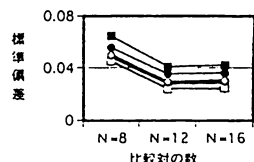
結果および考察

【T法およびS法との比較] T法による評価と総当たりPM法による評価との間には、有意な正の強い相関が認められた(第1図)。また、PM法によって推定した野菜の好き嫌いに関する推定値と実測値の間にも強い相関がみられた。S法の場合も、ほぼ同様の結果が得られた。これらの結果は、PM法が1対比較の分析方法として適切であることを示している。

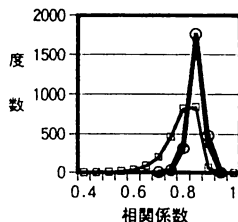
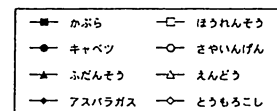
【比較数の検討] 対比較数を多くするほど、偏回帰係数の標準偏差は小さくなり(第2図)、推定精度が高くなることを示している。簡易PM法で推定した偏回帰係数と総当たりPM法で推定した偏回帰係数との間の相関係数の分布(第3図)および簡易PM法による推定値と観察値との間の相関係数の分布(第4図)をみると、いずれも対比較を多くするとばらつきが小さくなったが、対比較数が1.5nおよび2nでは、これらの分布は大きく異ならなかった。以上の結果から、検体数(n)が8程度であれば、対比較数は、最低でも1.5n、さらに高い精度を求めるならば2nとすればよいことが明らかになった。



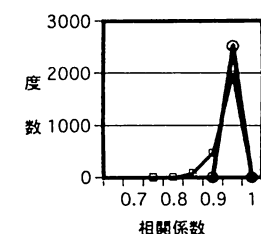
第1図 Thurstone法とPM法による嗜好性評価



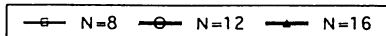
第2図 簡易PM法によって推定した偏回帰係数の標準偏差



第3図 総当たりPM法と簡易PM法によって推定した偏回帰係数間の相関係数の分布



第4図 観察値と簡易PM法による推定値との間の相関係数の分布



いちはし ひでき

サンプル数の諸問題 (8)

一叩打法による個人内変動の検討一

○川島 大司 (東海女子大学 文学部) 久米 稔 (早稲田大学 文学部)

叩打法 個人内変動 サンプル数

[目的]

主として耳鼻科で内耳の異常の診断に用いられている叩打法をとりあげた。

叩打の各点をコンピュータにより処理することで個人内変動を把握する方法を考案し、個人内変動を検討した。

[方法]

被験者：女子大学生 10名

叩打方法：タブレットにスタイラスペンで叩打をする。

- ① 遮眼する。
- ② ペンをタブレットの中央あたりに誘導し、原点を決める。
- ③ ペンをタブレットより少し上に移動し合図のあるまで待たせる。
- ④ 合図をし、律動的 (メトロノームを使用) に 100 回叩打をする。この時、前腕や手を机等に接触させないようにする。
- ⑤ 100 回叩打した後、60 秒休憩する。
- ⑥ これを 10 回繰り返す。

[結果と考察]

データ処理方法：95 mm 四方内の叩打点の処理をする。

- ① 95 mm 四方内を縦横 200 分割する。そのマトリックスを左下を 1 番、右上を 4000 番として番号をつける。
- ② 番号を第 1 象限に変換すると、X 座標、Y 座標 0 ~

200 にプロットできる。変換した点をグラフに表示する。

- ③ 縦横 200 四方を縦横 5 分割し、25 のブロックを作成する。左下を 1、右上を 25 とし、ブロック番号をつける。
- ④ 25 のブロックの中で各叩打点が 80% 以上はいるブロックを探す。
- ⑤ ブロック番号をもとに平均と標準偏差を算出する。

表 1 は 10 人の中で、ばらつきの小さい者 (被験者 A)、中程度の者 (被験者 B)、大きい者 (被験者 C) のブロック番号と平均、標準偏差を示したものである。

図 1-A、図 1-B はばらつきの小さい者の叩打点をプロットしたグラフとブロック番号を明示したものである。図 2-A、図 2-B はばらつきの大きい者の叩打点をプロットしたグラフとブロック番号を明示したものである。

被験者 10 人は、ばらつきの大きい者 3 人、小さい者 3 人、中程度の者 4 人にわかれた。

この叩打法の叩打点をブロック番号で表し、そのばらつきの度合いにより、個人内変動を基に被験者をグループに分けることができるのではないかと考えられる。

今後は、この個人内変動が性格的なもの等によるのではないかと考えられるのでその点を検討してみたい。

表 1 ブロック番号

試行	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	X	SD
被験者 A	13	12/13	13	12/13	13	13	8/13	12/13	12/13	12/13	12.4	1.22
被験者 B	14	13/18	13	13	13/14	13	13	13	8/13	13/14	13.2	1.93
被験者 C	14/15	13/14	13	9/13/14	9/14	13/14	9/10/13/14	8/9/13	13	8/9	11.9	2.34

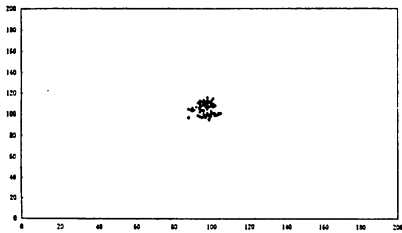


図 1-A 叩打点 (ばらつきの小さい者)

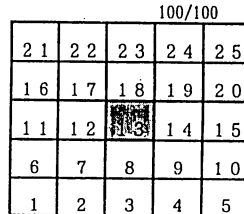


図 1-B ブロック (ばらつきの小さい者)

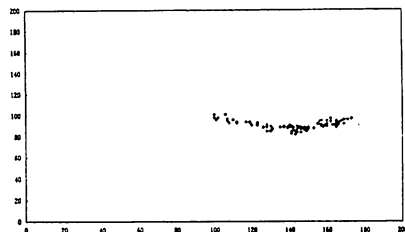


図 2-A 叩打点 (ばらつきの大きい者)

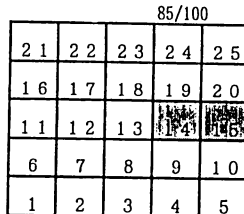


図 2-B ブロック (ばらつきの大きい者)

かわしま だいじ
くめ みのる

若年女性のメンタルストレス負荷とリラクゼーション技法時における自律神経機能の評価

高橋真理
(杏林大学保健学部)

藤生英行
(筑波大学心理学系)

若年女性・自律神経機能評価・心拍変動・スペクトル解析・性周期

I 目的

近年精神的なストレスやリラクゼーション状態に対する生体評価に、心拍変動による数々の分析が報告されている。しかし結果に関しては必ずしも統一された見解が得られていない。そこで本研究では、精神的なストレスやリラクゼーション状態における生理学的な変化を定量的に捉える指標に、心拍変動による自律神経機能の評価が適応可能であるかを、若年女性を対象に検討した。また、性周期により、精神的なストレス時に自律神経機能の変動に違いがあるかも検討した。

II 方法

実験は、健康な女子学生13名(平均年齢21.1歳)を対象に、心電図(CM5)と呼吸運動の計測を行い、400Hzのサンプリング周波数でA/Dコンバータを通してパソコン上に記録した。

実験の流れは、開始前に自律神経失調調査表(東邦大式医学指数)と月経周期の記入を求めた後、椅座位安静で約15分間15回/分の呼吸練習を行った。その後実験室内でまず閉眼による3分間を安静時とした。次に前頭葉への認知干渉等の精神的なストレスの誘発が報告されるStroop Color Word Conflict Test(CWT)を用い、GRT上に1枚ずつ計120枚のカラーワードを提示し、できるだけ速くキーボード操作で回答するように指示した。最後に自律訓練法(AT)とイメージ法によるリラクゼーション技法のテープを、ヘッドホーンを通じて閉眼で約11分間聞かせた。なお、各状態の終了直後には状態不安STAI(X-1)を求め、またCWTに対しては、NASA-TLXの評定も行った。

解析は、安静時、ストレス時、リラクゼーション時(AT時)の3状態とも各2分間ずつ、心拍(R-R間隔)変動の時系列データを、時間領域(NNMean, NNSD, CVNN, NN50)と、周波数領域(FFT法)で解析し、繰り返し測定計画による一要因の分散分析等で統計処理した。

なおFFT法で得られたスペクトル波形からは、0.04~0.15Hzまでの低周波成分領域をLF成分、0.15~0.4Hzまでの高周波成分領域をHF成分とし、LF/HFを交感神経活動、HFを副交感神経活動の指標とした。

III 結果

1. 状態不安STAI

合計評点を比較すると、ストレス時(47.69±7.85)は安静時(36.08±5.38)より有意に高く、リラクゼーション時(29.85±6.48)は両時より有意に低かった(p<0.05)。

2. NNMean

連続する正常同調律R-R間隔(NN)の平均時間は、ストレス時(768.98±108.69)は安静時(898.01±69.79)よ

り有意に短かく、リラクゼーション時(923.18±78.41)はストレス時より有意に長かった(p<0.05)。

3. SDNN, CVNN, NN50

SDNNの平均値はストレス時(43.42±14.44)は安静時(61.23±16.72)より有意に低かった(p<0.05)が、リラクゼーション時(50.59±13.93)は有意な変化ではなかった。また、CVNN, NN50では有意な変化は認められなかった。

4. LF/HF・HFnu(normalized unit) (図1, 図2)

呼吸の周波数によるLF成分への引き込みを除外した7名を対象に比較した。LF/HFの平均値は、ストレス時は安静時より有意に高かった。一方HFnuの平均値は、ストレス時は安静時より有意に低下し、リラクゼーション時はストレスより有意に上昇していた(p<0.05)。

LF/HF: 交感神経活動の指標

HFnu: 副交感神経活動の指標

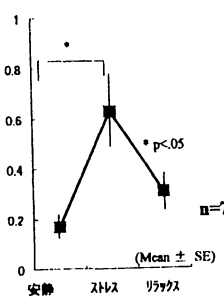


Fig. 1. LF/HFの変化

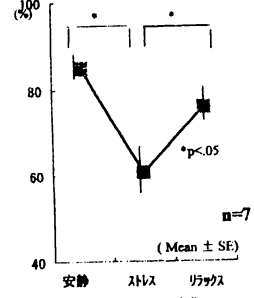


Fig. 2. HFnuの変化

5. 性周期の影響

月経周期から明らかに性周期が判断できる6名(卵胞期3名、黄体期3名)を対象に、安静時を基準に、ストレス時のLF/HFとHFnuの変化率を比較した。黄体期3名は全員とも卵胞期3名よりLF/HFの上昇率が大きく、HFnuの低下率も大きかった。

IV まとめ

以上より、若年女性の精神的なストレス状態やリラクゼーション状態の変化を評価する指標には、交感神経・副交感神経両自律神経活動の評価が可能である心拍変動のスペクトル解析(FFT法)は有用である可能性が示された。また、黄体期は卵胞期に比し、ストレス状態では交感神経活動は上昇し、副交感神経活動は低下しやすいたことが推測された。

しかし、呼吸性不整脈のLF成分への引き込み等、呼吸による影響に関しては問題が残る。今後は位相領域の解析等も含め、更に検討を重ねたい。

(たかはしまり・ふじうひでゆき)

アーチェリーの競技場面における成績遂行に及ぼす注意力の影響 -TAISによる検討-

○馬場 理子

(同志社大学文学研究科)

キーワード：アーチェリー、注意力、TAIS

<目 的>

スポーツ場面において、十分な遂行を達成するためには競技中に注意を集中させることが必要であろう。しかし、そこで必要とされる注意のタイプは、競技によって異なるといわれる。そこで、本研究では、アーチェリー競技者の注意力の特徴をTAISで測定し、また、様々な条件のもとで、注意力が成績遂行に及ぼす影響を検討した。

<方 法>

被験者：同志社大学体育会アーチェリー部部員31名（競技歴：1年未満2名、1年以上3年未満14名、3年以上15名）であった。

注意力の測定：加藤・細川（1995）によるTAISの日本語版（システムパブリカ製）により測定した。

装置：全日本アーチェリー連盟競技規則にそって、実験場面を設定した。心理的緊張を導入するためのビデオ撮影条件では、ビデオカメラ2台を被験者の右前方に設置し、2人ずつ上半身が撮影できるようにそのつど微調整した。また、聴覚的刺激条件を導入するための音呈示条件では、シューティングライン後方にラジオカセットレコーダーを設置し音刺激を呈示した。音刺激は、効果音大全集7（日本サウンドエフェクト研修会監修）の笑い声49秒間を繰り返し編集したものを用了。

手続き：実験に先立って、被験者に対してTAISに回答を求め、1週間以内に返送させた。実験は、同志社大学アーチェリー場において、快晴無風の状態で30mの距離で行った。実験状況は、音刺激の有無×ビデオ撮影の有無の4条件であった。各条件は2エンド*ずつでランダムに実施した。まず、被験者31名をランダムに8グループに分けた。各グループは、8エンド射ち（合計48本）、1エンドごとに点数（0点から10点）をつけた。1エンドは4分で、30秒前には口頭で警告を行った。また、点数採点は相互看的とした。

（注：*エンドとは6射を一区切りとする競技用語）

<結 果>

アーチェリー競技者のTAIS得点：被験者のTAISのT得点は、すべての尺度において、40～60の範囲内の値であった。注意関連尺度の中では、外部からの多くの刺激を同時に有効に統合できることを表すBET尺

内山 伊知郎

(同志社大学文学部)

度の得点が高かった。

TAIS得点と成績遂行：外界の刺激によって気が散るためにミスをする傾向を表す尺度であるOETには、負の有意な相関（ $r=-.41, p<.05$ ）がみられた。また、コントロールを測定する2つの尺度については有意な相関がみられなかった。さらに、対人関係尺度については、対人場面において自分をコントロールできると考えていることを表す尺度であるCONに正の有意な相関（ $r=.36, p<.05$ ）、自己尊重を表す尺度であるSESに正の有意な相関（ $r=.37, p<.05$ ）、外向性を表す尺度であるEXTに正の有意な相関（ $r=.40, p<.05$ ）、知的表出を表す尺度であるIEXに正の有意な相関（ $r=.45, p<.05$ ）がみられた。

各条件での成績遂行と注意：OET尺度について、中央値で上位群、下位群に分け、OET尺度×ビデオ撮影×音刺激呈示の3要因の分散分析を行なったところ、OET尺度の主効果が有意であり、OET下位群の方が成績遂行がよかった。音の要因についても、主効果が有意であり、音を呈示した方が成績遂行がよかった。ビデオ撮影条件については、有意な差がみられなかった。他の注意関連尺度については分散分析で有意な差がみられなかった。

<考 察>

本研究の結果から、TAISの注意関連尺度であるOETは、成績遂行と負の相関をもつことが明らかになった。また、OETの高い人は全ての場面で成績が悪かった。また、対人関係尺度の中では、CON, SES, EXT, IEX尺度などと成績遂行とが正の相関をもつことが明らかになった。なかでも、IEX, EXT尺度などで評定される、知的表出が高い人、外向的な競技者の成績がよい傾向が認められた。

つまり、アーチェリー競技には、とくに外界の刺激によって気を散らさないための注意力が必要とされる。また、知的表出をする人や外向性をもつ競技者の成績がよいと考えられる。

また、注意を妨害すると思われる音刺激を呈示したとき、むしろ遂行が促進される傾向が認められた。これは、音刺激が他の刺激の影響を受けにくくする効果として働いているためであると考えられる。

（ばばあやこ・うちやまいちろう）

柔道選手の心理的相違－選手と部員間の比較－

飯 田 穎 男

大学柔道選手 質問紙法 因子分析 分散分析

目的
スポーツ心理学研究のために開発され、アメリカ人道選手に対する研究、日米柔道選手における心理的相違等の柔道研究にもアメリカで幅広く活用されている3種類の質問紙を用いて日本の大学柔道選手を対象選手群と部員群の両群の因子構造より心理的特徴を比較検討した。

研究方法

(1) 質問紙

質問紙は State-Trait Anxiety Inventory Form(STAI-X1)20 項目、Sport Competition Anxiety Test For Adults(SCAT-X2)15 項目、State Sport-Confidence Inventory(SSCI-X3)12 項目の3項目を使用した。

(2) 被検者

被検者は学生柔道大会でも上位にランクされる2大会の計258名で選手群として国際大会、全日本学生柔道優勝大会等々にも出場した経験のある55名、部員群208名の2下位標本に分類した。段位は初段から参段、経験年数は平均8.87年、標準偏差2.63年であり、十分な経験を持っているといえる。

(3) 心理的特徴の推定法

統計学的立場から推定するため因子分析を用いることにする。すなわち各項目間について計算された相関行列に不完全主成分分析を施し、固有値が1.0以上の主成分についてノーマルバリマックス基準による直交回転を適用し多因子解を求めた。

結果と考察

(1) 不安度に対する調査－競技の試合直前－(X1)

1) 選手群 4因子が抽出され、累積貢献度は46.56%であった。因子負荷量は1.5以上を有意とした。

第1因子は不安である、心配している、緊張している、極度に緊張しているの4項目が抽出され「不安感情因子」と解釈した。第2因子は休んでいる、落ちついている、くつろいでいるで「リラックス因子」、第3因子は嬉しい気分である、楽しい気分であるで「喜びの因子」、第4因子は起こりうる不安を心配している、恐っているで「怒りの因子」と解釈した。

2) 部員群 同様に4因子が抽出され累積貢献度は55.56%、第1因子は「喜び因子」、第2因子は「不安感情因子」、第3因子は「リラックス因子」、第4因子

は「怒りの因子」と解釈した。両群を比較すると程度の差はあるものの同様な因子構造を示している。しかし選手群は代表選手としての心的圧迫のためか不安感情の占める領域が部員群に比較して大きい。

(2) スポーツにおける不安度の調査－競技時－(X2)

選手群の3因子の累積貢献度は39.55%に対し、部員群は抽出された固有値1.0以上の因子数は1因子のみで19.74%であった。両群を比較するとX1と同様に選手群は試合時においても不安、緊張の占める領域が部員群に比較して大きい。しかし部員群は因子構造としては選手群に比較して単純であるが、抽出された因子の特質は複雑であることを示している。

(3) スポーツに関する自信調査(X3)

1) 選手群 4因子が抽出され、適応能力、挑戦する因子、競技力向上因子、集中力因子と解釈した。

2) 部員群 2因子が抽出され、競技力向上因子、挑戦の因子と解釈した。X2と同様に部員群は因子構造は単純であるが抽出された因子の特質は複雑であった。また分散分析の結果、自信度において部員群に比べ選手群は顕著に高かった。

表1 平均値及び標準偏差

	選手群 (N=55)			部員群 (N=203)		
	X1	X2	X3	X1	X2	X3
M	50.60	33.29	65.36	52.66	34.38	55.66
SD	6.88	4.08	13.28	6.86	3.93	18.06

結論

1. 選手群、部員群とも競技直前の不安度は程度の差はあるものの同様な因子構造を示した。

2. 競技直前、競技中とも選手群は不安感情の占める領域が部員群と比較して大きい。

3. 試合中の不安度、自信度とも因子構造は選手群に比較して部員群は単純であるが抽出された因子の特質は複雑であることは示していた。

4. 自信度において選手群は多様な領域に分化している。また分散分析の結果、これから競技する自信が部員群より顕著に高いと推測された。

いいだ えいお

大学生の食に関する研究 (1) -看護科と栄養科学生の比較-

○關戸 啓子 小野 和美
(川崎医療福祉大学 医療福祉学部)

内海 滉
(千葉大学 看護学部)

キーワード：大学生，食習慣，看護科，栄養科

〔はじめに〕

看護科と栄養科学生は，将来，人の食生活援助に関わる可能性が大きい。その場合，食生活の援助方法には，自然と各自の食生活や食に関する考え方が反映されると思われる。そこで，看護科と栄養科学生の食生活と食に対する認識を調査した。今回は，国民栄養調査において，最も欠食率の高い朝食に焦点を当ててアンケート調査を実施した。

〔方法〕

1996年9月に看護科1年次生52名と栄養科3年次生18名を対象にアンケート調査を実施した。有効回答数は，看護科学生50名(有効回答率96.2%)，栄養科学生18名(有効回答率100%)であった。

〔結果〕

- 「朝食の習慣」においては，必ず食べると回答した学生が両群とも最も多く，看護科62.0%，栄養科66.7%であった。
- 「朝食を抜く理由」は，時間がないと回答した学生が両群とも最も多く，看護科89.5%，栄養科50.0%であった。次いで，作るのが面倒，食欲がないという理由であった。
- 「朝食の量」については，軽食(トースト1枚と飲み物程度)と回答した学生が両群とも最も多く，看護科64.6%，栄養科55.6%であった。
- 「朝食の時間-大学で1時限の講義がある日-」については，8時台と回答した学生が両群とも最も多く，看護科60.4%，栄養科55.6%であった。次いで，7時台の回答が多かった。
- 「朝食の時間-大学が休みの日-」については，9～10時台と回答した学生が両群とも最も多く，看護科77.1%，栄養科55.6%であった。
- 「朝食の習慣」と「朝食の量」について，学生の居住形態(自宅かアパート等で一人暮らしか)によって比較したが，差は認められなかった。
- 食習慣に関する20項目のアンケート調査結果を，3段階評価によって数量化し，バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，4因子が抽出された。(表参照)
- 学科別に因子得点を比較したところ，栄養科学生は看護科学生に比べて，食事の内容(f3)にこだわり

が強い傾向が認められた。(図参照)

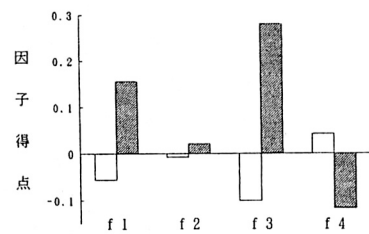
〔考察〕

朝食に関する食生活の実態は，看護科学生，栄養科学生ともに差はなく，むしろ非常に似た食生活であった。国民栄養調査における同年代の結果ともよく類似しており，大学生としてほぼ平均的な食生活であると思われた。また，大学がある時とない時の食事時間のずれから，その日の予定にあわせて，うまく食事時間を調整している様子が窺えた。一方，居住形態によって「朝食の習慣」と「朝食の量」は変わらないことから，幼児期から培われた食習慣は，大学生になって一人暮らしをしても継続されていることが推察された。看護科学生と栄養科学生は，表面上の食生活に差はなかったが，食に対する認識には差があり，栄養科学生は食事内容に関心を示し，学科の特性が示唆された。

因子分析結果

Q-No.	質問項目	f 1	f 2	f 3	f 4	因子名
⑬	空腹だと何も考える気がしない。	0.899	0.027	0.058	0.027	空腹時の 気持に関する因子
⑭	空腹だと何もする気がしない。	0.869	0.042	0.100	-0.095	
⑮	空腹だと腹が立つ。	0.503	0.280	-0.084	0.086	
⑯	①お腹一杯食べないし，食べた気がしない。	0.143	0.643	-0.207	-0.328	食事回数 と量に関する因子
⑰	②少し食べれば十分である。	0.189	0.634	-0.177	-0.303	
⑱	③毎日3食必ず食べるように気をつけている。	-0.101	0.624	0.292	0.139	
⑲	④1食位抜いても気にしない。	0.026	0.578	0.150	0.072	食事内容 に関する因子
⑳	⑤食事をしなくても生きていく方法があれば，食べなくてもかまわない。	0.063	0.445	0.019	0.067	
㉑	⑥食事内容のバランスを考えて食事をとるようにしている。	-0.003	0.186	0.742	-0.037	
㉒	⑦食事内容は気にしない方である。(食べれば良い)	0.193	-0.039	0.705	-0.018	食事時間 に関する因子
㉓	⑧使用する食材にこだわりを持っている。	-0.168	-0.035	0.483	0.290	
㉔	⑨食事はじっくり味わって，ゆっくり食べる。	0.085	0.142	0.236	0.490	食事時間 に関する因子
㉕	⑩食事に時間をかけるのは，時間ももったいないと思う。	-0.013	-0.056	-0.079	0.453	

※累積寄与率47.3%



□看護科 (n=50)
▨栄養科 (n=18)

因子得点 一学科別一

せきど けいこ，おの かずみ，うつみ こう

大学生の食に関する研究 (2) - 朝型と夜型タイプの比較 -

○小野 和美 關戸 啓子
(川崎医療福祉大学 医療福祉学部)

内海 滉
(千葉大学 看護学部)

キーワード：大学生，食生活，朝型と夜型タイプ

〔はじめに〕

母親の食行動パターンが，子どもの食生活を左右していることが報告¹⁾されており，母親の食生活管理に対する能力は大切である。青年期の女性は，将来母親となり，家庭の食生活に大きな役割を担う可能性が高く，その準備期とも捉えられる存在である。そこで，女子大学生を対象に，食生活に関するアンケート調査を実施した。今回は，生活パターンの差による，食生活への影響を検討するため，日本語版朝型—夜型質問紙²⁾による調査を同時に実施した。

〔方法〕

1996年9月に女子大学生（看護科学生52名，栄養科学生18名）を対象にアンケート調査を実施した。有効回答数は68名（有効回答率97.1%）であった。

〔結果〕

1. 朝型の学生は12人(17.6%)，中間型の学生は45人(66.2%)，夜型の学生は11人(16.2%)であった。看護科学生と栄養科学生の間には差は認められなかった。
2. 学生の居住形態については，朝型—夜型による差は認められなかった。
3. 「朝食の習慣」においては，必ず食べると回答した学生は，夜型に少なく，他の2群に比べて有意差が認められた。
4. 「朝食を抜く理由」は，時間がないと回答した学生が3群とも最も多く，差は認められなかった。
5. 「朝食の量」については，軽食（トースト1枚と飲み物程度）と回答した学生が3群とも最も多く，差は認められなかった。
6. 「朝食の時間—大学で1時限の講義がある日—」については，朝型は7時台が他の2群に比べて多く，8時台が他の2群に比べて少なかった。それぞれ，有意差が認められた。
7. 「朝食の時間—大学が休みの日—」については，朝型は8時台が，中間型は9～10時台が，夜型は10時台が最も多かった。
8. 食習慣に関する20項目のアンケート調査結果を，3段階評価によって数値化し，バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，4因子が抽出され，f 1：空腹時の気持に関する因子，f 2：食事回数と量に関する因子，f 3：食事内容に関する因

子，f 4：食事時間に関する因子と解釈した。

9. 朝型—夜型別に因子得点を比較した（図参照）。

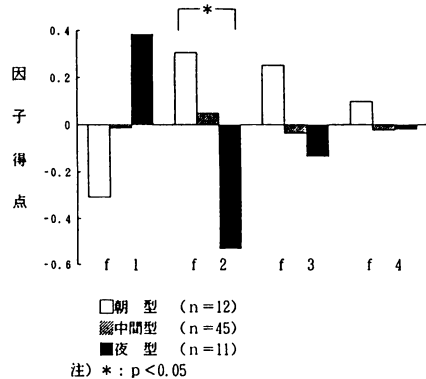
f 1において，朝型は空腹によって気持が左右されにくく，逆に夜型は左右されやすい傾向が認められた。f 2において，朝型に比べて夜型は食事回数・量にこだわりが少なく，有意差が見られた。f 3において，朝型は食事内容を気にする傾向が認められた。f 4においては，朝食—夜型による差はみられなかった。

〔考察〕

居住形態によって，朝型—夜型タイプの学生構成に差はなく，過去に培われた生活パターンは一人暮らしであっても継続されていることが推察された。

夜型の生活スタイルを持つ学生は，朝が遅いためか朝食を抜く者が多かった。朝食の時間も，朝型—夜型の各生活スタイルを反映したものになっていた。

因子得点の結果をみると，朝型は夜型に比べて，食事回数や量，内容を気にする傾向が認められ，食に関する認識が高い群であることが示唆された。



因子得点 —朝型—夜型別—

〔文献〕

- 1) 春木 敏ほか：食行動にみる食意識の構造分析（第2報），栄養学雑誌，51(6)，317-327，1993。
- 2) 石原金由ほか：日本語版朝型—夜型質問紙による調査結果，Japanese Journal of Psychology，57，87-91，1986。

おの かずみ，せきど けいこ，うつみ こう

実習における情報収集の記述の意識

—環境に関する看護記録を通して—

○生駒和子

内海 澁

(都立府中病院)

(千葉大学看護学部)

情報収集・環境・看護記録・臨床実習・因子分析

【目的】臨床実習での環境に関する情報収集の記述内容を調査し、記述要素を因子分析する。そして、記述の類似特性を観察する。さらに、情報特性の構造と学生の属性との関連を分析し、今後の教育に役立てる。

【研究方法】

1. K看護専門学校三年課程の2年生83名の属性(居住場所・親との同居等)の調査
2. 上記の学生の基礎実習Ⅲ(1996.9/3~9/19)で情報収集項目の環境「ベッド及び周囲に関心をはらい自立できるか」の記述内容を調査
3. 記述内容を分類し、因子分析(パルックス法)し学生の属性との関連を調べる

【結果・考察】方法1.2.の用紙は100%の回収を得た。

1. 情報の記述内容と記述件数

記述の内容数は366件あり、記述内容をK.J法で整理した結果、29項目に分けられた。更に、それらを身体・心理・社会・物理的環境の4カテゴリーに分けた。

カテゴリー別の内容頻度は、物理的環境が178件と一番多かった。周囲の物品や整理の状況を記述し「ベッド及び周囲に関心をはらい自立できるか」を明らかにする傾向であった。身体的環境は148件あり、行動の記述・身体的状況・自立状況・安静度が多く、身体的状況や安静度を記述し自立状況を明らかにしている。

心理的環境は35件と少ないが「関心をはらえるか否か」は、心理面に触れないと判断しにくい内容であり基礎実習Ⅲで「関心をはらえる・気にとめている・患者の習慣について・何々したがる」等の情報収集がなされている事がわかった。社会的環境は10件あり「他者が何々をしている・～をしてもらっている・学生が～をした」であった。「ベッド及び周囲に関心をはらい自立できるか」に対し患者自身が実施していない事を察知し患者を取り囲む人的環境の働きかけに目が向けられていた。各カテゴリー中の項目別の平均値と標準偏差は表1である。平均値の高い記述の順位は身体的環境の「行動の記述」、物理的環境の「周囲の物品」、身体的環境の「身体的状況」の順であった。心理的・社会的環境の記述項目は平均値も標準偏差も低い値であった。これは、弘山¹⁾の「学生は、受持ち患者の客観的事実、及び症状経過にまず関心を持ち、それに関連させて情報を集め始める」の結果と類似していた。

表1 項目別得点

身体的環境		心理的環境		社会的環境		物理的環境	
MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.
6 行動の記述	0.66 0.83	11 心を伝える	0.13 0.37	13 他者が～を	0.06 0.24	15 周囲の物品	0.49 0.77
2 身体的状況	0.41 0.69	8 氣にとめてい	0.10 0.33	14 ～をしてもら	0.04 0.19	20 機能的な物	0.36 0.63
4 自立の状況	0.34 0.57	10 態度について	0.10 0.30	25 学生が～を	0.01 0.11	16 物品の状況	0.33 0.70
3 安静度	0.30 0.54	9 何々したがる	0.05 0.21	21 ～をした	0.01 0.11	17 整理の状況	0.33 0.60
5 介助の状況	0.04 0.19	12 関心について	0.02 0.15			22 床面	0.23 0.50
7 行動の履歴	0.04 0.19	28～の履歴を	0.01 0.11			24 ゴミ	0.13 0.40
		29 人に接し	0.01 0.11			23 リネンや床	0.08 0.35
						21 掃除の方法	0.05 0.21
						18 整理の頻度	0.04 0.19
						19 行動補助具	0.02 0.15
						26 記録～ペ	0.02 0.15

2. 因子の命名と因子構造

記述を項目別に分類したマトリックスにおいて因子分析し累積寄与率52.38%で7因子を抽出し、出来事の実事・周囲の整理状況・整理頻度・希望と取り巻き・行動場面と習慣・ゴミと周囲の状況・身体状況因子と命名した。何れの因子構造も、身体・心理・社会・物理的環境の記述項目の交流が観察され全体的観察を試みる傾向にあると考えられた。

3. 背景群別因子得点平均値の比較

7因子の因子得点について居住場所・両親との同居の有無の関連を観察した。

居住場所が自宅である学生は自宅以外の学生より、

6因子において得点平均値が高い。中でも周囲の整理状況因子は5%の有意差がある。父親または母親と同居している学生は、同居していない学生より周囲の整理状況因子に1%の有意差がある。

居住場所が自宅であったり、親と同居していると、学生自身が周囲の物品や整理状況について意見をされたりするため、患者の周囲の整理状況や物品・周囲の状況について記述が多くなされるのではと考える。また、家族に囲まれ庇護を受け気持ちにゆとりが生まれ患者の周囲の状況が観察されやすいとも考えられる。

【まとめ】

「ベッド及び周囲に関心をはらい自立できるか」の記述内容を調査し、学生の記述の意識と関与するものとして以下が分かった。(1)受持ち患者を取り巻く周囲の物品や、その状況、患者の身体的状況に目を向けての情報収集が多い。(2)記述内容の因子構造は全体的観察を試みる傾向にある。(3)情報収集の記述内容を規定する要因は居住場所・親との同居に関連が見られる。

【引用文献】

- 1) 弘山弘子: 情報収集における学生の思考過程, 教務と臨床指導者, 日総研出版6(4): 162-167, 1993.
- いこまかずこ, うつみこう

看護学生の子供に対するイメージの構造

○寺田敦子 草野美根子

中 淑子

内海 晃

(佐賀医科大学医学部)

(産業医科大学産業保健学部)

(千葉大学看護学部)

看護学生

子供のイメージ

小児看護実習

研究目的：小児看護実習を通して看護学生が子供のイメージをどのようにとらえているのか、意識構造の変化を明らかにすることで、小児看護実習の学習効果と意義を検討したので報告する。

研究方法：(1)対象：S大学看護学生61名。

(2)方法：小児看護実習開始前と中間、終了後に子供のイメージ(中作成)について、やさしい-きびしい、明るい-暗い、うれしい-悲しい、柔らかい-かたいなどの形容詞35項目(7段階評価)で記載させた。

フェイスシートとして家族形態、兄弟の数、子供と接した経験の有無、健康状態などを調査した。

結果・考察：因子分析の結果、第1因子として快的因子、第2因子として活動因子、第3因子として形量因子を抽出した(表1)。

学生のフェイスシートでの群別比較として因子スコアにおける各因子間の実習前後のt検定を行った結果(表2)、兄弟のいる者といない者、子供との交流のある者とない者、戸外で遊んだ者と室内で遊んだ者などに有意差を認めた。

表1のように学生の持つ子供のイメージは第1因子(快的因子)で、かわいい、興味ある、好きなどの項目で示されており、子供を好ましい対象としてとらえている。

第2因子(活動因子)では動物的な、動的な、粗野ななどの項目から子供を活発なイメージでとらえている。

第3因子(形量因子)では大きい、鋭い、強い、速いなどのように子供の特性を量的にとらえて形容していると考えられる。

表2では第2因子(活動因子)で兄弟の有無や遊び場の異っていた者などに、第3因子(形量因子)では兄弟の有無、小学生以上を子供とイメージしていた者などに有意差を認めた。1人っ子や室内で遊ぶことが多かった者は実習を通して、複数の子供同士が療養の範囲において活発に遊ぶ様子を見ることで、子供の活動性に対する認識を新たにし、兄弟のいる者や小学生以上を子供であるとイメージしていた者は自分自身の兄弟との交流、乳幼児と比較した場合の体格の差や運動能力の発達に違いを感じたためではないかと考える。

表1 因子分析による因子負荷量

第1因子	第2因子	第3因子	項目内容	
0.82	0.03	0.00	25.かわいい	快的因子
0.79	0.02	0.00	19.興味ある	
0.78	-0.06	0.02	18.好き	
0.72	0.29	0.08	16.愉快な	
0.70	0.01	0.06	5.美しい	
0.68	0.28	0.14	3.うれしい	
0.68	0.15	0.13	9.暖かい	活動因子
-0.07	0.69	-0.24	15.動物的な	
0.32	0.63	-0.17	24.動的な	
-0.20	0.61	-0.02	22.粗野な	
0.12	0.60	-0.11	14.一時的な	
-0.11	0.58	0.36	21.激しい	
0.27	0.57	-0.12	13.賑やかな	形量因子
0.29	0.47	0.08	34.積極的な	
-0.05	-0.12	0.79	12.大きい	
0.00	0.14	0.66	10.鋭い	
0.03	0.01	0.62	4.強い	
-0.19	0.15	0.53	32.速い	
0.36	-0.07	0.45	35.賢い	
0.19	0.39	0.42	28.鮮やかな	
0.25	-0.24	0.42	30.複雑な	

表2 有意差を認めた項目

項目	F 1 (快的因子)	F 2 (活動因子)	F 3 (形量因子)
兄弟		** T = 2.79 1人っ子 > 兄弟あり	*** T = 3.14 1人っ子 < 兄弟あり
子供との交流		* T = 2.06 交流ある > 交流ない	
遊び場		** T = 2.73 戸外 < 室内	
子供のイメージ			** T = 3.09 幼児期まで < 小学生以上
家族数		* T = 2.09 3人 > それ以上	
嫌いな科目			** T = 3.16 ある < ない

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

実習開始前、中間、終了後において各因子を比較したところ活動因子において実習前後と実習中と終了後、形量因子では実習前後で有意差を認めた。これは実習を通して子供の活発さを体験し実感したものと考える。

てらだあつこ くさのみねこ
なか よしこ うつみ こう

看護婦の技術に関する意識と行動

——— 看護婦の日常の行動から ———

○金子 潔子 内海 澁
(都立板橋看護専門学校) (千葉大学)

キーワード：看護技術・看護の行動・意識

〔目的〕

看護は、対象に看護技術を用いることで成り立つ。だから基礎教育においても、技術教育には特に力が注がれている。実際に卒業生が臨床でどのような意識を持って看護技術を行っているか、看護婦の日常の看護技術の行動と意識の実態を明らかにし、今後の技術教育のあり方の検討に役立てたい。

〔研究方法〕

対象は現行のカリキュラムで卒業し、都立病院に就職している看護婦483名である。調査内容は、M. ホワイトの看護の重要度の調査項目を参考にして、生理身体的援助、心理・コミュニケーション、診療の補助、指導教育のカテゴリーから50項目の質問紙を作成し、看護技術について①行動、②意識、③重要性の各々を4段階で評価した。データ分析は、因子分析(バリマックス回転法)による因子構造を調べ、属性群別に個人の因子得点の平均値を算出、群差を比較した。

〔結果〕

調査票は73%の回収率であった。

①項目別得点では、教育・指導のカテゴリーで平均が低かった。②看護婦の日常の行動の因子分析の結果7つの因子が抽出され、日常のケアには身体的な安楽への援助と配慮を伴った精神的援助、環境の整備に関する3つの因子が認められた(表1)。また看護の

表1 因子分析負荷量表(行動)

	質問項目	F2	F3	F5	因子の命名	
F	11 体位を定期的に変換する	-0.62	0.01	0.09	第一日常 ケア因子	
	27 安楽な体位を保持させる	-0.60	-0.07	0.14		
2	16 ベッドからの置き上がりを手助ける	-0.58	0.20	-0.01		
F	19 時間とおりに薬物を与える	-0.04	0.73	0.03		第二日常 ケア因子
	25 食事内容の観察	-0.14	0.67	0.03		
3	20 観察できる状況をつくる	-0.08	0.65	0.16		
F	6 毎朝ベッドの状態を観察しベッドメイキング	-0.09	-0.02	0.72	身の回りの 世話因子	
	8 病室を掃除機で片づける	-0.17	0.07	0.68		
	5	14 ベッドの周囲を片づける	-0.21	0.13		0.63

表2 因子分析負荷量表(意識)

	質問項目	F2	F3	F7	因子命名	
F	26 患者の気持ちや状態を医師に伝える	0.65	0.13	0.00	医学的コミ ュニケーシ ョン因子	
	32 患者の訴えをきく	0.52	0.19	-0.14		
	2	30 医師指示を実施	0.52	0.17		0.11
	50 分かりやすく検査の説明をする	0.52	0.14	0.14		
F	36 悩み不安のある患者の話をきく時間をとる	0.18	0.77	-0.00	意思的コミ ュニケーシ ョン因子	
	25 家で言う言葉について家族に説明する	0.13	0.70	0.10		
	3	29 家族と話し合う時間をとる	0.13	0.70		0.10
F	10 患者の要望にナースコールをよく使う	-0.02	-0.05	0.69	話し合い 因子	
	49 ベッドサイドの整理を片づける	0.20	0.16	0.57		
	7	45 離れない患者を別室によんで話をきく	0.04	0.26		0.49

った(表2)。③看護技術の属性群別の比較では、年齢別で身の回りの世話因子に差があった(P<.01)(表3)。看護婦の経験年数の比較では、コミュニケーション因子で4年目の群が行っていると答えていた

表3 因子得点群別平均値

年齢(件数)	行動 f5(身の回りの世話因子)平均値(標準偏差)	t	df
25歳以下(285)	-0.10(0.97)	t = 3.74	df = 347
26歳以上(64)	0.42(1.01)		

(P<.05)(表4.5)。

表4 経験年数(コミュニケーション)因子

	変動	自由度	分散	分散比
群間変動	15.927	3	5.30901	5.4547 **
群内変動	327.026	336	.973292	
総変動	342.953			
経験年数(患者中心の看護)				
	変動	自由度	分散	分散比
群間変動	8.24768	3	4.12384	4.3399 **
群内変動	345.874	336	.950216	
総変動	354.122			

〔考察〕

①看護技術の項目別得点で指導・教育ができていないことは、看護の経験が浅くゆとりがないこと、指導時の基本となるコミュニケーション技術がまだ未熟なことなどが考えられる。

②因子分析の結果、今まで日常生活行動の援助として一緒にとらえていた日常のケアには3つの意味があることに気づかせてくれた。看護婦の意識のなかでも日常のケアの3つの因子を、別なものと認識していると考えられる。

また看護の重要性の因子分析で3つのコミュニケーション因子が抽出されたことは、看護婦のなかでコミュニケーションの必要性が意識できていると思われる。この3つのコミュニケーションの意味は、今後教育のなかでも活用することができるであろう。③看護婦の経験年数でコミュニケーション因子が4年目で高いことは、看護の経験によって患者に関心が向けられたことと、患者と話すことに慣れたことでコミュニケーションを行っていると考えられる。④看護技術は、経験を積み重ねるなかで卒後も成長してゆくものであると考える。それ故基礎教育において必ずしも、理想の段階に到達しなくとも、卒後教育のなかで看護技術の成長を期待することが効果的なカリキュラムを作成するために必要と考える。

かねこ きよこ うつみ こう

患者－看護婦関係の分析

—— 言語速度を通して

今富さゆり（福岡大学筑紫病院） 内海 滉（千葉大学） 篠原 純子（広島大学）

キーワード：患者－看護婦関係・会話・言語速度・相互言語速度比

はじめに

「看護は、患者と看護婦との間の治療的対人プロセスである」とペプロウは言っている。両者の間で交わされる会話は、相互的な過程であり、互いに談笑したり沈黙している時も、何らかの手段によって何かを相手に与えようと交流を行っている。この相互作用は看護にとって基本的なものであり、一方的な情報提供ではなく、患者からの情報を看護婦が的確に受けとめる機会となる。今回、可能な限り科学的客観的裏付けの観点から、有海や高田らの技法を追試し、患者と看護婦との会話における相互作用について、話題別に言語速度を算出し分類を試みた。

方法

1. 対象

- ①患者：言語生活に支障のない70歳以上の5名
- ②看護婦：4名

2. 面接場所：病室

3. 会話時間・内容

- ①会話時間：制限せず
- ②会話内容：自由雑談形式（それとなく健康に向う姿勢をもたせるようにする）

4. 情報分析方法

- ①会話はすべて録音し、プロセスレコードに復元する。
- ②話題別に言語時間と語彙数をモーラの次元で計量し言語速度・相互言語速度比を算出する。

言語速度＝言語量（モーラ）／言語時間（分）
相互言語速度比＝患者の言語速度／看護婦の言語速度

- ③全会話は4段階に分け、相互言語速度比で二つに分類する。

結果

言語速度は患者と看護婦が初対面でないためか、最初から高くなっている。事例Ⅰ～Ⅳは患者と看護婦の曲線の差が小さく平行に変化し、事例Ⅴ・Ⅵの曲線の差は大きく、患者と看護婦の会話にずれがみられる。

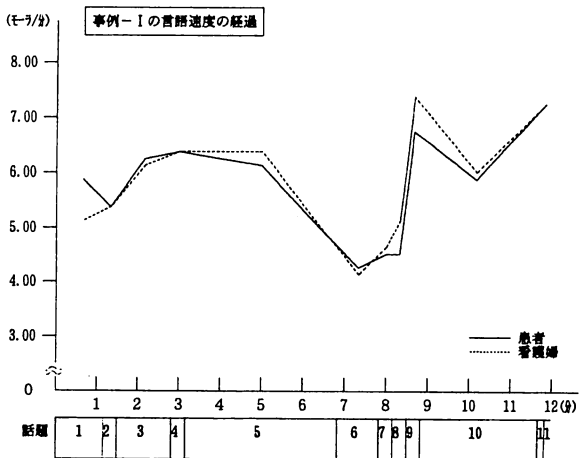
相互言語速度比の曲線は事例Ⅰ・Ⅱは話題毎の変化度が小さくなっている。しかし、事例Ⅲ～Ⅵは変化度が大きく、頻繁になっている。その中で事例Ⅰは変化度が一番小さく「1.00」に近い曲線をしめしている。

全会話を4段階に分けた時の相互言語速度比は最終

が下降している（看護婦の言語速度が大きい）パターン1と、最終が上昇している（患者の言語速度が大きい）パターン2とした。

6事例を分類すると、言語速度の曲線の幅は事例による差はない。患者と看護婦の言語速度の曲線の差は0.26～0.646であり、パターン1の方が差が小さくなっている。相互言語速度比は事例Ⅰでは各話題毎の変化度が小さく平均1.00になる。また事例Ⅲ・Ⅳは1.00に近いが各会話毎の変化度が大きく、事例Ⅴ・Ⅵは1.00から遠ざかり、変化度も大きくなっている。更に相互言語速度比の標準偏差は、事例Ⅰ～Ⅳは分散が小さく、事例Ⅴ・Ⅵは分散が大きい。

話題の内容はパターン1の事例Ⅰ～Ⅲと事例Ⅵは医療に関する話題が75%以上をしめている。しかし、事例Ⅳ・Ⅴは36～55%と医療に関する話題は少なくなっている。相互言語速度比の標準偏差と医療に関する話題の比率との関係は右下がりの回帰直線になる。標準偏差が小さいほど医療についての会話が多くなっている。更に、看護婦は医療に関する話題を患者に投げ掛けている。発言時間と発言量の比率は、パターン1の事例Ⅰ～Ⅲとパターン2の事例Ⅳは全会話の64%以上を患者がしめている。各話題の全体会話における比率は、患者が投げ掛けた話題の両者の会話量が少なく、看護婦が投げ掛けた話題の会話量が多くなっている。また、患者が投げ掛けた話題は次の話題の言語速度を上昇させる糸口になっている。



(いまとみさゆり, うつみこう, しのはらじゅんこ)

音響の看護婦に及ぼす影響

—警報音環境と音楽嗜好性—

○鈴木 千春

山下 春江

内海 況

愛知医科大学附属病院

九州大学医学部附属病院

千葉大学

警報音 音響 看護

〔目的〕

音響は、その大きさや種類、音質により看護に効果的に働くが、逆に看護の妨げともなる。山本氏は、大きい音・ランダムな間欠音、予期できない音・聞き慣れない音・意味のある音などは、作業能率（複雑な判断や記憶を必要とする作業）妨害をおこしやすいと述べている。看護婦は、病院の中で幾種類もの医療機器の音に囲まれて働き、その音を時間の経過とともに日常的な音として感じるようになる。しかし、日常的な音として感じる医療機器のおとは、看護婦にとっていかなる影響を与えるのか。

今回、医療機器の音が、看護婦に対してどのような影響を及ぼしているのかを、生理心理学的反応（皮膚温・皮膚電気抵抗・皮膚血流）ならびに、音響に関するアンケート調査により検討した。

〔方法〕

1. 対象は、医療機器の音に囲まれて働く看護婦15名。
(平均年齢：32.4 ± 3.2才)
(平均看護婦経験年数：11.1 ± 2年)
対照群として臨床実習経験のない看護学生10名。
(年齢：19~20才)

2. 実験とアンケート調査を実施した。

〈実験〉被験者は、防音室内でアイマスクを着用し、安静臥床状態とする。呼吸器警報音（440Hz）を被験者の耳もとで約70dBとなるように設定。その警報音を被験者に聞かせ、警報音負荷の前後で皮膚温・皮膚電気抵抗・皮膚血流を測定した。

〈アンケート〉音響に対するアンケートを実施。

〔結果〕

1. 皮膚温について

警報音負荷により皮膚温が低下したのは、看護婦は15名中10名、学生は10名中5名であった。その前後の変化の平均は、看護婦：31.38→31.33℃ 学生：31.25→31.18℃。看護婦は皮膚温低下、学生は上昇という逆の反応がみられた。（P < 0.01）（図1参照）

2. 皮膚電気抵抗について

警報音負荷により皮膚電気抵抗が減少した者（手のひらに汗をかいた者）は、看護婦は15名中10名、学生は10名中3名であった。その前後の変化の平均は、看護婦：671.41→625.77 学生：314.51→398.21。看護婦

は学生に比べて皮膚電気抵抗の低下が大きくみられた。（P < 0.2）（図2参照）

3. 皮膚血流について

警報音負荷により皮膚血流が低下したのは、看護婦は15名中12名、学生は10名中2名。また無負荷時に対する警報音負荷時の比率は、看護婦1.38 学生1.26であり、看護婦の方が変化の比率が高い。（図3.4参照）

4. 音響に対するアンケートでは、学生は、看護婦に比べてせいかつの中に音楽がある方がよいと答えるが、実際にはBGMを聴くのは看護婦の方が多い。

〔考察〕

看護婦は、警報音を聞くと、皮膚血流が低下し、皮膚温が下降する。即ち、交感神経が刺激され、ストレス反応が起こったと考えられる。さらに、皮膚電気抵抗が低下したことから皮膚に潤滑を生じ（手に汗をかき）精神的動揺を受けたと言える。学生は、警報音を聞いてもストレス反応は弱く、精神的動揺は受けていない。これは、警報音が、看護婦にとって意味のある音であり、ストレス反応を起こす音であることが示唆された。

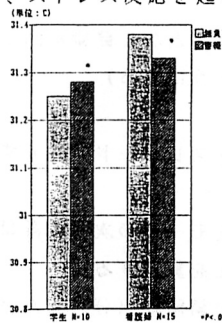


図1 警報音負荷による皮膚温変化

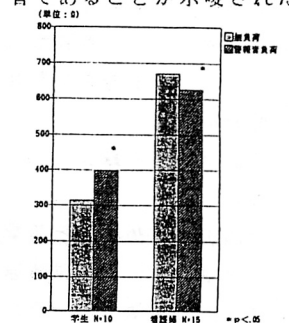


図2 警報音負荷による皮膚電気抵抗変化

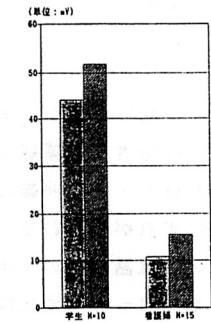


図3 警報音負荷による皮膚血流変化

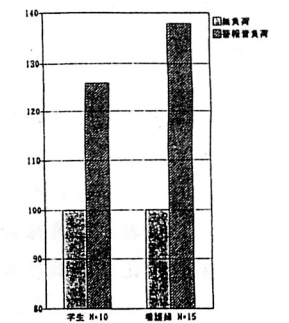


図4 無負荷時に対する警報音負荷時の比率 (血流)

すずきちはる やましたはる え うつみこう

皮膚血流の研究—深呼吸の皮膚血流に及ぼす影響—

○山下春江

(九州大学医学部附属病院)

皮膚血流 深呼吸

鈴木千春

(愛知医科大学附属病院)

内海 澪

(千葉大学)

M A S

が生じたとも考えられる。

3. M A S の得点別深呼吸による皮膚血流の変化 (図2)

M A S の得点10点以下は31例で、深呼吸による皮膚血流の変化は、 $1.52 \pm 1.37\text{mm}$ 、11~15点は26例で $1.56 \pm 1.38\text{mm}$ 、16~20点は20例で $2.04 \pm 1.94\text{mm}$ 、21点以上は20例で $1.30 \pm 1.17\text{mm}$ であった。

4. 皮膚血流の変化別年齢、肺活量、M A S 得点の比較

深呼吸による皮膚血流の変化は、増加したグループ34例 (A群)、変化しなかったグループ11例 (B群)、減少したグループ52例 (C群) の3つのグループに分けられた。1) 年齢では各群の差はみられなかった。2) A群の肺活量は、 $2633.75 \pm 385.86\text{cc}$ 、B群は $2954 \pm 390.95\text{cc}$ 、C群は $2795.69 \pm 412.24\text{cc}$ であった。B群で肺活量が多く、B群とC群では有意差がみられた ($p < 0.05$)。3) A群のM A S の得点は、 16.40 ± 5.20 点、B群は 13.34 ± 4.99 点、C群は 13.88 ± 5.43 点であった。A群が一番高い得点であった。

深呼吸による皮膚血流の変化の見られなかったグループは、変化のみられたグループに比べ肺活量が多く、M A S 得点は低い傾向がみられた。

肺活量が少なく、不安得点が高い例では深呼吸を1分間行うことはストレスになる可能性もある。

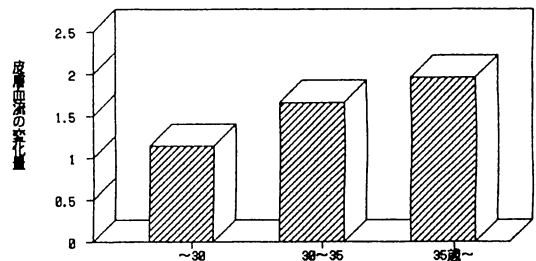


図1. 年齢別深呼吸による皮膚血流の変化

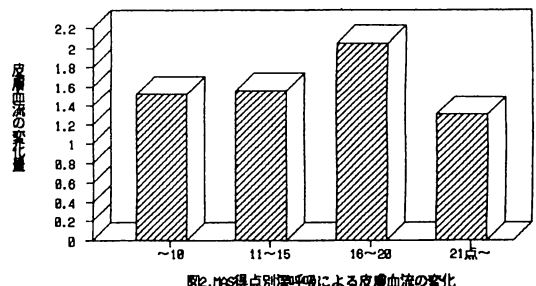


図2. M A S 得点別深呼吸による皮膚血流の変化

(やましたはるえ すずきちはる うつみこう)

I. 目的

呼吸と血流は、身体の重要な機能のひとつである。呼吸は皮膚血流を減少させるが、正常呼吸に戻すと1分以内にもとのレベルに回復する。各種分野の看護において、緊張の除去、呼吸機能の訓練などに深呼吸が実施されている。今回、深呼吸の皮膚血流に及ぼす影響を調べ、年齢、肺活量、不安の要因で生じる差を検討した。

II. 方法

1. 実験期間：平成6年12月9日~平成7年1月19日。
2. 実験対象：成人女性13名 (年齢 31.89 ± 3.35 歳、肺活量 $2760.22 \pm 414.69\text{cc}$)。
3. 使用機器：シンコルター C T E 血流計。
4. 実験方法：①測定場所は、右前腕内側中央部とする。
②被験者は防音室のベッドに仰臥位になる。
③安静臥床し、血流が安定したら右上肢挙上を1分間行う。
④約2~3分後血流が安定したら、右上肢挙上姿勢で深呼吸10回を1分間以内に行う。(吸気2秒、呼気4秒)
⑤血流が安定した時点で、実験を終了する。
⑥被験者には全員M A S 不安テストを行う。

実験はのべ97例に施行した。右上肢挙上時と右上肢挙上姿勢で深呼吸を行った時の血流を測定し、その変化の差で深呼吸の皮膚血流に及ぼす影響を推定した。

III. 結果および考察

1. 年齢別深呼吸による皮膚血流の変化 (図1)

30歳未満は30例で、深呼吸による皮膚血流の変化は、 $1.14 \pm 1.02\text{mm}$ 、30~35歳は43例で $1.66 \pm 1.58\text{mm}$ 、35歳以上は24例で $1.96 \pm 1.67\text{mm}$ であった。年齢が高くなるほど、深呼吸による皮膚血流の変化が大きくなり、30歳未満と35歳以上では有意差がみられた ($p < 0.05$)。

2. 肺活量別深呼吸による皮膚血流の変化

肺活量2500cc以下は43例で、深呼吸による皮膚血流の変化は、 $1.82 \pm 1.75\text{mm}$ 、2500~3000ccは26例で $1.63 \pm 1.33\text{mm}$ 、3000cc以上は28例で $1.13 \pm 1.07\text{mm}$ であった。肺活量が小さいほど深呼吸による皮膚血流の変化が大きかった。肺活量の少ない被験者で、1分間の深呼吸はきつかったと感想を述べた者がいた。肺活量の少ない被験者は、深呼吸がストレスとなり、皮膚血流の変化

医療材質の研究 - タオルとガーゼの感触イメージと皮膚血流との関連 -

○篠原 純子

内海 滉

今富 さゆり

(広島大学医学部保健学科) (千葉大学看護学部) (福岡大学筑紫病院)

キーワード 医療材質・皮膚血流・感触イメージ

看護で用いられる医療材質の中にタオルとガーゼがある。タオルとガーゼは、どちらも皮膚を外界の刺激から保護する目的および皮膚の付着物を除去する目的で直接身体に当てて用いられる。今回、タオルとガーゼの感触が身体に及ぼす影響を観察するために感触イメージと皮膚血流との関連を検討した。

【研究方法】

対象：28～36歳の健康な女性14名

期間：平成7年12月4日～平成7年12月17日

使用機器：交差性熱電対方式による皮膚血流計
UM-METER

使用材料：タオル（綿100%）32×32cm

1回の実験につき1枚使用

手術用尺角ガーゼ（タイプ1）30×30cm

1回の実験につき11枚使用

アンケート調査：

1) 平成7年度看護婦学校看護教員講習会受講生34名（女性33名、男性1名）を対象にタオルとガーゼの感触イメージを山崎記載形式で調査しKJ法を用いて整理した。

2) KJ法を用いて整理した感触イメージの中から22項目を抜粋し実験時のアンケート調査に用いた。

実験とアンケート調査の方法：

1) 被験者はアイマスクと耳栓を装着し、ショーツ一枚と浴衣を着用する。

2) 被験者の左前腕内側中央部に皮膚血流測定素子を固定する。

3) 仰臥位にて安静臥床し、血流安定後に実験を開始する。

4) 37℃、3.5lの湯に右手関節～指先までを5秒間浸した後、タオルで水分を拭きとる。

5) 水分を拭きとったタオルで右手を覆った状態にて、左上肢を1分間拳上し、皮膚血流負荷変動量を測定する。

5) その後アイマスクをしたままの状態にて、タオルの感触イメージを22項目2段階で調査する。

6) ガーゼについても同様の方法で行う。

結論

1. ガーゼはタオルに比べて不快の感触イメージ得点が高かった（ $P < 0.05$ ）。

2. 不快の感触イメージ得点が3点以上の場合には、タオルとガーゼの皮膚血流負荷変動量の間有意差を認められた（ $P < 0.05$ ）。

3. 快の感触イメージ得点が3点以上の場合には、タオルとガーゼの皮膚血流負荷変動量の間有意差を認められなかった（ $P > 0.05$ ）。

4. タオルとガーゼの感触イメージを因子分析により不滑因子・冷因子・柔軟因子・滑因子・温因子に分類した。

5. ガーゼはタオルに比べて、滑因子と冷因子の因子得点が高かった（ $P < 0.05$ ）。

ガーゼはタオルに比べ不快の感触イメージが強い。また、不快の感触イメージ得点が高いときにはガーゼはタオルに比べ皮膚血流への影響が大きい。

今後は、看護におけるタオルの有効的な利用方法ならびにガーゼの感触イメージに影響を及ぼす要因およびその看護について検討していきたい。

表 アンケート調査によるタオルとガーゼの感触イメージ

タ オ ル		ガ ー ゼ	
快	不 快	快	不 快
やわらかい	26かたい	3やわらかい	10かたい
ソフト	1		少しかたい
あたたかい	4つめたい	1あたたかい	1つめたい
ぬくい	1少しつめたい	1少しあたたかい	1ひんやりしてる
やさしい	5	やさしい	1
ふんわり	4ごわごわ	2ふかふか	1ごわごわしてる
ふわふわ	5		4
ふわっ	2		
さらっしてる	1	1さらっしてる	1さらっした
			7
さらさら	1がさがさする	1さらさら	2かさかさ
		2さらり	2がさがさ
		するっ	1がさつく
つつる	1	つつる	2
なめらか	3ぼさぼさ	1なめらか	1ぼさぼさ
すべすべ	3きめがあら	1きめこまかい	4ぼさぼさしてる
			2
手ざわりがよい	2	肌ざわりがよい	1
気持ちいい	2		少し気持ち悪い
風通しがよい	2	涼しい	1
ふきとりやすい	1		1ふきとりにくい
吸取力がある	1吸取しにくそう	1吸取力がない	2すぐ乾く
乾いた感じ	1		
フィット感	1密着しない	1びったりする	4

しのはらじゅんこ・うつみこう・いまとみさゆり

教育評価の研究 (その37)

……生涯学習時代のあり方を問う……

岸本 英男

(大泉会 四期会)

目的

教育評価は、教育職の経験者であれば、自明の理として、誰もが経験則としての個有の知見を持つ。而し普遍妥当性が問われる場合、常識的な概念的知識として収斂され、その規準に合わない知見は、捨象され、折角の新機軸も時間の流れの中に埋没する。而しながら、人間の生み出す歴史的状況には、循環と共生の原理が働き、関係弁証法的発展の法則が捨象された個有の知見を蘇生させる。「歴史に学ぶ」姿勢は万人に備わった自己覚知の発達段階に於ける状況認知力としての必然性を立証していると言えよう。

人類文明の現在の発達段階に於ては、自己覚知に伴う状況認知力は、遺憾ながら高齢化しなければ開花できない。つまり衣食住の生活資源の蓄積が戦争や内乱自然災害、環境破壊等に、不断に剥奪され、発達に決定的ダメージを与えているからである。シジフォスの神話や、パンドラの函の世界から僅か2000年程度の人智の発達では「歴史に学ぶ」自己覚知力は万人のものとならず、学習評価はできるが教育評価に結びつき難い。この間の距離を測定し、縮めていく事を目的とする。

方法と経過

既に筆者は $E = f(G \cdot A \cdot T)$ の公理に基づく「評価観」の滲透を提唱し続けてきたが、権力獲得の手段としてのキャピタリズムに役立つテストでの大量得点に奉仕する評価万能時代にあつては「たてまえ論」に躊躇せざるを得ず、ディオニソスの「ほんね論」の跋扈を評す事になり、今日の医療と教育の荒廃の淵源となった各界各層のトップの犯罪行為の温床を形成してしまつた事になる。つまり彼等は学習評価では最高位にあつたが、教育評価にあつては最低位にランクづけされた事になる。勿論彼らの所属し活動した場、乃ち土俵としてのGは千差万別であり、そこでのAの内容も亦それに準ずる多様性がある。従つて時間の流れの中で時々刻々の測定をすれば、功罪相半ばする場面も多々含まれてはいる。而し、同時代の加齢成熟、乃ち高齢社会の経験則に照らしてトータルに事例を集めれば、従来の評価観が、いかに近視眼的であり、教育評価の名に値しなかつたかの証左となるであろう。

今日、高齢社会という、今までの人類の未経験な地

球国家時代への推移に直面して、先進諸国民の潜在的平面的共通価値意識は、「達者で長生きする」「クォーリティオブライフ」そして「サバイバル」というキーワードを生み、少数派のエリート乃ちWASPのノブレスオブライジと対峙する。戦後50年の経済復興で形の上ではサミット参入国として、国民総中流意識を謳歌する一方で実質的には核抑止力の世界戦略に組み込まれた軍産複合体制による経済破壊下で苛酷なサバイバル競争下、人間破壊が加速化されつゝあるビッグバン現象があり、而も、同時進行中である以上、核の抑止力という呪縛された神話を信奉する限り、民衆の人間性向上は画餅に帰し、教育と学習の距離は埋め難く難反する一方である。つまり核の抑止力はナンセンスであり、教育の普及こそ、人間性を陶冶し自己覚知能力を啓発し、歴史に学ぶ学習能力を高め、戦争や内乱の抑止力として有効に機能し得る。既に今世紀に於て実証され尽くしたこの教育原理、それを生涯かけて学習していくプロセスと成果を評価していく、このスタンスを筆者は教育評価と称し、所謂「いつでもどこでも必要に応じて学べる生涯学習」のキャッチフレーズとは別次元の生涯教育理念の確立を目的とした教育評価の研究つまり受胎から自然死までの「教」と「育」の絶対矛盾のせめぎあいの中から生ずる合一の理念の体現者としての実現度を評価する現象を、教育評価としている事になる。元来、生涯教育とは「すべての人が心の中に平和のとりでを築く事」を目的として、国連のユネスコ本部に1965年、成人教育推進国際会議が開かれ議決された事に始まる。而し、冷戦の激化で、軍拡路線に転じた先進国は、この双務協定としての平和の理念を権力に奉仕する学習の理念に換骨弁胎し、産業界のイノベーション対策やカルチャーマーケットの開発にミスリードしてきた。この流れを、いかに本来の真面目に戻すかが現在問われている最大の課題と言える。

結果と考察

21世紀を見すえた人類の英知は学校教育のエートスである特殊教育の見直しによる新しい人間観価値観文化のあり方に注目し始め、既に捨象してきた「たてまえ論」の見直しに着手しつゝある。ルースベネディクト(文化類型学)や村上陽一郎(科学史)の仮説が特殊教育の世界で実証されつゝある事がその証左と言える。

幼児の自己統制の発達とその規定要因の検討

—— 保育場面における教師評定による幼児の自己統制尺度の再検討 ——

中 田 栄

(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科)

Key words : self-regulation, altruism, empathy, autonomy

I. 問題と目的

本研究は、幼児期における自己統制の発達とその規定要因について、検討することを主目的とする。

自己統制(self-regulation)は、自己の意志に基づき、自らの行動を調整していこうとする行動であり、社会化の指標としても重要である。そこで、本研究では、昨年度(中田, 1996)に引き続き、自己統制の形成期としての就学前幼児の自己統制を取り上げ、その規定要因について検討した結果を中心に報告する。

II. 研究方法

1. 調査対象: 幼稚園の4歳と5歳児クラスの幼児の担任教師を対象とし、725名の幼児の評定結果が分析された。
2. 手続き: 担任の教師に独自に作成した他者評定形式の質問紙を配付し、教師が幼児の行動評定を行った。
3. 内容: 質問項目は、以下に示した通りである。

- (1)目的変数: ①自己統制: 計18項目
- (2)予測変数: ①愛他性(9項目), ②自律性(9項目),
③自己効力感(9項目), ④他者理解(9項目)

III. 結果

1. 尺度の妥当性の検討

(1)自己統制の項目間の構造

自己統制については、①「意志的・言語的自己主張」の因子、②「独自性」の因子、③「自己抑制」の因子が抽出された(中田, 1996, 1997)。なお、全体の累積寄与率は80.1%であり、これら全てを自己統制と捉え、合成得点の平均値を分析に用いた。

(2)予測変数の選択

次に、予測変数の36項目について、あらかじめ想定した尺度の妥当性を確認することを目的として、反復主因子法を実行し、後続因子と固有値との落差に基づき、因子数を6と決定し、著しく共通性の低かった項目を除外し、再度6因子解を仮定した反復主因子法を実行した。そして、Varimax回転後、固有値が1以上、因子負荷量0.44以上の次の6因子が確認された。

- ①愛他性, ②自律性, ③他者理解 ④共感性,
⑤遊びに対する能動性, ⑥自己効力感

(3)尺度の信頼性の検討

各尺度ごとのCronbach's alphaの信頼性係数は.68から.89までの間にあり、内的一貫性の高さと安定性を有していることが確認された。

2. 幼児の自己統制とその規定要因の検討

(1)変数の選択

各尺度は、上記した因子分析の結果から、目的変数として、“自己統制”の1変数、予測変数として、“愛他性”“自律性”“他者理解”“共感性”“遊びに対する

能動性”“自己効力感”などの変数が取り上げられた。なお、多重共線性の診断の結果、問題はみられなかった。

(2)自己統制とそれを規定する要因の検討

次に、自己統制と各要因がどのように関係し、自己統制を規定しているのかを検討するため、“自己統制”を目的変数とし、“自律性”“遊びに対する能動性”“他者理解”“愛他性”“共感性”“自己効力感”を予測変数とし、重回帰分析(STEPWISE法)を行った。重相関係数については、各目的変数において1%水準で有意であった。なお、自己統制は、年齢や性によって異なることがすでに明らかにされている(Nakata, 1996, 1997)。

そこで、年齢と性の要因を制御した結果について考察する。標準偏回帰係数については、5%水準以上で有意であり、特に、顕著な結果(.20以上)であったものを取り上げる。まず、“自己統制”に対して“自律性”“遊びに対する能動性”“愛他性”等からの有意な正の影響($\beta = .34, .31, .22$)が存在した。次に、“自律性”を目的変数とし、“愛他性”“遊びに対する能動性”“自己効力感”“他者理解”“共感性”を予測変数として重回帰分析を行った結果、“自律性”に対して、“遊びに対する能動性”“愛他性”からの強い正の影響($\beta = .41, .39$)がみられた。さらに、“愛他性”を目的変数とし、“遊びに対する能動性”“共感性”“他者理解”“自己効力感”を予測変数として分析を行った結果、“愛他性”に対して、“遊びに対する能動性”“共感性”“他者理解”からの強い正の影響($\beta = .38, .22, .21$)がみられた。そして、“遊びに対する能動性”を目的変数とし、“他者理解”“共感性”“自己効力感”を予測変数とし、さらに、分析を行った結果、“遊びに対する能動性”に対して、“共感性”“自己効力感”からの強い正の影響($\beta = .33, .20$)がみられた。

III. 考察

上記の結果から、幼児の“自己統制”の規定要因として、“愛他性”“自律性”“遊びに対する能動性”が、“自己統制”を大きく規定することが示唆された。また、“遊びに対する能動性”は“自己統制”の規定要因であるとともに、“愛他性”と“自律性”を通して、“自己統制”に対する影響を支持している可能性も示唆された。なお、本研究では、“自己効力感”からの“自己統制”への直接効果はみられなかったが、“遊びに対する能動性”を媒介として間接的に“自己統制”に影響している可能性が示唆された。さらに、“共感性”は“遊びに対する能動性”と“愛他性”に強い正の影響を示しており、“遊びに対する能動性”と“愛他性”を媒介として間接的に“自己統制”を規定している可能性が示唆された。

(なかた さかえ)

保育園児の障害事故について

— 平成5年度を中心として —

岡本善之

(麻布大学獣医学部)

キーワード：保育園児、障害事故、保育園、園管理下、平成5年度

研究目的

日本は1970年に高齢化社会(65歳以上人口が7%以上)になり、1995年に高齢社会(65歳以上人口が14%以上)となっている。高齢化社会から高齢社会になるまでの所要年数は25年で、これを諸外国と比較するとフランス130年、スウェーデン85年、アメリカ70年、イギリス45年、旧西ドイツ45年で、日本の高齢社会の到来がいかに早かったかがわかる。このようになった要因としては、高齢者の寿命が延びたことなどもあるが、主な要因は少子化である。既に15歳未満の子ども人口が65歳以上の高齢者人口よりも少なくなっている。少子高齢社会にあっては、子どもの健全育成が特に重要である。感染症などによる死亡が減ってきているなかで、事故は最大の死亡原因になってきている。子どもを大きな事故から守ることは緊急の課題である。本研究は認可保育所における園児の障害事故について調べることによって、事故防止と安全管理・安全教育、児童健全育成に資することを目的としている。

方法

「学校の管理下の死亡・障害(平成7年版)」日本体育・学校健康センター学校安全部(平成8年3月22日発行)に所載されている資料によった。ここで、障害とは、保育園の管理下における負傷・疾病について医療が行われ、それが治癒したときに残った心身のき損状態をいうとされている。そして、障害発生は、事故による障害(交通事故による障害、交通事故を除く事故による障害)と疾病による障害としているが、本研究ではこれらすべてを障害事故とした。

結果

平成5年度に保育園で23件の障害事故が起きている。障害発生の概況は、交通事故を除く事故による障害23件である。

すべて保育中の事故で、いずれも体育活動外の事故である。内訳は、転落事故4件、転倒事故6件、衝突事故1件、接触事故2件、落下物による事故2件、切傷事故3件、挟まれる事故2件、熱傷事故1件、動物による事故2件である。

障害種別の状況は、神経・精神障害2件、視力・眼球運動障害4件、醜状障害12件、腹部臓器障害1件、手指切断・機能障害4件である。

障害等級別の状況は、第1級1件、第8級3件、第11級2件、第12級4件、第13級1件、第14級12件である。

平成5年度の日本体育・学校健康センターの災害共済給付への保育園児の加入状況は、1,487,512人、加入率は91.8%である。未加入者が133,163人、8.2%いる。

考察

1) 保育園と幼稚園の件数の比較からの考察

合計件数23件は、同じ平成5年度の幼稚園児の6件と比較すると3.8倍にもなる。センターの災害共済給付への加入園児数は幼稚園児のほうが多い(1,503,423人)ことを考えると、保育園では0歳児から6歳児までと幅広い年齢を対象としているが、幼稚園では3歳から6歳を対象としていること、保育時間が原則として保育園は8時間、幼稚園は4時間であること等を考慮しても、なお保育園のほうが障害事故が起きやすいように思われる。保育園児の場合、年齢別にみると23件のうち3歳以上児は19件で82.6%を占めることになり、幼稚園児にはいない3歳未満児が件数を特に多くしているということはないといえるものと思われる。保育園と幼稚園で件数に大きな差が生ずる主な要因としては、保育形態にあるのではないかとと思われる。養護と教育を一体として機能させている保育園にあつては、自由遊びのような保育形態が多くなるが、幼児教育のある幼稚園にあつては、一斉保育のような保育者の指導のもとに一斉に園児が同じような行動をとるなどの保育形態が多くなると思われる。この違いが差を大きくしているのではないかとと思われる。要するに自由遊びのような保育形態を多くするか、一斉保育のような保育形態を多くするかの違いが大きく関与してきているのではないかとと思われる。自由遊びのような場面にあつては特に園児の掌握や安全管理、危険予知等に留意することが必要であると思われる。

2) 全体的な考察

事故の型としては、転倒と転落が多く、遊び・ふざけで転倒5件のように保育者の注意が十分であったかと思われるものが多い。事故防止のためには、園児に対する安全教育、保育者の安全管理が共に十分に機能することが大切であるが、そのためにも事故の実態をよく掌握し実際に即して行っていくことが必要である。

(おかもと よしゆき)

かかわり方の発展にかんする研究 (31)

一母と子の集団活動における幼児の自己形成一

○小原伸子 青木玲子 佐藤啓子
 (文教大学人間科学部) (東京女性財団) (文教大学人間科学部)
 <・3才児親子集団・心理劇・関係学・自己形成・かかわり>

I. 目的

自己・人・物の関係状況における幼児の人間関係の諸相について、関係学的立場(創始者:松村康平)から、以下の観点について明らかにする。

(1)自己・人・物の接在共存を可能にする教育プログラムの試案が、幼児の人間形成にとってどのような意義をもたらしているか、関係学における自己構造図と起動点の成立と移動によって明らかにする。

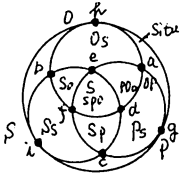
II. 方法

(1)行為法 (2)参加観察法 (3)実践法

III. 経過

文教大学幼児集団研究会(3才児とその親との集団指導)における特別活動プログラム(1997年1月24日Ⅲ期2回)「母と子のための心理劇」の活動資料を基に分析・考察する。監督:佐藤啓子,サブリーダー7名(小原・青木他),母子8組,参加観察者2名,カメラ係1名,ビデオ係1名

IV. 分析基準



S:自己 P;人 O;物 Situ.;状況
 a~i;起動点
 自己構造図;Ss;自己的自己, Sp;自己的人,
 So;自己的物, Os;物的自己, Ps;人的自己
 P0orOP;人的物および物的人, Spso;統合的自己

V. 結果および考察

1. 不思議なマイクロフォンの技法

この活動を自己構造図と起動点の成立と移動で見ると幼児(S)のお正月何をしたかの課題(O)を成立させる領域(自己的物So)の顕在化を誘う活動であり、起動点bの成立を促す活動である。

親子のかかわりを見てみると、母が幼児と同じ目の高さにしゃがんで親子で見つめ会ったり、ひざにすわったり、立って両手をつないでぐるぐるまわりながら話したりと、母に支えられながら、包まれながらのかかわりがうかがえ、幼児(S)と母(P)との接する起動点cが成立し、幼児(S)と課題(O)との接する起動点bを成立させるために、監督の質問を母が繰り返したり(起動点a)、母に耳打ちして母に答えてもらったり(起動点f)、内容をはっきりさせるために、違う角度から質

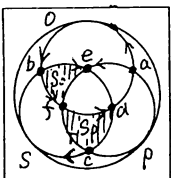


Fig. 1

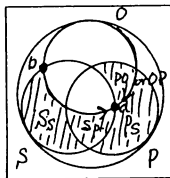


Fig. 2

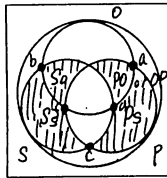


Fig. 3

問したり(起動点e)と、母を媒介とした活動(起動点cからa, f, eへ)がみられ、また、お正月の様子を行為で表現する(起動点a, bからeへ)など、報告することを親子で楽しんでいるかかわりもみられた。この活動は、幼児にとって、母(自己的人Sp)の存在が大きく、母の補佐のかかわり(起動点cからa, f, eへ)によって、集団の中でお正月のことを話す(起動点bからdへ・自己的物So)体験が育っている。(Fig.1)

2. 凧あげ大会の技法

凧あげ大会は、一人凧・二人凧・集団凧へと母子単位から、母子対母子関係、小集団対小集団関係へと対人関係枠を拡大化しながら、集団活動体験を進めている。このことを自己構造図と起動点の成立と移動から、みても、凧になる体験や凧をあげる体験(自己的物So)を通して、楽しんだり(自己的自己Ss)、他の人と一緒にすることで親しくなったり(自己的人Sp)、集団を意識したり(人的自己Ps)、他の人の凧に気づいたり(人的物あるいは物的人P0orOP)と領域の顕在化を誘う活動であり、凧の役やあげる人の役(自己的物So)を通して演者体験(起動点bからdへ)を促進する活動である。この活動を通して、幼児は、みじかな母(人的自己Ps)だけではなく、凧という役割をとって振る舞っている母(人的物あるいは物的人P0orOP)や集団の中にいる母(人的自己Ps)と分化してとらえ、多様な役割をする母を認識することが育っている。また、二人凧の時には、親子で一緒に同じ役を担うことによって、安心して楽しい体験(自己的自己Ss)が育ち、さらに、小集団の一員として動いている時には、みんなで動く楽しさ(自己的自己Ss・人的自己Ps)が育っている。(Fig.2)

3. スポーツ大会の技法

スポーツ大会の活動は、それぞれのスポーツのルールを守りながら、手・足・身体全体を動かし、集団の昂揚体験を誘う活動である。この活動は、幼児にとって、ルールを知り(物的人および物的P0orOP)、振る舞う楽しさ(自己的物So・自己的自己Ss)や集団でするダイナミックな体験(人的自己Ps)が育っている。(Fig.3)

VI. 総括的考察

このプログラムの流れは、3才児の時期に必要な母子充実活動から、母子が集団の一員として個々に振る舞う母子個別活動へと活動が展開され、幼児にとって母と共に自己も人も物も活かされる集団の楽しさを体験し、幼児の人間形成に意義があったと考察する。

<おぼらのぶこ、あおきれいこ、さとうひろこ、>

「かかわり方」の発展に関する研究(32)

一母と子の集団活動における母親の自己形成一

○ 青木 玲子

小原伸子

佐藤啓子

(東京女性財団)

(文教大学人間科学部)

(文教大学人間科学部)

＜母親集団・心理劇・関係学・自己形成・かかわり方＞

I. 目的 : 自己・人・物の関係状況における母親と幼児の人間関係諸相ついて、関係学的立場(創始者:松村康平)から、以下の観点について明らかにする。(1)心理劇における母親と子供のかかわり方を関係学的に考察し、母親の自己形成を育むプログラムを考察する。

(2)母親グループプログラムの「心理劇のバックアッププログラム」の可能性と教育的効果について考察する。

II. 方法 : (1)行為法、(2)参加観察法 (3)実践法

III. 経過 : 文教大学幼児集団研究会における特別プログラム「母と子の心理劇」活動資料及び母親の分化活動記録、及び母親の感想をもとに分析、考察する。(1997.1.24実施 参考資料 1)

IV. 結果および考察: 母親グループは、研究会の目的にそって、1年間のプログラムを3期とし、1期においては、自己・人・物の関係単位を認識し、日常生活において、子どもと一体化した生活から希薄化している母親(自己)を顕在化するプログラムを進めている。心理劇のプログラムを導入することによって、母親が、様々な役割や物になってふるまうことにより行為の可能性を広げることがねらいである。2期では、子どものかかわり方について学習し、内在、内接、外在、外接、外在の5つのかかわり方を日常生活に対応させて、具体例を心理劇で体験するプログラムを実践している。3期は、母親の自主的な活動としている。毎回の合同活動への母子参加が統合活動としてとらえられるが、特に3期における特別プログラム「母と子の心理劇」は、母親グループの日常プログラムの実践的、統合的活動として位置づけられている。今回は、「母と子の心理劇」の「ウォーミングアップ:不思議なマイクロフォンの技法」と「凧上げ大会の技法」における母親の「物」となつてこどもの特色あるかかわり方に焦点をあてる。

1技法(不思議なマイクロフォンの機能)とかかわり方の可能性

母親は、「不思議なマイクロフォン」として振る舞うことにより、物となつて、単に音(子供の言葉)を拡声するだけではなく、子供と共に以下三つのかかわりを期待されるプログラムの意図であった。

1) こどもとのかかわり→①子どもの言葉(行為)を聞く→内在的
②子どもの言葉(行為)をなぞる→内接的 ③子どもの言葉(行為)を問いたずら。→外接的 ④子どもの言葉(行為)に母親もやりとりをして新しく付け加える→接在的 ⑤子どもの言葉(行為)を無視する→外在的かかわり、以上5つのかかわりの可能性があるが、実践活動では、母親は、子どもに内接するかかわりで子どもに安心感をあたえて、母親に抱きつくようにして耳で話す子どもが多かった。2)物になるかかわり→集団に拡声する役割をマイクとして物の役割を取ることを期待された。活動では、母親が子どもの話しを引き出しながら伝えたり、「やぎさんに葉っぱをあげた」という子供の言葉を行為で伝えることがあった。3)こどもと状況の媒介的かかわり→集団に対して、子どもの言葉を伝える役割をになつていた。集団や状況を意識しながら子供とともに参加することが期待された。むしろ、円陣のなかにいる時に、他母子の活動を伝える母親のかかわりが必要と思われる。3つのプロセスにおいて、母親にとっては、物になるかかわりが、なかなか出来なかつたとの感想である。不思議などという可能性を活かしきれなかつたことと、子どもがマイクロフォンの意味がわからず、母親を母親としか捉えず、母親も子どもに内接的にかかわること、物にはなりきれなかつたことに要因がある。

2. 「凧上げ大会の技法」とかかわり方の可能性 どの母親も凧となつて楽しそうに身体を動かすことができた。これは、親子とも凧とい

う物の機能の認識が成立していたことによると考えられる。

母親は、子どもの動きに対して自在にかかわり方を変化させながら、凧になりながら、子どもと話ながら、またリーダーの風に吹かれて状況変化に接在的にかかわりながら身体を動かすことを楽しんだ。

V. フィードバックプログラムの視点と実践

「母と子の心理劇」実践の結果からのフィードバックすべき課題を、母親のかかわり方の視点から考察する。

1. 子どもとのかかわりの多様性を認識する→子どもとのかかわり方については、母親の基本的、日常的な課題である。母親グループにおいては、2期に「5つかかわり方を学ぶ」プログラムがある。フラッシュを使って理論説明をしているが、関係状況に応じてかかわり方を主体的に選択していくためには、母親が自己の行為をかかわりの視点で認識する必要があるのである。

2. かかわり方の可能性を日常生活の母と子の場面構成で考察する。

3. 子どもと日常生活でのかかわり方を母と子の関係状況のみではなく、社会的な関係状況において再考する。以上の観点を踏まえた継続的プログラムは、年間のプログラムとして位置づけられているが、体験を自己認識して発展するためには、それぞれの観念のプログラムのフィードバックが必要である。今回のフィードバックプログラムとしては、1)子どもになる体験、「母と子の心理劇」における同じ場面で3歳児、とくに我が子になってみる体験のプログラムを構成した。2)物になるかかわり、物になる体験は、母親の場合、物の本質や機能を理解したり、創造できなければふるまえないことが多い。心理劇では、単に固定した役割としてふるまうだけではなく、自分らしく、創造的にふるまうことに意味があると考えられる。フィードバックプログラムとしては、「不思議なマイクロフォン」の可能性として、コンピューターの機能(伝える事項を整理し、自分の新しい考え方もつけ加えて伝える)、テープレコーダー機能(相手の言葉を正確に録り返し伝える)、マイク(大きく伝える)など物の機能を認識しながら行為する技法を取り入れてプログラムを構成した。(参考資料2)

3) 子どもと集団の媒介的かかわりと媒介的役割は、子どもが小さい時には、母親にもっとも期待される役割である。その役割は、母親の状況(集団)認識とかかわりによる。フィードバックプログラムとしては、観客として他の親子のかかわりのパターンをみる。今回の合同活動においては、母親が媒介的役割を担うプログラムを継続的に用意する。

VI. 総括的考察

今回の「母と子の心理劇」の実践研究では、母親が子どもへの多様なかかわり方をするることによって、新しい状況においても親子の楽しい体験が成立する可能性を考察した。「母と子の心理劇」は、母親にとって楽しいプログラムであると同時に、集団における母親の役割や、自己のかかわり方の可能性を実現する体験の機会でもある。学習体験としては、楽しい体験の充足感と同時に、体験や学習についての自己認識も必要である。今回の実践の効果は、リーダーがフィードバックプログラムを検討、用意することで、母親にとっては、「母と子の心理劇」の自己体験が明確化され、深化され、新たな場面への対応や日常性活での応用への可能性へとつなぐことが出来たと考察する。

リーダーにとって、活動のフィードバックは、年間プログラムの充実とウォーミングアッププログラムの再検討ともつながり、実践活動の観察に対する新しい観念の成立も今後の課題となった。

アオキレコ オバラノコ サトウヒロコ

専門学校福祉学科生への授業評価に関する研究Ⅱ

○佐伯 典彦

(東京商科学院新宿専門学校)

岡村 一成

(富士短期大学)

(目的) 学生の授業評価と「授業態度、出席状況、教師に対する信頼関係など」との関係について昨年度結果と比較検討をおこなう。また担任クラスと非担任クラスとの違いについてもあわせて検討する。

(方法) 平成8年度に「心理学」を履修した福祉系専門学校生66人(非担任クラス。以下「平8非担」)のデータと平成9年度に「心理学」を履修した同じ福祉系専門学校生39人(非担任クラス。以下「平9非担」)と同50人(担任クラス。以下「平9担任」)を比較し検討を試みた。

「心理学」の試験終了後(採点および評価前)、授業評価アンケートを配布し無記名で授業に対する評価をさせた。提出については、この科目の試験を受験した学生全員の回答が得られた。

質問は「授業内容の理解」「板書内容の理解」「担当教師との相性」など10項目(図1参照)について、10点計100点満点で評価させた。また「試験の想得点」「授業態度」「担当教師の好き嫌い」など7項目(表1参照)についても各100点満点で評価させた。その他「いじめられ体験の有無」「ボランティア体験の有無」「身近に障害をもった方がいるか」などについてYES/NO形式で回答を求めた。

(結果) 授業評価の合計点と次の7項目の評価点との間の相関係数を算出した(表1)。なお授業評価の各項目の平均点は図1、合計点の分布は図2に示すとおりである。また、表2は学生の過去の経験について答結果をまとめたものである。

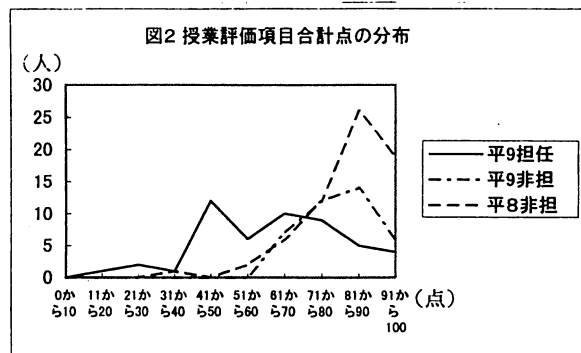
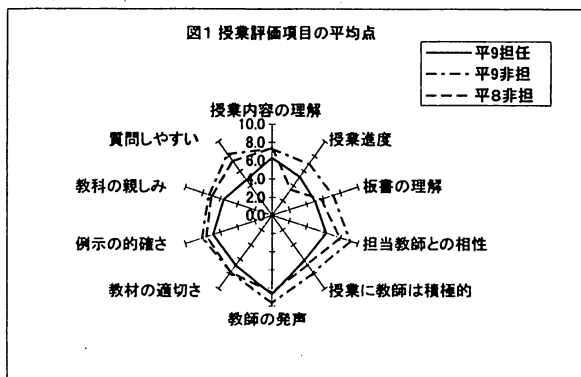
表1 授業評価と各項目との相関係数

	(平8非担)	(平9非担)	(平9担任)
試験の予想得点	r=0.36*	0.19	0.31*
授業態度	r=0.15	0.11	0.29
担当教師の好き嫌い	r=0.48*	0.47*	0.60*
授業の出席状況	r=0.16	0.21	0.01
希望する就職への有用性	r=0.31*	0.13	0.02
この教科の社会的有用性	r=0.01	0.04	0.10
この教科の対人関係有用性	r=0.10	0.01	0.33*

表2 自分の過去の経験について

	(平8非担)	(平9非担)	(平9担任)
いじめにあった	28.8%	53.8%	44.0%
ボランティア活動の体験がある	36.4%	23.0%	22.1%
身近に障害をもった方がいる(いた)	62.1%	43.5%	64.2%
両親、家庭に問題があると思う	34.8%	28.8%	14.3%
自分は精神的に不安定だと思う	48.5%	61.5%	70.1%

表1についてみると授業評価の合計点と「担当教師の相性が良いと思う学生」との間には3クラスとも相関がかなりあるとみられ、「平9担任」クラスは



の試験の出来が良いと思う学生」「日常生活の対人関係に悩んでいる学生」にも相関がみられた。表2については「身近に障害をもった方がいらっしゃる」が3クラスとも高く、「いじめにあった」「自分の心に問題がある」と答えた学生が昨年のクラスよりかなり多いことがわかった。

(考察) 福祉学科生は感受性が強く、自分の心の不安定さを周囲の要援護者に福祉サービスをおこなう中で同一視し、自分の心の安定・満足を得ようとしている様子が、昨年よりさらに強まっている。また「担任」クラスと「非担任」クラスを比較した結果、「担任クラス」の学生は、「心理学」の担当教師が生活指導をする担任教師であることから、図2の「授業の評価」や図1の「担当教師の相性」に低い評価をしていることがわかる。また心の悩みをもつ学生が担任教師に相談する機会も多いが、同時に「心理学」の教科担当である担任教師の授業評価のなかで、「この教科は自分の日常の対人関係に役立つ」と考えている学生が、表1の「この教科の対人関係有用性」の高い相関と、表2の「自分は精神的に不安定だと思う」の高いパーセンテージに反映している。

いずれにせよ、将来要援護者の心のケアを担う学生に「心理学」の授業のなかで、まず自分自身の心をつめる機会を多く設ける必要があるように思える。

秘書イメージに及ぼす教育の影響

和田美知子

(城西大学女子短期大学部)

キーワード：秘書イメージ，秘書教育，短期大学

【目的】「秘書」という言葉から、あるいは「秘書職」という職務内容から得られるイメージに対して、短大における2年間の秘書教育はどのような影響を及ぼすのかを検討する。

【方法】経営学科秘書専攻と文学科の女子短大生に対し、入学直後と卒業間近の2回、次の要領で質問紙調査を実施した。すなわち、「秘書」のイメージについて「秘書は_____」の後に20通りの異なる記述をさせた。

【結果】回答欄には20通りの記述を求めたが、記述量に差が見られたため、10通り以上記述した者について集計した。秘書専攻の学生は、2回の調査とも共通の113名、統制群となる文学科の学生は、共通の学生が多いものの、入学時が141名、卒業時が203名である。

記述された内容を、Sw：秘書職の概要，Sb：秘書職務上の態度，Ch：秘書個人の性格特性，Sa：秘書個人の能力，Pa：秘書個人の外見的属性の5種類に大分類し、それらをさらに3つずつ、計15項目に細分化して分析を試みた。15項目とは、Sw₁:秘書職の意義，Sw₂:秘書の対人関係，Sw₃:秘書の日常業務，Sb₁:機密保持，Sb₂:機敏性，Sb₃:責任感，Ch₁:温かさ，Ch₂:冷たさ，Ch₃:感情，Sa₁:教養・知識，Sa₂:知性，Sa₃:特殊技能，Pa₁:容姿，Pa₂:服飾，Pa₃:年齢・性別である。

専攻・時期の異なる4群別に、5つの大分類の出現率を見ると、比率が最も高かったのは、秘書専攻学生では2回ともSb：秘書職務上の態度であり、文学科学生では2回ともSw：秘書職の概要であった。出現率に

ついては、カイ二乗検定の結果、実施時期の間、専攻間のいずれにも有意な差があった($p<0.01$)。

表1は、専攻・時期の異なる4群別に、15項目の出現率の結果をまとめたものである。秘書専攻学生では、2回ともSw₁:秘書職の意義，Sb₂:機敏性，Sb₃:責任感の出現率が高く、文学科学生では、Sw₁:秘書職の意義，Pa₁:容姿，Ch₁:温かさの出現率が高い。これらの出現率には、カイ二乗検定の結果、実施時期の間、専攻間のいずれにも有意な差があった($p<0.01$)。

さらにCR値(臨界比)を求めて検定した。その結果を表1の右半分に示す。秘書専攻学生の2回の結果から危険率1%未満で有意差のあった項目を見ると、Sw₁:秘書職の意義とSa₃:特殊技能が減少し、Sb₁:機密保持が増加した。また専攻間の比較では、入学時よりも卒業時の方が有意差のある項目が増えている。特にSb₁:機密保持は秘書専攻が有意に高く、Pa₃:年齢・性別は秘書専攻が有意に低くなった。

【考察】短大の秘書教育は、接遇、文書管理や企業実習などの実務的なものと、秘書理論や事例研究などの講義からなっている。今回の調査で、秘書専攻の学生は、文学科の学生に比べて、入学時から秘書を職業として意識しているため、より具体的な秘書のイメージを持ち、卒業までにさらにその傾向を強くしていることが分かった。特に『秘書職務上の態度』の中の「機敏性」と「責任感」については、秘書を目指す学生が入学以前に知識として獲得している可能性を示してお

り、「機密保持」もまた卒業までに有意に強く認識されるようになる。これは、2年間の秘書教育によって習得しなければならない現実的な課題が一層鮮明になったと考えられる。またこのことは、秘書教育を受けていない文学科の学生のイメージが概念的な『秘書職の意義』や『秘書個人の外見や性格』などの項目に集まっていることからもうかがえる。(わだ みちこ)

表1 専攻別，時期別4群の秘書イメージの記述内容(%)

大分類	項目	秘書専攻の学生		文学科の学生		C R 検 定			
		①入学時	②卒業時	③入学時	④卒業時	①×②	③×④	①×③	②×④
Sw	Sw ₁	19.4	14.2	24.7	17.6	3.98 **	6.08 **	3.86 **	3.01 **
	Sw ₂	4.0	4.1	3.1	5.1	0.11	3.42 **	1.53	1.55
	Sw ₃	2.0	1.7	3.1	2.2	0.67	1.88	2.01 *	1.21
Sb	Sb ₁	2.2	5.2	2.1	2.3	4.50 **	0.49	0.31	5.29 **
	Sb ₂	13.1	15.0	5.1	6.9	1.57	2.62 **	8.46 **	8.90 **
	Sb ₃	13.3	15.5	8.7	8.9	1.78	0.14	4.44 **	6.95 **
Ch	Ch ₁	6.8	8.3	9.7	11.2	1.69	1.64	3.19 **	3.15 **
	Ch ₂	1.7	2.2	4.8	4.6	1.08	0.31	5.13 **	4.17 **
	Ch ₃	1.1	1.3	0.9	1.2	0.66	0.94	0.52	0.41
Sa	Sa ₁	6.1	4.4	2.4	3.1	2.20 *	1.53	5.62 **	2.29 *
	Sa ₂	7.7	8.7	9.3	9.2	1.04	0.17	1.70	0.53
	Sa ₃	9.7	5.9	7.8	4.9	4.14 **	4.07 **	2.07 *	1.40
Pa	Pa ₁	8.7	11.0	10.9	12.2	2.28 *	1.38	2.26 *	1.23
	Pa ₂	1.7	1.1	4.7	7.5	1.62	3.96 **	5.00 **	9.65 **
	Pa ₃	2.5	1.4	2.7	3.1	2.29 *	0.75	0.41	3.56 **

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

リーダーシップ特性の研究 —受動的リーダーシップ測定を試み—

○ 野田 紀子 内海 澁
(岐阜大学医学部附属病院) (千葉大学)

「リーダーシップ」「受動的リーダーシップ」「因子分析」

看護集団の中における婦長、副婦長は中間管理者・第一線監督者であり、その行動はリーダーシップを含んでいます。部下は上司のリーダーシップを日常受けて行動しており、上司のリーダーシップを評価しています。上司は部下からのリーダーシップの要求に答えなければなりません。上司は、自己のリーダーシップが、部下に十分答えているかを部下の言動から評価しようとしています。それは、部下の言動のなかに、上司のリーダーシップに答えている部分をとらえる事です。これを「受動的リーダーシップ」と考えます。

三隅は集団機能の角度からリーダーシップを客観的に捉えました。部下が上司を評価する三隅のリーダーシップ項目にもとずいて、上司が部下の言動から、自己のリーダーシップを評価する、受動的リーダーシップ項目を作成しました。

〔研究方法〕

1. 対象：G大学医学部附属病院看護職110名
2. 調査方法：留め置き法による質問紙調査
3. 調査内容：「PM論」によるリーダーシップ測定24項目を副婦長、看護婦を対象に、受動的リーダーシップ測定24項目を婦長、副婦長を対象に行った。調査項目は5段階評定として、各部署の上司は部下の行動から自分を評価し、部下は上司を評価しました。

〔結果と考察〕

リーダーシップ及び受動的リーダーシップ項目の相関関係をみました。相関係数0.1以上は24項目中18項目ありT検定にて相関を認めました。相関係数の最も高い項目は「あなたの職場で問題が起こった時あなたの上役はあなたに意見を求めますか」と「あなたの職場で問題が起こった時あなたはスタッフに意見を求めますか」の項目で、相関係数は0.31でした。リーダーシップ項目の得点からバリマックス回転法による因子分析を行い、累積寄与率5.6%で4因子を抽出しました。第一因子は「スタッフを信頼している好意的」などの項目で構成されており「スタッフを尊重する因子」と命名しました。第二因子は「まずい仕事を責める、規則に従う」などの項目で構成されており「仕事に対する厳しさの因子」と命名、第三因子は

「仕事の段取りの良さの因子」と命名しました。

受動的リーダーシップ項目の得点により因子分析を行い累積寄与率49%で4因子を抽出しました。第一因子は「スタッフのための設備改善の努力、スタッフへの理解」などの項目で構成されており「スタッフを尊重する因子」と命名しました。第二因子は「規則を出す人使いがあらう」などの項目で構成されており「仕事にたいするきびしさの因子」と命名しました。第三因子は「仕事の段取りの良さの因子」と命名しました。三隅のリーダーシップ項目は、科学的に分析され、信頼性が高く、今回それを基準にして作った受動的リーダーシップ項目は、三隅のそれと共通の因子が見いだされました。

婦長、副婦長、スタッフ110名を相互に組み合わせた288組を、リーダーシップ24項目と受動的リーダーシップ24項目の合計48項目について因子分析を行い累積寄与率43%で4因子を抽出しました。第一、四因子は受動的リーダーシップ項目で、第二、三因子はリーダーシップ項目で構成されていました。第一因子は「相互信頼の因子」以下「スタッフを尊重する因子」「仕事を計画的にスタッフと行う因子」と命名しました。今回抽出された因子は看護集団における中間管理者のリーダーシップ行動を表していると考えます。

対象の背景と4因子の関係について、因子得点の平均値で比較しました。受動的リーダーシップと婦長、副婦長の経験年数との関係において「スタッフを尊重する因子」と「仕事の厳しさの因子」で経験年数1年毎に因子得点の増減を認めました。中間管理者は、集団の特性の変化に合わせ、自己のリーダーシップ行動を柔軟に変えているようです。

リーダーシップと副婦長、看護婦の関係において3因子に有意差が認められました。これは副婦長は婦長と連携をとり業務を行っており、看護婦より婦長のリーダーシップを強く受けているようです。婦長と看護婦は、地位と役割がかけ離れており相互関係が形成されていないと考えます。婦長は制圧的な態度を控え、日常看護婦とコミュニケーションを図り、仕事の目的や計画、お互いの願望等を話し合い両者共通の価値観を見いだすよう努力する必要があると思われます。

のだ のりこ うつみ あきら

創作童話を用いて看護学生の自己分析を試みる

○ 松尾典子

内海 澁

(山形大学医学部)

(元千葉大学看護学部)

<研究目的>

自己理解を容易にするために看護学生自身を主人公にして書いた物語を交流分析理論で考察する。

<方法>

対象はA大学医療技術短期大学部看護学科学生2名(21歳女性)である。学生は創作童話を交流分析を手がかりに分析をする。その分析を面接により引き出し、自己理解を確認し、考察する。

<結果>

1. 学生Aの童話と分析(勇気のビー玉)

童話の内容:あるところにリリーという、はずかしがりやの子ぎつねがいた。誰かに会うとお母さんの陰にかくれる。「どうしてあいさつできないの、お姉ちゃんはあいさつできたのに」とお母さんは叱る。お姉ちゃんと比べられて、リリーはますます自分が嫌いになる。ある日、お母さんに叱られ泣いて家を飛び出す。大きな木にうっすらと光る穴を見つける。そこに、なりたいと思っていたもうひとりのリリーの姿があった。見入っていると、もうひとりのリリーが「勇気を出して」と1粒のビー玉をくれた。家にもどったリリーは勇気を出して「ただいま、ごめんなさい」と言うことができた。もうひとりの明るいうリリーに生まれ変わり、いつまでもビー玉を宝物として大切にしたい。

分析:ぎつねの子は自分の思っていることを素直に言えない。順応、消極、閉鎖、感情抑制的な自我状態が私の中にあると気がついた。このような自分が嫌いで私自身の気持ちが文中に表現された。木の中の理想的な自分の姿はそうありたいという内に秘めた感情である。そして勇気のビー玉は誰かに支えられたい願望だと考える。なにげなく書いた物語で自分と同じ心を持つぎつねの子を通して、自分の心の状態が分かった。

2. 学生Bの童話と分析(柿太郎と桃太郎)

童話の内容:桃太郎は正直で心優しいおじいさんとおばあさんに拾われた。柿太郎は意地悪で嘘つきなおじいさんとおばあさんに拾われた。10年後。「柿太郎、鬼の宝をとってこい」と意地悪じいさんにそそのかされ、きび団子をもって旅に出た。途中、犬、猿、きじに会い団子でつって仲間にした。でも犬達が団子を欲しがると怒り、殴って団子をやらない。それでも何とか全員で鬼が島についた。柿太郎は鬼と戦わず、仲間

になったふりをして宝を盗みだそうと、家事雑用をしながら鬼の隙をうかがっている。

ある夜、桃太郎が鬼が島にやってきた。「桃太郎さん、どうか私を助けて下さい。私は隣村の柿太郎と申す者、鬼にさらわれ、以来、家事雑用をやらされています」と桃太郎を利用しようとする。犬達は「此の者は嘘つきです。私達はいじめられました」と訴える。それを聞いた柿太郎はヤバイと鬼の所へもどる。

桃太郎に敗れた鬼達は新地へと逃れ、柿太郎も連れていかれ、2度と村へ帰ることはなかった。

分析:主人公の柿太郎は優しさが欠如した他人に厳しく、自分に甘い人間である。また悪賢く、何が得策かを考える冷静で現実志向の自我状態もみられる。主人公を育てた老夫婦に問題があり、老夫婦の悪いところがそのまま主人公に当てはまる。物語の中の自分は柿太郎と桃太郎の両方である。

<考察>

1. 学生A:ぎつねについて「私は色々考える性格で馬鹿な考えもする。日頃親しみのないぎつねのイメージ」という。このことは内的な劣等感をぎつねに託している。「ビー玉はアメ玉のように溶けず形が残る」という。これは彼女の劣等感を克服するための決断の強さ、固さを表している。自分の可能性とそれを支える勇気のビー玉を持っていることに気づいている。
2. 学生B:脚本分析でみると、桃太郎は正直者の老夫婦をモデルとして正しく、人のために生きる勝者の脚本である。柿太郎は悪賢い老夫婦をモデルに、不正直で愛されない、存在に値しない人間だと決意した敗者の脚本で成長する。この柿太郎の性格傾向を「自分はあまり優しい人とはいえない」「自分はひねくれたところがある」と自分の中に見る。そして結末で柿太郎を追放し、正直で優しい性格の桃太郎を登場させる。このことは自分の中で自分を支配する否定的な脚本指令に気づき、肯定的で建設的な脚本へと修正する能力を発見している。

<結論>

自分を主人公として物語を表現し分析することで、否定的な自我状態や脚本、そしてそれを肯定的に修正できる自己の能力を発見している。

索 引

人名索引

数字はページ数で、ゴシック体は口頭発表者、明朝体は連名発表者を示す。講演、シンポ、ワークは、それぞれ公開講演、公開シンポジウム、ワークショップの担当を示す。

【ア】		荻野 七重	53
青木 玲子	123, 124	奥村 雄介	シンポ9
浅井 春夫	シンポ4	小野 和美	111, 112
浅沼 恵	67	小原 伸子	123, 124
浅野 智子	75		
網野 武博	14	【カ】	
飯田 穎男	110	片岡 大輔	47
伊賀 憲子	102	加藤 基子	66
生駒 和子	113	金山 正子	82
石風呂 素子	27	金子 潔子	115
板津 裕己	28, ワーク11	川口 毅	24
市橋 秀樹	106	川崎 道子	シンポ8
稲毛 教子	52	川島 大司	107
稲越 孝雄	81	川辺 譲	シンポ7
稲松 信雄	104	川村 司	18, 19, 20, 21
今富 さゆり	116, 119	神田 久男	シンポvi
上野 いずみ	26	岸田 博	64
浮谷 秀一	59, 60	木島 恒一	103
宇佐美 覚	82	岸本 英男	120
内山 伊知郎	50, 92, 109	木村 誠治	坐禅iv
内海 澁	72, 73, 74, 75, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 127, 128	桐生 正幸	シンポ10
大上 涉	44, 45	草薙 和美	104
大久保 康彦	97, 98	草野 美根子	74, 85, 114
大塚 廣子	81	久米 稔	102, 103, 107
大友 達也	33	黒田 淑子	34
大沼 夏子	44, 45	小杉 正太郎	25, 89, 90
大村 政男	59, 60	小林 千世	40
大森 智美	83	小林 裕	42
岡村 一成	125	後藤 嘉余子	35
岡村 美奈	29		
岡本 清美	39	【サ】	
岡本 善之	122	斎藤 勇	53
尾形 悦子	80	佐伯 典彦	125
		阪口 しげ子	76, 77, 78
		坂原 明	68
		佐藤 秋子	65
		佐藤 和己	33

佐藤 啓子	123, 124
佐藤 怜	55
澤田 道子	73, 86
椎名 篤子	シンポ3
宇石 礼子	93
篠原 純子	116, 119
柴田 出	シンポ2
島津 明人	89
清水 幹夫	31
進藤 聡彦	32
菅原 博嗣	18, 19, 20, 21
鈴木 和長	ワーク11
鈴木 千春	117
鈴木 芳子	52
関 陽子	22
関口 和代	49
關戸 啓子	111, 112
曾我 重司	46
曾根原 純子	40

【夕】

高嶋 正士	16
高田 茂子	79
高野 隆一	102
高橋 敷	56
高橋 浩子	54, 63
高橋 真理	108
高橋 良博	54, 63
竹内 由則	23
田中 潜次郎	13
田中 昌 人	12
田中 道 弘	62
田中 美由紀	48
谷澤 田鶴子	101
種市 康太郎	90
田之内 厚三	57
田畑 節子	72
玉井 寛	97, 98
丹治 和典	51
寺沢 充夫	17

寺沢 美彦	102
寺田 敦子	74, 85, 114
外島 裕	47
殿村 由希	70
豊村 和真	41

【ナ】

内藤 哲雄	76, 77, 78
中 淑子	74, 85, 114
中川 敏貴	33
中田 栄	121
長塚 康弘	15
中野 アツ子	38
中村 昭之	シンポ1
中山 英雄	33
永末 貴子	61
永田 雅子	95
奈良 康明	講演 v
成田 猛	103
新田見 教子	23
根本 明日香	37
根本 良子	36
野田 紀子	127

【ハ】

箱田 裕司	44, 45
橋本 泰子	96
長谷川 孫一郎	シンポ6
畠山 彰文	99
服部 環	105
花沢 成一	70
馬場 理子	109
早坂 三郎	58
林 潔	シンポ1
平尾 美生子	シンポ5
広島 克佳	23
深田 高一	85
福井 嗣泰	69
福井 博一	25
福岡 欣治	50

藤生 英行	108
藤田 主一	16
藤野 文代	24
布施 淳子	42
星野 明子	36
星山 佳治	24
細江 達郎	シンポ vii

【マ】

間島 英俊	28
増田 直衛	46
松浦 常夫	91
松浦 光和	68
松尾 典子	128
松谷 さおり	36
松田 好美	84, 87
松永 保子	84, 87
松本 洸	94
三上 れつ	30, 37
三島 二郎	17
三井 利幸	18, 19, 20, 21
峯岸 廣美	86

向井 希宏	88
村本 淳子	83
望月 稔	17
森 ひとみ	43
森下 高治	95
森田 敏子	84, 87

【ヤ】

矢口 一郎	100
安木 博臣	28
安富 由美子	ワーク11
山崎 章恵	76, 77, 78
山下 春江	118
山田 耕嗣	ワーク11
山本 勝則	82
吉田 恵理子	74, 85
吉田 信彌	42

【ワ】

若原 克文	18, 19, 20, 21
和田 美知子	126

日本応用心理学会第64回大会準備委員会

- 準備委員長 中 村 昭 之 (駒澤大学文学部教授)
- 準備委員 大塚 秀 治 (麗澤大学国際経済学部助教授)
軽部 幸 浩 (駒澤大学文学部非常勤講師)
北川 公 路 (駒澤大学文学部非常勤講師)
鈴木 順 一 (駒澤大学文学部非常勤講師)
高橋 良 博 (駒澤大学文学部非常勤講師)
高谷 口 泰 富 (駒澤大学文学部教授)
茅原 正 (駒澤大学文学部助教授)
寺岡 隆 (駒澤大学文学部教授)
中丸 茂 (駒澤大学文学部非常勤講師)
永田 陽 子 (駒澤大学文学部講師)
牧野 晋 (一橋大学商学部助手)
森山 敏 文 (広尾心理臨床相談室室長)
- 事務局長 小 野 浩 一 (駒澤大学文学部教授)
幹 事 加 藤 博 己 (駒澤大学文学部助手)

(五十音順)

日本応用心理学会第64回大会発表論文集

発行日 1998年1月14日
発行者 日本応用心理学会第64回大会準備委員会
委員長 中村昭之

〒154 世田谷区駒沢1-23-1
駒澤大学心理学研究室
TEL 03 (3418) 9303 FAX 03 (3418) 9126